

福岡市

有田・小田部

第7集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第139集

1986

福岡市教育委員会

頁	行	誤	正
23	8	3周の側柱だけの	4周の側柱だけの
27	9	8は外面に焼が	9は外面に焼が
36	11	71は口徑14.8cm、 72は口徑7.5cm、	72は口徑14.8cm、 74は口徑7.5cm、
39	20	約20~30cmを測る。	約20~30cmを測る。
46	Fig. 28	1号住居跡出土遺物	2号住居跡出土遺物
56	7	鉢 (106, 109)	鉢 (106)
58	18	137は内面に	134は内面に
62	7	底6cmの穿孔が	底6cmの穿孔が
64	5	6~8cmの穿孔を	6~8cmの穿孔を
75	28	註3 福岡市教育委員会	…福岡市教育委員会
77	Tab. 4	6号柱間寸法 88.9	…7.7.8.6 9.1.9.1
86	25	深さ0.4mを測る。	深さ4cmを測る。
91	7	桁行約2.18~2.19m、	桁行約21.8~21.9m、
	13	桁行4間、桁行5間の	桁行3間、桁行4間の、
92	4	平均約3.1尺である。	平均約7.1尺である。
93	13	幅1.5~2.5cmを測る。	幅1.5~2.5mを測る。
101	19	SX2235などに伴っており、 註3	…註4
112	11	2は高台底5.8cmを	2は高台底4.7cmを
		船は淡灰色で、	船は淡緑色で、
116	6	裏脊高17.0cmを	裏脊高7.0cmを
	10	白 (17, 18)	白 (16, 17)
	16	12・13はともに	16・17はともに
	17	13は青灰色、13は小豆色を	16は青灰色、17は小豆色を
119	Fig. 77	No.32…… (1/3)	No.32のみ1/4
120	16	30は礎上より出土	31は礎上より出土
	32	新平瓦 (36, 37, 38)	新平瓦 (36, 37)
121	Fig. 78	No.40	No.40は道筋状遺構出土
122	1	丸瓦 (40)	丸瓦 (39)
	15	高台底5.3cmを	高台底3.0cmを
	23	皿 (43)	皿 (44)
	26	皿 (42, 46)	皿 (42, 45)
123	Fig. 79	No.53, 54	No.53, 54は3号窓出土
124	29	皿 (40)	皿 (49)
	31	环 (51)	环 (50)
125	4	(52)	(51)
	11	鉢 (53)	鉢 (52)
		裏脊高15.6cmを	裏脊高5.6cmを
	16	平瓦 (53, 54)	平瓦 (53)
	18	幅26cmを	幅2.6cmを
	22	碗 (57)	碗 (56)
	24	皿 (56)	皿 (55)
132	29	最大幅12.5m	最大幅1.25m
137	29	打鉄石器 (14)	打鉄石器 (21)
139	12	盤 (17)	盤 (16)
	14	盤 (15, 16) 15、16とともに	盤 (14, 15) 14, 15とともに
		15は内面する。	14は内面する。
	15	15は頗広い。16の	14は頗広い。14の
	17	盤 (20)	盤 (19)
	21	盤 (18, 19)	盤 (17, 18)
	22	底径は10が8.4cm、11が7.9cmを	底径は17が8.4cm、18が7.9cmを
		18の外は	18の外は
		19は所調して	17は所調して
	25	石斧 (21)	石斧 (20)
143	3	明代の青磁 (19) や白磁皿 (16) …	明代の青磁 (28) や白磁皿 (29) …註4
148	9	最大幅1.06m、	最大幅1.06m、
150	18	又、約16m	又、約1.6m
157	1	碗 (32, 33) 32は玉縁口縁を、 33は	碗 (31, 32) 31は玉縁口縁を、 32は
		32が7.7cm、33が7.1cm、	31が7.7cm、32が7.1cm、
	2	32の船は	31の船は
		33の船は	32の船は
	3	32は大宰府史跡の	31は大宰府史跡の
		33は	32は
	5	矛斧 (34)	槍斧 (33)
158	2	27, 29, 31, 36は	26, 28, 30, 34は
		30は	29は
	9	碗 (30)	碗 (29)
	12	碗 (31)	碗 (30)
	16	不明青銅器 (35)	不明青銅器 (34)
164	5	盤 (1) 口縁部の	盤 口縁部の
171	Fig. 109	2号拂土層名称	1号拂土層名称

福岡市

有田・小田部

第7集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第139集



昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

序 文

福岡の歴史は、朝鮮半島や中国大陸に近い事から海外交渉史であるとも言われています。ここ数年、早良平野の埋蔵文化財の発掘調査は、公共事業や民間事業の急速に進められる開発によって質量ともに増加の一途を辿っています。その成果も、市民の目を見張らせる大陸文物が一部に含まれますが、古代史の謎を解明する手がかりとなっています。そこに埋蔵文化財行政の目的はあると信ずるものです。

さて、有田・小田部地区は昭和41年の九州大学考古学研究室の御尽力により始められましたが、今年度で106次を数えます。一つ一つの調査の成果が徐々に、有田・小田部の歴史を明らかにしていると信じます。ひとえに調査に御理解と御協力を頂いた、地元・土地所有者のみなさんのおかげです。記して感謝申し上げます。今回の報告書の内容は、有田・小田部の通史ともなるような資料を中心としています。旧石器時代から宝町時代までの歴史的変遷です。

本報告が、学会・学校教育・社会教育に御活用して頂くと共に、埋蔵文化財行政の御理解に役立てて頂ければ幸いです。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

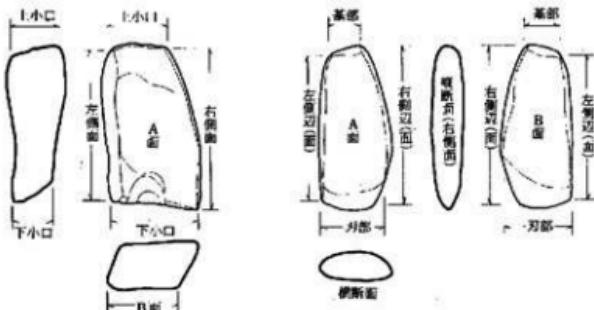
教育長 佐藤善郎

例　　言

- (1) 本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における住宅開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和60年度の国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。
- (2) 本書には昭和56年度の第52次・第60次調査、昭和58年度の第82次・第83次・第87次調査、昭和59年度の第95次調査、昭和60年度の第101次調査について収録する。
- (3) 本書では有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。
- (4) 本書に収録した発掘調査は、第52次・第60次調査を井沢洋一・山崎龍雄が、第82次・第83次・第87次・第95次調査を井沢洋一・松村道博が、第101次調査を山崎龍雄・米倉秀紀が担当した。
- (5) 本書に掲載した遺構実測は、第52次・第60次調査を井沢・山崎・児玉健一郎・松尾正直・渡辺武子・清原ユリ子が、第82次・第83次・第87次・第95次調査は井沢・松村・谷沢仁・辻哲也・清原ユリ子が、第101次調査は山崎・米倉・清原が行なった。
- (6) 本書に掲載した遺物実測、写真撮影、遺構、遺物の整図については以下の通りである。
(遺物実測) 第52次調査—松尾正直・谷沢、第60次・第82次・第95次調査—井沢、第83次・第87次・第97次調査—谷沢、第101次調査—米倉、(写真撮影) 第52~95次調査—谷沢・井沢、第101次調査—米倉、(遺物・遺構整図) 一池田洋子・深堀博子・井沢・谷沢
遺構の写真撮影は第101次調査を除き井沢が主として行なった。
- (7) 本書の執筆は以下のようである。

第1・2章	井沢
第3章—1~6・7	井沢
4(遺物各説)・8	谷沢
9	米倉

- (8) 本書の編集は井沢が行なった。編集に際しては谷沢・池田・深堀の協力を得た。



本文目次

本文頁

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	2
第2章 遺跡の立地と調査概要	5
1. 立 地	5
2. 調査の概要	6
第3章 調査経過	11
1. 第52次調査	11
1) 調査地区の地形と概要	11
2) 遺構各説	13
3) 遺物各説	23
4) 小 結	37
2. 第59次調査(遺物編)	39
1) 調査地区の地形と概要	39
2) 遺物各説	44
3) 小 結	74
3. 第60次調査	80
1) 調査地区の地形と概要	80
2) 遺構各説	81
3) 遺物各説	82
4) 小 結	82
4. 第82次調査	83
1) 調査地区の地形と概要	83
2) 遺構各説	83
3) 遺物各説	93
4) 小 結	101
5. 第83次調査	104
1) 調査地区の地形と概要	104
2) 遺構各説	104
3) 遺物各説	112
4) 小 結	125

6. 第87次調査	127
1) 調査地区的地形と概要	127
2) 遺構各説	128
3) 遺物各説	136
4) 小結	142
7. 第95次調査	144
1) 調査地区的地形と概要	144
2) 遺構各説	144
3) 遺物各説	152
4) 小結	158
8. 第97次調査	161
1) 調査地区的地形と概要	161
2) 遺構各説	162
3) 遺物各説	163
4) 小結	164
9. 第101次調査	165
1) 調査地区的地形と概要	165
2) 遺構各説	167
3) 遺物各説	171
4) 小結	174
付論1. 第59次調査出土炭化米の調査	78
2. 福岡市早良区有田遠跡出土の細形鋼戈に付着する織物について	177
3. 福岡市西区大字拾六町宮の前遺跡3号石棺出土の鎧に付着する織物について	182

挿 図 目 次

Fig. 1	有田・小田部周辺の遺跡	(1/25,000)	4
Fig. 2	有田・小田部台地と発掘調査地点	(1/5,000)	折込
Fig. 3	有田・小田部台地の旧地形図	(1/5,000)	折込
Fig. 4	第52次調査区北壁土層図	(1/80)	11
Fig. 5	第52次調査遺構配置図	(1/200)	12
Fig. 6	1号住居跡実測図	(1/60)	13
Fig. 7	1号住居跡かまど実測図	(1/40)	14
Fig. 8	2号住居跡実測図	(1/60)	15
Fig. 9	3号住居跡実測図	(1/60)	16
Fig. 10	4号住居跡実測図	(1/60)	17
Fig. 11	1号・2号土壤実測図	(1/40)	18
Fig. 12	3号～5号土壤実測図	(1/20, 1/40)	19
Fig. 13	7号～9号土壤実測図	(1/30)	21
Fig. 14	10号～11号土壤実測図	(1/60)	22
Fig. 15	1号溝土層断面図	(1/40)	22
Fig. 16	1号～3号掘立柱建物	(1/100)	24
Fig. 17	1号・2号住居跡出土遺物	(1/3, 1/4)	25
Fig. 18	1号住居跡・1号土壤出土遺物	(1/4, 1/3)	26
Fig. 19	2号土壤出土遺物	(1/3)	28
Fig. 20	3号～5号・8号土壤出土遺物	(1/3)	30
Fig. 21	10号土壤出土遺物	(1/3)	32
Fig. 22	10号～12号土壤出土遺物	(1/3)	33
Fig. 23	1号溝・Pit・表土出土遺物	(1/2, 1/3)	36
Fig. 24	第59次調査遺構配置図	(1/200)	40
Fig. 25	2号溝遺物出土状態	(1/100)	43
Fig. 26	41号土壤遺物出土状態	(1/100)	44
Fig. 27	表土・包含層出土遺物	(1/3)	45
Fig. 28	1号住居跡出土遺物	(1/4, 1/3)	46
Fig. 29	甕棺実測図	(1/8)	47
Fig. 30	土壤出土遺物	(1/3)	48
Fig. 31	8号・11号・15号土壤出土遺物	(1/3)	50

Fig. 32	土壤出土遺物	(1/3)	52
Fig. 33	41号土壤出土遺物	(1/3)	54
Fig. 34	41号土壤出土遺物	(1/3)	55
Fig. 35	1号溝出土遺物	(1/3)	56
Fig. 36	1号溝出土遺物	(1/3)	57
Fig. 37	1号溝出土遺物	(1/3)	59
Fig. 38	2号溝出土遺物	(1/3)	60
Fig. 39	2号溝出土遺物	(1/3)	62
Fig. 40	2号溝出土遺物	(1/8)	63
Fig. 41	2号溝出土遺物	(1/3)	65
Fig. 42	5号溝出土遺物	(1/3)	67
Fig. 43	5号溝出土遺物	(1/3, 1/4)	68
Fig. 44	Pit出土遺物	(1/3)	71
Fig. 45	Pit出土遺物	(1/3)	72
Fig. 46	中世館跡	(1/2,000, 1/500)	76
Fig. 47	第59・60次調査遺構配置図	(1/400)	80
Fig. 48	遺構配置図及び1号・5号溝土層図	(1/100, 1/60)	81
Fig. 49	1号溝出土遺物	(1/3)	82
Fig. 50	第32次・第82次調査遺構配置図	(1/200)	84
Fig. 51	1号住居跡、出入口 pit	(1/60, 1/20)	85
Fig. 52	1号・2号・8号土壤	(1/40)	86
Fig. 53	3号・4号土壤	(1/40)	87
Fig. 54	5号・6号・9号～11号土壤	(1/40, 1/30)	88
Fig. 55	7号土壤	(1/40)	89
Fig. 56	1号・2号集石遺構	(1/30)	91
Fig. 57	1号掘立柱建物	(1/100)	折込
Fig. 58	2号～4号掘立柱建物	(1/100)	折込
Fig. 59	2号溝土層図	(1/40)	93
Fig. 60	1号住居跡出土遺物	(1/3)	94
Fig. 61	土壤・溝・集石遺構出土遺物	(1/3, 1/1)	95
Fig. 62	1号集石遺構出土遺物	(1/4)	97
Fig. 63	1号・2号溝出土遺物	(1/3)	98
Fig. 64	2号溝出土遺物	(1/3)	100

Fig. 65	掘立柱建物配置図	(1/500)	102
Fig. 66	第83次調査遺構配置図	(1/200)	105
Fig. 67	1号～3号土壤	(1/40)	106
Fig. 68	井戸実測図	(1/30)	107
Fig. 69	1号・2号・道路状遺構土層図	(1/60)	109
Fig. 70	溝土層断面図	(1/60)	110
Fig. 71	溝・道路状遺構変遷図	(1/80)	110
Fig. 72	1号・2号溝・道路状遺構	(1/60)	折込
Fig. 73	井戸出土遺物	(1/3)	113
Fig. 74	井戸出土遺物	(1/3, 1/4)	114
Fig. 75	井戸出土遺物	(1/4)	115
Fig. 76	1号溝出土遺物	(1/3)	118
Fig. 77	1号溝出土遺物	(1/3)	119
Fig. 78	1号・2号溝出土遺物	(1/4, 1/3)	121
Fig. 79	3号土壤・包含層出土遺物	(1/3, 1/4)	123
Fig. 80	第87次調査遺構配置図	(1/200)	127
Fig. 81	1号・2号住居跡	(1/60)	128
Fig. 82	1号・5号～7号土壤	(1/40)	130
Fig. 83	3号・4号土壤	(1/30)	131
Fig. 84	1号掘立柱建物	(1/100)	133
Fig. 85	1号溝土層断面図	(1/40)	134
Fig. 86	2号溝及び5号・6号土壤断面図	(1/40, 1/50)	135
Fig. 87	1号・2号住居跡出土遺物	(1/3)	137
Fig. 88	4号土壤・1号溝出土遺物	(1/3, 1/2)	138
Fig. 89	2号溝出土遺物	(1/3, 1/1)	140
Fig. 90	第95次調査遺構配置図	(1/200)	145
Fig. 91	1号住居跡A・B図	(1/60)	146
Fig. 92	1号～3号土壤	(1/30)	148
Fig. 93	1号～3号溝土層図	(1/60, 1/20)	149
Fig. 94	1号道路状遺構	(1/40)	151
Fig. 95	1号住居跡・1号・2号土壤出土遺物(1/3)		153
Fig. 96	1号溝出土遺物	(1/3, 1/2)	154
Fig. 97	2号溝出土遺物	(1/3)	156

Fig. 98	3号溝、1号道路状遺構出土遺物…(1/3, 1/2)	157
Fig. 99	弥生時代前期遺構配置図.....(1/2,500)	159
Fig. 100	第97次調査遺構配置図.....(1/200)	161
Fig. 101	1号土壤墓.....(1/30)	162
Fig. 102	甕棺墓.....(1/30)	163
Fig. 103	甕棺、及び1号土壤出土遺物.....(1/3)	163
Fig. 104	1号住居跡.....(1/60)	165
Fig. 105	第101次調査遺構配置図.....(1/100)	166
Fig. 106	1号・2号土壤墓.....(1/30)	167
Fig. 107	2号掘立柱建物.....(1/100)	168
Fig. 108	1号・3号～5号掘立柱建物.....(1/100)	170
Fig. 109	1号・2号溝断面図.....(1/40)	171
Fig. 110	2号土壤墓出土遺物.....(1/3)	172
Fig. 111	出土遺物.....(1/3, 1/2)	173

図版目次

図版写真

PL. 1	有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）	
PL. 2	有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）	
PL. 3	(1)第52次調査北半部分（南から）	(2)調査区南半部分（南から）
PL. 4	(1)1号住居跡（東から）	(2)1号住居跡カマド検出状況（西から）
PL. 5	(1)1号住居跡・かまどの状態（南から）	(2)(1)と同じ（正面から）
	(3)(1)と同じ（裏面から）	(4)1号住居跡かまどの煙道部（北から）
PL. 6	(1)1号住居跡遺物出土状態（西から）	(2)(1)と同じ（煙）
	(3)(1)と同じ（甕）	(4)(1)と同じ（瓶）
PL. 7	(1)2号住居跡（東から）	(2)3号住居跡（東から）
PL. 8	(1)4号住居跡（東から）	(2)10・11号土壤（東から）
PL. 9	(1)1号土壤（東から）	(2)1号土壤遺物出土状況
	(3)2号土壤（東から）	(4)2号土壤遺物出土状況
PL. 10	(1)4号土壤（西から）	(2)5号土壤（西から）
	(3)5号土壤遺物出土状況	(4)7号土壤（北から）
PL. 11	(1)8号土壤（西から）	(2)8号土壤遺物出土状況

	(3) 9号土壙（西から）	(4) 11号土壙（南から）
PL. 12	(1) 10号土壤遺物出土状態（北から） (3)(1)に同じ（高坏）	(2)(1)に同じ（坏身） (4)(1)に同じ（繪壺）
PL. 13	(1) 11号土壙断面の状態（南から） (3) 1号溝（東から）	(2) 11号土壙遺物出土状態（南から） (4) 1号溝断面の状態
PL. 14	(1) 2号・3号溝（南から） (3) 調査区南側 Pit 群	(2) 4号・5号溝（北から）
PL. 15	(1) 1号掘立柱建物（東から） (3) 2号掘立柱建物（南から）	(2) 1号掘立柱建物（南から） (4) 3号掘立柱建物（南から）
PL. 16	出土遺物	
PL. 17	出土遺物	
PL. 18	出土遺物	
PL. 19	出土遺物	
PL. 20	(1) 第59次調査調査前の状況（南から）	(2) 第59次調査全景（南から）
PL. 21	出土遺物	
PL. 22	出土遺物	
PL. 23	出土遺物	
PL. 24	出土遺物	
PL. 25	出土遺物	
PL. 26	出土遺物	
PL. 27	(1) 第60次調査全景（東から）	(2) 出土遺物
PL. 28	(1) 第82次調査全景（北から）	(2) 1号掘立柱建物（東から）
PL. 29	(1) 1号住居跡（南から） (3) 壕出土状態	(2)(1)に同じ（東から）
PL. 30	(1) 1号土壤（東から） (3) 4号土壤（西から）	(2) 1号土壤遺物出土状態 (4) 6号土壤（北から）
PL. 31	(1) 2号・8号土壤（南から） (3) 3号土壤（南東から）	(2) 2号土壤土層の状態（南から） (4) 5号土壤（東から）
PL. 32	(1) 6号土壤（東から） (3) 6号土壤・2号掘立柱建物切合い状態	(2) 7号土壤（北から） (4) 1号・2号掘立柱建物柱穴切合い状態
PL. 33	(1) 1号集石（北から） (3) 2号集石（北から）	(2) 1号集石内軒平瓦出土状態 (4) 1号集石鉄釘出土状態
PL. 34	(1) 2号掘立柱建物（東から）	(2) 3号・4号掘立柱建物（西から）

PL. 35	(1) 1号掘立柱建物柱穴掘り方状態 (3) 2号掘立柱建物柱穴掘り方状態	(2) 2号掘立柱建物柱穴掘り方状態 (4) 2号掘立柱建物柱穴掘り方状態
PL. 36	(1) 1号溝（南から）	(2) 2号溝土層状態（東から）
PL. 37	出土遺物	
PL. 38	pit, 2号溝 出土遺物	
PL. 39	(1)第83次調査全景（北から）	(2)調査区全景（南から）
PL. 40	(1)道路状遺構II, III期（北から）	(2)道路状遺構III期（北から）
PL. 41	(1)1号・2号溝及び道路状遺構（北から）(2)1号・2号溝及び道路状遺構北側土層 (3)1号・2号溝及び道路状遺構南側上層	
PL. 42	(1)1号・2号溝及び道路状遺構II期（北から）(2)(1)に同じ（南から）	
PL. 43	(1)1号溝土層状態（南から） (3)1号溝上層状態（南から）	(2)道路状遺構土層状態（南から）
PL. 44	(1)道路状遺構II, III期の状態 (3)2号溝I期底面の状態（北から）	(2)2号溝の底面状態（北から） (4)道路状遺構疊敷の状態
PL. 45	(1)1号溝上層状態（北から）	(2)2号溝土層状態（北から）
PL. 46	(1)1号溝I, II期土層状態（北から） (3)2号溝土層状態（北から）	(2)道路状遺構土層状態（北から）
PL. 47	(1)井戸 (3)井戸底隕群の状態	(2)井戸底の状態 (4)井戸底遺物出土状態
PL. 48	(1)1号・2号土壤（南から） (3)近世暗渠の状態（北から）	(2)2号土壤土層状態（西から）
PL. 49	(1)3号土壤（東から） (3)遺物出土状態	(2)3号土壤覆土の状態 (4)遺物出土状態
PL. 50	出土遺物（井戸, 1号溝, 3号土壤）	
PL. 51	出土遺物（井戸, 1号溝, 2号溝）	
PL. 52	出土遺物	
PL. 53	出土遺物（井戸, 1号溝, 2号溝）	
PL. 54	(1)第87次調査全景（東から）	(2)1号溝（東から）
PL. 55	(1)1号・2号住居跡（北から） (3)炉検出状態（南から）	(2)甕出土状態（西から）
PL. 56	(1)4号土壤（北から） (3)4号土壤完掘状態（南から）	(2)鉄釘, 炭化物出土状態（南から）
PL. 57	(1)3号土壤（南西から）	(2)1号土壤（南から）

	(3) 5号土壙（東から）	(4) 6号・7号土壙（北から）
PL. 58	(1) 1号掘立柱建物（東から） (3) 柱穴の状態	(2) 柱穴土層状態 (4) 柱穴掘り方切合い状態
PL. 59	(1) 1号溝土層状態（東側） (3) 1号溝、6号・7号土壙土層状態（東から）	(2) 1号溝土層状態（西側）
PL. 60	(1) 2号溝（北から）	(2) 2号溝完掘状態
PL. 61	出土遺物	
PL. 62	出土遺物	
PL. 63	(1) 第95次調査全景（東から）	(2)(1)に同じ（西北から）
PL. 64	(1) 1号住居跡 A面（北から）	(2) 1号住居跡 B面（北から）
PL. 65	(1) 1号住居跡出入口部の Pit (3) 3号土壙（東から）	(2) 遺物出土状態 (4) 4号土壙（西から）
PL. 66	(1) 1号・3号溝（北から）	(2) 1号溝断面上層図
PL. 67	(1) 2号溝（東から） (3) 3号溝、1号道路状遺構（北から）	(2) 3号溝、2号道路状遺構（北から）
PL. 68	(1) 1号道路状遺構（南から）	(2) 3号溝の状態（南から）
PL. 69	出土遺物	
PL. 70	出土遺物	
PL. 71	(1) 第97次調査 全景（東から）	(2) 墓棺出土状態
PL. 72	(1) 土壙墓（東から）	(2) 土壙墓の粘土帯撤去状態
PL. 73	(1) 土壙墓小口部の状態	(2) 出土遺物
PL. 74	(1) 第101次調査全景（東から）	(2) 1号～3号掘立柱建物（南から）
PL. 75	(1) 1号掘立柱建物（南から） (3) 4号掘立柱建物（東から）	(2) 3号掘立柱建物（東から） (4) 住居跡（東から）
PL. 76	(1) 2号土壙墓（北から） (3) 出土遺物	(2) 2号土壙墓遺物出土状況
PL. 77	出土遺物	

表 目 次

tab. 1	昭和59・60年度有田・小田部発掘調査一覧表	10
tab. 2	第52次調査掘立柱建物一覧表	23
tab. 3	第59次調査遺構一覧表	41
tab. 4	第59次調査掘立柱建物一覧表	77
tab. 5	第82次調査掘立柱建物一覧表	92
tab. 6	第87次調査4号土壤出土鉄釘一覧表	143
tab. 7	第101次調査掘立柱建物一覧表	169

付 図

I.	有田・小田部地区各調査地点配置図NaIV.....(1/1000)	付録
II.	第83次調査1号・2号溝、及び道路状況測定図...(1/40)	付録

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市近郊の農村地帯であった有田・小田部の台地上には、有田地区・小田部地区・南庄地区の3つの集落で存在している。近年、202号線バイパスが西へ延長した事と昭和57年の市営地下鉄の開通等の影響を受け、専用住宅地域から高層住宅地域へと変貌しつつあり、過日の農村の面影は少い。

有田遺跡の発掘調査は昭和50年度から国庫補助事業として出発したが、昭和52年度からは1,000m²以下の小規模開発に対処している。昭和50年度～昭和56年度までの開発傾向は、専用住宅が圧倒的に多かったが、昭和57年度から昭和60年度までの開発傾向では、専用住宅が減少し、高層の共同住宅、賃貸倉庫、駐車場、店舗、分譲住宅などの大規模化の傾向を示している。昭和60年度までの調査件数は106件である。この内には学校建設、市営住宅改築などの公共事業も含まれている。

昭和60年度の発掘調査を必要とする件数は、前年度からの繰り越し分を含めて17件である。この内、特に緊急を要する6件について発掘調査を行った。発掘調査は、昭和60年8月23日～61年2月21日まで実施した。総面積は3,584m²である。又、第104次調査は九州大学考古学研究室による発掘調査であることを明記しておきたい。

報告書については、昭和56年度の第52次・第58次調査、昭和58年度の第82次・第83次・第87次調査、昭和59年度の第95次・第98次・第99次調査、昭和60年度の第101次調査を報告する。

(昭和56年度発掘調査地)

第52次 福岡市早良区小田部2丁目110-2	面積561m ²	申請者 毛利 四郎
第60次 福岡市早良区小田部3丁目178-2	面積526m ²	申請者 伊佐茂太郎

(昭和58年度発掘調査地)

第82次 福岡市早良区有田1丁目29-13・14	面積413m ²	申請者 蒲地 俊喜
第83次 福岡市早良区有田1丁目127-3	面積378m ²	申請者 桃島 重義
第87次 福岡市早良区有田2丁目12-6	面積247m ²	申請者 倉光ミサオ

(昭和59年度発掘調査地)

第95次 福岡市早良区有田1丁目31-4	面積657m ²	申請者 松尾 典雄
第97次 福岡市早良区南庄3丁目90・91・93	面積1087m ²	申請者 小石原廣喜

(昭和60年度発掘調査地)

1. 第100次 福岡市早良区有田2丁目13-2・4	面積671m ²	申請者 松尾 熊夫
2. 第101次 福岡市早良区有田(千道原250-1)	面積215m ²	申請者 山口 晴彦

3. 第102次	福岡市早良区小田部2丁目154	面積330m ²	申請者 毛利 重徳
4. 第103次	福岡市早良区小田部3丁目3-14	面積502m ²	申請者 毛利 保人
5. 第104次	福岡市早良区有田2丁目(七山前)		九州大学発掘調査
6. 第105次	福岡市早良区小田部2丁目18-8	面積660m ²	申請者 柴田 正行
7. 第106次	福岡市早良区小山部5丁目162	面積706m ²	申請者 毛利 三男

2. 発掘調査の組織

〈第52次調査〉—「有田・小田部第4集」参照—

〈第82次・第83次・第87次調査〉—「有田・小田部第6集」参照—

(1)昭和59年度発掘調査の組織 〈第91次～第99次調査〉

調査主体	福岡市教育委員会
調査担当	福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係
調査責任	文化課課長 生田征生
庶務担当	岡嶋洋一
調査担当	井沢洋一、松村道博、米倉秀紀
調査補助員	谷沢 仁
調査作業	松尾和雄、高浜謙一、吉村哲美、合屋龍介、有富いつ子、緒方マサヨ、金子由里子、清原ユリ子、坂口フミ子、佐藤テル子、柴田勝子、柴田幸子、庄野崎ヒデ子、土斐崎初枝、西尾たつよ、平井和子、堀川ヒロ子、松井邦子、松尾玲子、日野良子、中村千里、後藤ミサヲ、吉岡田鶴子、宮原邦江、吉田祝子、板倉文子
資料整理	児玉健一郎、池田洋子、深堀博子、仲前智恵子、永井和子、内尾トミ子、大田けい子

(2)昭和60年度発掘調査の組織 〈第100次～第106次調査〉

調査主体	福岡市教育委員会
調査担当	福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係

調査責任 埋蔵文化財課課長 柳田純孝
庶務担当 岸田隆
調査担当 山崎龍雄、米倉秀紀
調査補助員 谷沢仁、
調査作業員 松尾和雄、高浜謙一、合屋鶴介、吉村哲美、神尾順次、深堀雅基、馬場寿男、明野隆、藤岡毅雄、高橋正弘、有富いつ子、板倉文子、井上紀世子、井上真寿美、結方マサヨ、金子由理子、清原ユリ子、北原ヒサ子、後藤ミサヲ、坂口フミ子、佐藤テル子、柴田勝子、庄野崎ヒデ子、上斐崎初栄、徳永ノブコ、西尾たつよ、平井和了、堀川ヒロ子、松井フミ子、松井邦子、蓑原幸江、宮原邦江、三島博子、萬スミヨ、吉岡田鶴子
資料整理 池田洋子、深堀博子、永井和了、内尾トミ子、仲前智江子、池田礼子、松下節子、吉田祝子、井上カツ代



1. 西新町遺跡 2. 藤崎遺跡 3. 原遺跡 4. 原缺櫓遺跡 5. 級倉遺跡
 6. 敷倉原遺跡 7. 下隈遺跡 8. 鶴可遺跡 9. 原深町遺跡 10. 有田七田前遺跡

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡 (1/25,000)

第2章 遺跡の立地と調査概要

1. 立 地

福岡市早良区有田・小田部・南庄の位置する台地は、室見川の開析によって形成された早良平野のほぼ中央に位置し、標高15m前後を測る独立中位段丘である。台地の形成は洪積世に位置づけられ、八女粘土、鳥柄、新期ロームの層序をなしている。台地は主軸を南北方向に向か、南北の長さ約1km、最大幅約0.7kmを測り、北へ緩やかに傾斜している。旧地形では有田1～2丁目を最高所にして標高15mを測り、周辺水田面との比高差は約10mを測っていたが、現在では沖積化のため5～7mの比高差である。台地の西側に室見川が、東側に金屑川が北流しているため台地の縁辺は浸食を受け、小断崖を形成している。また、台地内に深く切り込んだ比較的浅く、緩やかな谷も幾つか存在するため台地は北方向にハッサウエー状に分岐している。この台地上には有田・小田部・南庄の3つの集落が形成されているが、近世の住宅化はその界線を失くしつつある。有田・小田部両地区は昭和40年代の初めに区画整理事業が行なわれ、著しい現状変更が行なわれている。

有田遺跡は台地上に広く分布する旧石器時代から近世までの複合遺跡である。旧石器のナイフ・ポイントは第6次調査などで検出されている。縄文時代には有田地区の西側に偏して中期～晚期の貯蔵穴群を検出している。弥生時代初頭のV字溝は第2次調査で検出されたが、この溝は谷を取り巻くように巡り、長径300m、短径200mの環濠になる可能性をもっている。西端^{註1}の七田前遺跡では縄文晚期の土器に大陸系の石器や無文土器を伴っている。前期後半の集落は台地中央上に検出され、この時期の溝は有田地区では台地縁辺をとり巻くように巡る。この時期の壺棺墓から細形銅戈が発見されている。又、小田部地区から細形銅矛の出土も伝えられる。^{註2}中期は前代を踏襲し、大型の円形住居跡群が出現し、青銅利器の熔范片の出土や広形銅戈の出土も伝えられることから拠点的な集落の存在が考えられる。古墳時代の住居跡は台地上に広く検出しており、長期間に亘った集落が各所に存在している。この時期には小田部地区に古墳が形成され、筑紫殿塚、松浦殿塚などの大円墳が存在する。^{註3}弥生時代からついた在地勢力の集約化が認められる。弥生時代から古墳時代の原遺跡は金屑川を挟んだ東側に位置しており、共に共同体的な機能を果していたものと思われる。律令時代にはこの地区が早良郡田部郷に比定されるが、大型の柱穴をもつ建物群は有田地区に集中し、第56次・第57次・第77次・第78次・第82次調査では倉庫や居住的な建物を検出した。又、これらの建物群は、古代官道の額田駁が西方約2kmに位置することを考慮すれば官衙規模の建物群と考えて良いだろう。中世には西に下山門庄、南に野芥莊が存在し、当該地域には名主屋敷が形成される。後半には大内氏早良郡代大村興景の地行地や、大友氏の被官であった小田部氏の里城一小田辺城などが存在する。

有田地区で検出した幅5mの空濠は“L字形”又は，“コの字形”的郭を形成しており、範囲は約200m四方に及ぶ。大内氏関係の遺物や明代の陶磁器が出土しており、16世紀前～中頃の築城を考えることができる。中世の遺物では博多が貿易港として栄えたことや大内氏の朝鮮貿易とも関わっており、中国陶磁器や朝鮮陶磁器の出土がある。

2. 調査の概要

有田遺跡の調査は、昭和41～43年に施行された有田地区的区画整理事業に伴って九州大学考古学研究室が発掘調査を行い、弥生前期から中世に至る豊富な資料を得ている。昭和59年度事業で検出した遺跡は、弥生時代前期から近世に亘っている。

第91次調査 台地の西麓、室住団地側に位置する。当該地の西側は、室見川の氾濫原となる。遺構は耕作土（水田）の下の八女粘土層に検出できる。

遺構 円形袋状土壤、中世末～近世初頭溝、pit群

遺物 弥生式土器、須恵器、備前系摺鉢、土師質土器、瓦質土器



第91次調査

第92次調査 台地上面の平坦地北寄りに位置し、標高12mを測る。当該地の北西部は谷頭であるから、地形は緩傾斜している。遺構はローム層上に検出したが、東側は中世に削平を受けている。

遺構 弥生時代後期の溝1条、古墳時代の溝1条、土壤3基、中世の土壤墓1基、pit群

遺物 弥生式土器壺、古墳時代須恵器壺、土師器壺



第92次調査

第93次調査 当該地は、ハッ手状に延びる有田・小田部台地の中央部に位置し、北西方向に谷頭が存在する。当該地は基礎工事が既に済んでいたため、協議によりその間を調査するにとどまった。周辺の調査では、弥生時代の甕棺墓、住居跡、掘立柱建物、古墳時代の住居跡、中世の火葬墓、土壤墓等が検出されている。

遺構 溝、pit群

遺物 弥生式土器、土師器、須恵器、近世陶磁器



第93次調査



第94次調査

第94次調査 有田・小田部台地の東北隅一南庄地区の東端斜面に位置する。西側の第76次調査では、弥生時代の住居跡や掘立柱建物を検出している。遺構面はコーム層であるが、削平は著しい。

遺構 pit群、堀立柱建物

第95次調査 有田地区の平坦地は、標高14mを測るが、この平坦地西寄りの標高12.5mの位置にある。周辺では弥生時代初頭の環濠の一部や古墳時代の住居跡、奈良時代の堀立柱建物、中世の濠などを検出しており、当該地では古墳時代の集落を形成するものと思われる。今回の調査で特記すべきことは、弥生時代初期の環濠の一部が検出できた事です。これによって、昭和42~43年に発見された環濠が幅約200mに達する事がわかった。

遺構 弥生時代前期初頭の溝、古墳時代前期住居跡
2軒、中世濠2条、近世初期道路状遺構1条、
土壤4基

遺物 夜白式土器片、古墳時代土師器、中国陶磁器、
李朝陶磁器

第96次調査 有田地区の標高14m前後を測る平坦地に位置する。周辺では、弥生時代前期～中世の遺構が検出されている。特に中世の濠は、伝承の小田辺城の解明に役立つものと考えられる。

遺構 古墳時代前期の溝1条、中世溝1条、土壤2基、井戸1基

遺物 古墳時代土師器甕、中世土師質鉢、瓦質土器
火舍、鼎、板碑、五輪塔、青銅製鈴、るつぼ、
中国陶磁器、李朝陶磁器

第97次調査 小田部地区の東端、標高6.7mに位置する。著しい削平のため遺構の残存状態は悪い。

遺構 弥生時代末期甕棺墓1基、古墳時代木棺墓2基、土壤1基

第98次調査 小田部地区の標高8.5mを測る。台地上にある。昭和43年頃の区画整理による削平が著しい。西



第95次調査



第96次調査



第97次調査

側の第80次調査では、古墳時代住居跡、掘立柱建物を検出している。

遺構 土壙 1 基, pit 群

第99次調査 有田・小田部台地のほぼ中央の鞍部、標高7.7mの緩斜面に位置する。周辺では弥生時代前期～古墳時代の住居跡、中世の土壙墓、火葬墓がある。北西側の削平が著しい。

遺構 土壙 2 基、掘立柱建物 1 棟、棚状遺構 1、近世溝状遺構 1 条

昭和60年度事業では、前年度同様に弥生時代から近世初頭までの遺構、遺物を検出した。発掘調査は昭和60年8月23～61年2月21日迄行った。調査次数は第100次から第106次までである。第104次調査は、九州大学文学部考古学研究室による有田七田前遺跡の調査である。以下各調査地点の概要について述べる。

第100次調査 有田地区台地の最高所部に位置する。西側隣接地は昭和58年度に第78次調査を実施しており、弥生時代前期の貯蔵穴や弥生時代中期、古墳時代初頭の竪穴式住居跡、中世末の濠などが検出している。

遺構 弥生時代前期の貯蔵穴、土壙 4 基、弥生時代中期竪穴住居跡 1 軒、古墳時代前期竪穴住居跡 3 棟、中世の掘立柱建物 18 棟、中世の溝 5 条、井戸 1 基、中世末の濠 1 条、土壙墓 1 基

第101次調査 周辺の発掘調査では、奈良時代の大型掘立柱建物群を検出しており、早良郡衙に関する遺構が存在する事が予想される地域である。

遺構 奈良時代の掘立柱建物 4 棟、古墳時代竪穴住居跡 1 棟、中世溝状遺構 3 条、掘立柱建物 1 棱、土壙墓 2 基

遺物 龍泉窯系青磁碗 2、刀 1 本など

第102次調査 周辺では昭和52年に第4次調査、56年に第48次調査と 2ヶ所の地点で調査が行われている。当該地では、梁行 3 間 × 衍行 3 間の大型の純柱の掘立柱



第98次調査



第99次調査



第100次調査



第101次調査



第102次調査



第103次調査



第105次調査



第106次調査

建物 1 棟及び柵列を検出した。柵列は掘立柱建物の北側で西方向へ曲る可能性が強い。この柵列は第105次調査で検出した柵列と方向が一致する。

遺構 掘立柱建物 1 棟、柵

第103次調査 小田部の集落内に位置する。従来周辺の発掘調査は行われておらず、周辺の遺構分布状況など不明であった。当該地には「宮城」などの字名も残っており、興味深い。近世小田部地区の農村集落の一端が伺えるものと考えられる。

遺構 近世初頭井戸 1 基、溝 2 条、近代井戸 1 基、掘立柱建物 2 棟

第104次調査 九州大学考古学研究室が文部省の科学研究費を得て実施したもので、「有田七田前遺跡」周辺の調査である。遺構は前回同様に現水田下約 0.5 m に検出できる。シルト面より水田に関する溝状遺構を検出した。

遺構 溝状遺構

遺物 織文時代晩期土器片等

第105次調査 当該地の南西約 50m 程には第52次調査が実施されている。当該地で奈良時代と考えられる柵と掘立柱建物 1 棟及び溝状遺構 1 条を検出したが、柵列は第102次調査の柵と方向が一致するので接続するものと考えられる。柵の周囲に大型の掘立柱建物が存在する事から、官衙に付設した倉庫群を想定できないだろうか？

遺構 古墳時代後期住居跡 1 棟、奈良時代掘立柱建物 1 棟、溝状遺構 1 条、中世土壤

遺物 馬齒、古墳時代の土器片等

第106次調査 周辺の発掘調査では、弥生時代前期末から中期にかけての墓群や古墳時代の竪穴式住居跡群、古墳時代から律令時代にかけての掘立柱建物群、中世の溝などを検出しており、小田部地区でも特に遺構が濃密に集中する地域である。調査地区は台地から

谷に向う緩斜面上に位置し、斜面上に弥生時代から古墳時代にかけて遺物を含む整地層が厚く堆積していた。遺構はこの整地面上と下のコーム層上面に存在する事が判った。特に整地面上では、古墳時代の堅穴式住居跡が多數検出された。又、遺構内、及び整地層中より多量の黒曜石の剝片、石器の完成品が出土しており、調査地周辺で石器を作っていた可能性がある。

遺構 古墳時代堅穴式住居跡15軒+α、古墳時代から律令時代の掘立柱建物3棟、中世溝3条

遺物 弥生時代から古墳時代の土器、石器（磨製・打製石器、石斧）等

以上、各地点の調査概要についてのべたが各地点の詳細な報告については、充分な資料整理のうえ今後報告して行きたい。

註1 昭和59年度の第95次調査では第2次調査(19街区)に対して約200m幅を隔てており、東西方向のV字溝を検出した。

註2 福岡市教育委員会「有田七田前遺跡」 1983

註3 福岡市教育委員会「有田遺跡—福岡市有田古代聚落遺跡第1次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集 1968

註4 福岡市教育委員会「有田古代遺跡発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1集 1967

註5 福岡市教育委員会「有田・小田部第1集」所収 1980

註6 福岡市教育委員会「有田・小田部第2集」所収 1982

註7 福岡市教育委員会「有田・小田部第3集」所収 1982

註8 福岡市教育委員会「有田・小田部第4集」所収 1983

註9 福岡市教育委員会「有田・小田部第5集」所収 1984

註10 福岡市教育委員会「有田・小田部第6集」所収 1985

Tab. 1 昭和59・60年度有田・小田部発掘調査一覧表

調査次数	地点名	調査地 域(地番)	面積(m ²)	調査期間	備考
第81次	I	早良区有田			
第82次	J	早良区有田1丁目29-13, 29-14	411m ²	58年7月14日～9月6日	
第83次	I	早良区有田1丁目127-3	378.45m ²	58年8月24日～11月11日	
第84次	K	早良区有田2丁目7-66	303.82m ²	58年9月13日～10月18日	
第85次	A	早良区南庄3丁目261-1	144m ²	58年9月27日～10月5日	
第86次	H	早良区小田部5丁目143-3	247m ²	58年10月11日～11月7日	
第87次	K	早良区有田2丁目12-5	248m ²	58年10月14日～12月1日	
第88次	I	早良区有田1丁目8-7	260m ²	58年11月2日～12月24日	
第89次	A	早良区南庄3丁目261-1	433m ²	58年12月1日～12月20日	
第90次	E	早良区小田部5丁目149-2～4	286m ²	59年12月9日～59年1月28日	
第91次	J	早良区小田部3丁目153	283m ²	59年4月25日～5月11日	
第92次	J	早良区有田1丁目26-6(一部)	150m ²	59年4月26日～5月12日	
第93次	H	早良区小田部3丁目401	319m ²	59年5月11日～5月22日	
第94次	A	早良区南庄3丁目172	453m ²	59年6月8日～7月5日	
第95次	J	早良区有田1丁目31-4	657m ²	59年7月25日～8月29日	
第96次	I	早良区有田1丁目20-7	446m ²	59年8月16日～9月28日	
第97次	A	早良区南庄3丁目90, 91, 93	1,082m ²	59年8月26日～9月5日	
第98次	E	早良区小田部5丁目44	286m ²	59年12月19日～12月25日	
第99次	C	早良区小田部1丁目147, 150	547m ²	60年1月24日～1月31日	
第100次	K	早良区有田3丁目8～2	671m ²	60年8月23日～10月27日	
第101次	J	早良区有田1丁目32-3	215m ²	60年9月4日～10月1日	
第102次	G	早良区小田部2丁目154	338m ²	60年9月26日～11月7日	
第103次	H	早良区小田部3丁目3～14	501m ²	60年10月4日～10月22日	
第105次	G	早良区小田部2丁目18～8	660m ²	60年10月26日～11月22日	
第106次	E	早良区小田部2丁目168	706m ²	60年11月8日～12月14日	

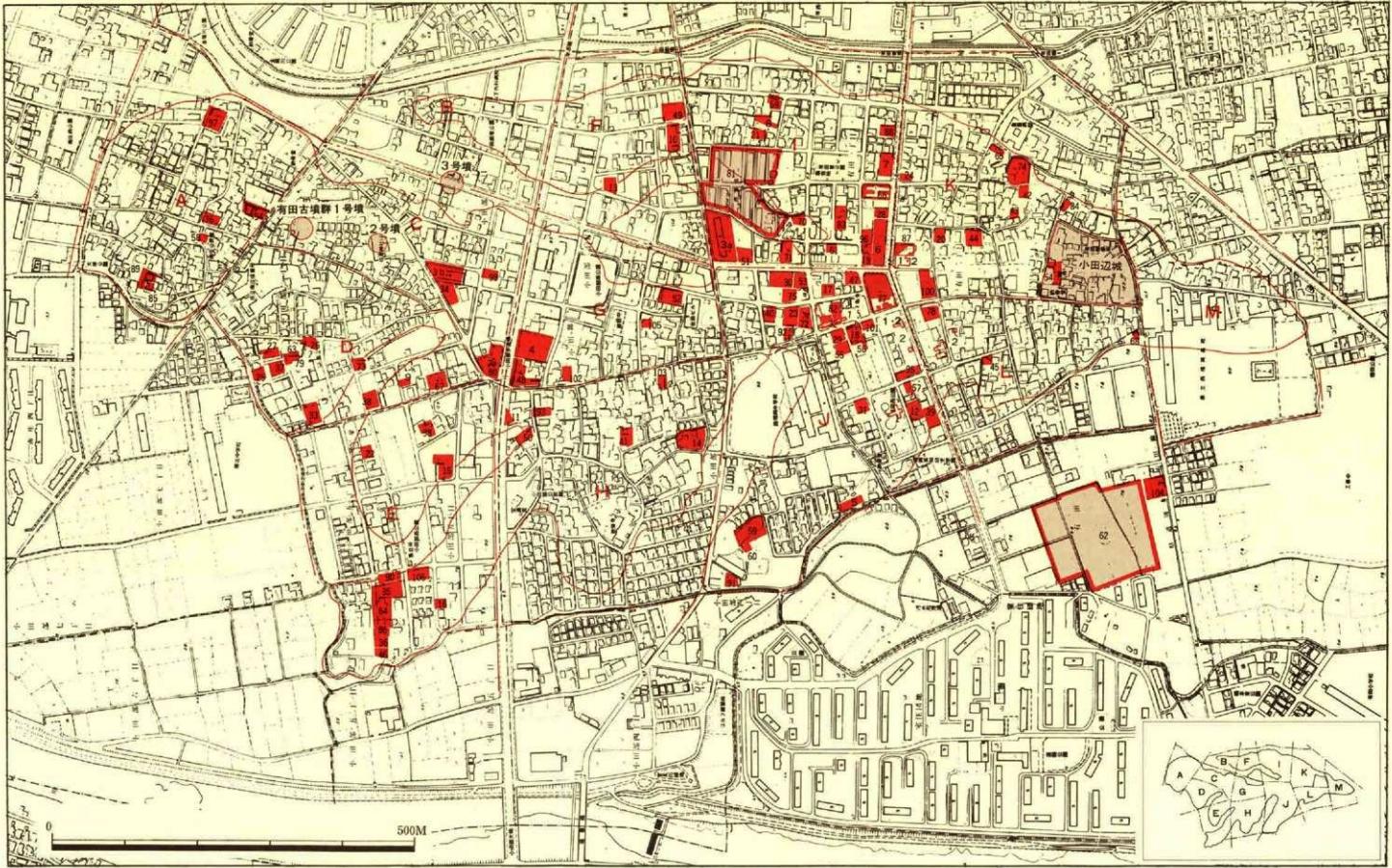
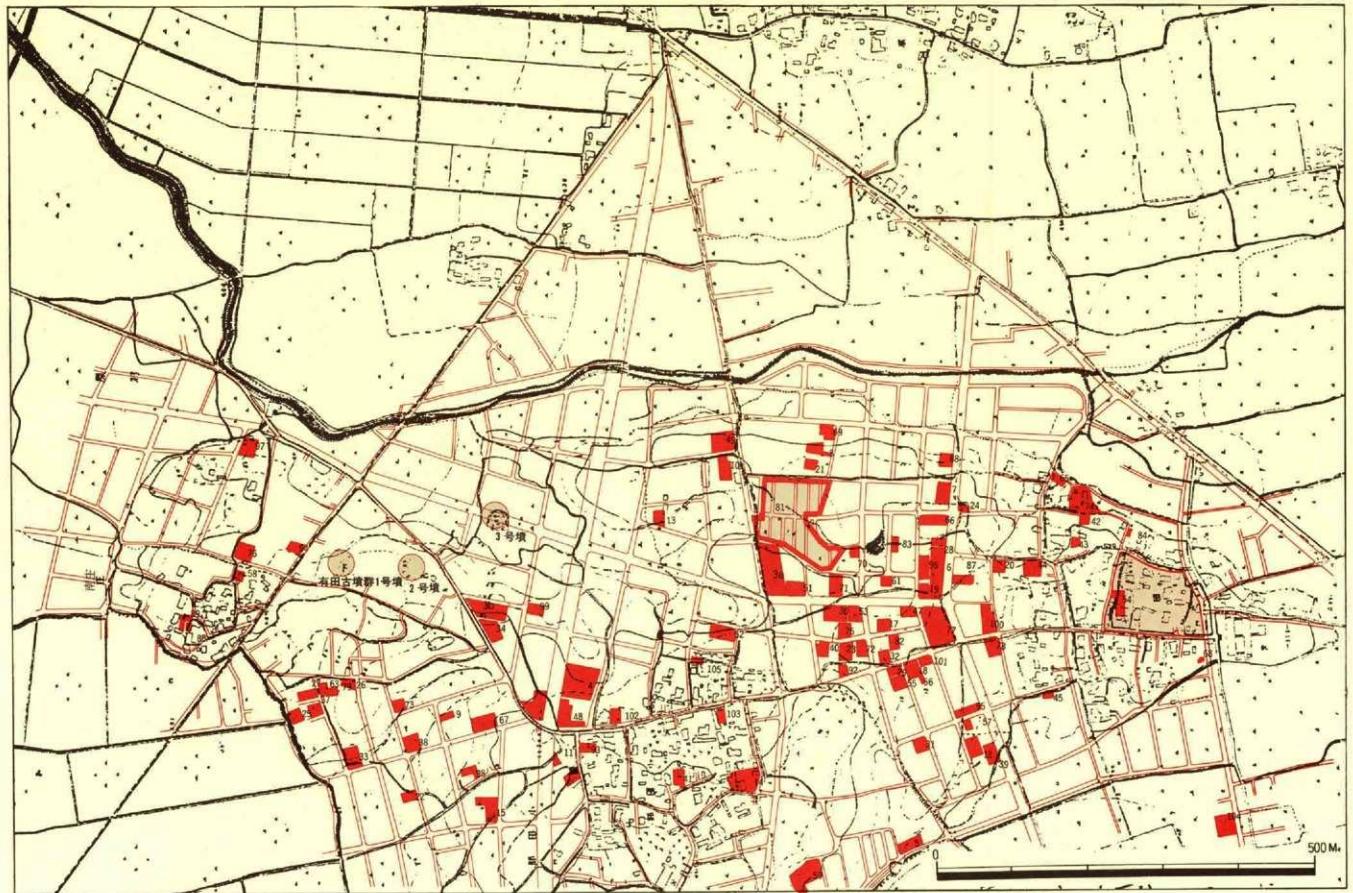


Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点 (1/5,000)
※赤塗りは調査地点を、数字は調査次数を表す。



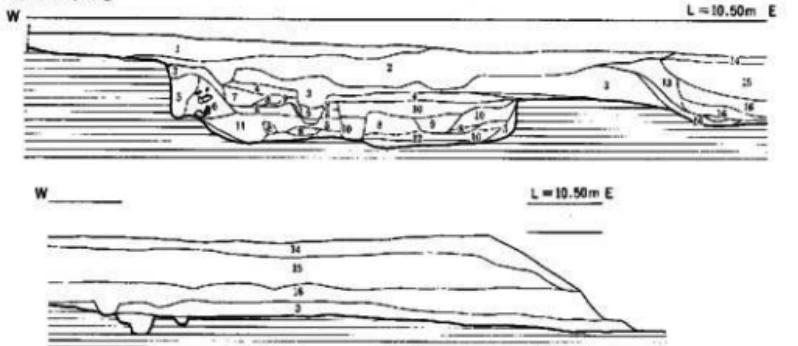
第3章 調査経過

1. 第52次調査

1) 調査地区の地形と概要

調査対象地は福岡市早良区小田部2丁目110-2である。調査対象面積は561m²である。有田地区の平坦地の北側には北東側、及び北西側から谷が切り込んでいるが、当該地は北東方向からの谷頭付近の傾斜地に位置する。調査前の現況の地目は畠地であり、標高10~11mを測る。賃貸住宅建設に伴って発掘調査を実施した。調査期間は昭和56年6月24日~8月5日である。

当該地は試掘調査の結果、区画整理によって著しい削平を受けると共に東側では最高2mの客土が行われている。調査は排土処理の関係から調査区を2分して行った。遺構面は傾斜地であるが、西側上部はローム層、東側下部は八女粘土層が遺構面である。東側の削平が著しく近世初期の溝状遺構しか存在しない。東側一帯の谷地はかつて水田として利用されており、水田化に伴う破壊と思われる。遺構面までの上層はFig. 4の通りであるが、第1・2・14~16層は客土、第3層は旧耕作土、第5層は近世の掘り込み、第4層~10層の落ち込みは第11号土壌の断面である。



土層名

1. 無土層
2. 黒褐色砂質土と黒褐色粘質土の混合土
3. 灰色褐色粘質土
4. 黑褐色粘質土(盛り)
5. 壤不褐化粘質土と黒色砂質粘質土の混合土
6. 黑褐色粘質土と塊山ブロックの混合土(軟質)
7. 深黒色粘質土
8. 明不褐化塊山粘土ブロック(軟質)
9. 黑色粘質土に塊山粘土を含む
10. 黑褐色粘質土に黒褐色塊山ブロックを含む
11. 黒色粘質土に黒褐色山土を含む
(底が盛っているらしく覆土は軟い)
12. 黑褐色粘質土に黑色粘質土混入
13. 黑褐色粘質土
14. 灰褐色土
15. 琉土、黒褐色砂質土と黒褐色土の混合土
16. 塗灰褐色粘質土

Fig. 4 第52次調査区北壁土層図 (1/80)

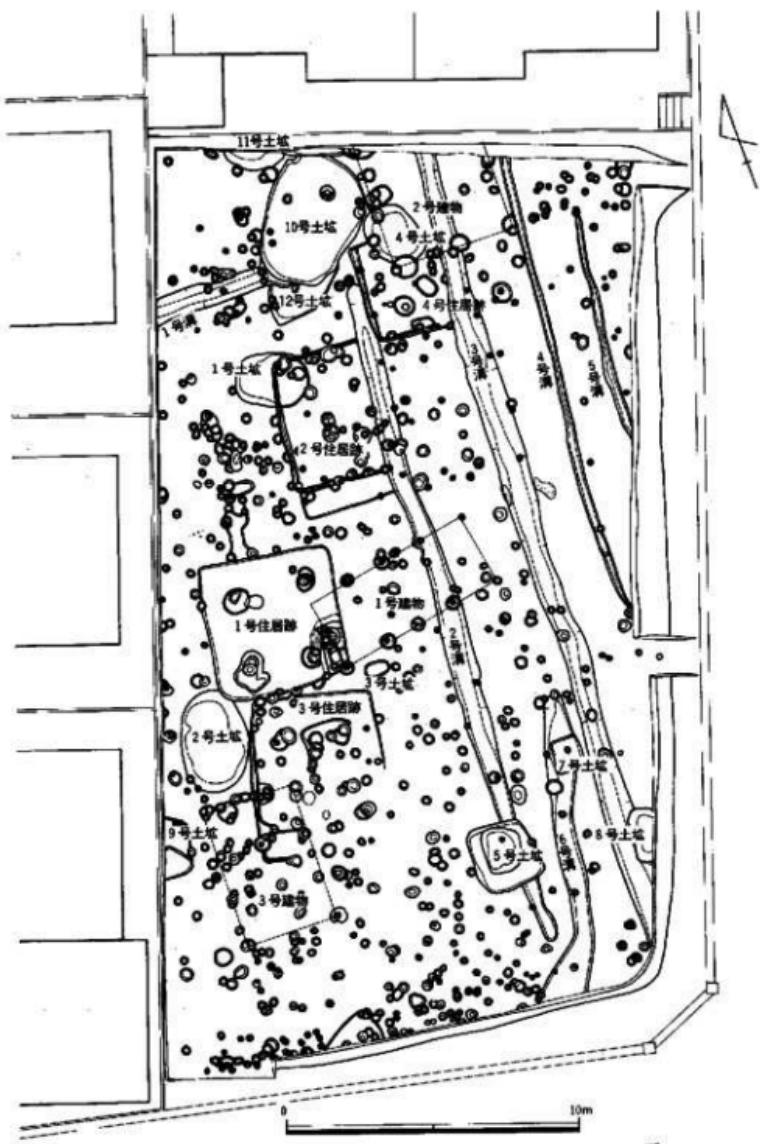


Fig. 5 第52次調査達構配置図 (1/200)

遺構は古墳時代前期の住居跡4軒、古墳時代の土塙6基、奈良時代の土塙1基、平安時代土塙1基時期不詳の獨立柱建物3棟、土塙2基、中世溝1条、近世溝状遺構5条である。古墳時代の住居跡群は第3次調査の住居群と関連が強く、集落を構成する小単位と考えられる。

2) 遺構各説

住居跡

古墳時代初頭の住居跡3軒、同じく中頃の住居跡1軒を検出した。初頭の住居跡はいずれも

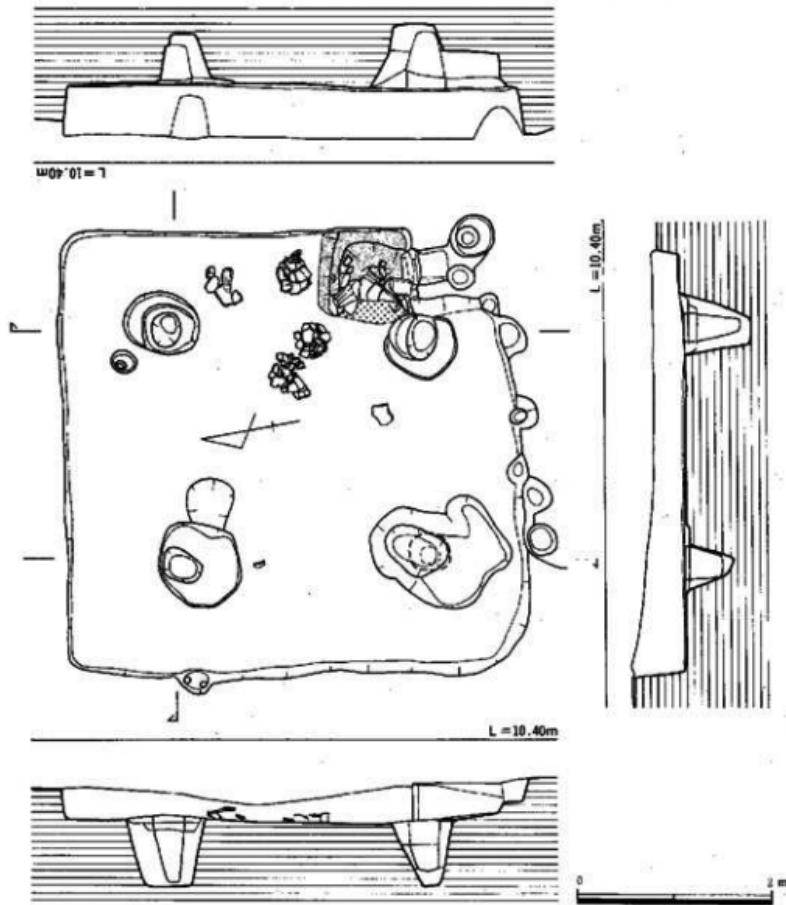


Fig. 6 1号住居跡実測図 (1/60)

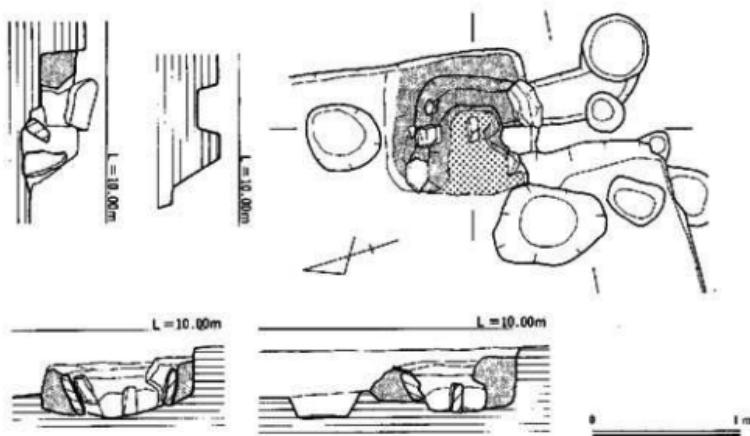


Fig. 7 1号住居跡かまど実測図 (1/40)

ベッドを有しているが、削平が著しく、柱穴等不明な部分が多い。3号住居跡は、4本の柱穴をもっており、構造上類例が無いため再検討を要する。

1号住居跡 (Fig. 6, PL. 4~6)

平面形は方形を呈しており、東南隅にかまどを付設している。しかし、コーナー部分は煙道のために地山を削り残している。西壁長4.7m、東壁長4.5m、北壁長4.5m、南壁長4.5m、深さ55cmを測る。柱穴は4本である。径は62~80cm、柱窓径は28~40cm、深さは70cmを測る。かまどは青灰色粘土と土を混ぜてコの字形に作られている。焚口の両側壁に板石を貼り付け、天井部には板石を構築している。中央には方形状の石を立てて支柱としている。煙道はかまどの奥に作られるのではない。かまどの南壁に接続する。住居跡は東南隅を一辺約85cmの方形に削り残しており、この方形に地山を削り残した部分にかまどに対して直交する煙道を設ける。煙道の幅は35cm深さ15cm、長さ80cmを測る。かまどの大きさは奥行58cm、間口65cm、深さ35cm、壁の厚さ25cmを測る。

遺物は土師器の甕、瓶、須恵器の坏身、蓋、高坏の他鉄器1点がある。その他、蓋形の滑石製品があるが、この器形は中世に多く、住居跡に伴うものか否か検討を要する。

住居跡の時期は須恵器の坏、蓋の形状からⅢa期が考えられる。

2号住居跡 (Fig. 8, PL. 7)

著しい削平のため全形は明らかではない。1号土壤を切っている。平面形は長方形を呈し、南側に幅72~90cm、高さ10cmのベッドを設けている。住居跡の規模は長さ5.3m、現存幅3~3.4mを測る。周溝はベッドの内側から西壁、東壁を巡る。周溝幅は10~15cm、深さ0.8cmを測る。

南側壁下に周溝が無いことは北壁の周溝がベッド内側を巡っていたことを示しているので、北側にもベッドが存在したことは充分に考えられよう。

炉跡は南側ベッド寄りのP3で、径60cmを測る。柱穴はP1, P2で、柱穴径は40~60cm、深さ50~60cmを測る。

遺物は土師器壺の繊片が多い。V期を示す須恵器壺蓋が出土しているが、混入品と考えて差しつかえない。住居跡の時期は古墳時代前期初頭である。

3号住居跡 (Fig. 9, PL. 7)

著しい削平を受けているため全形は明確ではない。構造上から2軒の住居跡の切り合いとも考えられるが、調査では結論をだせなかった。平面形は隅丸長方形を呈し、南側に幅90cmのベッドを付設している。住居跡の長さ5.7m、北壁長4.0m、中央部幅4.6mを測る。周溝は幅10~25

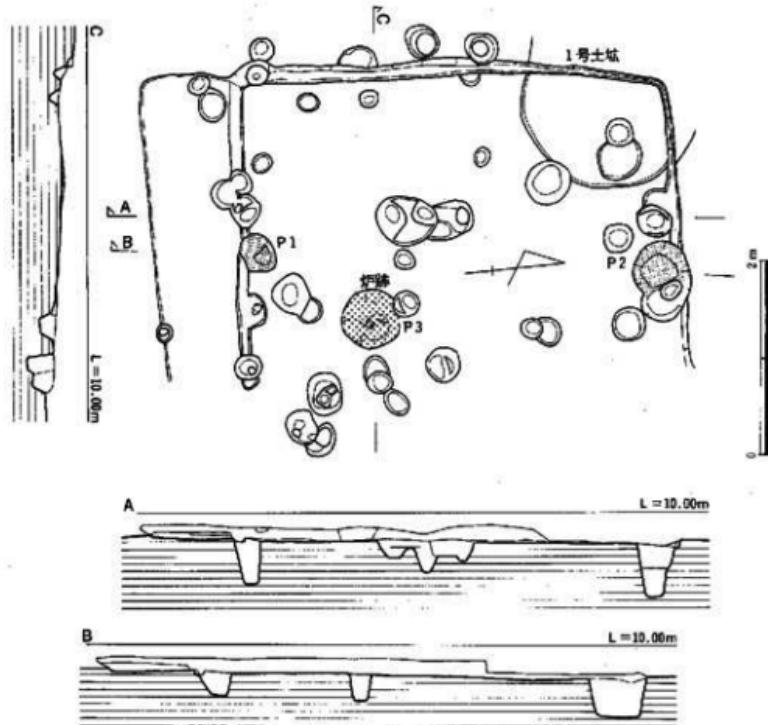


Fig. 8 2号住居跡実測図 (1/60)

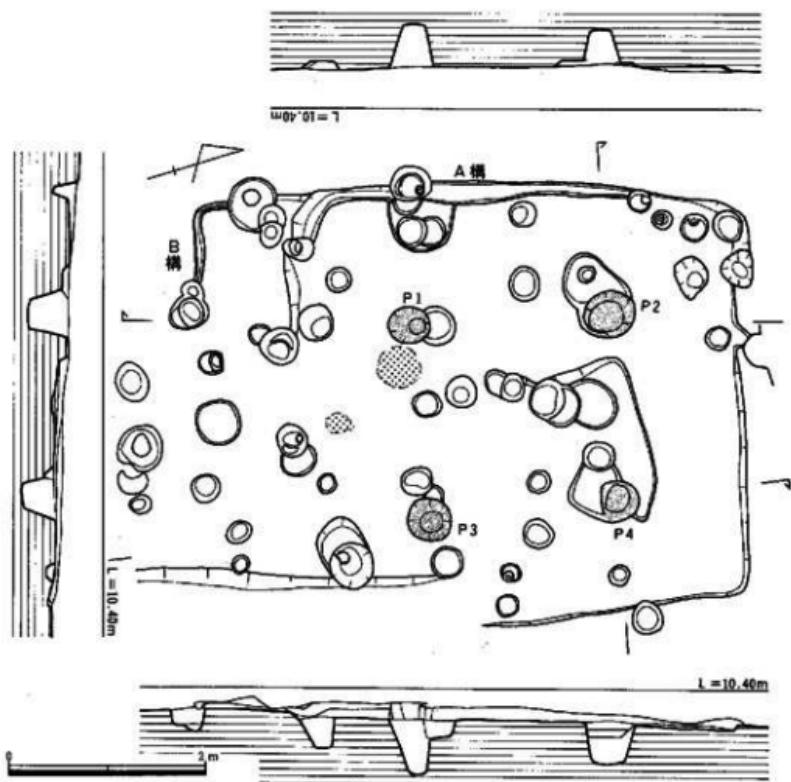


Fig. 9 3号住居跡実測図 (1/60)

cm, 深さ10cmを測り西側壁下からベッド下へ巡るものをA溝とする。周溝幅7~10cm, 深さ15cmを測り, 南壁下から西壁へ巡る溝をB溝とする。B溝は西壁の一部まで巡るが, A溝へ接続しない。又, 西壁はベッド部分の壁と内壁のラインが一致していない。支柱は4本で, P1~P4が相当する。柱穴径は40~55cm, 深さ40~55cmを測る。ベッド内側での壁の長さは4.6mを測るから, 4本柱をもつた一辺約4.6mを測る方形住居跡にベッド状の造り出しを設けた溝造となる。しかし, 一般に4本柱の住居跡は5世紀中頃~後半に出現し, ベッドは消失するので, 当該例は少ないとと思われる。西壁の不一致や周溝の関係から別個の造構とも考えられる。炉跡は不明であるが, P3の東側に焼土が認められる。遺物は全て細片につき年代を決めることは不可能である。

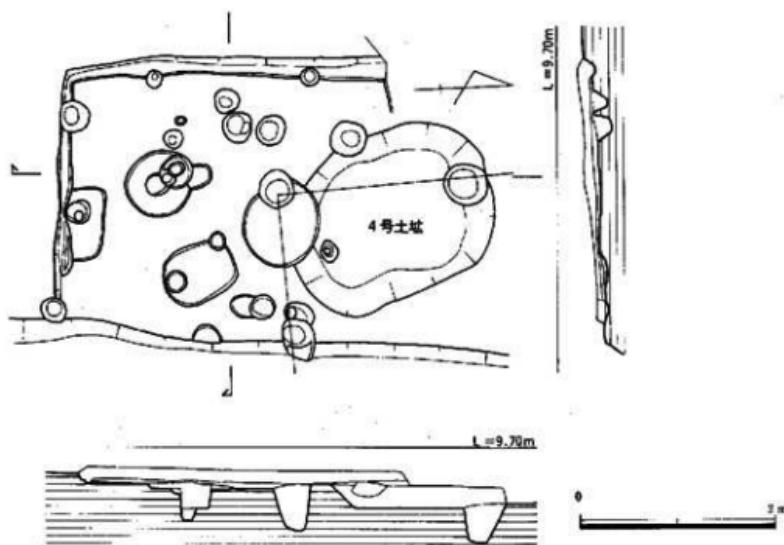


Fig. 10 4号住居跡実測図 (1/60)

4号住居跡 (Fig. 10, PL. 8)

削平は著しく、更に4号土塙、及び近世の溝に切られており、全体形は不明である。長方形を呈するものと思われる。西壁現存長3.35m、南壁現存長2.6m、現存高15cmを測る。周溝は幅10~20cm、深さ8cmを測り、南壁から西壁下を巡る。遺物は土師器の細片であるが、内面にヘラケズリを施しており、時期は古墳時代初頭と考えられる。

土 塙

合計12基の土塙を検出した。時期は古墳時代～平安時代までの間にあるが、5号土塙は土塙墓の可能性がある。1号・2号・4号・8～12号土塙は古墳時代、5号土塙は奈良時代、3号土塙は平安時代である。

1号土塙 (Fig. 11, PL. 9)

2号住居跡と切り合い関係にある。平面形は橢円形を呈し、断面形は皿状である。長さ2.49m、幅1.83m、深さ25cmを測る。覆土は黒褐色粘質土で、上層～下層にかけて出土する。塙底には径40m、深さ12cmを測るP1がある。遺物には土師器の壺、須恵器壊蓋などがある。須恵器の時期はIV期を示している。

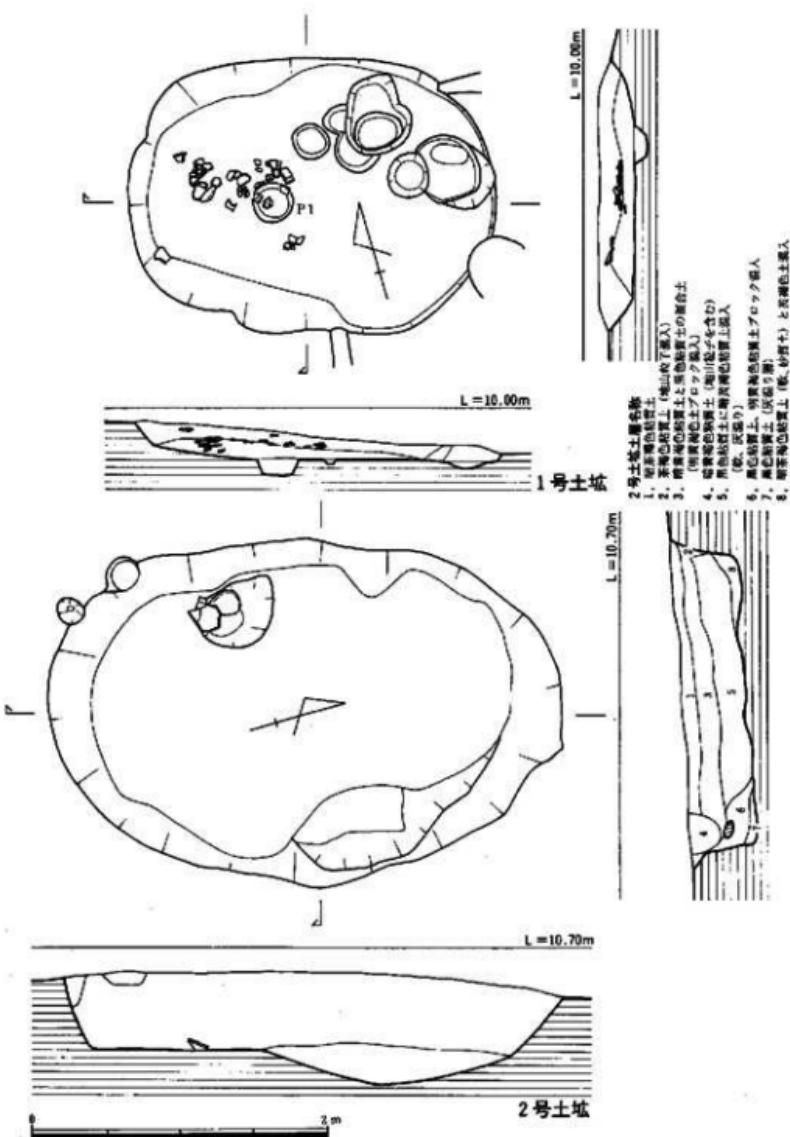


Fig. 11 1号・2号土壤実測図 (1/40)

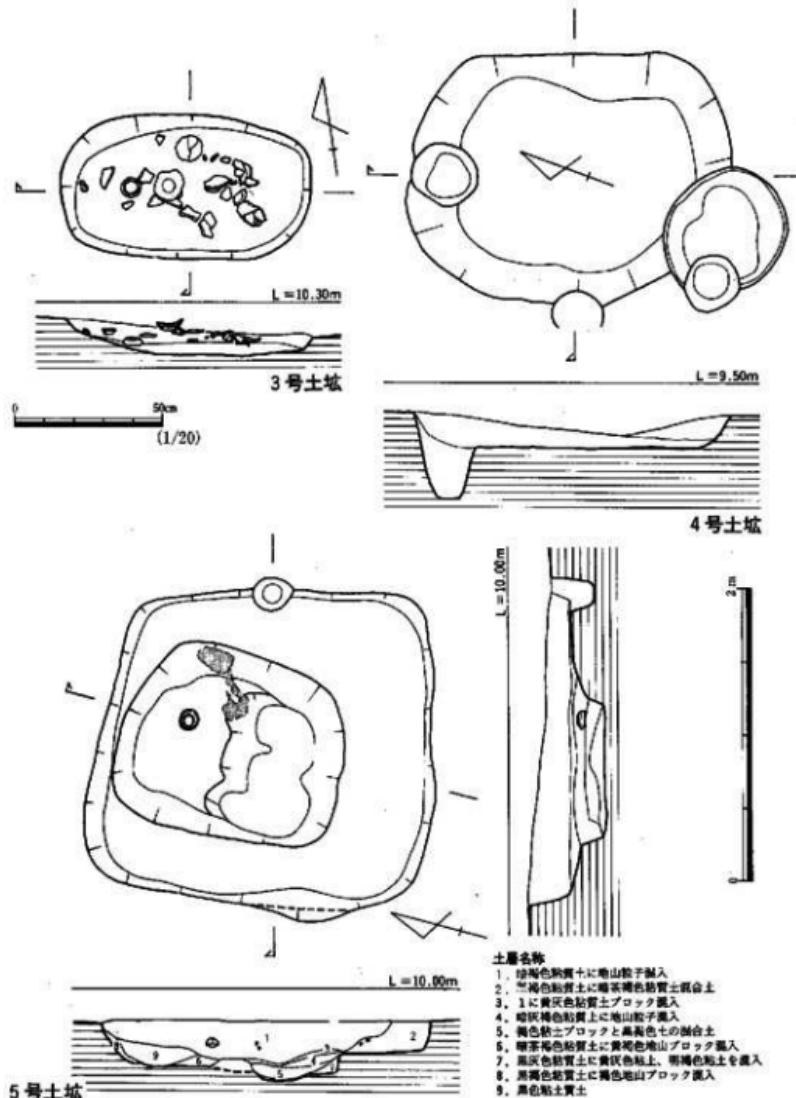


Fig. 12 3号～5号土壤実測図 (1/20, 1/40)

2号土塙 (Fig. 11, PL. 9)

1号住居跡によって切られる。平面形は梢円形を、横断面形は逆梯形を呈している。床面や周壁の状態は起伏が多い。最大長3.43m, 最大幅2.33m, 深さ0.54~0.78mを測る。覆土は大きく4層に分かれ。第一層は暗茶褐色粘質土、第2層は暗茶褐色粘質土と黒色粘質土の混合土、第3層は黒色粘質土(暗茶褐色粘質土混入)、第4層は暗茶褐色粘質土(黄褐色粘質土混入)である。時期は須恵器のII b, 又はIII aに比定できる。

3号土塙 (Fig. 12)

平面形は隅丸長方形を呈し、横断面形は舟底状である。覆土は暗茶褐色を呈しており、遺物の出土が多い。長さ2.55m, 幅は1.5m, 深さ12cmを測る。遺物には土師皿、高台付の土師碗が多く出土する。平安時代の遺構で、9~11世紀の時期が考えられる。

4号土塙 (Fig. 12, PL. 10)

4号住居跡と切り合い関係にあるが、先後関係不明。3号掘立柱建物に切られる。不整隅丸長方形を呈し、断面形は浅い皿状である。覆土は黒褐色粘質土で、長さ2.18m, 幅1.68m, 深さ0.26mを測る。遺物には土師器高壺などがある。

5号土塙 (Fig. 12, PL. 10)

二段掘の土塙で、平面形は方形、内部の二段目は不整隅丸長方形を呈す。断面形は一段目が逆梯形を呈する。二段目の底面は起伏があるが、底面には炭化物の薄い層が存在する。長さは南北長1.90~2.36m、東西長2.2m、深さは一段目が14~36cm、二段目が18~21cmを測る。須恵器高台付碗が二段目の壙底に伏せた状態で出土した。土塙墓の可能性は強い。

6号土塙 (Fig. 5)

調査区の南境界地に位置するため形状は不明である。平面形は隅丸長方形を呈していると思われる。現存長約2m、現存幅1.4m、深さ3cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

7号土塙 (Fig. 13, PL. 10)

平面形は長方形を、断面形は逆梯形を呈する。長さ1.22m、幅約1m、深さ12~15cmを測る。底面に径22cm、深さ14cmを測るpitが存在する。覆土は黒褐色粘質土である。

8号土塙 (Fig. 13, PL. 11)

東側境界地にあるため全形は不明。長さ1.85m、現存幅0.88mを測る。底面は起伏があって、深さ12~18cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は覆土全体から出土し、須恵器壺蓋、土師器甕などが出土した。

9号土塙 (Fig. 13, PL. 11)

西側境界地にある。又、南側は攪乱壙によって破損する。隅丸長方形を呈した土塙で、現存長1.48m、現存幅0.9m、深さ約8cmを測る。

10号土塁 (Fig. 14, PL. 12)

平面形は楕円形を呈した土塁である。北側は11号土塁と切り合うが先後関係は不明。南側は12号土塁と切り合うため不定形を呈している。長さ4.45m、幅3.32m、深さ約0.57mを測る。覆土は黒褐色粘質土を主体として、5層に大きく分けることができる。底面は平坦である。遺物は土塁全体から多量に出土した。土師器壺、壺、高坏、坏、タコ壺、須恵器坏身、蓋、甕、砥石などが出土した。須恵器はIII b～IV期である。

11号土塁 (Fig. 14, PL. 11・13)

10号土塁と切り合うが、先後関係は不明。土塁の大きさは断面図で観察すると、長さ4.8m、深さ1.08mを測る。覆土は黒褐色粘質土を主体とし、下層は暗茶褐色粘質土（地山碎土）と黒褐色粘質土が互層をなしている。遺物は土師甕、須恵器高坏などが出土地していいる。10号土塁と同一時期であろう。

12号土塁 (Fig. 5)

10号土塁の南側で切り合う。不整隅丸長方形を呈し、現存長1.5m、現存幅2.0m、深さ40cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器高坏片が出土地している。

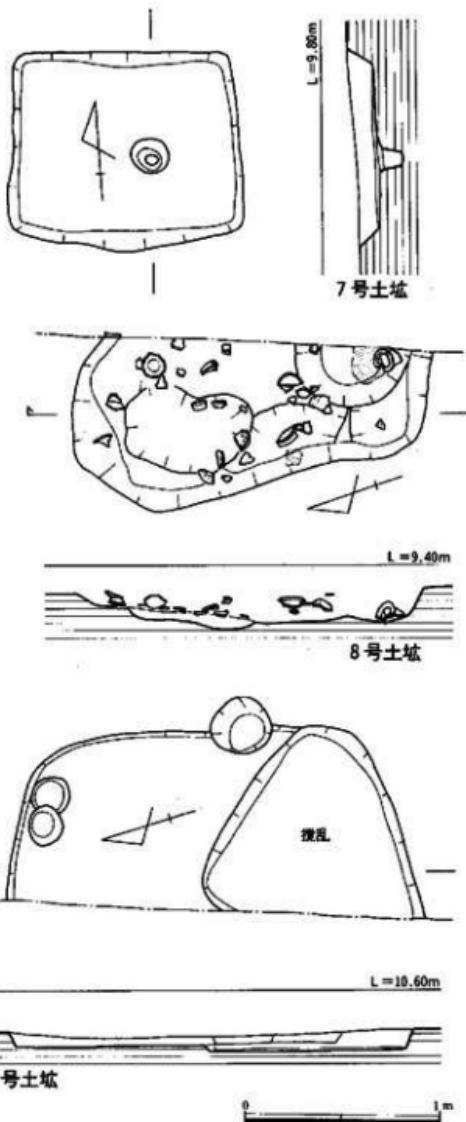


Fig. 13 7号～9号土塁実測図 (1/30)

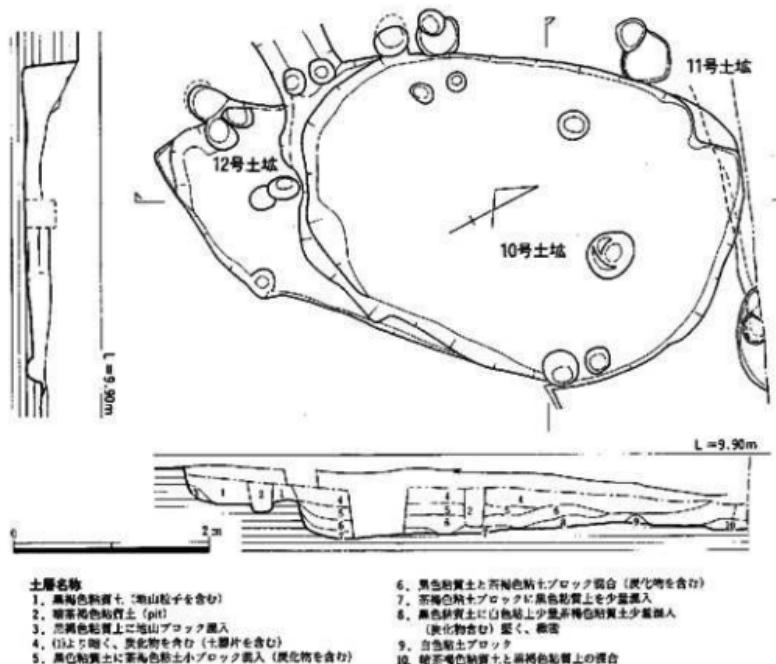


Fig. 14 10号～11号土壤実測図 (1/60)

溝

南北方向の溝 5 条、東西方向の溝 1 条を検出した。

1号溝 (Fig. 15, PL. 13)

台地を横切る東西方向の溝である。断面形は箱薬研掘を呈しており、現存長は 8.5m、現存幅は 0.7m を測る。覆土は第 1 層が暗茶褐色

粘質土、第 2 層が増茶褐色粘質土 (ローム碎土ブロック混入) である。遺物は白磁片などが出土している。

2～6号溝 (Fig. 5, PL. 14)

いずれも南北方向の溝で、断面形は U 字形を呈した浅い溝である。各々の溝は台地主軸に対して並行しており、水田又は



Fig. 15 1号溝土層断面図 (1/40)

畠地に伴う排水溝であろう。溝幅は2号が0.5m, 3号が0.9m, 4号が0.8~1m, 5号は0.2~0.3m, 6号は0.3~0.7m測る。遺物はないが、覆土からこれらの溝は近世、近代のものと考えられる。

掘立柱建物

柱穴と思われるpitは多数検出したが、建物として認めたものは3棟だけである。2号・3号掘立柱建物は主軸方向が一致しており、同一時期の所産である。

1号掘立柱建物 (Fig. 16, PL. 15)

東西方向の建物で、梁行1間、桁行3間の側柱だけの建物である。梁行2.49m、桁行5.88m、梁間平均8.3尺、桁間平均19.6尺である。柱穴は径40~50cm、柱痕径18~20cm、深さ約50cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

2号掘立柱建物 (Fig. 16, PL. 15)

境界地にあるため、桁行の規模は不明。梁行2間、桁行2間+αの南北方向の建物である。梁行4.2m、桁行4.26m以上、梁間平均14尺、桁間平均14.2尺を測る。覆土は黒褐色粘質土である。柱穴径60~100cm、柱痕径30cm、深さ60cmを測る。

3号掘立柱建物 (Fig. 16, PL. 15)

梁行2間、桁行3間の側柱だけの建物である。南北棟で、梁行3.42m、桁行4.74m、梁間平均11.4尺、桁間平均15.8尺を測る。柱穴径35~60cm、深さ30~70cmである。覆土は黒褐色粘質土である。

Tab. 2 第52次調査掘立柱建物一覧表

(単位: cm)

規 模	方 向	桁 行		梁 行		方 位	床面積 (m ²)	備 考
		実 長	柱間寸法(尺)	実 長	柱間寸法(尺)			
1号	4×1 東 西	595(19.8)	5.5+4+4.6+5.7 4.8+4.7+4.7+5.6	250(8.3)	8.3	N82°E	15	
2号	2×2 南 北	430(14.3)	8.7+5.6	420(14)	7 + 7	N 1°E	18	
3号	3×2 南 北	478(16.6)	5.5+ 5 +5.4	315(10.5)	5 + 5.5	N 3°E	15	

3) 遺 物 各 説

1号住居跡出土遺物 (Fig. 17, 18, PL. 16, 19)

須恵器

壺蓋(1, 2) 1は完形品で、口径12.6cm、器高4.2cm、2は復元口径12.2cm、器高3.2cm

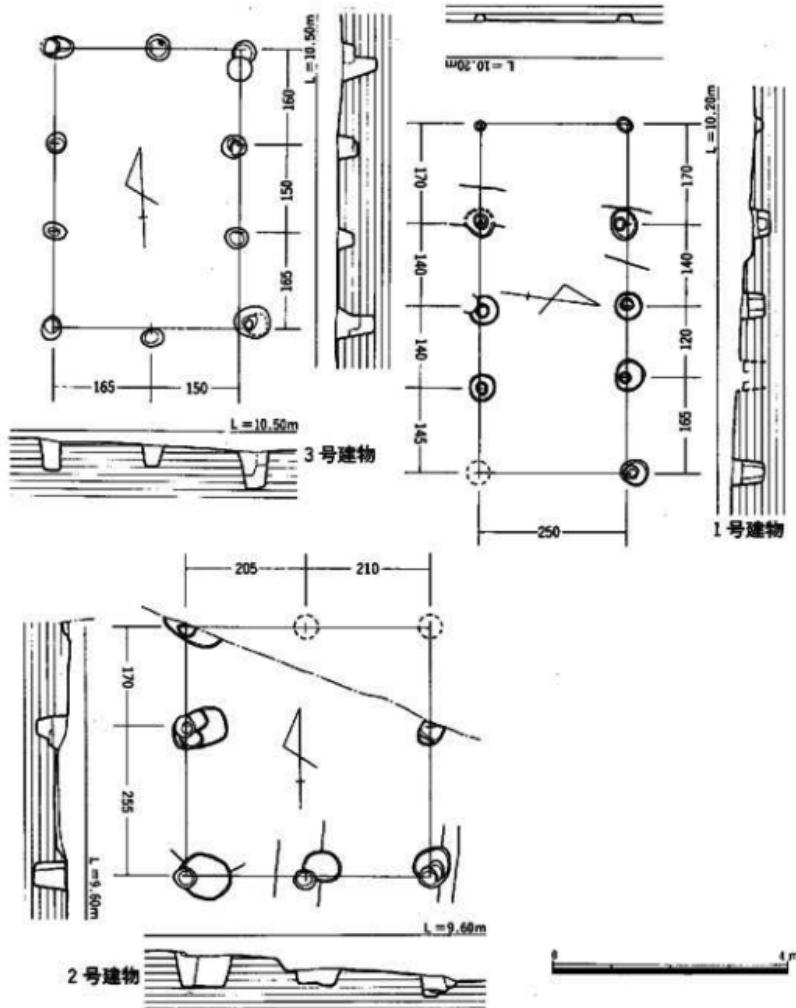
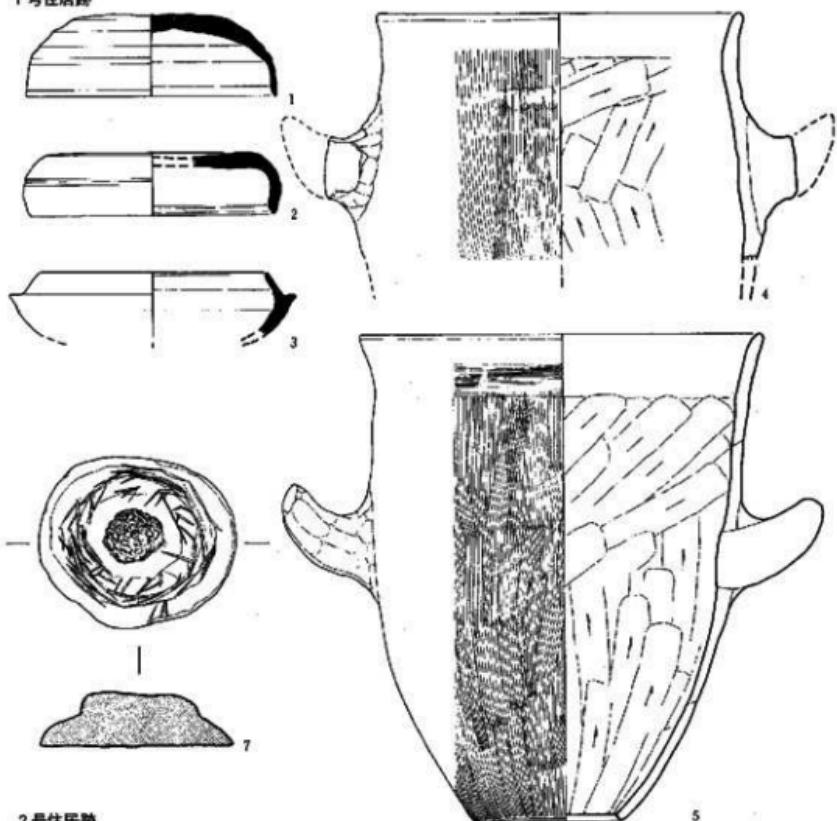


Fig. 16 1号～3号据立柱建物 (1/100)

1号住居跡



2号住居跡

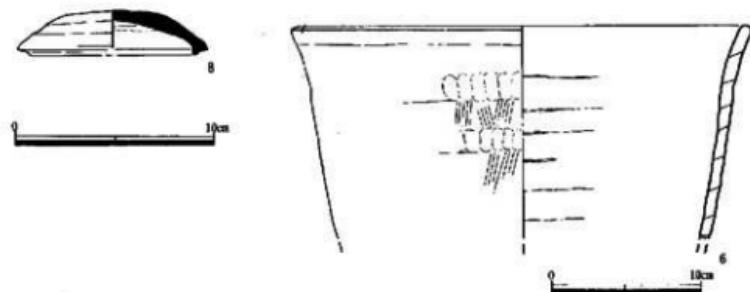


Fig. 17 1号・2号住居跡出土遺物 (1/3, 1/4)

を測る。2の口縁端部は内側に小さく切り込む。1は体部外面の2/3まで、2は天井部と体部の境までヘラケズリを施す。時計回りである。1は胎土に砂粒を含む。1は淡灰青色、2は灰色を呈し、焼成は良好。

壺身(3) 復元口径11.5cmを測る。内外面ヨコナデ調整。蓋受けは小さく、高い立ち上りを有している。胎土に砂粒を含み、灰青色を呈している。

その他高壺が數点出土している。いずれも脚部上部の破片であるが、外面にはカキ目を施し、透しはタテ長である。黒灰色又は、淡灰色を呈している。

土師器

壺(4, 5, 6) 4は口径25cm, 5は完形品で、口径27.4cm, 器高33cmを測る。口縁部は

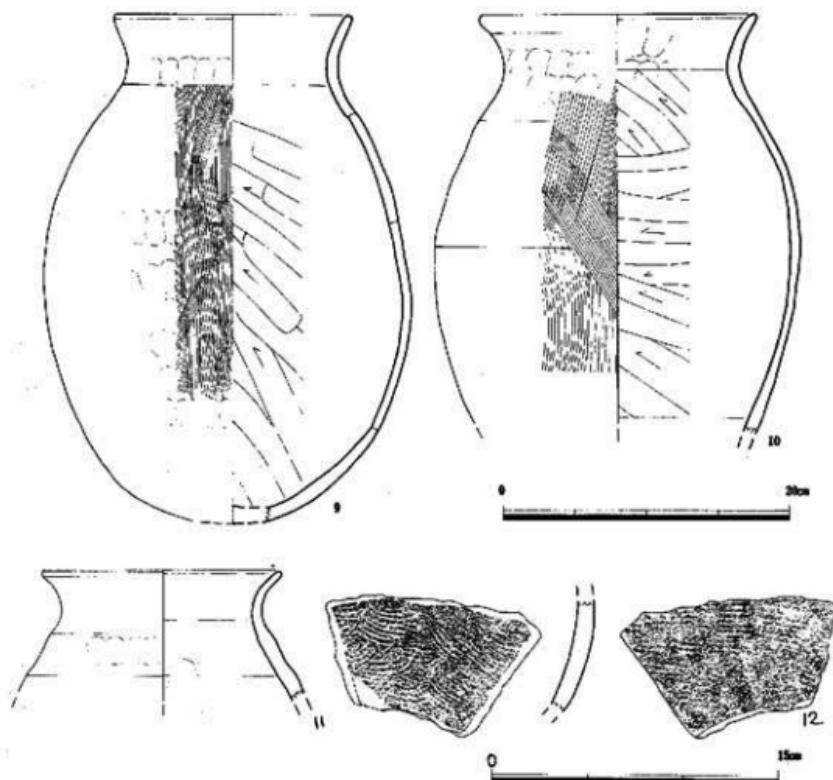


Fig. 18 1号住居跡, 1号土壤出土遺物 (1/4, 1/3)

かるく外反するが、4は口がすぼまり、5は開く形態をとる。5の底部は焼成前に径9.6cmの大きさに穿孔している。把手の接着方法は、4は貼り付け、5は差し込みによるものである。内面の下位はタテ方向、上位はナナメ方向のヘラケズリである。外面はタテ方向のハケである。4は胎土に雲母、長石粒子を含む。5は砂粒を多く含む。4は暗褐色、5は暗黄褐色を呈する。6は口径31.2cmを測り、口が開く器形で、体部上位に把手が付くものと思われる。内面に粘土の巻き上げ痕を残している。胎土に砂粒を含み、明黄褐色を呈する。

甕(9, 10) 9は口径17.1cm、残存高36cm、10は口径19.4cm、現存高30.9cmを測る。長胴形の器形で、胴部外面はタテハケ、内面はナナメ方向のヘラケズリを施す。口縁端部は丸味をもつ。いずれも胎土に砂粒を多く含み、暗黄灰色を呈し、8は外面に媒が付着する。

石 器

滑石製品(7) 蓋と思われるが、断面形は笠形を呈している。下底面は平坦ではなく、やや内反をしている。下底面は不整円形で、径は8.8cm~10cmである。最大高は3.2cmを測る。つまみは径6cmを測り、不整円形であるが、削り出しの削り痕を残している。頂部にも敲打痕が残っているところから、未製品の段階と思われる。一部に媒が付着しており、石鍋の転用品と考えられる。床面の出土では無い。中世遺物の可能性を残している。

2号住居跡出土遺物 (Fig. 17, PL. 16)

須恵器

壺蓋(8) 口径8.2cm、器高2.3cmを測る。口縁部内側のかえりは、口縁部よりも高く、断面三角形状を呈している。内外面は磨滅のため調整は不明である。天井部のヘラケズリは逆時計回りである。胎土に砂粒を含み、灰白色を呈する。住民跡形態から古墳時代初頭が考えられるので混入品と思われる。

1号土塙出土遺物 (Fig. 18, PL. 18, 19)

2号住居跡と切り合っているため、遺物に混在がみられるが、土師器甕等の形態から2号住居跡に後出するものと思われる。

土師器

甕(11, 12) 口径12.6cmを測る。口縁部は小さく外反し、内面はヨコナデ調整、外面はヨコハケである。その他は磨滅のため調整不明。淡赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。12は胴部片であるが、外面には格子目タタキ、内面には青海波のタタキがある。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含んでいる。12は須恵器の手法で作られた土師器といえよう。

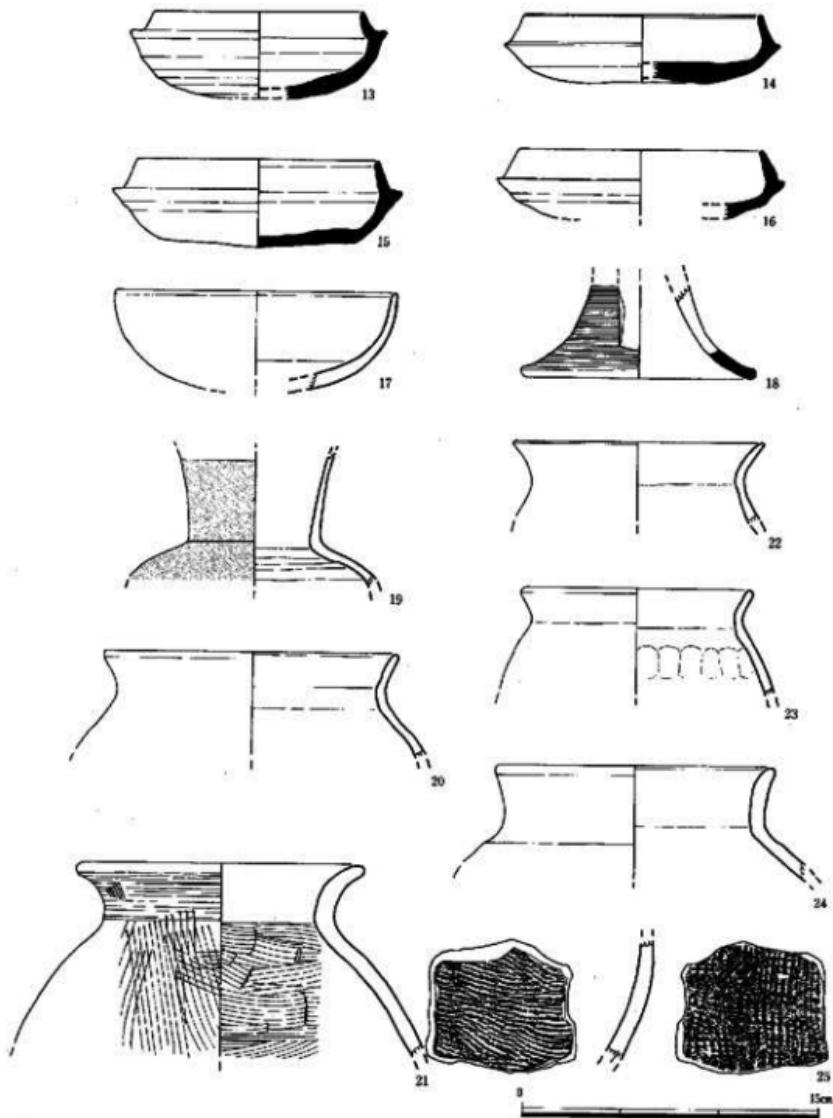


Fig. 19 2号土壤出土遺物 (1/3)

2号土塙出土遺物 (Fig. 19, PL. 18, 19)

須恵器

- 壺身(13~16) 口径から大、小の二種がある。小の13は口径10.7cm、器高6.5cmを測る。体部外面のヘラケズリは逆時計まわりで、体部の3/4まで施される。大は14~16で、14の口径は12.2cm、器高3.5cm、15は完形品で、口径12.4cm、器高4.5cm、16の口径12.2cm、現存高3.5cmを測る。蓋受けは小さく、1.2~1.8cmの高い立ち上り部を有している。14の端部は平坦に、15の端部内側はナナメに削り取っている。ヘラケズリは体部の約3/4まで施し、14~16は逆時計回りである。内面はヨコナデ調整である。いずれも胎土に砂粒を含む。13・14は暗青灰色、15は青灰色、16は灰色を呈している。
- 高坏(18) 脚部の底径12.2cmを測る。脚擬端部はやや丸味をもつ。透しは縦長で、幅2.2cmを測る。胎土に砂粒を含み、暗青灰色を呈している。

土師器

壺(17) 口径14.5cm、現存高5.1cmを測る。体部は半球体を呈し、口縁端部は丸くおさめる。内外面共にヨコナデ調整、胎土に砂粒を含み、灰褐色を呈する。

壺(19) 口縁部と体部下半を欠く。頸部径6.8cmを測る。胴部には粘土紐巻き上げ痕が残る。口縁部外面はタテ方向、胴部外面はヨコ方向のヘラ研磨である。丹塗りを施す。胎土は良好である。

壺(20~25) 胴部の大部分を欠いている。20は口径15.1cm、21の口径14.7cm、22の口径12.9cm、23の口径12cm、24の口径14.3cmを測る。21・24は器壁が厚く、中形品である。21の内面は粗いヨコハケを施す。20以外は胎土に砂粒を含む。20、23は赤褐色、24は淡赤褐色を呈する。25は胴部片であるが、外面には格子目のタタキを、内面には青海波のタタキを施す。内外面は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。須恵器の成形手法を用いた土器である。20・22~24は器壁が薄く、小形品であるが、口縁部は小さく外反する。胴部内面は磨滅のため調整は不明である。

3号土塙出土遺物 (Fig. 20, PL. 18, 19)

土師器

壺(26, 27, 29, 30) 高台付の壺で26は小形、27・29・30は大形である。器高が深く、口縁部は小さく外反する。高台は外開きで、29の端部が尖がるものと30の端部断面形がコの字形のものとがある。口径は26が16.1cm、27が14.8cm、現存高5.6cm、29の高台径が7.9cm、30の高台径8.5cmを測る。26・29・30は内黒土器で、外面は26が黄灰色を、30が淡赤褐色を呈する。27の胎土は精良で、他は砂粒を含む。27は黄灰白色を呈す。他に外面黒色土器が1点ある。

壺(28) 底部を欠く。口径15.8cm、器高4.2cmを測る。体部は丸味をもつ。内外面はヨコナデ調整で、胎土に砂粒を含む。暗褐色を呈する。

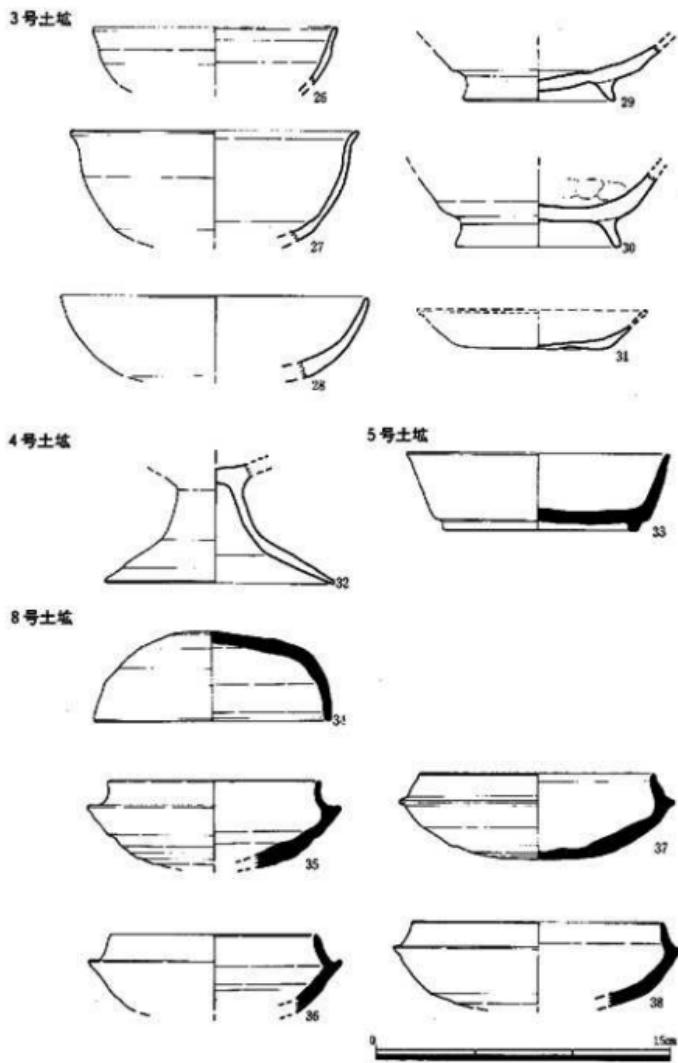


Fig. 20 3号～5号・8号土塚出土遺物 (1/3)

皿(31) 実測可能な皿は2点であった。31の口径4.7cm、器高1.2cmを測る。ヘラ切り底である。胎土に砂粒を含み、淡赤褐色を呈する。

4号土塙出土遺物 (Fig. 20, PL. 18, 19)

細片が多く、実測できるものは1点にすぎない。

土師器

高坏(32) 脚部径11.9cm、残存高6.2cmを測る。裾部は大きく開き、筒部と裾部との境は内面に稜を有している。内外面磨減のため調整は不明。胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈する。

5号土塙出土遺物 (Fig. 20, PL. 18, 19)

須恵器

塊(33) 口径13.5cm、器高4cm、高台径10.5cmを測る。高台は断面コの字形で、体部は直線的に立ちあがる。外面ヨコナデ調整。胎土に砂粒を含み、灰色を呈する。

8号土塙出土遺物 (Fig. 20, PL. 18, 19)

須恵器、及び土師器が出土したが、土師器は壺片があるが、細片のため図示できない。

須恵器

壺蓋(34) 復元口径12.3cm、器高4.7cmを測る。体部の丸味は強く、口縁端部は丸味をもつ。外面のヘラケズリは逆時計回りで、約3/4に施す。胎土に砂粒を含み、暗青灰色を呈する。

壺身(35~38) 35は口径11cm、現存高4.6cm、36は口径10.6cm、37は完形品で、口径12.1cm、器高4.4cm、38は口径12.3cm、残存高4.4cmを測る。蓋受け部が小さく、高い立ち上りを有しており、37の口縁端部は内側にナメに削り取っており、35の端部は平坦仕上げである。ヘラケズリは37が約2/3まで、35・36・38は約1/2までに施される。35・37・38は逆時計回りのケズリである。内面はヨコナデ調整で、いずれも胎土に細かい砂粒を含む。35・38は暗青色、36は淡灰色、37は灰青色を呈している。

その他、高坏の脚部片がある。実測は不可能であるが、縦長の透しを設けている。暗青色を呈する。

10号土塙出土遺物 (Fig. 21, PL. 17)

各層から多量の遺物が出土した。須恵器及び土師器においても年代幅をもっている。須恵器は壺身、蓋、高坏、壺、小形鉢、赤焼け土器がある。土師器には壺、小形鉢、壺、瓶、タコ壺がある。

須恵器

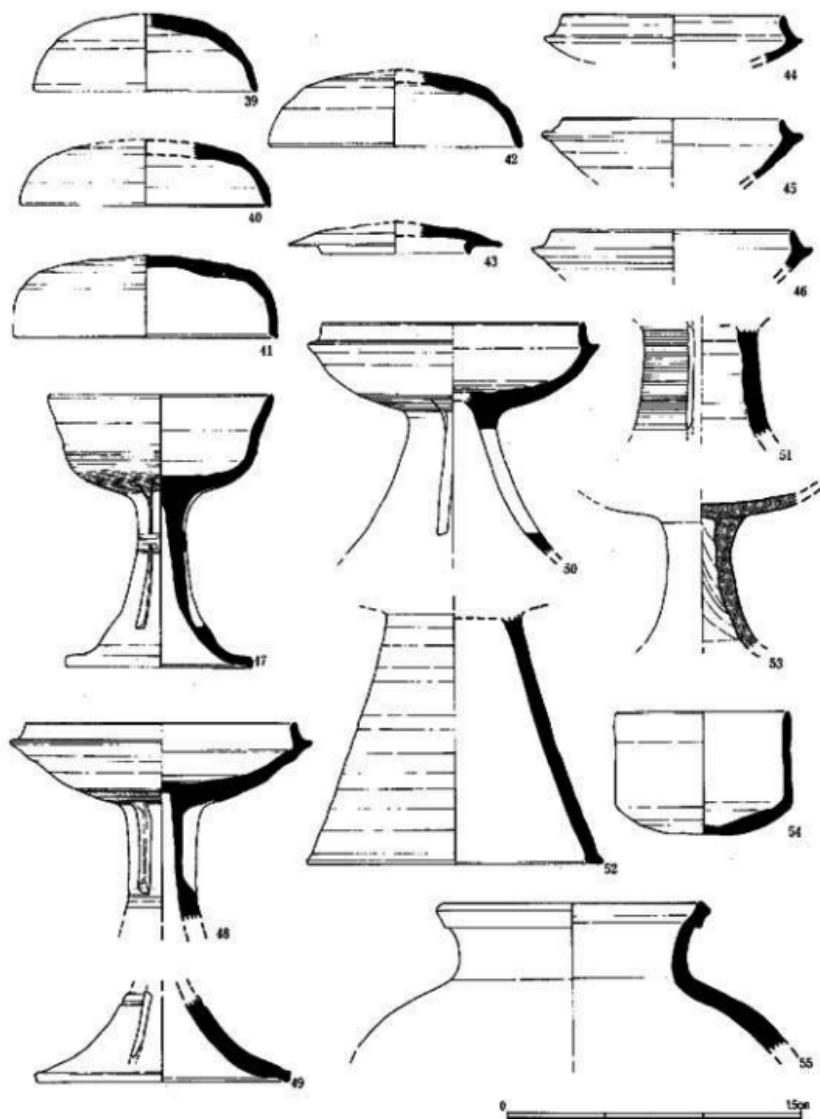


Fig. 21 10号土壤出土遺物 (1/3)

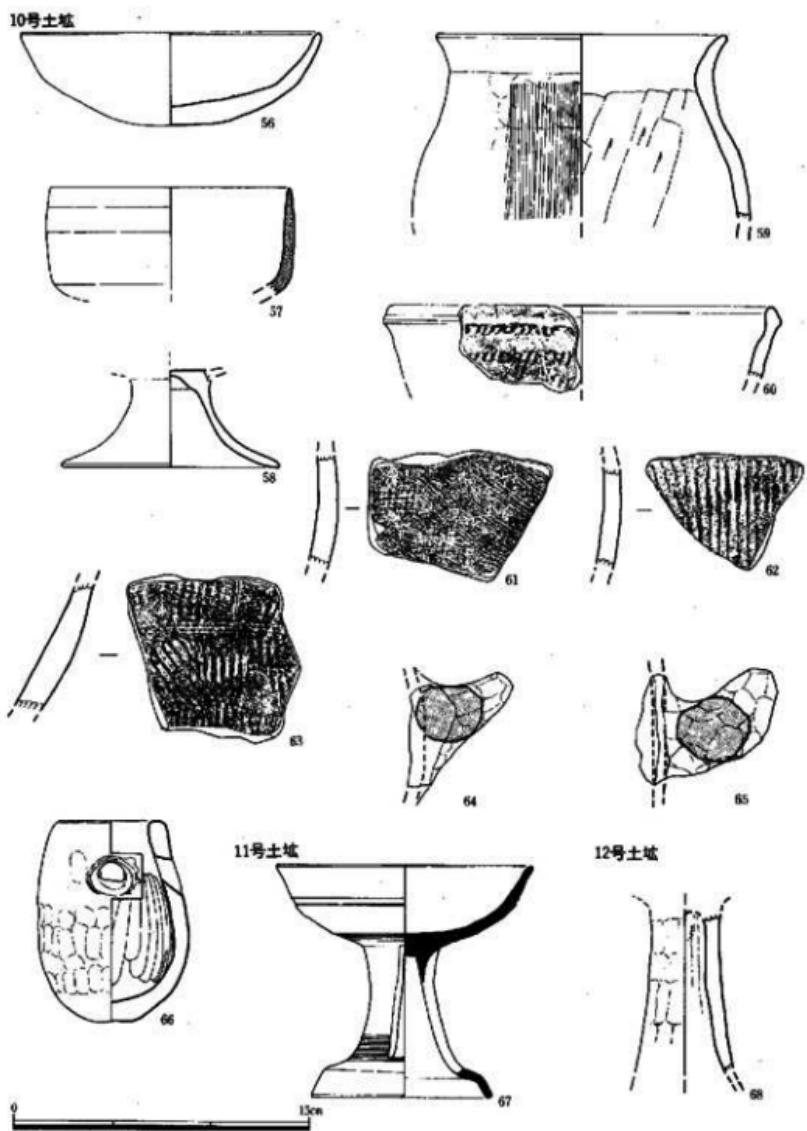


Fig. 22 10号～12号土壤出土遺物 (1/3)

坏蓋（39～43） 39・41は器高が深い。39の口径11.4cm、器高4 cmを、41は口径13.6cm、器高4.2cmを測る。41の口縁端部内側はナナメに削り取っている。40はわずかに痕跡を残す。40・42は器高の浅いもので、40の口径11.4cm、器高4 cm、42の口径13.1cm、残存高3.2cmを測る。口縁端部は丸く仕上げる。ヘラケズリは、31が約1/3、40・42が約2/3、41が約3/4まで施し、方向は41が逆時計回り、42が時計回りである。いずれも胎土に砂粒を含み、39は暗青灰色、41は暗灰色、40は灰白色を呈する。43は口縁部内側にかえりを有しており、天井部には宝珠形のつまみがつくものと思われる。口径は7.6cm、残存高1.6cmを測る。内外面ヨコナデ調整。暗青色を呈する。

坏身（44～46） いずれも破片であるが、44の口径11.5cm、45の口径11.2cm、46の口径12.4cmを測る。蓋受け部は小さく、44のみ立ち上りが長く、端部内側をナナメに削り取っている。胎土に砂粒を含み、44は灰色、45は暗灰色、46は灰青色である。

高坏（47～51） 47は無蓋高坏、48・50は有蓋高坏である。47は口径11.5cm、高台径9.6cm、器高14.2cmを測る。坏部底面にカキ目を施す。脚部は中位の横沈線の上部と下部に継長の透しを施しているが、内面まで貫いていない。脚端部は内側へつまみ出して平坦にしている。48の口径は13.9cm、残存高10.2cmを測る。立ち上り高は小さい。沈線上位の継長の透しは47同様に内面まで貫いていない。50の口径13.6cm、残存高11.8cmを測る。坏底部にはカキ目を施す。脚は大きく開いており、幅6.6cmの継長の透しを施す。49の脚は裾広がりで、端部は平坦に仕上げる。胎土は48・49・51が精選され、47・50には砂粒を含む。47・51は黒灰色、48・50は灰色、49は赤褐色を呈す。49は赤焼け土器である。

器台（52、53） いずれも脚部片である。52は脚部径15.3cm、現存高13.1cm、53は現存高7.4cmを測る。52は大きく開いた脚で、端部は平坦である。53の坏部は浅く、皿状の器形であろう。脚は細身である。内外面磨滅している。胎土に砂粒を含むが、52は灰白色を呈する。53は淡赤褐色を呈する。須恵器の赤焼け土器である。

鉢（54） 小形の鉢である。口径9 cm、復元器高6.3cmを測る。体部は直線的で、底部との境に稜を有している。底部には逆時計回りのヘラケズリを施す。胎土に砂粒を含み、暗青色を呈する。

壺（55） 小形の壺ともいいくべきで、口径14.1cmを測る。口縁部は緩く外反するが、外面に粘土を貼り付けて肥厚させる。山形突堤の退化した形状である。胎土には細かい砂粒を含み、灰白色を呈している。

土師器

坏（56） 完成品で、口径9 cm、器高4.8cmを測る。内外面ナデ調整である。胎土に砂粒を少し含む。赤褐色を呈している。

鉢（57） 小形である。従来、壺と呼称された器形である。口径12.5cm、残存高2.3cmを測る。

磨滅のため調整不明。胎土に砂粒を含み、淡赤褐色を呈する。須恵器の赤焼け土器である。
高坏 (58) 補足の脚で、端部は丸味をもつ。脚径11cm、残存高4.9cmを測る。調整不明。胎土上に砂粒を含み、褐色を呈する。

甕 (59～63) 59は口径14.9cm、現存高4.6cmを測る。口縁部は緩く外反し、内面に稜を有する。器壁は厚い。内面はタテ方向のヘラケズリ、外面はタテハケ調整である。60は口径21.1cmを測る。口縁端部の内側を肥厚させる。外面に格子目タタキを施す。62・63の外面は格子目のタタキを施し、内面はナデ調整である。胎土に砂粒を多く含み、60は赤褐色、62・63は淡赤褐色、59は暗赤褐色を呈する。

瓶 (64・65) 把手の部分である。64は貼り付け、65は差し込みである。64は径2.8～3.5cm、長さ4.0cm、65は径3.4cm、長さ6.0cmを測る。胎土に砂粒を多く含む。

鉢 (66) 完形品で、口径5.4cm、器高10.5cmを測る。下半が膨った器形である。上位に穿孔があって、孔径1.2～1.8cmを測る。内外面はナデ調整である。胎土に長石と雲母を含み、黄褐色を呈する。

11号土塙出土遺物 (Fig. 22, PL. 18, 19)

須恵器

高坏 (67) 無蓋高坏である。口径13.2cm、器高12.1cm、高台径9.2cmを測る。坏底部と脚筒部下位にカキ目を施す。坏部は口縁部と底部の境に沈線を施し、脚部は筒部と壺部の境に二重の段を有している。内外面ヨコナデ調整。胎土に砂粒を含み、灰色を呈する。

12号土塙出土遺物 (Fig. 22, PL. 18, 19)

土師器

高坏 (68) 脚部残存高8.1cmを測る。細身の脚である。胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈する。内面ヘラナデを施す。

1号溝出土遺物 (Fig. 23, PL. 18)

土師實土器

措鉢 (70) 底径17.2cmを測る。内面は粗いヨコハケ、外面はナデ調整である。内面には5本の条痕を施す。胎土に砂粒を含み、灰褐色を呈している。

白磁

碗 (69) 玉縁口縁を有する。高台径5.6cmを測り、釉は灰白色である。内面に厚目に施し、外面は露胎である。

1号溝

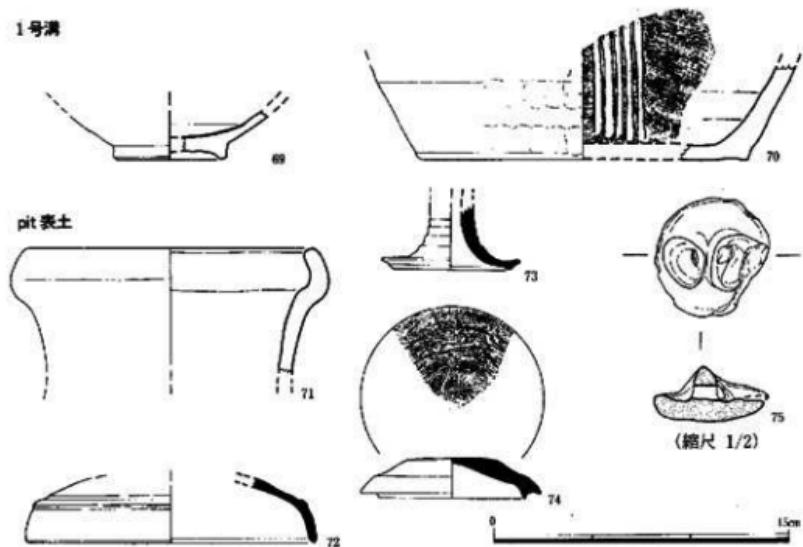


Fig. 23 1号溝, Pit, 表土出土遺物 (1/2, 1/3)

pit 出土遺物 (Fig. 23, PL. 18)

土製品

土製模造鏡(75) P 9出土。不整円形を呈し、長径4.1cm、高さ1.9cmを測る。鋏を1.6cmの高さにつまみ出しており、径6~7mmの穿孔を施す。胎土には細砂粒を含み、灰褐色を呈している。

表土出土遺物 (Fig. 23)

弥生式土器

壺(71) 袋状口縁部を有しており、口径14.6cmを測る。胎土に細砂粒を含み、黄白色を呈する。弥生後期の土器である。

須恵器

壺蓋(72・74) 71は口径14.8cm、残存高3.4cmを測る。口縁部と体部の境は段をなす。72は口径7.5cm、器高2cmを測る。口縁部内側のかえりは断面三角形状を呈し、口縁端部よりも高い。天井部にヘラ記号がある。いずれも胎土に砂粒を含み、灰色を呈する。

高坏(73) 小形の高坏で、脚端部が外へはね上がっており、内側に断面三角形のかえし状の突帯がある。筒部には横沈線を施す。底径7.1cm、残存高3.3cmを測る。胎土に細かい砂を含み、淡灰青色を呈している。

その他の採集品としては青磁片2点、白磁片1点、高麗²青磁2点が出土している。

4) 小 結

当該地は南約70mにある第3、10次調査との関係は著しく、特に古墳時代においては同一集落を形成するものと考えられる。ここで、当該地について若干まとめておきたい。遺構の時期は前述したように古墳時代初頭から中世末期に及ぶものである。

I期は古墳時代初頭を主としており、3軒の住居跡がこれに相当する。住居跡の残存状態が悪いため、時期比定は困難であるが、内面をヘラケズリした土師器の出土からみて、弥生後期の片袖ベッドの住居跡形状は考えにくい。よって住居跡の復元をすれば、両袖にベッドを設けた形状が考えられる。有田遺跡においては、この形状は4世紀前半～中頃に盛行しているところから、同一時頃の遺構と考えたい。但し、3号住居跡のような片袖のベッドに、4本の主柱については今後の検討課題である。

II期は古墳時代中頃～後期の段階で1号住居跡及び土壙群がある。1号住居跡は南東隅にかまどを設け、方形住居跡の一角を煙道のために削り残した構造であるが、従来のかまどの調査例は馬蹄形を呈し、壁の中央に設けるのが一般的で、有田遺跡では初例である。時期は須恵器IIb～IIIaの段階と思われる。土壙は1号・2号・8号・10号・11号土壙がある。1号は須恵器のVの段階、2号・8号・10号・11号は須恵器のIIIaの段階が考えられる。但し、10号土壙は總量に対してIIIaの遺物が圧倒的に多いけれども、44～46の坏身はIV期aに、47のかえりを有した坏蓋や55の甕が存在しており、V期まで下るものと思われる。

III期は奈良時代～平安時代末の時期で、3号土壙、5号土壙が相当する。3号土壙の土師器椀は内黒土器、外黒土器、黒色研磨土器が混在している。内黒・外黒土器の出現期は9世紀前半頃である。黒色土器は9世紀後半頃の唐人塚6号墳例を初現として、11世紀後半頃には瓦器焼への変換を計っている。土師器坏、皿はヘラ切りである。糸切りへの変換は12世紀前～中頃であるから、土師器の時期は太宰府史跡SD1330との口径比から11世紀後半～12世紀前半が考えられる。5号土壙は須恵器焼より、8世紀中頃が比定できる。この時期の墓は長方形、又は隅丸長方形の土壙墓で木棺墓が主体を占め、劍塚遺跡の8世紀～9世紀中頃の土壙墓・木棺墓、君ヶ畠遺跡の9世紀～12世紀の土壙が知られる。方形の掘り方をもった土壙墓には、宮ノ本遺跡^{註4}がある。宮ノ本遺跡では、方形配石をもった二段掘りの木棺墓と石積み壙による低壙丘を有した土壙墓がある。この土壙墓は不整形の掘り方で、内部は細粒子の炭と灰を混ぜた埋土で

あるため火葬墓と考えられている。この火葬墓からは青銅製の買地券が出土している。当該土壙は二段掘りの土壙であり、墳丘が無いなど構造上宮ノ本遺跡例とは異なるが、一段目の墳底や主体部墳底に炭化物層が存在することから火葬墓と考えた方が良いであろう。

赤焼け土器について

当該調査地では、須恵器の成形手法によって作られた土器と、須恵器の胎土、成形手法も同一ながら赤褐色を呈し、硬質、又は軟質がある。赤焼け土器については児玉氏、石山氏、川述氏^{註5}、^{註6}、^{註7}によって整理されているので、ここでは詳述しない。住居跡からの出土は無いが、1号土壙、2号土壙、10号土壙からの出土がある。須恵器の手法による土師器は1号土壙に1点、10号土壙に4点ある。いずれも變形土器で、胎土に砂粒を含み、他の土師器とは胎土に差はない。1号土壙の甕(25)は内面に青海波状の叩き、外面に細かい格子目の叩きを有す。10号土壙出土の胴部片(61~63)の内、63の内面はナデ調整で、外面には平行叩きを施す。61の内面はナデ調整、外面は細かい格子目叩きの上から、更にナナメ方向のハケによって叩きを消している。62は外面に大きめの格子目叩きを施し、内面は25同様の青海波状の叩きである。青海波状としたのは、いわゆる須恵器にみられる荒々しい太目の叩きとは相違し、6~7本単位の弧形状の叩き原体であるからである。口縁部(60)は須恵器の肥厚した口縁部を模倣しており、外面には口縁端部まで格子目叩きを施した後ヨコナデ消し、胴部内面は平行叩きを施す。須恵器III~VI期に伴う土師器甕の内面は一様にナナメ、タテ方向のヘラケズリを施しており、調整方法に相違がある。胎土は土師器の甕と相違なく、砂粒を多く含んでいる。60~62、25でみると、内外面の叩き原体は須恵器にみる叩き原体とも相違し、且つ、叩きの仕方にも若干の相違があるようにみられる。これは、須恵器製作に携った人が作ったのではなく、土師器製作者の須恵器模倣による製作品と考えたい。これらの土器は第74次調査でも上壙から出土しているが、住居跡からの出土は無いので、生活用具とは違った特殊な用途が考えられるのではないかだろうか。須恵器の赤焼け土器は、49・53・57である。須恵器と同じ手法で胎土も同一であるが、53と57は軟質である。これらの赤焼け土器について、橋口氏は前者を似非土師須恵器と53の高坏などは擬須恵土師器と呼称している。^{註8}

註1 福岡県教育委員会「向佐野・長浦窯跡の調査」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告V」1975

註2 福岡県教育委員会「福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集」1977

註3 福岡県教育委員会「福岡県筑紫野市所在劍原遺跡群の調査」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告IV-X」1978

註4 太宰府町教育委員会「宮の本遺跡」1980

註5 津屋崎町教育委員会 児玉真一編 「赤焼き」土器について『筑山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書第3集 1981。

註6 福岡県教育委員会 石山 熊綱 「III 結語 6「赤焼き」の土器について」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X 1977。

註7 田川市教育委員会 川述昭人編 「IVおわりに」の「赤焼き」土器について『孤ヶ迫横穴群』田川市文化財調査報告書第1集 1981。

註8 福岡県教育委員会 橋口達也編 「野間窯跡群」「両塙バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集」1982。

2. 第59次調査（遺物編）

遺構についての詳説は、昭和57年3月に刊行した、「有田・小田部第3集」で述べているので、ここでは省く。先の報告書では遺構編として刊行しており、今回は「遺物編」として報告するが、以下に概要を述べるので参考にされたい。

1) 調査地区の地形と概要

当該地は福岡市早良区小田部3丁目117番地に所在する。調査対象面積は938m²である。

昭和56年に民生局保育課によって原西保育所の建設計画が行われ、同年7月に用地内の試掘調査を実施した結果、弥生時代から近世（18世紀～19世紀初頭）に至る遺構を検出した。発掘調査は福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財2係（当時）が担当したもので、調査期間は昭和56年10月6日～11月21日まで実施した。

有田・小田部台地は独立中位段丘であるため、台地縁辺には段丘面を残している。又、この台地は北西・北東方向から谷が入りこむため、幾つかの舌状台地を分岐している。当該地は大字名は小田部にあるものの、有田地区的台地上平坦地の西側に位置する。この台地平坦部から北西方向へ伸びる細長い舌状台地は幅約200m、長さ約400m、標高は8～14mを測る。当該地はこの台地の先端部、標高10m前後を測る谷側の斜面に立地する。調査前は畠地であった。当該地南側の市営住宅地との比高差が約1.5mほどあるため、当初、畠作のための地下げ地業によるものと考えたが、昭和40年代初頭の区画整理事業対象地ではないこと、又、中世遺構の残存状態から、段丘形成時に平坦地が存在し、更に中世における地山削平が行われた結果であると考えたい。

表土は耕作土で、約20～30mを測る。遺構面はローム層、ロームの風化土、褐色砂質土から形成されており、東側、すなわち谷側へ緩傾斜している。褐色砂質土はローム層の下層に存在する推積土であるが、調査区西側に於いてはこの褐色砂質土が露呈しており、更に遺構の残存状態も良好でない。台地周辺には17世紀～18世紀代の畠地、地割溝を検出しており、これらの削平が江戸時代の開墾時によるものと考えられる。

遺構は弥生時代前期～中世の土壙41、弥生時代前期窓棺墓1基、同中期の円形住居跡2軒、中世溝状遺構4条、同掘立柱建物10棟、近世の地割溝1条を検出した。弥生時代の遺構は著しい削平のため残存状態は悪いが、中世溝内からは中期の窓棺片が多量に出土し、他の土壙からも前期、中期の壺、壺片が出土しているので、弥生時代前期～中期の集落と墓地が存在した事が推測できる。中世の遺構は主たるものである。南側の崖下から北側の台地縁辺まではコの字形に溝が巡っている。この溝は中世後半期に位置づけられ、内側には土壙や掘立柱建物が集

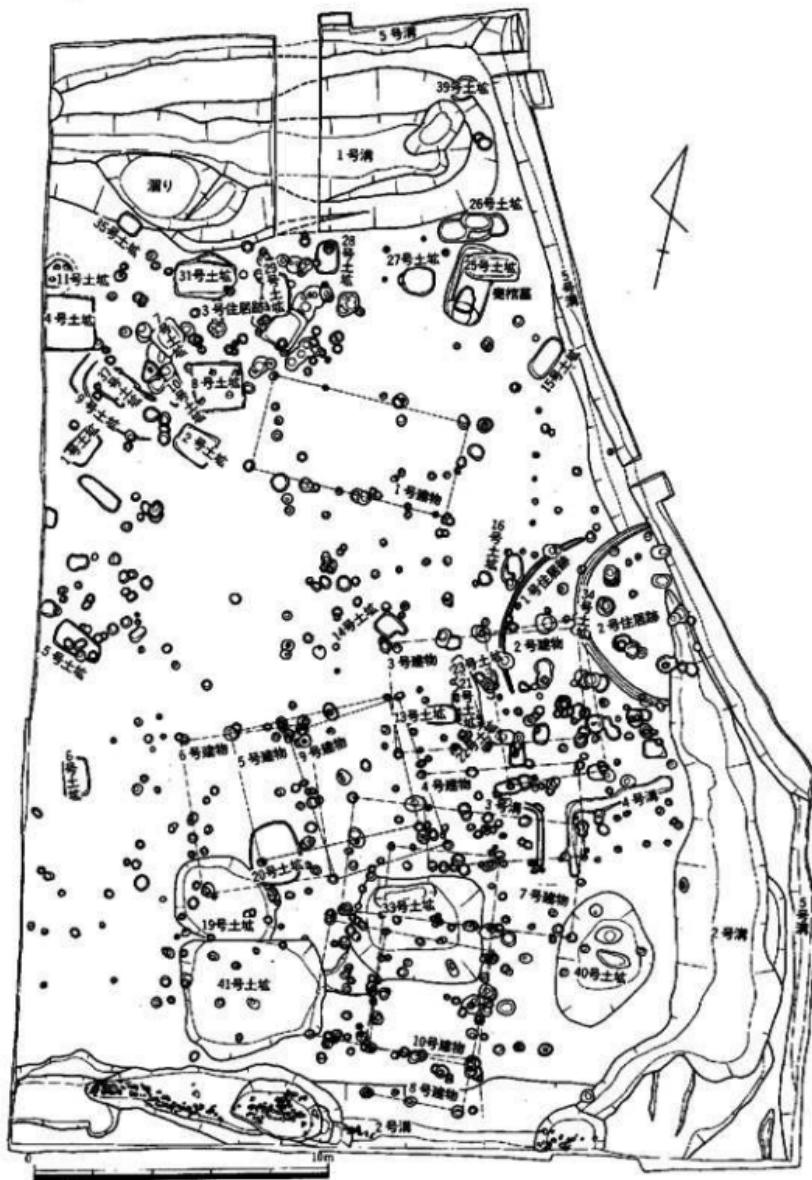


Fig. 24 第59次調査構成配図 (1/200)

Tab.3 有田第59次調査遺構一覧表①

遺構名	平面形状	断面形状	規 模 長さ×幅×深さ(m)	方 向	出 土 遺 物	備 考
1号住居	円 形		径 約7.8m		弥生式土器片	周溝、支柱6本
2号住居	円 形		径 6.5×6.2		弥生式土器、黒曜石片、石底子	柱穴、周溝、支柱6本
3号住居	円 形					
1号土塁	不整の圓丸形	低い造 台 形	1.23×0.82×0.25	N26°E	弥生式+漆(要)。土師器(片)、青磁(塊)	炭化米出土
2号土塁	圓 丸 美 方 形	x	1.33×1.08×0.35	N13°E	弥生式+漆(造台形)、漆片類	炭化米出土
3号土塁	美 様 円 形	x	1.63×0.51×0.13	N72°W	弥生式土器(要)	炭化米出土
4号土塁	方 悪 台 形		1.97×1.56×0.85	N15°W	弥生式土器(片)、漆器(片)、土師器(杯・皿)、瓦質土器(擦跡)、青磁(塊)、鉄鋤、不明の石器品、板石	11号土塁に切られる 形状・規模とも 8号土塁に似る
5号土塁	不整の圓丸長方形	低い造 台 形	1.73×0.81×0.23	N49°W	弥生式土器(片)	蓋にピット?
6号土塁	圓 丸 美 方 形	x	1.28×0.79×0.11	N18°W	土師器(杯・皿)、青磁(片)	
7号土塁	不整の圓丸長方形	深い造 台 形	1.64×0.88×0.25	N35°W	弥生式土器(杯・皿)	
8号土塁	不 整 の 方 形	台 形	1.66×1.51×0.89	N18°E	上層：弥生式土器(片)、漆器(片)、土師器(杯・皿)、瓦質土器(抹)、青磁(塊・皿)、銅質土器(抹・要)、鐵鋤、鐵釘、劍片類 下層：弥生式土器(片)、土師器(片)、須也質土器(片)、劍片類	炭化米出土 附近に配石
9号土塁	圓 丸 美 方 形	造 様 形	?	N64°W	弥生式土器(片)、土師器(片)、劍片類	炭化米出土
10号土塁	圓 丸 美 方 形	低い造 台 形	?	N44°W	なし	
11号土塁	不整の圓丸長方形	台 形(袋状)	開口部: 0.78×0.70 奥部(袋底): 1.30× 1.25 0.69	N28°E	漆器(高台部)、土師器(杯・皿・盤)、瓦質土器(抹 跡)、青磁(四片)、劍片類	
13号土塁	圓 丸 美 方 形	造 台 形	1.10×0.59×0.33	N72°E	なし	
14号土塁	方 形	造 台 形	0.73×0.73×0.13	N30°W	なし	
15号土塁	圓 丸 美 方 形	圓丸の台形	1.58×0.69×0.32	N27°E	弥生式土器(片)、黑石、劍片類	
16号土塁	圓 丸 形	低い造 台 形	(1.00)×0.58×0.39	N16°W	土師器(皿)、劍片類	
19号土塁	不 整 形	浅い皿状	3.46×2.79×0.16	N15°W	弥生式土器(要)、須也質(片)、土師器(杯・皿)、 土師質土器(土器)、瓦質土器(杯盤)、青磁(塊)	41号土塁と接する
20号土塁	圓 丸 形	低い造 台 形	2.15×1.76×0.19	N18°W	土師器(杯・皿)	
21号土塁	不 整 地 内 壁	深い皿状	2.89×0.58×0.22	N28°W	土師器(皿)、土師質土器(土器)	22号土塁に接される
22号土塁	圓 丸 美 方 形	造 台 形	0.93×0.65×0.27	N32°E	土師器(片)、青磁(塊)	
23号土塁	圓 丸 美 方 形	低い造 台 形	(0.82)×0.32×0.2	N21°W	なし	
25号土塁	圓 丸 美 方 形	深い皿状	1.53×0.95×0.36	N77°E	弥生式土器(要)、須也器(片)、土師器(皿)、鐵鋤、 劍片類	
26号土塁 A-B-C	圓 丸 美 方 形	造 台 形	開き西から (0.16, 0.38, 0.7)	N75°E	弥生式土器(要)、須也器(片)、土師器(皿)、 劍片類	3基が複合?
27号土塁	圓 丸 美 方 形	低い造 台 形	(1.19)×0.85×0.26	N75°E	なし	炭化米出土
28号土塁	x	x	1.09×0.86×0.19	N12°W	須也器(片)、土師器(皿)、柱状片、丸、石斧、劍片類	
29号土塁	x	造 台 形	1.37×0.68×0.55	N21°W	土師器(片)、劍片類	30号土塁を切る
30号土塁	圓 丸 美 方 形	x	1.43×(1.26)×0.43	N22°E	弥生式土器(要・要)、土師器(片)、劍片類	
31号土塁	不整の圓丸形	(造 台 形)	2.08×1.22×0.31 (1.54)	N76°E	弥生式土器(要)、須也器(件品・杯身)、土師底(片皿)、 土師質土器(土器)、瓦質土器(擦跡、壓跡)、青磁(塊)、 漆付(片)、須也質土器(片)、劍片類	
33号土塁	不 整 形	浅い皿状	4.37×3.47×0.16	N29°W	須也器(片)、土師器(片)	
34号土塁	圓 丸 形 ?	低い造 台 形	(0.80)×(0.30)×0.16	N35°W	土師器(片)、鐵鋤、劍片類	
35号土塁	不 整 の 方 形	造 台 形	0.90×0.60×0.31	N62°W	土師器(片)、劍片類	

Tab. 3 有田第59次調査遺構一覧表②

遺構名	平面形状	断面形状	横 長さ×幅×深さ(m)	方 向	出 土 遺 物	備 考
37号土塁	不整の方形	逆 台 形	1.07×0.96×0.28	N64°W	弥生式土器(甕), 土師器(朴・紅), 刺片類	
39号土塁	格 目 形	直 状	1.00×0.71×0.16	N26°E	弥生式土器(甕?), 土師器?	土師器?
40号土塁	タ	直 い 互 状	1.66×3.28×0.07	N 6°W	弥生式土器(甕), 陶芯器(片), 土師器(甕)	
41号土塁	不整の長方形	ア	4.81×(4.00)×0.22	N84°E	土師器(件残), 土師質土器(土鍋, 甕), 瓦質土器(瓦 鉢押付), 陶芯器(片・瓶), 陶質質土器(甕・鉢), 鉄鏃, 土劍, 刺片類	
1号構		一段目 亂状 一段目 V字状	既存長 15m 既存幅 3 m 深さ 1.1m		一段器(件残), 十脚質土器, 丸漆 瓦質土器, 地人陶器等	
2号構	L 字 形	U 字 形	既存幅 2.0m 深さ 0.8m		二脚器(片・瓶), 瓶, 糸入陶器, 石臼	
3号構	鉢 形	U 字 形	4×0.2×0.2		三脚質土器	
4号構	鉢 形	U 字 形	5×0.3×0.2			
5号構	L 字 形	U 字 形	深さ 0.4~0.6		唐津・伊万里系陶器等	18世紀

中するので、集落、又は屋敷を区画する溝と考えられる。北東隅に陸橋を設けている。掘立柱建物は1間×2間、1間×3間、2間×3間の規模をもち、全て側柱だけの建物である。重複しているが規則性から同時存在した建物は2~3軒であろう。中世遺構にも年代幅が存在しており、集落の成立は12世紀末~13世紀と考えられるので集落から屋敷地への変遷をも検討したい。溝で区画した中世集落には井手ノ原遺跡^{井2}、蒲田遺跡^{井3}などがあり、又、居館としては諸岡遺跡^{諸4}や原遺跡^{原5}があげられる。中世集落の在り方や中世の各屋敷、居館の構造相違について検討し得る資料である。

遺物に縄文時代晩期の壺形土器などや18世紀代の古伊万里系、唐津系の陶磁器まで多種多様の遺物を出土したが、古墳時代~平安時代の遺物は極端に少ないが、2号溝から出土した内面毛彫りを施した越州窯系青磁碗は唐代末~5代の時期であるが、筑前においても出土例が極めて少ない。又、茶臼や李朝陶器の出現は、当該地に居住した者の中、茶をたしなむ習慣をもっていた事を証明するもので、当時、早良平野において茶の栽培が広汎に行われたとはいえ、抹茶をたしなむ階層は限られたものと考えられる。更に、有田・小田部には幾つかの名屋敷地が存在したのは知られるが、文献に著られる在地名主層の名前も多く今後、屋敷、又は集落是非を含めて、今後、名主層の検討を行いたい。

その他の遺物としては炭化米が弥生時代~中世の土壤から検出している。大部分は中世の土壤に流れ込んだ状態であり、米を貯蔵した建物が存在した事を示している。米の分析について九州大学の大村武教授にお願いしており、付論として掲載しているので参考にされたい。

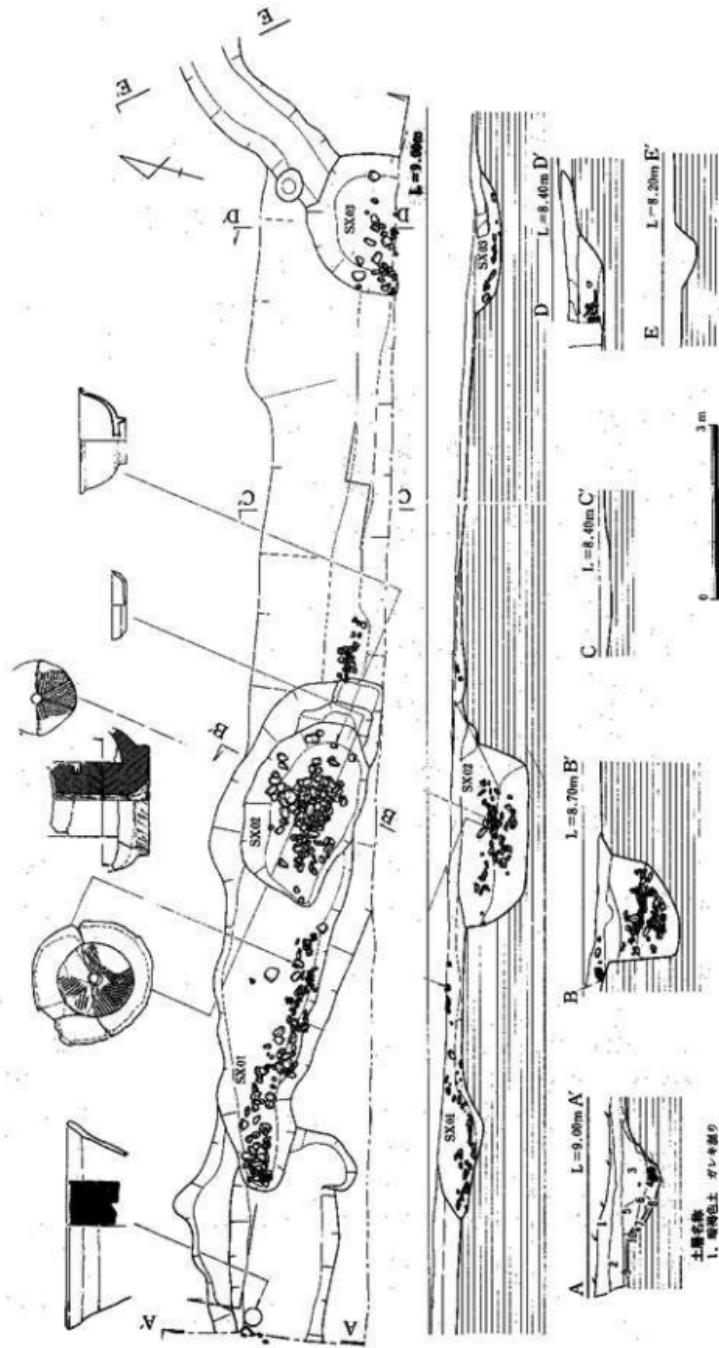


Fig. 25 2号溝遺物出土状態 (1/100)

第5~11層は3~4層ではない。
6~8・10~12. 黄褐色土 粘性土 (地山土) ブロックを多く含む。

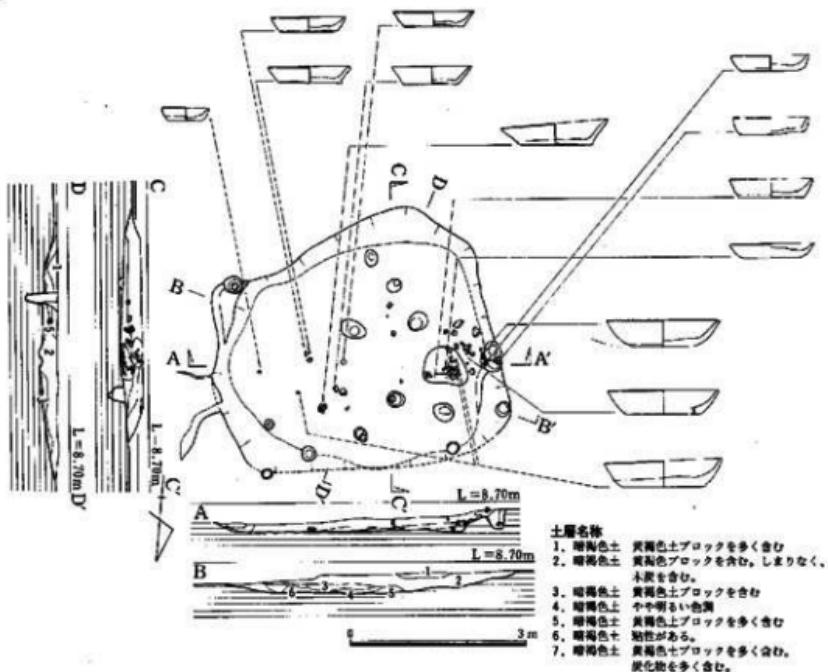


Fig. 26 41号土壤遺物出土状態 (1/100)

2) 遺物各説

表土出土遺物 (Fig. 27)

弥生式土器

壺 (1) 底径6.5cmを測る。球体に近い張った胸部である。朝顔形の口縁部を有した形態であろう。胎土に砂粒を含み、淡褐色を呈する。

壺 (2, 3) 小さく外反したくの字形口縁部である。底部はやや上部底であるが、胸部の張りは小さい。外面に細かいタテハケを施す。3は淡褐色を呈している。

陶器

皿 (4) 18世紀の伊万里である。底径3.8cmを測る。内面に須による墨文を施す。釉色は青味をもつた、透明釉である。

蓋（5） 復元口径8.5cmを測る。唐津系である。灰色の胎土の蓋部外面のみに白土を刷毛塗りした後、縁部近くに1条の沈線を加え、透明釉をかけている。

土製品

土鍤（6） 長さ3.4cm、最大径1.0cm、孔径0.3cmを測る。

石製品

石鍋転用品（7） 方形の板状に形成する途中である。西側面と下端の小口面は丁寧に調整している。B面から右側面にかけて2条の沈線を巡らせているので、石鍤としての利用も考えられる。

2号住居跡出土遺物 (Fig. 28, PL. 25)

土器片は、いずれも小破片である。

縄文式土器

甕（11） 口縁部がある。外面黒褐色、内面暗赤褐色であり、胎土に砂粒を少量含んでいる。11は上げ底状の底部で、底径7.9cmを測る。

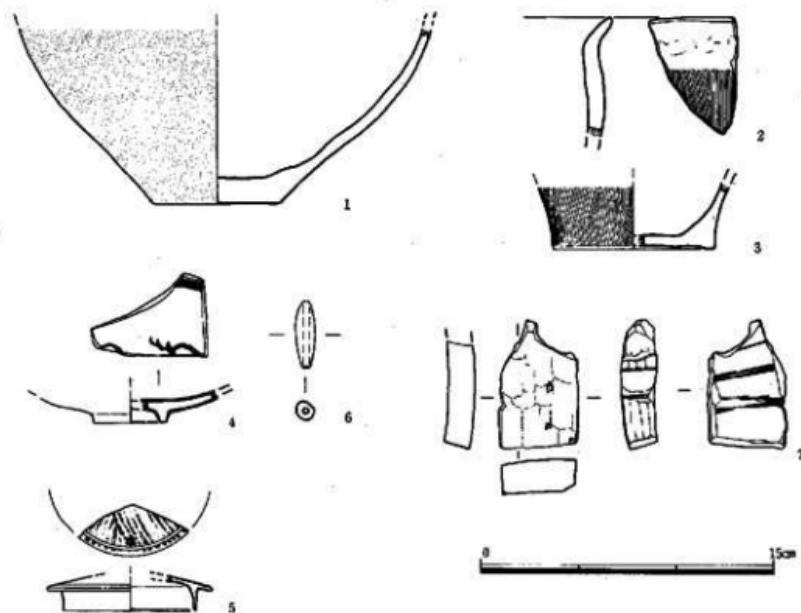


Fig. 27 表土・包含層出土遺物 (1/3)

弥生式土器

壺（8，9，10） 8・9は口縁部、10は胴部を示す。色調は赤褐色及び、黄褐色でいずれも少量の砂粒を含む胎土である。口縁部については、L字形に近い角度で外反する端部のために内面端部に稜ができる。特に9は鋸先状口縁をなす。胴部については2条の凸帯がみられる。厚さ約8mm程である。いずれも中期という時期が考えられよう。

石製品

石包丁（12，13） 12は両端を欠失する。表・裏面ともに研磨されている。図上B面の刃部には再度の刃づけの為と思われる研磨が加えられている。A断面では表面刃部からの研磨によって鋭い刃縁を形成するが、B面は刃部の磨耗部を除去するに至っていない。玄武岩製であろうか。

2号住居跡に本来伴っていたと思われる土器はないが、その年代の上限は弥生中期である。

墓出土遺物 (Fig. 29, PL. 21)

上甕（14） 砂粒を多く含んだ胎土で、内面は灰黄褐色、外面は赤褐色及び黄褐色を呈する。内面は接合部に指頭押圧痕を残す。全体にナデ調整である。外面は下半部に籠磨き、上半部はナデ調整である。最大径は胴部中位にあり、頸部はすぼり気味である。口縁部は肥厚し、外反する。口縁部端部には上下に刻目を施す。頸部に3条の沈線を巡らせる。口径62.0cm 器高73.9cm を測る。

下蓋（15） 内外面ともに赤褐色を呈す。外面はナデ調整、頸部内面にはヨコハケ調整を施す。

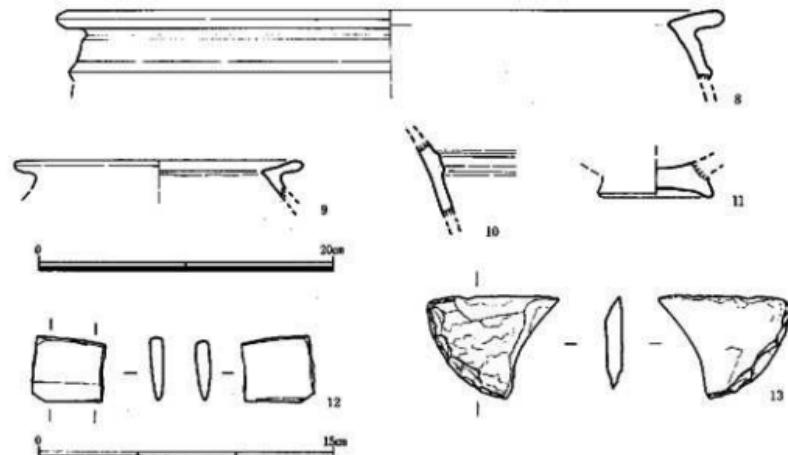


Fig. 28 1号住居跡出土遺物 (1/4, 1/3)

胸部最大径が胸部中位にあり、下膨れの形状を示す。口径64.5cm、器高81.0cmを測る。頸部と肩部に各3条の沈線を巡らす。口縁端部の上・下には刻口を施し、頸部内面はヨコハケ調整である。胎土に砂粒を多く含む。

上、下壺とともにいわゆる金海式の壺棺である。弥生時代前期末に位置づけられる。

1号土塙出土遺物

(Fig. 30, PL. 22~25)

弥生式土器

壺(18) 底部破片で、底径の復元値8.2cmを測る。全体に磨滅が著しいが、外面にはハケ目がみられる。

青磁

皿(16, 17) ともに破片であるが、16は復元すると口径12.8cm、高台径8.0cm、器高2.6cmを測る。胎土は灰白色である。釉は内面で淡緑色、外面では暗灰緑色を呈し、高台部にはかからない。17は底部の破片で、高台径は5.3cmである。胎土は

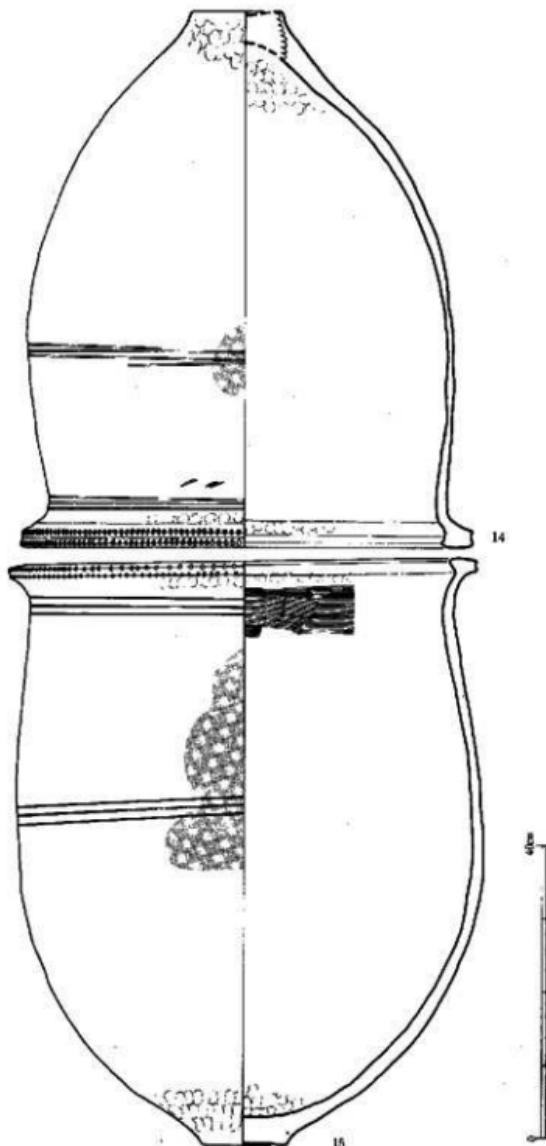
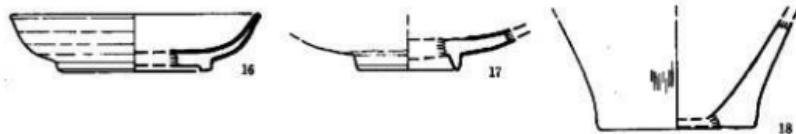
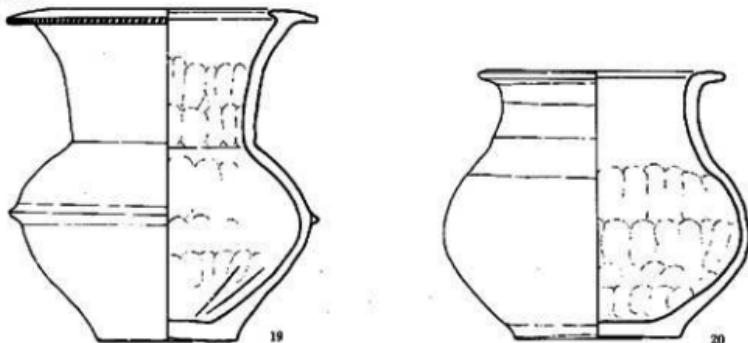


Fig. 29 壺棺実測図 (1/8)

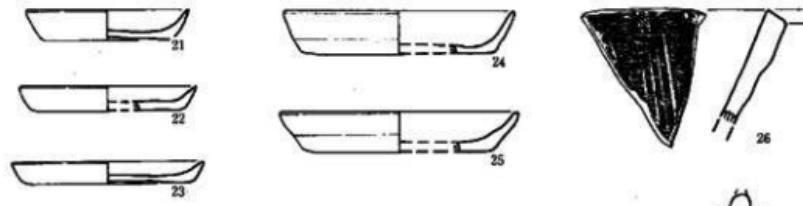
1号土塚



2号土塚



4号土塚



5号土塚



0 15cm

Fig. 30 土塚出土遺物 (1/3)

陶器質で、小気泡がみられる。釉は荒い貢入のみられる灰緑色のもので、底部内面は輪状に搔き取られている。胎土は灰色である。

2号土塙出土遺物 (Fig. 30, PL. 21)

弥生式土器

壺 (19, 20) ともに完形である。19は朝顔形に開く頸部に、鋸形の口縁部がつく。口縁上端面は外方にやや傾斜し、口縁端部にはヘラによる刻み目がつけられている。胴部最大径がやや上位にあって、断面三角形の突帯を施す。平底である。内面頸部以下に指圧痕がみられ、その上からナデを加えている。底部付近では縦方向の板状工具による調整痕がみられる。口縁部内面、及び外面はヨコナデを施す。突帯下位はタテ方向のナデを施している。胎土は砂粒を含み褐色である。口径16cm、胴部最大径15.8cm、底径7.2cm、器高17.1cmを測る。20は19に比べると全体につくりが雑である。胎土には多量の砂粒を含み、色調は灰色である。頸部内面は指圧痕、外面はタテナデを施す。頸部は如意形にすぼまり、口縁部は水平に屈曲する。頸部には粘土の巻き上げ痕が明瞭に残る。口径12.7cm、胴部最大径15.7cm、底径8.7cm 器高13.8cmを測る。

3号土塙出土遺物 (Fig. 30, PL. 22~25)

壺の底部破片である。外面は赤褐色、内面は黒色を呈し、外面にはタテハケを施す。平底であり、復元底径は8.1cmを測る。

4号土塙出土遺物 (Fig. 30, PL. 22~25)

弥生時代以降の遺物が出土しているが、いずれも小破片、又は細片である。覆土中からの出土である。

土師器

皿(21~23) 2種類ある。A類(21)は口径8.4cm、器高1.6cm、B類(22, 23)復元口径9.1~9.9cm、器高1.2~1.3cmを測る。いずれも糸切り底である。内外面ヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈する。

壺 (24, 25) 口径12.0~12.3cm、器高2.3~2.2cmを測る。糸切り底である。内外面ヨコナデ調整。胎土に砂粒を含み、24は淡赤褐色、25は赤褐色を呈する。

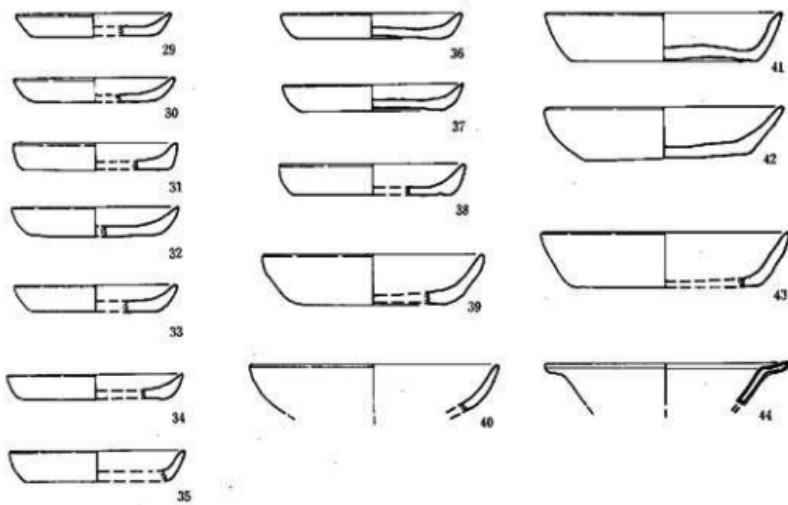
瓦質土器

捏鉢 (26) 口縁部の破片である。胎土は白色に近い灰色で、口縁端部が肥厚する。外面は炭素の付着がみられる。指圧とナデ調整である。内面はヨコハケを施し、4条の条痕を施す。

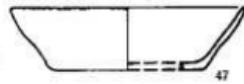
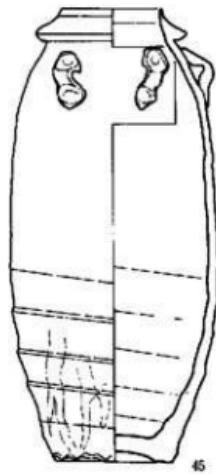
石製品

不明石器 (27) 西洋梨形を呈する。上端は先が細く、丸味をもち、下端は欠損している。断面形は円形で、回転運動によるものと考えられる。使用によるのか、製作方法によったのか不明である。砂岩製である。

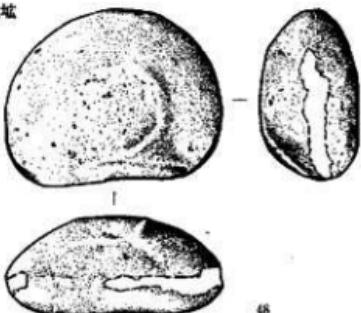
8号土坡



11号土坡



15号土坡



— 15cm —

Fig. 31 8号·11号·15号土壤出土遗物 (1/3)

5号土塙出土遺物 (Fig. 30, PL. 22~25)

弥生式土器

壺 (28) 黒色を呈する小型壺形土器の口縁破片である。八の字形に開き、端部は平坦に仕上げる。前期に属するものであろう。

8号土塙出土遺物 (Fig. 31, PL. 22~25)

4号土塙と埋土の状態及び、遺物の出土状況が近似する。

土師器

皿 (29~38) いずれも器高が低く、器壁が厚い。復元口径8.0~9.6cm、器高1.2~1.6cm、底径6.3~8.2cm を測る。全て糸切り底である。体部はヨコナデ調整。34・35の胎土は精選されるが、他は砂粒を含む。32・35~37が明茶褐色、31・34・38は淡茶褐色、他は赤褐色を呈する。

杯 (39~43) 全て糸切り底である。口径11.5~12.9cm、器高2.4~2.9cm、底径7.4~9.9cm を測る。体部はやや丸味をもつ。内外面ヨコナデ調整。胎土に砂粒を含む。42は明茶褐色、他は淡赤褐色を呈する。

青 磁

杯 (44) 口縁部の破片である。口径の復元径6.5cm を測る。口縁部が強く屈曲して横方向に開く。胎土は灰白色で、釉は灰緑色であるが、厚い部分では緑色を呈する。

11号土塙出土遺物 (Fig. 31, PL. 22~25)

土師器

壺 (47) 復元口径12.6cm、器高3.4cm、底径7.6cm を測る。内外面ヨコナデ調整の糸切り底である。体部が大きく開く器形である。灰色を呈する。

土師質

播鉢 (46) 口縁部が肥厚する。内面はヨコナデ調整後、5本のタテ方向の条痕を施す。胎土に砂粒を含み、灰白色を呈する。

陶 器

四耳壺 (45) 斜目に倒れた状態で出土した。完形である。器高23.5cm、最大径は胴中位にあり、器高10.9cm、口径5.2cm、底径6.0cm を測る。胎土は茶褐色で、褐色釉が口縁部内面までかかる。外面は風化剥落している。鼓形をなす口縁部は、外面にツバ状の突出部を形成する。肩部に耳が2対貼り付いている。底部は上げ底である。胴部下半にロクロによる水引き窓を明瞭に残している。

15号土塙出土遺物 (Fig. 31, PL. 22~25)

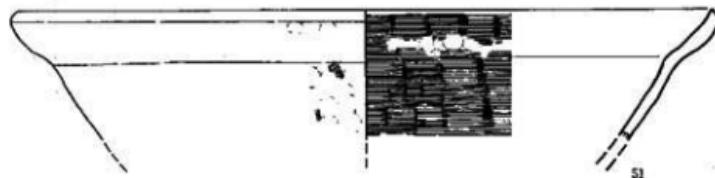
石製品

敲石(48) やや扁平な円盤の両端部から一部側縁にかけて使用している。径は8.8×11.1cm, 最大厚5.0cmを測る。閃綠岩か。

19号土塙出土遺物 (Fig. 33)

土師器

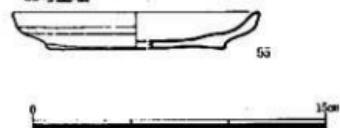
19号土塙



31号土塙



33号土塙



34号土塙

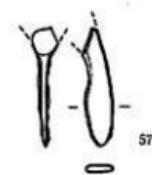


Fig. 32 土塙出土遺物 (1/3)

坏(49) 復元口径13.7cm, 器高2.9cm, 底径9.3cmを測る。糸切り底である。体部が大きく開く器形である。ヨコナデ調整である。胎土には露母, 赤褐色粒子を含む。淡赤褐色を呈する。

青磁

碗(50) 口縁部の破片である。釉は緑色を呈する。施釉前に白土をもって象嵌する。高麗青磁と考えられる。

土師質土器

鍋(51) 口縁部の破片である。復元口径38.6cmを測る。口縁部はやや内弯する。体部と口縁部の境は内面に稜を有している。胎土に砂粒を多く含み, 内面は明赤褐色, 外面は灰色味を帯びた暗赤褐色を呈する。内面はヨコハケ調整で, 指圧痕を消している。外面はナデ調整である。他に1点出土している。

31号土塙出土遺物 (Fig. 32, PL. 22~25)

弥生時代以降の遺物が多く, 全て小破片で出土した。図示できる遺物は以下のとおりである。

土師器

坏(52, 53) 小破片のため法量には若干不安がある。底部は糸切り底である。復元口径11.9~11.6cm, 底径8.1~7.8cm, 器高2.5cmを測る。器壁は厚く, 体部は丸味をもつ。体部内外面はヨコナデ調整である。胎土は精良で, 金露母粒子を含む。53は赤色粒子を含む。灰褐色を呈する。

瓦質土器

捏鉢(54) 復元口径28.0cmを測る。胎土は少量の砂粒を混じえるが, 焼きは堅緻である。内外面ともに白色に近い淡褐色を呈する。内面上半部はヨコハケ調整である。下半部は使用により磨滅して平滑である。外面は玉縁状に肥厚させ, 端部に沈線を施す。外面はナデ調整である。

33号土塙出土遺物 (Fig. 32, PL. 22~25)

土師器

坏(55) 口形12.7cm, 底径9.2cm, 器高1.9cmを測る。器壁は厚みがある。内外面ヨコナデ調整。胎土は良質で, 明黄褐色を呈する。

34号土塙出土遺物 (Fig. 34, PL. 22~25)

土師器

坏(56) 口径13.6cm, 底径9.3cm, 器高3.3cmを測る。体部が外へ開く器形である。内外面ともにヨコナデ調整。胎土は良好で, 明橙色を呈す。

鉄製品

不明鉄器(57) 現存長6.1cmを測る。全体に錆が付着している。上端部を欠失している。下

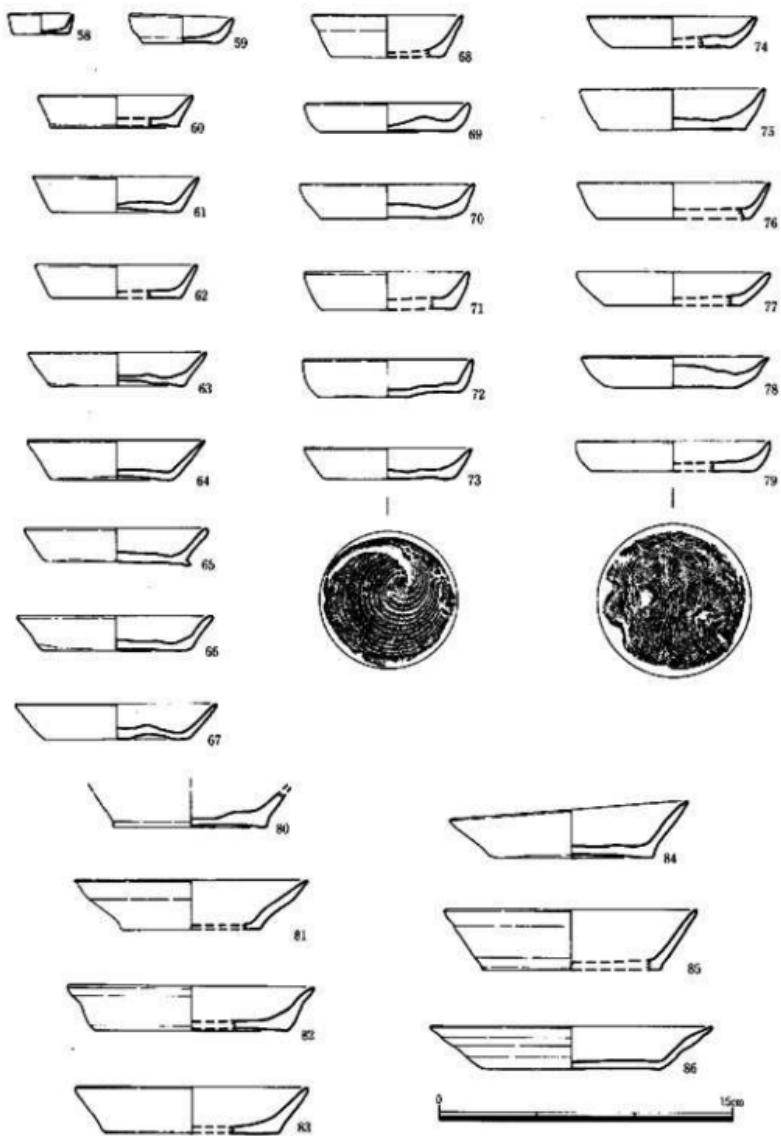


Fig. 33 41号土塘出土遗物 (1/3)

部は薄く引きのばし、柳葉形に作り出す。上端部は厚くしている。

41号土塙出土遺物 (Fig. 33, PL. 22~25)

土師器

皿 (58~79) 全て糸切り底である。大、中、小の3種類ある。A類 (58) は口径3.4cm、底径3.0cm、器高1.0cmを測る。底部に板状圧痕がある。B類 (59) は口径5.4cm、底径4.0cm、器高1.6cmを測る。C類 (60~79) は口径7.8~10.0cm、器高1.5~2.2cm、底径5.7~8.4cmを測る。更にC類の内、器壁が厚く丸味をもつもの (69~79) と、器壁が薄く体部が外反気味であるもの (60~68) の2種に分かれる。体部は内外面ヨコナデ調整である。胎土は60・62が精選され、他は砂粒を含んでいる。58は炭素吸着により黒色を、69は黒味を帯びた淡赤褐色、70は灰褐色を呈する。他は黄褐色、又は淡赤褐色、赤褐色を呈している。

杯 (80~90) 2種ある。いずれも糸切り底である。A類 (80~86) は体部が外反し、器壁は薄手である。81・86のように口径と底径比が大きなものもある。口径12.0~12.7cm、器高2.3~3.2cm、底径7.2~9.2cmを測る。B類 (87~90) は器壁が厚く、体部が丸味を有した器形である。口径12.4~13.5cm、器高2.7~3.3cm、底径7.1~9.5cmを測る。体部はヨコナデ調整で、胎土に砂粒を含んでいる。83は口縁外面の一部に油滴痕が認められる。81・86は内面が黒ずんでいる。80・85・90は淡赤褐色を、83・89は黄褐色、他は赤褐色を呈する。

土製品

土錐 (91) ほぼ球形であり、径4.3cmを測る。孔径は0.6cmを測り、焼成前に穿孔している。孔はほぼ中心を通る。胎土に砂粒を含み、淡黄褐色を呈する。

1号溝出土遺物 (Fig. 35~37, PL. 22・23・25)

出土遺物は弥生時代から中世に及び、中世遺物が造構年代を決める手懸りとなり得るが、弥生時代の壺棺片も出土したので、参考資料として報告する。

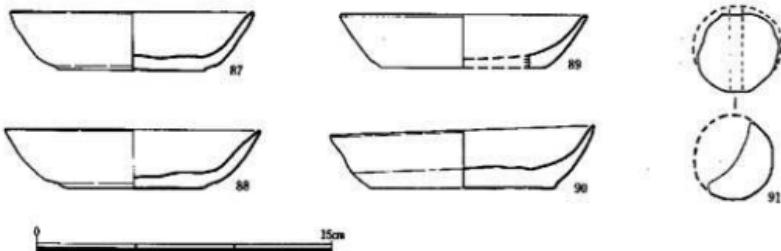


Fig. 34 41号土塙出土遺物 (1/3)

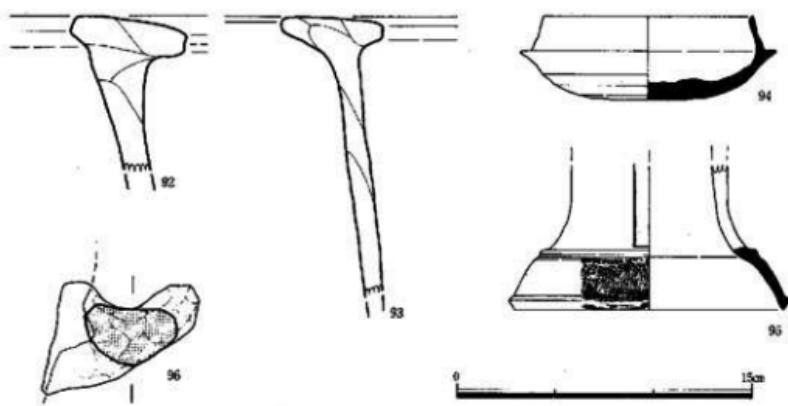


Fig. 35 1号溝出土遺物 (1/3)

弥生式土器

壺棺 (92, 93) 口縁部の破片及び胴部の破片がある。92は口縁部の内外面を肥厚させ、L字形の口縁部を形成する。93は内側に粘土を貼付けてT字形の口縁部を形成する。口縁部直下には突帯を有していない。胴部の破片は、いずれも一条の突帯をもつ。胎土には砂粒を多く含み、赤褐色を呈す。中期の壺棺である。

須恵器

壺蓋 (94) 復元口径10.6cm、蓋受部径13.2cm、器高4.3cmを測る。体部の約1/2まで逆時計回りのヘラ削りを施す。内底面には青海波のタタキが残る。立ち上りは比較的高く、やや内傾する。端部は丸味を帯びている。胎土に砂粒を含み、青灰色を呈す。

器台 (95) 脚部の破片である。端部復元径13.8cmを測る。据部は内湾し、口縁端部と筒部との境に突帯を施す。この突帯間に2条の櫛描きの波状文を2段に施す。筒部には幅約2.2cmを測る。長方形の透しを設ける。胎土にはほとんど砂粒を含まず、焼成は堅致である。但し、焼き亞みがある。全体に青灰色を呈する。

青磁

碗 (101) 碗下半部の破片である。復元高台径5.6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良である。淡灰緑色の釉は、高台外面まで厚くかかる。高台内面には目痕がみられる。他に口縁はやや外反し、端部は丸く終わる碗がある。胎土は灰色で、緑色味のある透明釉を施す。細かな貫入が著しい。

皿 (102) 高台径4.1cmを測る。高台は疊付がやや尖り気味である。内面には粘土と砂を混じ

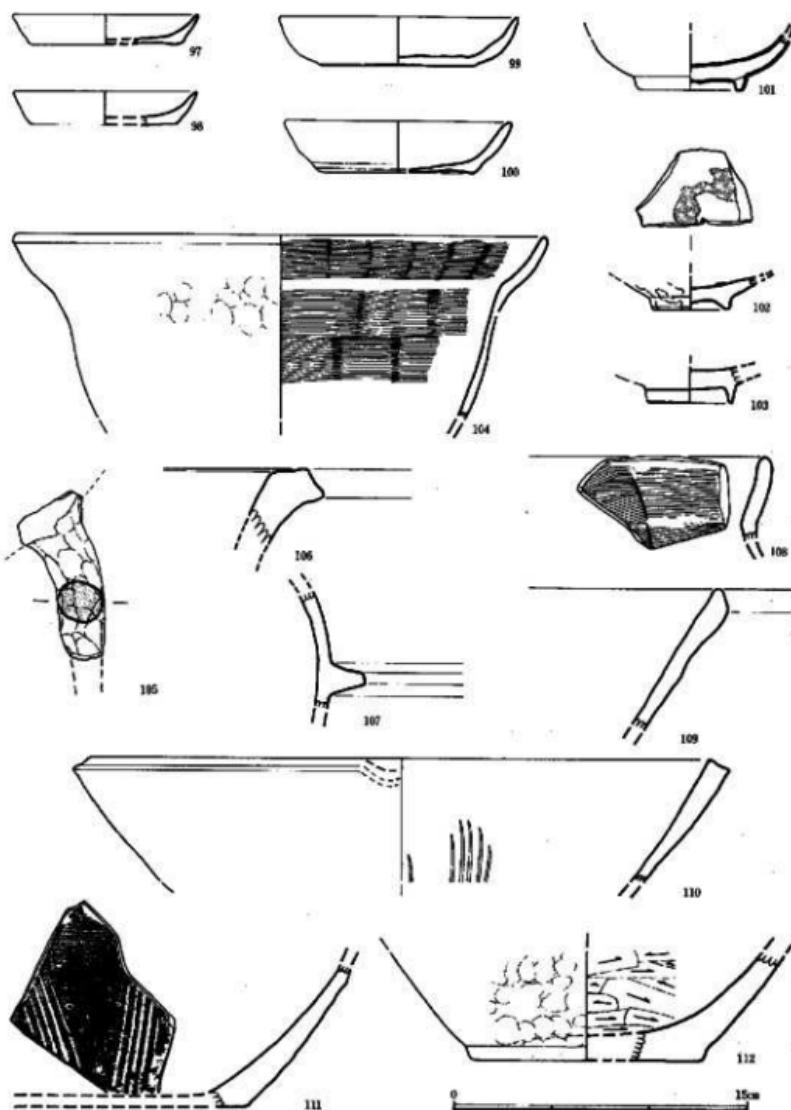


Fig. 36 1号满出土遗物 (1/3)

えた目痕がある。釉は厚目で、灰緑色を呈する。内底には施さない。焼成は甘い。李朝の皿である。

染付

碗(103) 底部の破片である。胎土は灰白色を呈し、精良である。白濁色釉はやや青みがかる。高台接合部に圓線を描く。高台疊付に離れ砂が付着している。

他には、全体の3分の1を欠失する碗がある。口径10.3cm、高台径5.0cm、器高5.6cmを測る。胎土は精良で、高台疊付部分を除いて、全体にやや灰色味を帯びた瑠璃釉がかかる。文様は蓮と蝶とを描く。溝上部で検出した。これらの染付は18世紀代と考えられ、上部からの混入品である。

土師器

壺(96) 换入式の把手である。最長は7.1cm、最大幅6.9cmを測る。胎土に砂粒を多く含む。淡赤橙色を呈す。

土師質土器

鍋(104) 脚部下半を欠く。復元口径27cmを測る。口縁部は内湾氣味に屈曲し、体部との境は内面に稜を有している。内面はヨコハケを、外面は押圧痕及び、ナデ調整を施している。外面には煤の付着がみられる。胎土は精良で、焼成は堅緻である。内外面ともに赤褐色を呈する。

瓦質土器

鉢(106, 109) 口縁部の破片である。106は口縁部をくの字形に肥厚させ、下端部をつまみ出している。外面とともにナデが施される。胎土には粗砂粒を含み、淡赤褐色を呈する。

湯釜(107, 108) 108の内面はヨコ方向の細かいハケ調整、外面はナデ調整である。107は脚部である。外面の鈎付近には煤が付着する。

搗鉢(110, 111) 110の復元口径は33.7cmを測る。内面はヨコ方向の細かいハケ調整後に5条以上の条痕を施す。外面は磨滅している。体部は大きく開くもので、口縁端部は肥厚する。内面に煤が付着する。内面は黒灰色を呈する。胎土に多量の砂粒を含み、内面は暗灰色、外面は黄褐色を呈する。111は底部片である。内面は細かいヨコハケ調整を施した後、5条の櫛目を施す。外面は指圧痕が残っている。胎土に少量の砂粒を含み、やや軟質である。内面は淡灰褐色である。

捏鉢(109, 112) 112は復元底径12cmを測る。内外面ともに灰色を呈する。内面はナデ、外面は指による押圧痕のナデ消しがみられる。平底である。109は口縁部の破片である。やや軟質で、灰褐色を呈する。口縁部を肥厚させ、玉縁状を形成している。磨滅のため調整不明。黒灰色を呈す。

鼎(105) 脚部のみである。全体を手捏ねによって成形後、体部との縫目付近に細かいハケ目を加える。全体に煤の付着物がみられる。淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

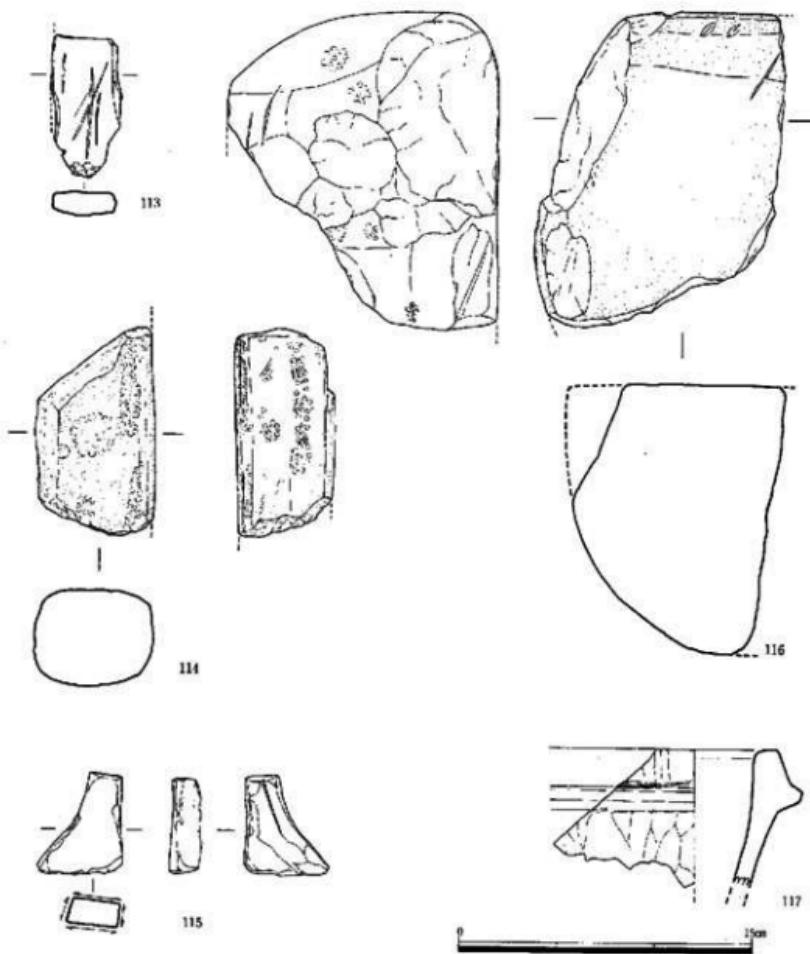


Fig. 37 1号溝出土遺物 (1/3)

石製品

石鍋 (117) 口縁の破片である。口縁部を肥厚させ、端部を水平に形成する。外面に断面台形状の突帯を造り出す。内面の研磨は丁寧である。外面は突帯部を除いて、タテ長の削り痕が残る。加工は横方向の削りによって行われたものである。尚、外面には全体に煤、又はタール状の付着がみられる。

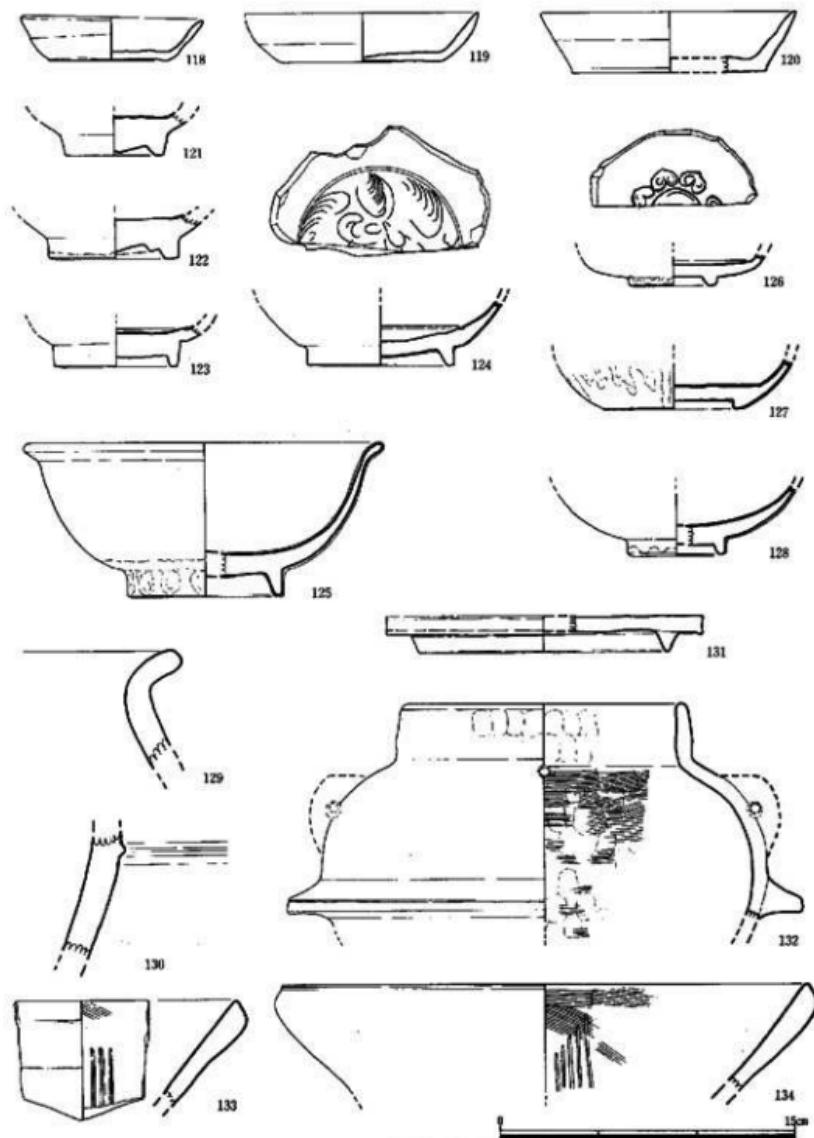


Fig. 38 2号墓出土遗物 (1/3)

砥石 (113, 115) 113は現存長7.3cm、現存幅3.6cmを測る。表裏面を砥面として使用する。側面は研磨を施す。115は硬質細粒砂岩である。現存長5.2cm最大幅4.3cmを測る。両面及び側面を全て砥面として利用する。側面には一部敲打痕が残る。頁岩質である。

不明石器 (114)両端を欠いている。現存長10.7cm、最大幅6.1cmを測り、断面形は隅丸方柱状を呈している。表面を粗割りした後、敲打・研磨を施す。木研磨部分が多く、敲打痕を残す。細粒砂岩である。

石塔(116)水溜り状の土壤から出土。石塔の一部と思われる。断面形は蒲鉾状を呈している。全体に研磨は丁寧である。成形時の調整痕が多数残る。粒子の細かい砂岩である。二次的に被熱している。

2号溝出土遺物 (Fig. 38~41, PL. 24, 26)

土師器

皿 (118) 口径9.2cm、底径6.2cm、器高2.3cmを測る。糸切り底で、内外面ヨコナデ調整である。

杯 (119, 120) 胎土に少量の長石粒を含み、淡茶褐色を呈する。119は口径11.9cm、底径8.3cm、器高2.3cmを、120は口径13.0cm、底径9.9cm、器高3.1cmを測る。内外面ヨコナデ調整。119の胎土には長石、石英粒子が、120には褐色粒子を含む。119は淡茶褐色、120は淡赤褐色を呈す。

青磁

碗 (121, 122, 124, 125, 128) 121, 122は底部の破片である。胎土は124が灰青色、122が灰白色。釉は体部下半までやや厚目にかかる。121は灰緑色釉、125は淡青緑色釉である。122の高台には目痕がある。高台径は121が5.1cm、122が6.5cmを測る。124は高台径7.5cmを測る。体部外面に暗緑青色の釉を薄目に施す。高台外面に釉垂れがみられる。疊付は釉の搔取りを行う。細かい貫入と気泡が入る。内底見込には沈線を施し、内底には毛彫りの雲文等を描いている。越州窯系である。125は復元径口18.4cm、高台径8.0cm、器高7.9cmを測る。端反りの口縁部である。釉は高台内側まで厚く施し、内底は輪状に搔取っている。胎土は灰白色で、褐緑色の釉である。胎土に色の違いがみられ、2次的な被熱を示すものかとも考えられる。128は底径5.0cmを測る。高台外面まで釉を施す。釉は淡緑色を厚目にかける。気泡がある。高台内面は釉の搔取りを行う。胎土は灰色である。

皿 (126, 127) 126はいわゆる李朝象嵌青磁といわれるものである。復元高台径は4.5cmを測る。胎土は暗灰色で、見込みに白土による象嵌文様を描いている。梅花のモチーフである。釉は濃灰緑色を呈し、全面に施す。疊付は搔き取っている。127は底径7.2cmを測る。基筒底の皿で、明代である。緑青色の釉を厚目に施すが、内底・外底には施さない。外面に釉垂れがある。釉に貫入と気泡がある。胎土は灰白色である。

白 磁

碗 (123) 高台径6.3cmを測る。白色釉を施すが、外面下半は露胎となっている。見込みに1条の沈線を施す。内底見込みに目痕が残っている。

瓦質土器

插鉢 (133, 134) いずれも口縁部片である。134は復元口径27.0cmを測る。いずれも口縁部がやや肥厚し、内側につまみあげた山形様の口縁端部である。いずれも口縁端部はナデ仕上げである。内面はヨコ・ナナメハケを施す。137は内面に5条の条痕を施す。133は3本以上の条痕である。外面はナデ調整している。133は茶灰色、134は灰褐色である。

捏鉢 (136) 肥厚する。底径11.7cmを測る。外面はナデ調整である。内面は淡黄褐色、外面は黒色を呈し、いぶしによるものと思われる。

火舍 (130) 調部の小破片である。内外面ともにナデ調整が施される。腹部の突帯間に印文を施す。胎土に細砂粒を含み、内外面白色に近い淡褐色を呈す。

托 (131) 復元口径16.3cm、高さ1.8cmを測る。平らな円盤に高台を付けた形状を呈する。ハケよりナデに近い調整痕がみられる。全面が黒褐色をなす。台部外面に黒褐色の付着物がみられる。本資料は井手ノ原遺跡で、托とされた例に類似している。

壺 (129) 壺の口縁部と思われる。同一個体とみえるものが、1号溝 (SD 01) から出土している。胎土に気泡があり、焼成は良い。内外面ともに黒褐色を呈する。

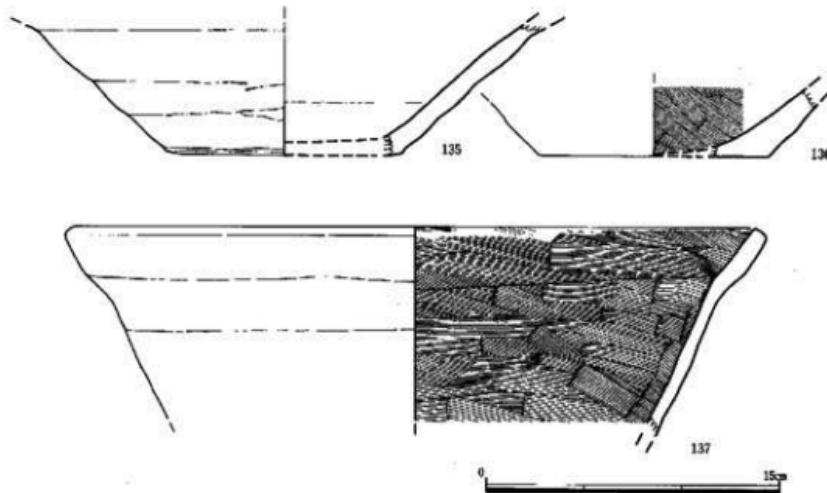


Fig. 39 2号溝出土遺物 (1/3)

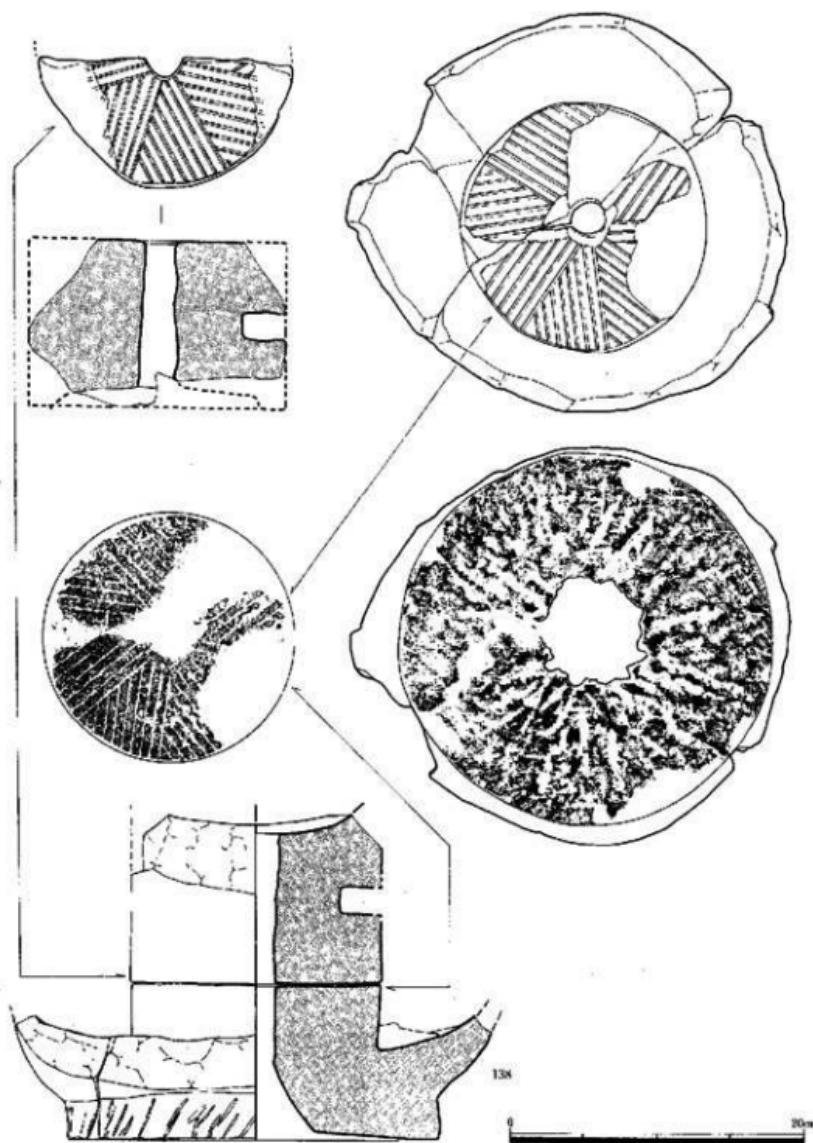


Fig. 40 2号溝出土遺物 (1/4)

土師質土器

捏鉢 (135) 遺存状態が悪く、調整等不明瞭だが、内面に使用による滑らかな部分がある。復元底径12.4cmを測る。胎土に砂粒を含む。内外面ともに淡赤褐色を呈する。

湯釜 (132) 底部を欠いている。球形の腹部には真直ぐ立ちあがる口縁部が接続する。又、頸部の付根部分に径6cmの穿孔が1個みられる。肩部に1対の耳を貼付けるが、耳には径6~8cmの穿孔を行う。遺存状態は悪いが、口縁部内外面は指圧痕の上をヨコハケ調整する。胸部下半、及び鉢の下面部に煤が付着している。

鍋 (137) 底部を欠いている。口縁部は内弯気味に外反し、体部との境は内面に稜を有す。内面はヨコ・ナナメハケ調整を施す。口縁部と体部の境目の稜線下には帯状の煤状付着物がみられる。外面はナデ調整である。口縁部は媒、又はタール状の付着物が覆い、口縁部下位は被熱のため赤化する。内面は明赤褐色で、胎土に砂粒を含む。

石製品

石鍋 (139) 口縁部の破片である。復元口径20.0cmを測る。口縁端部に断面が台形の小さな突帯をもつ。外面には工具によるタテ長の削り痕が残る。突帯、口縁端部上面、及び内面は削り痕を残さない。東側の包含層出土である。

その他、石鍋破片を利用し、再加工を施したものがある。他の1片は胸部の小破片である。内面は丁寧なケズリ仕上げ、外面はタテ長の削り痕を残している。

茶臼 (138) 2号水溜状土壙出土。現存高23cmを測る。下臼は3つの破片となって出土した。上臼も同じ場所からの出土である。上・下臼の擦り合せ面径が一致するので、1組のものと考えられる。上臼は約半分を欠失している。復元径17.6cm、器高11.4cmを測る。把手を取り付ける穴は円形を呈し、径は17cmである。下臼は受け部外周部と擦り合せ面の一部を欠失している。下臼の受け部の現存径32cm、現存の深さ2.8cm、底径25.5cm、高さ10.8cmを測る。擦り合せ面径は17.2cm、高さ4.6cmを測る。上・下臼ともに擦り合せ面に放射状の条痕を施す。この条痕は8等区分され、区割線の間には基準線と平行な細溝が、右回り方向で刻まれている。条痕は等間隔で、溝幅約0.2cm、間隔は0.5cmを測り、8~9本単位である。中心に近い部分は使用の為磨滅している。上臼の復元径14cm、深さ1.3cmを測る。断面皿状の受け部が設けられる。上臼の軸孔径は上面が2.5cm、下面が2.0cmである。下臼の軸孔は底面がラッパ状に開く。上面は径2.3cm、下面是径7cmを測る。臼の外面は丁寧に研磨し、ケズリをなくすが、下臼の基部、及び下底面、上・下臼の軸孔、上臼の取手孔には工具痕が残る。先端の尖がった工具によるものである。砂岩製である。

砥石(140, ~142) 142は1号水溜状土壙の出土。最大長11.9cm、最大幅11.2cm、厚さ4.2cmを測る。盤状の素材を使用する。2側面を砥面として形成、使用する。1面に工具の痕跡がある。又、タール状の付着物がある。粘板岩製と思われる。140は3号水溜状土壙出土。最大長14.6

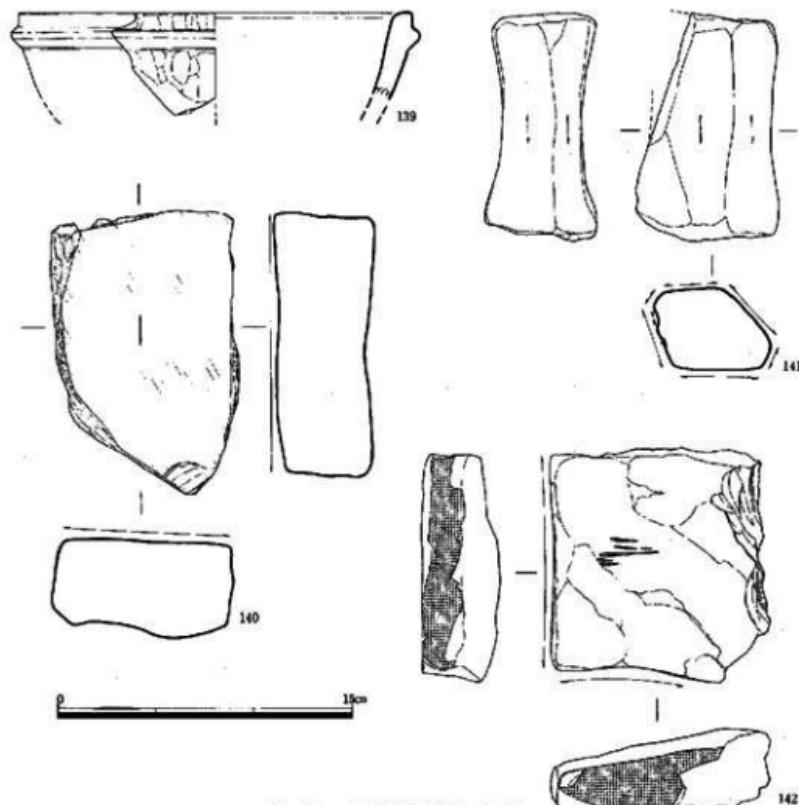


Fig. 41 2号溝出土遺物 (1/3)

cm、最大幅9.3cm、厚さ5.2cmを測る。盤状の素材を使用し、側面は粗割り状態である。底面は1面を使用する。頁岩であろう。141は現存長11.7cm、最大幅7.3cm、最大厚5.8cmを測る。柱状の石材を用い、側面を砾石として使用する。6面体で、六角柱状を呈し、小口面は粗割り調整である。底面は長軸方向に使用され、底面中央がへこんでいる。硬質砂岩製である。

その他、硬質砂岩の底石が1点ある。

5号溝出土遺物 (Fig. 42, PL. 22・23・25)

陶磁器

17世紀～18世紀の伊万里系の碗、及び雑器である。特に18世紀の碗は多量で、クラワンカ茶

碗である。

皿(143, 144, 151, 156, 157) 高台径は143が3.9cm, 144が4.1cm, 151が4.1cm, 157が7.4cmを測る。151は完形品で、口径9.2cm, 高台径3.7cm, 器高3.2cmを測る。釉は144が青味のある白色釉, 151は白濁色釉, 156は透明釉, 157は黄緑色釉である。143と144の内底見込みは輪状に釉の攝取りを行う。143の疊付には離れ砂が付着している。151は釉を厚目に施すが、溶け切っていない。外面には茶系の呉須で網目文を施す。高台は断面三角形状を呈している。156は厚目の釉で内面には呉須で文様を施す。157は大形の皿である。内底見込みは釉を蛇の目状にカキ取りを行なう。釉には細かい貢入がある。疊付に離れ砂の付着がみられる。いずれも伊万里系の磁器で、18世紀代の産物と思われる。

碗(145, 147, 148, 152, 153, 158, 159) 146・159は図上復元した。145は小碗である。高台形2.7cmを測り、体部は丸味をもつ。やや白濁した釉を薄目に施す。146は口径9.7cm, 高台径2.8cm, 器高5.0cmを測る。体部は丸味をもっている。透明釉を施し、高台外面には呉須による圓線を巡らす。疊付は釉を攝取っている。147は高台径4.2cm, 148の高台形4.3cmを測る。147は白色釉である。148は透明釉を厚く施す。外面に気泡がある。高台外面には呉須による圓線を巡らす。147は1条、148は2条である。148の外底部は施釉しない。152の高台径4.4cm, 153は4.2cm, 152は透明釉を施し、気泡がある。153の釉は白濁しており溶け切っていない。全面に気泡がある。いずれも高台疊付は攝取りを行う。158は復元口径12.4cm, 現存高4.8cmを測る。159は口径10.5cm, 高台径5.1cm, 器高5.6cmを測る。158は透明釉、159はくすんだ透明釉を厚目に施す。158がやや口径が大きく、体部が内弯気味であるが、外面の文様は同一である。すなわち、草花、蝶文をあしらっている。158には蝶文、159は草花文と蝶文を対称させている。159には貢入があり、一部亦変しているので、2次的な熱を受けたものと思われる。全て伊万里系の碗であるが、尖がった高台や体部の立ち上がりなどみると、18世紀～19世紀初頭の時期が考えられる。158・159は17世紀末から18世紀である。

壺(149) 伊万里系である。高台径8.0cm, 器壁の厚さ0.7～0.9cmを測る。内面は無釉で、外面には青味がかった白色釉を施す。高台の断面形はコの字形を呈し、外面には3条の呉須による圓線を施す。釉に貢入、龍裂がみられる。

陶 器

皿(150) 高台径4.1cmを測る。唐津系の青緑釉皿である。外面には透明釉がかかり、胎土は淡茶褐色を呈する。内底は蛇の目状に攝取っており、砂目痕が認められる。17世紀後半から18世紀前半の所産である。

碗(154, 155) 共に唐津系である。154は高台径5.0cmを測る。155はいわゆる刷毛目手といわれる碗で、ロクロ回転によって渦状に白色土を施す。釉はやや白濁した透明釉で、貢入がある。胎土は淡茶褐色を呈する。154の胎土は淡褐色を呈し、白濁する釉を施すが、褐色の微粒子

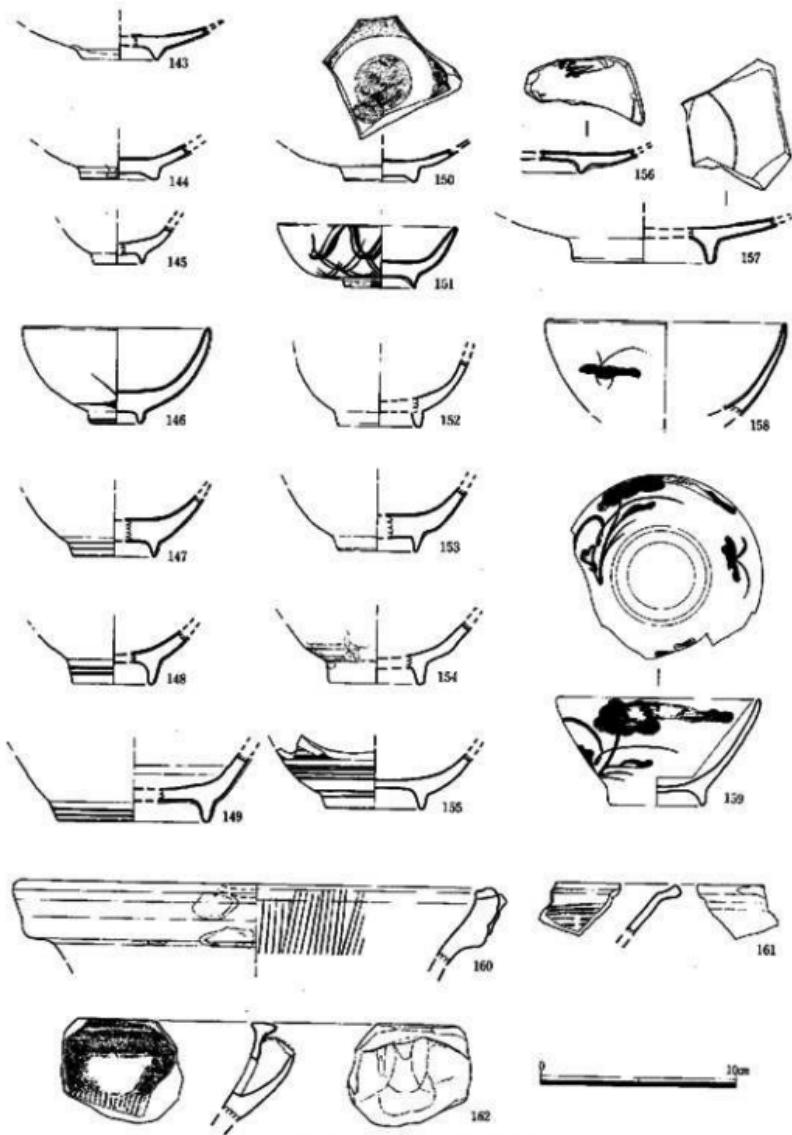


Fig. 42 5号溝出土遺物 (1/3)

が混じる。釉の滴下は著しい。焼成が甘く、風化のため釉の剥離が頗著である。

鉢 (161) 唐津系で、口縁部はくの字形に外反し、端部は丸味をもっている。内面は白土による刷毛目を施す。釉は透明で、薄目である。胎土は赤褐色を呈する。

擂鉢 (160, 162) 162は小形の鉢である。口縁直下の器壁を三角形状に切り取り、外側に注口部分を設けている。内面の条痕は深く、密である。160は復元口径25.0cmを測る。口縁部の外側に粘土を帯状に貼り付けて厚みをもたせる。内面には3mm幅で、5本単位の条痕を粗雑に施す。外面はヨコナデ調整であるが、指圧痕が残る。いずれも胎土に砂粒を含んでおり、濃茶褐色を呈している。

瓦質土器

湯釜 (164) 脇部破片である。鋤部の復元径27.1cmを測る。肩部に1対の半円形状の耳をつける。耳には棒状の工具によって、径0.6cmの穿孔を行う。内面はヨコハケ調整を、外面はナデ調整である。鋤より下位と耳の下半部に煤が付着する。胎土に砂粒を含む。

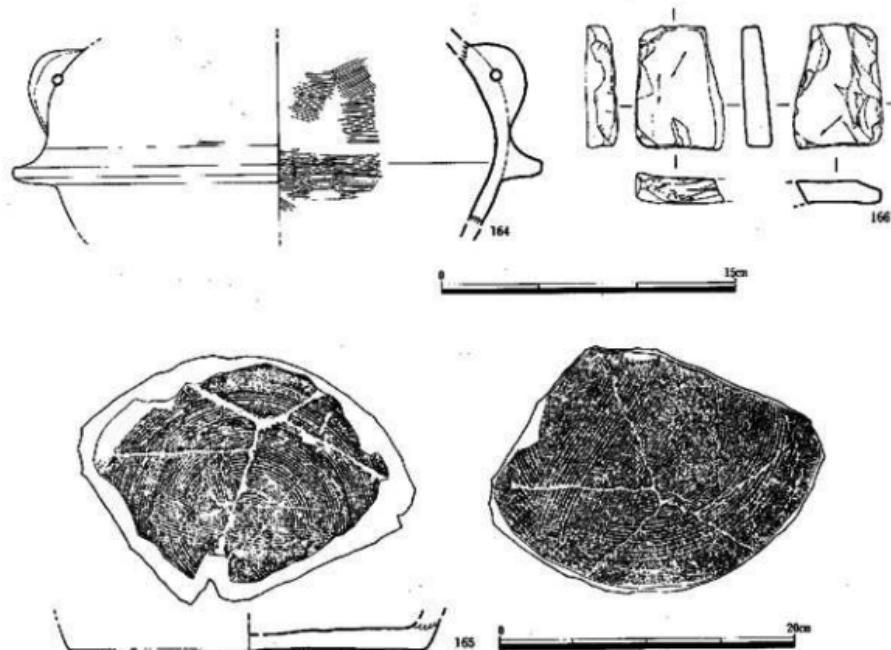


Fig. 43 5号溝出土遺物 (1/3・1/4)

土師質土器

甕(165) 底部のみで、径24.5cmを測る。内外面は同心円状の粗いハケ目を施した後、更にヨコ方向のハケを施す。胎土に砂粒を含み、淡赤褐色を呈する。

石製品

砥石(166) 最大長6.4cm、最大幅4.5cmを測る。板状を呈し、5面を砥面して利用している。小口には一部敲打痕が残っており、整形時のものであろう。硬質細粒の砂岩製である。

1号堀立柱建物出土遺物 (Fig. 44)

柱穴No.3から糸切り底と思われる土師器壺・皿の破片を検出した。(柱穴No.3-P82)

2号堀立柱建物出土遺物 (Fig. 44)

柱穴No.1(P-37)、柱穴No.3(P-98)から糸切り底と思われる土師器壺・皿の破片を、柱穴No.4からは弥生式土器片が出土した。

土師器

皿(187) P-98より出土。糸切り底で、1/4片である。復元口径10.6cm、器高2.5cm、底径7.3cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整で、胎土に砂粒を含む。赤褐色を呈する。

3号堀立柱建物出土遺物

柱穴No.1・柱穴No.2・柱穴No.4・柱穴No.5・柱穴No.6から糸切り底と思われる土師器壺・皿の破片が出土した。柱穴No.5からは更に土鍋が破片で出土している。

4号堀立柱建物出土遺物

柱穴No.4から底部糸切りと思われる土師器が破片で出土した。

5号堀立柱建物出土遺物

柱穴No.2・柱穴No.3・柱穴No.7から底部糸切りと思われる土師器の破片が出土している。

6号堀立柱建物出土遺物

柱穴No.2・柱穴No.3から底部糸切りと思われる土師器壺・皿が破片で出土している。

7号堀立柱建物出土遺物 (Fig. 45)

柱穴No.4・柱穴No.5から底部糸切りと思われる土師器壺・皿の破片が出土している。更に柱穴No.5(P-56)からは鉄片が、柱穴No.11からは土鍋が破片で出土している。

瓦質土器

鍋 (197) 柱穴No11 (P-56) 出土。柱穴内に流れ込むような状態で出土した。復元口径28.5cm, 器高13.6cmを測る。底部はやや丸味をもった平底で、体部は丸味をもつ。口縁部は小さく外反する。内外面とも指圧調整後、ヨコ・ナメ方向のハケ調整を行う。口縁端部内面はヨコナデを行っている。外面には煤状のものが付着している。底部は非常に硬い。胎土に粗砂粒を含み、黒色を呈する。

8号掘立柱建物出土遺物 (Fig. 45)

柱穴No 2・柱穴No 3から糸切り底と思われる上師器坏、皿の破片が、柱穴No 8 (P-128) からは土鍋が破片で、柱穴No 1からは弥生式土器が破片で出土した。

土師質土器

鍋 (198) 柱穴No 8 (P-128) 出土、口縁部片である。内湾気味に外反する口縁部で、端部は平端に仕上げる。内面はヨコハケ調整である。外面には煤が付着している。外面は黒色、内面は赤褐色を呈する。

9号掘立柱建物出土遺物

柱穴No 3・柱穴No 6から糸切り底と思われる上師器坏、皿が破片で出土した。

pit出土遺物 (Fig. 44, 45, PL. 22~25)

掘立柱建物の柱穴としたものも含め、約13個のピットから遺物が出土した。そのうち大部分が糸切り底の土師器坏、皿の破片と黒曜石の剥片類が出土したものである。以下そのうちのいくつかを示す。

P 33出土遺物 (Fig. 44, PL. 22・23)

土師器

皿(168, 169) 1/6片のため復元値に不安がある。糸切り底である。168は口径9.8cm, 器高1.6cm, 底径8.2cmを測る。169は口径11.6cm, 器高1.7cmを測る。内外面ヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈する。

P 63出土遺物 (Fig. 44, PL. 22・23)

土師器

皿(171, 172) 復元口径8.9~9.0cm, 底径6.7~8.3cm, 器高2.0cmを測る。糸切り底で、体部内外面ヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含む。淡赤褐色を呈する。

坏(173~175) 復元口径13.2~14.0cm, 底径9.4~10.2cm, 器高2.7~3.3cmを測る。糸切り底で、体部内外面ヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含む。173・174は赤褐色、175は暗茶褐色

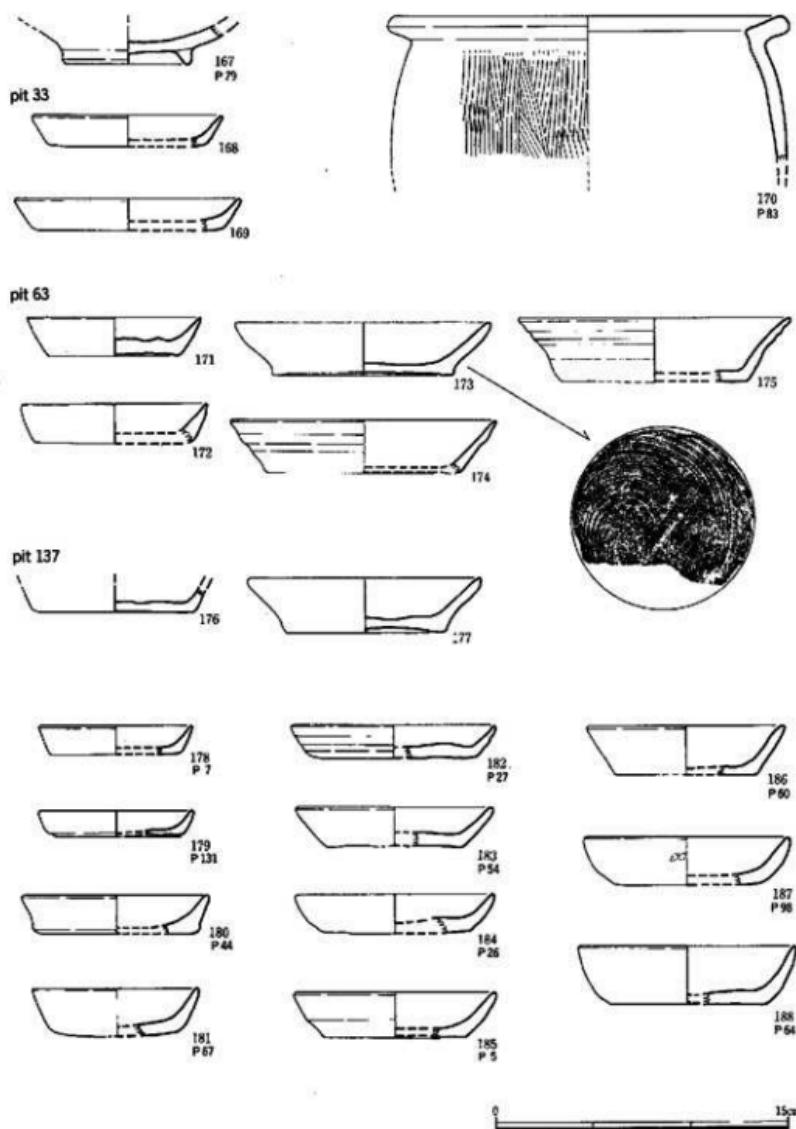


Fig. 44 Pit 出土遺物 (1/3)

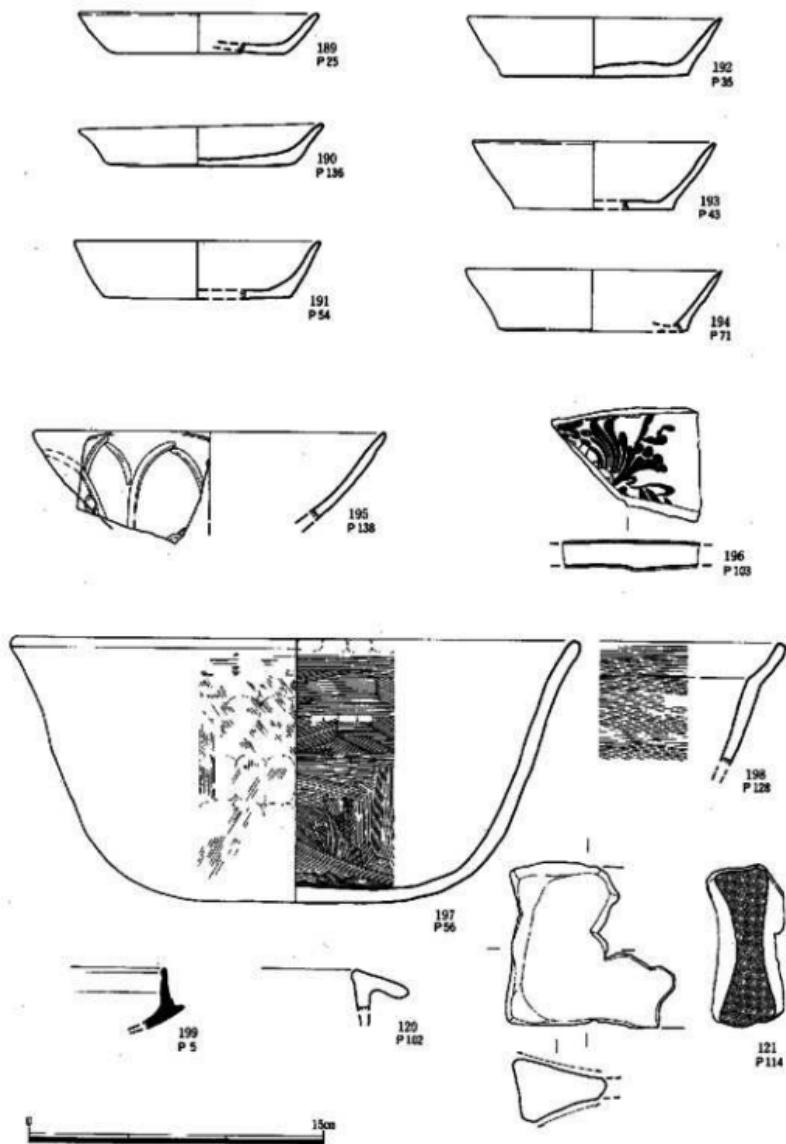


Fig. 45 Pit出土遺物 (1/3)

を呈する。

P 137出土遺物 (Fig. 44)

壺(176, 177) 177は口径12.0cm, 底径8.2cm, 器高2.8cmを測る。糸切り底で、体部内外面はヨコナデ調整である。177の胎土は精選されている。淡茶褐色を呈する。

その他の pit 出土遺物 (Fig. 44, 45, PL. 25)

弥生式土器

壺 P56出土。前期の壺の胴部破片である。胎上は赤褐色で、砂粒を少し含む。羽状文を施している。

壺(170) 中期の壺の口縁部である。口縁部は大きく双下方へ屈曲する。粗砂粒を含み、やや暗い褐色を呈する。P83出土。後期前半の壺である。復元口径20.0cmを測る。口縁部はくの字形に屈折し、頸部内面に稜を有す。内面はナデ仕上げ、外面は粗いタテハケ調整である。淡赤褐色を呈する。

須恵器

壺身(199) P5出土。壺部口縁付近の破片である。体部は浅く、立ち上り部は細い。胎土に砂粒をわずかに含む。灰色を呈している。

土師器

碗(167) P79出土。黒色研磨土器である。高台径6.6cmを測る。高台は断面形が三角形状を呈す。胎土に砂粒を含む。内外面黒色である。

皿(178~188) いずれも糸切り底である。口径、器高により3種に分けられる。A類(178, 179)は口径7.9cm, 器高1.3~1.5cm, 底径6.8~7.0cmを測る。B類(180, 182, 184)は口径9.7~10.5cm, 器高1.7~2.4cm, 底径6.5~8.5cmを測る。C類(185, 186, 188)は口径10.4~11.2cm, 底径7.4~8.2cm, 器高2.4~3.0cmを測る。181の底部には板目圧痕がある。体部内外面はヨコナデ調整である。胎土は182が精選されており、他は砂粒を含んでいる。179・183・188は淡茶褐色、185・187は赤褐色、180は灰黑色、184は暗茶褐色を呈する。

壺(189~194) いずれも糸切り底である。器高により大、小2種に分ける。小(189, 190)は口径12.4~12.6cm, 底径9.1~9.5cm, 器高2.1~2.3cmを測る。大(191~194)は体部が大きく開く器形で、口径12.5~13.1cm, 底径8.2~9.8cm, 器高3.0~3.4cmを測る。体部内外面ヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含む。193, 194は淡赤褐色、191は淡茶褐色、192は暗茶褐色を呈する。

青 磁

碗(195) P138出土。復元口径17.9cmを測る。外面に大きな片彫り蓮弁を描く。釉は灰緑色を呈し、気泡が多い。釉は薄目である。

盤(196) 底部破片である。内面には浮彫りを施している。釉は淡緑色で、厚目に施す。気泡

が多い。胎土は灰白色である。

石製品

砥石 (121) 最大長8.4cm, 最大幅8.4cm, 最大厚3.7cmを測る。3面を砥面として利用している。表裏の砥面は中央部が凹んでいる。軟質の砂岩である。風化している。

3) 小 結

当該調査においては、弥生時代から近世に至るまでの遺構、遺物を検出した。大まかに3期に分けると、I期は弥生時代、II期は中世、III期は近世である。

I期の弥生時代の遺構は著しい削平を受けており、規模は不明である。5号土壙墓から出土した壺形土器は口縁部にしづり状の痕跡をもつていて、板付I式併行期の上器である。前代の遺物としては突唇文土器も若干出土している。板付II式併行期には羽状文を施した壺形土器片や、前期末の壺棺墓が存在する。削平の状態は著しいが、集落と墓域が同一地域内で構成されていたと考えられる。中期の住居跡は削平が著しいため2軒のみであるが、やはり、1号溝から壺棺片を多数検出しておらず、前代から引つき集落が営まれたことを示している。この集落地は台地中央部に営まれたのではなく、台地から分岐した舌状台地の谷側緩傾地に営まれている。狭長な舌状地の立地を考えれば大集落を形成できるものではなく、4~5軒を単位とした墓地を伴う形態と考えられよう。台地上での弥生時代初頭からの集落は明確ではないが、当該地の約270mの第95次調査では、長径300mに及ぶ環濠の一部を検出しておらず、近い将来環濠内の集落の在り方が明らかになると思われる。又、中期後半、後期初頭の時期の間まで継続した集落が第3次調査で検出している。当該地点と第3次調査とは浅い谷を挟んで約350mの距離にある。この住居跡は一辺が7~9mを測り、2つの井戸を環状に囲む6~8軒の住居跡で構成される。この住居跡はいずれも少なくとも3回~4回の建て替えを行っており、拠点的な要素をもつていて、しかし、拠点的な要素は集落の意味ではない。有田地区のように限られた台地では、近距離に存在する住居跡群を一律的に集落として考えるのは無理がある。集落とは4~5軒の小単位を示しているのではなく、幾つかの小単位が集合して形成されるものと思われ、弥生時代初頭の段階より、拠点的な単位と從属的な単位は既に出現していたものと思われる。何故ならば、伯玄社遺跡の墓地における方形区画された一群と、他の群には明瞭な階層の差が与えられていたと思われるからである。弥生時代前期初頭の環濠については第95次調査の頃で述べたので参考にされたい。弥生時代前期後半の環濠は現在、第6次・第7次調査にて検出している。この溝は丘陵東側斜面の標高約13mと標高約10.5mのラインに沿う東西方向の溝である。2つの溝は約70m離れて並行しており、板付遺跡の環濠のように同一の溝が分岐しているものと考えられる。前期後半の例には、横隈遺跡や津古内畠遺跡のように台地の高所を囲堀し、内部に住居跡や貯蔵穴などが存在する。有田遺跡では溝が西側方向に巡るか否かさえ現在のと

ころ把握できていないが、台地中央部には貯蔵穴等が存在する。又、前期初頭と前期後半の環濠の位置の違いが、集落の在り方によるものなのか、今後の検討材料としたい。

II期は中世の掘立柱建物や溝を主体とする。第3集(遺構編)では中世集落と考えたが、集落とするには規模が小さく、また矩形の溝を考慮すれば、これらの遺構が館跡を形成するものと考えた方が妥当である。遺物により時期を検討してみる。1号溝出土の土師器皿、坏は一種類である。坏の法量、器形は第45次調査の「元□二年(1330)」の紀年銘をもつ卒塔婆に伴うSX1200^{註1}である。出土の坏に近似するが、皿はSX1200の皿の間に比べ、口径・器高とともに大きい。青磁の皿(102)は季朝であり、又、103の染付は明代で、いずれも16世紀に出現する。須恵質土器109は東備系の片口で、14世紀前半に出現する。瓦質土器の湯釜、鼎は、15世紀後半から16世紀前半の時期である。^{註2} 2号溝の土師器坏120は太宰府史跡第67次調査のII期黒陶土出土の土師器に法量、形状とも一致する。坏119は1号溝と同形態である。青磁には、同安窯系碗121・122がある。他に内面に毛彫り文様を有す越州窯系碗124がある。125は明の碗で、15世紀代である。皿126は李朝で、15世紀代に、127は明の皿で、16世紀に位置づけることが可能である。8号土壤の坏は大宰府史跡SX1200に合致し、皿のもほほ一致する。11号土壤の土師器坏はSX1633の坏に一致する。^{註3} SX1663は14世紀半~15世紀初頭である。19号土壤には高麗青磁(50)が伴う。41号土壤の坏は2種類ある。口径と底径比が大きいものは大宰府史跡第67次調査のIII期黒色土出土の土師器に一致し、他はSX1200よりも口径比が大きい。以上を整理すれば、この遺構群は14世紀前半から16世紀前の幅を有している。矩形の溝からの出土遺物も同様な時期を示しており、この館跡が、14世紀の段階に設けられ、16世紀に廃絶するものと考えられる。立地からみれば、舌状に伸びた狭い丘陵の谷斜面に位置し、西側は空見川の開析による河岸段丘が形成されているため制約を受ける。館跡を復元すれば、溝内側の南北の波幅は約30m、東西長は推定すれば約80mが考えられるので、この館跡は約2400m²の面積を推定できる。この広さは博多区諸岡館跡の推定面積にも近似する。掘立柱建物は明瞭に検出できなかったが、切合いから2~3回の建て替えを有している。整然とした配列とは言えないまでも一定の規則性が伺えるので、陶磁器や茶臼などの出土からみて、単なる集落とみるよりも、中世名士層の居館とみる方が妥当であろう。

註1 福岡市教育委員会「有田・小田部第3集—原西保育所の調査(遺構編)」 1982

註2 福岡県教育委員会「井手ノ原遺跡」山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第2集所収 1976

註3 福岡市教育委員会「蒲田遺跡」九州歴史自動車道関係埋蔵文化財調査報告 1975

註4 福岡市教育委員会「諸岡遺跡第14・17次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書108集 1984

14世紀後半から16世紀中葉前後の諸岡館跡の調査で、10期に亘る建物24棟を検出した。

註5 福岡市教育委員会が昭和59年度に発掘調査を実施する。昭和61年3月報告書刊行予定。この遺跡は陶磁器等から15世紀初頭と考えられ、方形区画の周濠が存在し、内側に5棟の建物がある。

註6 藤田勉「毛彫文様のある2、3の青磁について」古文化談叢 6集 1979

註7 宋西禪師が建久6年(1195)中国からもしかった茶種を聖福寺境内や背振山靈仙寺、又は、早良路山に播いたと言う。宋西は建保2年(1214)3代将軍源実朝のために抹茶の飲用をすすめて「喫茶養生記」上下2巻を献じた。

註8 福岡市教育委員会「飯盛神社関係史料集」昭和56年(1981)

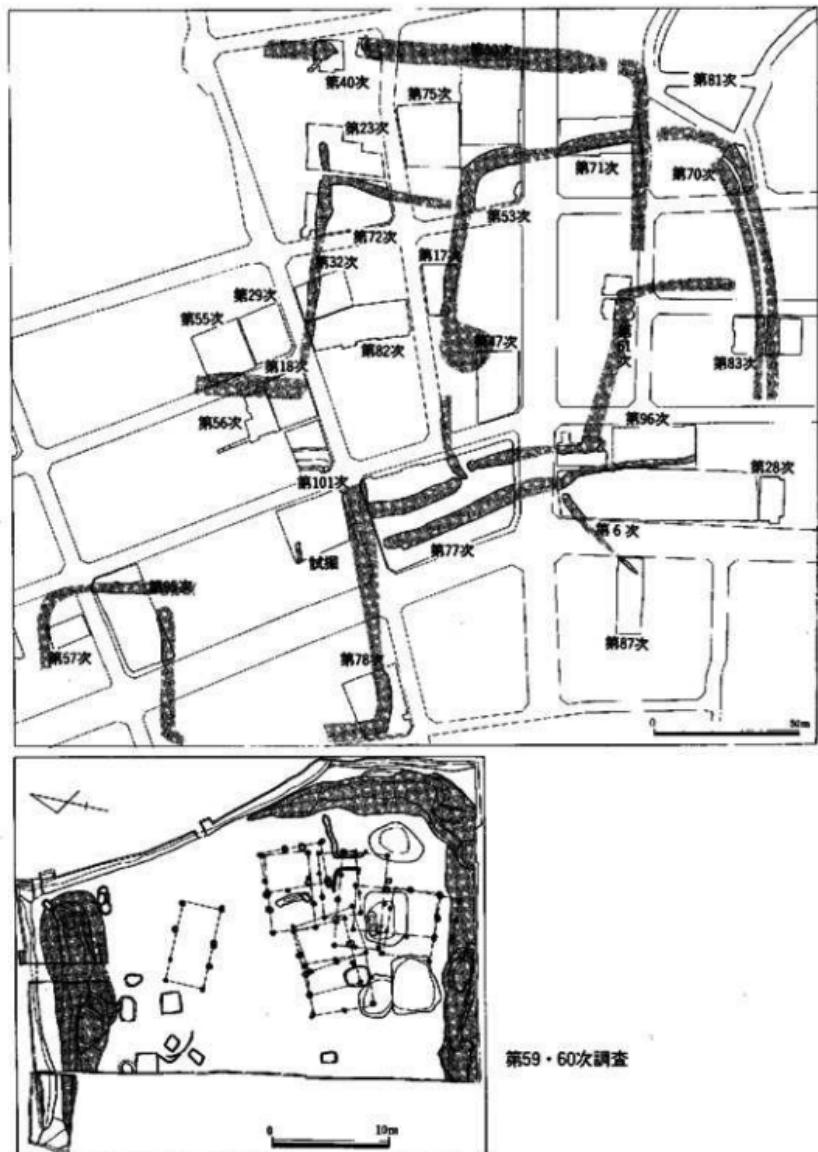


Fig. 46 中世館跡 (1/2000, 1/500)

- 註9 横内賀次郎「大宰府出土の輸入陶磁器について」
 　「九州歴史資料館研究論集4」 1978
- 註10 山本信大 太宰府市教育委員会「大宰府史跡跡III」太宰府市の文化財第7集所収 1983
 　「付論 土器の分類」
- 註11 浜石鶴「藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 福岡市教育委員会 1982
- 註12 森田勉「毛彫文様のある2、3の青磁について」
- 註13 兵庫県教育委員会「魚住古窯址群」 1983
- 註14 九州歴史資料館「大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報」 1981
- 註15 九州歴史資料館「大宰府史跡 昭和52年発掘調査概報」 1978
- 註16 福岡市教育委員会「藤崎遺跡第一第14+17次調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集 1984

Tab.4 第59次調査掘立柱建物一覧表

(単位:cm)

順序	規格	方向	断面		寸法		方位	底面積 (sqm)	備考
			東	西	高さ	柱頭寸法(尺)			
1 号	3×1	東西	690(23.0)		6.5・7.8・8.7	339(11.3)	11.3	N90°E	22.68
2 号	3×1	北西	530(17.7)		6.7・5.6・5.4	339(11.1)	11	N32°W	17.42
3 号	3×1	東西	638(21.3)		6.6・7.5・7.1	387(12.9)	12.9	N72°E	24.85
4 号	3×1	東西	638(17.6)		5.7・6.2・5.7	323(10.8)	10.8	N73°E	17.12
5 号	3×1	東西	638(18.4)		9.7・9.7・7	444(14.8)	14.8	N64°E	24.51
6 号	2×1	北西	530(17.8)		8.8・9	432(14.2)	14.2	N21°W	23.93
7 号	4×1	東西	768(26.3)		8.7・7.7・7.7	384(12.8)	6.4・6	N87°E	30.26
8 号	2×2	東西	565(18.8)		8.2・8.4・8.9	566(18.7)	8.7・8.7・8.7	N66°E	31.64
9 号	2×1	北西	520(17.3)		8・9.3	405(15.5)	13.5	N30°W	21.26
10 号	3×1	南北	780(23.4)		7.9・7.4・8.1	369(12.3)	12.3	N86°W	28.27

付 論 1 第59次調査出土炭化米の調査

九州大学農学部教授

大 村 武

調査を依頼された炭化米は、25の資料に分けられていたので、資料別に調査した。計測に先立って、まず、炭化の状態を観察した。穀殻が完全に残存しているものではなく、ほとんどが玄米の状態であった。焼け膨れ粒は少なく、かなり硬質で、容易に砕けることはなかった。

計測は欠損や焼け膨れのない完全粒について行った。若干の資料を除けば、完全粒の数はかなり多かったので、無作為に選んだ30粒について、粒長と粒幅を測定し、粒形（長幅比）と粒大（長幅積）を算出した。それらの値を表に示す。粒長の平均値は4.65mmで、資料ごとの平均値で5mmを超すのは資料12だけ、4mm以下はなかった。粒幅は平均2.88mmで、5資料で3mmを超えた。粒間の変異は2.1～3.8mmで、粒長の変異に比べやや大きかった。長幅比は、平均1.61で資料間の変異は1.51～1.72と比較的小さかった。粒大を示す長幅積は、資料によって10.89から15.43まで変異したが、平均は13.30であった。

これらの値を永松による16遺跡^{註1}および筆者による菜畑遺跡^{註2}の炭化米の計測値と比較する。粒長は16遺跡では4.34～5.08mm、菜畑遺跡では、4.65mmであり、粒幅は前者が2.51～3.08mm、後者が2.70mmであったことからみると、今回の計測値は平均的な値といえる。長幅比は、前者が1.55～1.86、後者が1.72であり、今回の値もこれらの値と大差はないが、若干小さい傾向がみられた。とくに、前者では2.0以上の値を示す粒が調査した320粒中9粒(2.8%)あったが、今回の調査では6粒で1パーセント弱であった。長幅積は前者の10.96～15.35、後者の12.53にはほぼ匹敵する値であった。

炭化米調査の目的は、申すまでもなく、往時のイネと現在栽培されているイネの関係を粒の形状と大きさから推定することにある。そこで、まず、現在のイネについてこれらの知見をのべる。加藤^{註3}は栽培イネ *Oryza sativa L.*をインド型と日本型の2亜種に分けたが、その指標の1つに玄米に長幅比があり、日本型はその値が2以下であるとした。永松^{註4}は当研究室に保存されている内外の品種2441点について粒長と粒幅を測定し、粒形の指標として玄米の長幅比、粒大の指標として長幅積を求めた。外国稻は粒形では円短から狭長（長幅比1.0以下～4.0以上）まで、粒大では極小から極大（長幅積12以下から24以上）まで著しい変異が認められた。これに対し、わが国の栽培品種は両者とも変異が小であった。粒形では536品種のすべてが短短～短長（1.4～2.0）に属し、短中（1.6～1.8）の品種が75パーセントを占めた。粒大も全品種が小粒～大粒（12～24）の範囲に入り、80パーセントが中粒（16～20）品種で、小粒（12～16）品種は3.9パーセントに過ぎなかった。

これらの知見に基づき、今回の計測値について考察する。長幅比の平均1.61、資料間変異

1.51～1.72は現在の品種の値とほぼ一致しているので、粒形は往時から現在までほとんど変化していないといえる。長幅比が2.0を超える粒が数粒あったが、これについては次のように考える。米粒の発達は、まず粒長が完成し、ついで幅、最後に厚さが完成する。2.0を超す粒は全体の1パーセントにも達せず、かつ、これらは例外なく、粒幅が小であったことからすると、米粒の発達のおくれたものであると考えるのは妥当であろう。したがって、往時も日本型イネが栽培されていたと断定してよかろう。これに対し、長幅積は、平均が13.30、資料間変異が10.89～15.43で、中粒はまったくなく、1資料が極小粒、他はすべて小粒で、現在の品種に比べ、かなり小さい。このことは、炭化によって粒が縮小したとも考えられる。しかし、安田は電気炉で米を炭化すると、僅かに縮小するが、その程度は極めて小さいとしていることからすると、現在の品種に比べ小粒であったとみてよかろう。

註1 永松土巳(1977) 植物性遺物、立岩遺跡、河出書房

註2 大村 武(1982) 出土古代米、米慮園 六興出版

註3 加藤茂苞ほか(1927) 種子植物の結実度より見たる穀品種の類縁に就て、九大農芸誌3

註4 永松土巳(1942) 栽培稻の地理的分化に関する研究、IV、玄米の形状並に大きさによる栽培稻の分類とその地理的分布に就いて、日本作物学会記事14。

註5 安田貞雄(1927) 日本太古の米、農業及園芸2。

炭化米の計測値表

資料 番号	調査 回数	粒 長 (mm)		粒 幅 (mm)		粒 形 (粒長×粒幅)		粒 大 (粒長×粒幅)		備 考
		平 均	最小～最大	平 均	最小～最大	平 均	最小～最大	平 均	最小～最大	
1	30	4.52	4.1～5.1	2.97	2.6～3.8	1.53	1.19～1.87	13.42	10.71～17.63	S K01
2	30	4.66	4.1～5.0	3.11	2.6～3.5	1.51	1.25～1.75	14.49	11.87～17.63	S K01
3	30	4.62	4.0～5.3	3.03	2.4～3.7	1.54	1.25～1.96	14.02	11.48～19.61	S K01
4	30	4.54	3.8～5.1	2.82	2.3～3.3	1.57	1.27～2.04	12.82	10.00～16.25	S K02
5	30	4.66	4.2～5.0	2.83	2.5～3.4	1.63	1.34～1.82	13.03	10.92～15.08	S K02
6	30	4.75	4.4～5.2	2.92	2.6～3.4	1.63	1.35～2.07	13.85	10.46～16.16	S K02
7	30	4.87	4.0～5.2	3.00	2.7～3.5	1.57	1.32～1.82	13.69	11.00～16.83	S K02
8	30	4.58	3.9～5.2	2.94	2.5～3.4	1.60	1.41～1.86	13.12	10.34～16.58	S K02
9	30	4.94	4.2～5.2	2.92	2.6～3.3	1.64	1.40～1.90	13.97	11.61～16.83	S K02
10	30	4.73	4.3～5.2	2.91	2.7～3.3	1.64	1.37～1.88	13.76	11.93～15.68	S K02
11	10	4.62	4.5～4.9	3.00	2.7～3.4	1.58	1.35～1.77	13.86	11.93～15.64	S K02
12	2	5.03	5.0～5.1	3.02	2.6～3.5	1.70	1.45～1.94	15.19	13.13～17.25	S K03
13	20	4.61	4.0～5.0	2.85	2.7～3.2	1.61	1.40～1.92	13.14	10.47～15.20	S K04
14	10	4.53	4.2～4.9	2.67	2.4～3.0	1.71	1.41～2.06	12.08	10.44～13.28	S K04
15	10	4.13	4.2～5.1	2.95	2.6～3.3	1.54	1.38～1.79	13.36	12.09～15.56	S K06
16	30	4.68	4.4～5.2	2.74	2.4～3.3	1.72	1.52～2.02	12.85	10.34～16.09	S K08
17	30	4.75	3.9～5.0	2.85	2.1～3.3	1.61	1.22～2.00	13.44	8.41～16.17	S K08
18	30	4.57	3.9～5.0	2.75	2.2～3.1	1.66	1.38～2.00	12.58	9.56～15.25	S K08
19	30	4.63	4.3～5.2	2.83	2.4～3.2	1.64	1.34～1.88	15.43	10.68～16.38	S K08
20	10	4.79	4.4～5.2	2.93	2.7～3.2	1.64	1.40～1.79	14.01	12.83～15.36	S K08B
21	30	4.56	4.1～5.1	2.83	2.4～3.5	1.62	1.39～1.85	12.90	10.08～16.56	S K09
22	30	4.87	4.1～5.1	2.81	2.5～3.3	1.67	1.44～1.96	13.10	10.71～14.28	S K09
23	4	4.13	3.6～4.7	2.61	2.3～3.1	1.58	1.54～1.60	10.89	8.10～14.34	S K11
24	30	4.63	4.1～5.1	2.77	2.4～3.2	1.68	1.34～1.85	12.84	10.20～15.66	S K37
25	30	4.65	4.2～5.1	2.94	2.2～3.3	1.59	1.31～1.88	13.66	9.24～16.92	S D02
全体	606	4.65	3.6～5.3	2.88	2.1～3.8	1.61	1.19～2.07	13.30	8.41～19.61	

3. 第60次調査

1) 調査地区の地形と概要

当該地は福岡市早良区小田部3丁目178-2に所在し、調査対象面積は26m²である。

第60次調査地点は第59次調査地点の北西側、調査区西辺部で接する位置にある。保育所の工事用道路開設に先立ち昭和56年11月21日から24日まで調査を行った。遺構は第59次調査で検出の1号・5号溝の延長部分を検出したにすぎない。いずれも、西端部を農道により削られてい る。

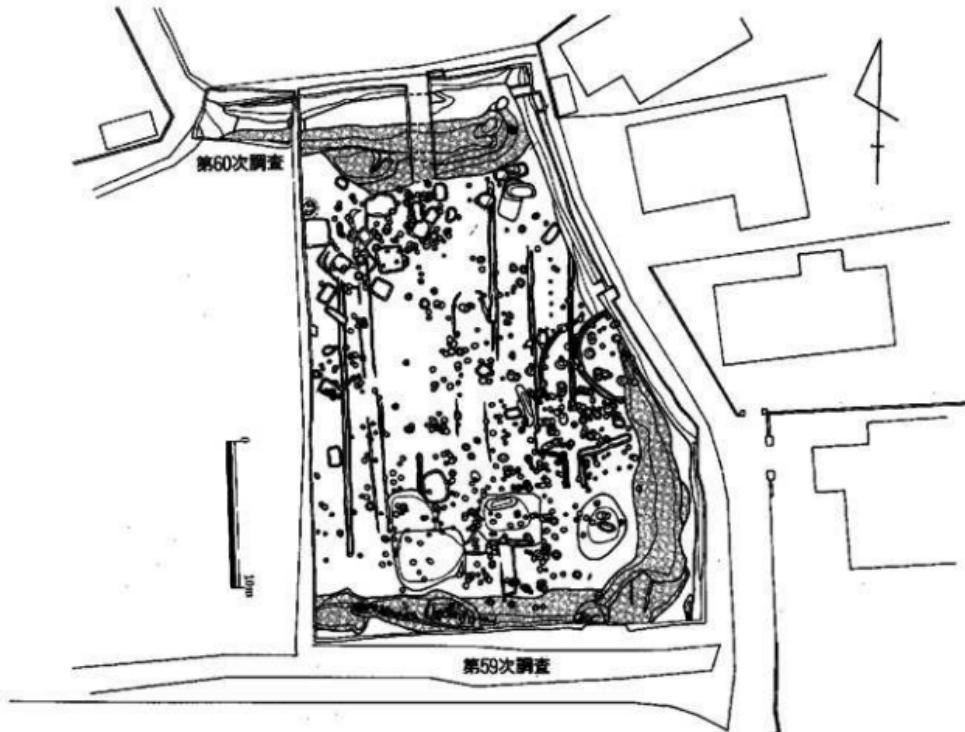
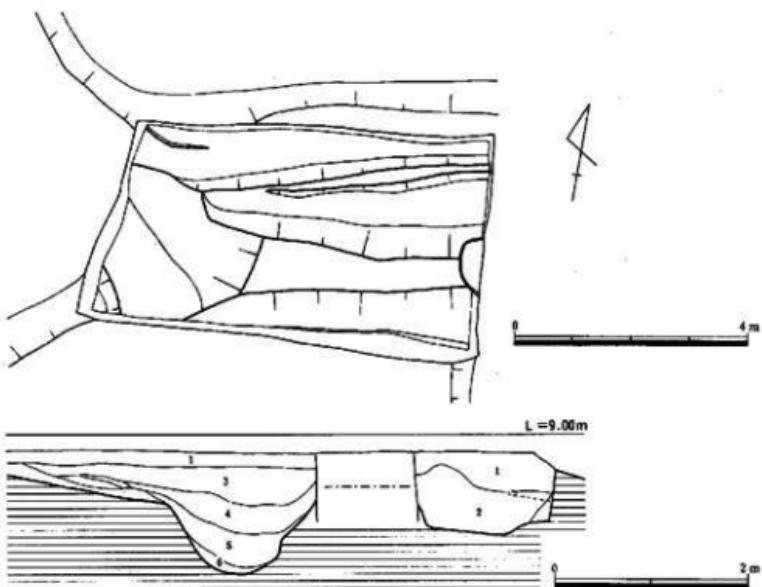


Fig. 47 第59・60次調査遺構配置図 (1/400)



土層名
 1. 黒褐色土（耕作土）
 2. 暗茶褐色土
 3. 暗茶褐色土 粘性がある
 4. 暗茶褐色土 褐色土ブロックを含む
 5. 暗茶褐色土 炭化物を含む遺物の多量の出土
 6. 暗茶褐色土 粘性がある

Fig. 48 遺構配置図及び1号・5号溝土層図 (1/100, 1/60)

2) 遺構各説

溝

1号溝 (Fig. 48, PL. 27)

二段掘りの溝で、断面形は一段目が浅い皿状を呈し、二段目はU字形を呈する。現存長4.9mを測り、西端にて南側へ屈折する。本来の溝幅は約5.7m、深さ1.2mを測る。覆土は暗茶褐色粘質土を主体としている。

5号溝 (Fig. 48, PL. 27)

北側境界地にあるため溝幅の実数は不明である。又、南側肩は現代の溝状遺構により破損している。現存最大幅は1m、深さ42cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土であるが、やや締りが悪い。

3) 遺物各説

1号溝出土遺物 (Fig. 49, PL. 27)

土師器

皿(1) 口径7.5cm, 器高1.8cm, 底径5.8cmを測る。器壁は厚みを有し, 体部内外面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み, 赤褐色を呈する。

壺(2, 3) 1口縁部を欠く。糸切り底で, 底径6.9~7.0cm, 現存器高1.2~2.0cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み, 2は米灰色, 3は赤褐色を呈する。

青磁

盤(4) 盤の底部破片である。高台は断面形コの字形を呈し, 復元径19.6cmを測る。内外面に淡緑色の釉を厚く施す。内面には模描文を施文している。見込みに圓線を有している。胎土は灰白色である。

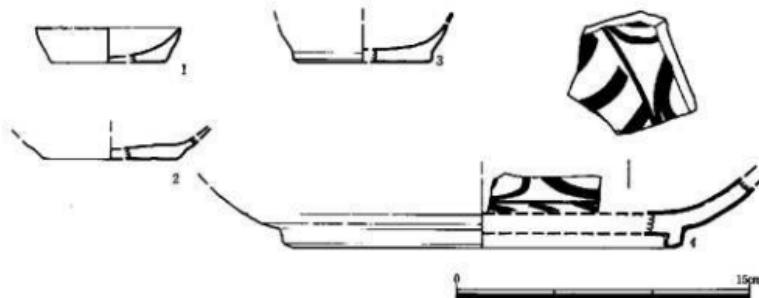


Fig. 49 1号溝出土遺物 (1/3)

4. 第82次調査

1) 調査地区の地形と概要

当該地は福岡市早良区有田1丁目29-13・14に所在し、調査対象面積は413m²である。

有田地区の頂部は約200m四方の平坦地を形成するが、当該地はこの平坦地の北側に位置し、標高12mを測る。

専用住宅建設に伴って、昭和58年7月14日～9月6日まで発掘調査を行った。周辺では北に隣接した第32次調査が、西側に第19号・第55号・第56次調査を実施しており、古墳時代初頭の住居跡や奈良時代の掘立柱建物、13世紀前後の井戸などを検出している。当該地ではこうした前提で調査を行い、掘立柱建物4棟、古墳時代住居跡1軒、古墳時代～中世の土塁15基、中世木構1条及び溝状遺構1、中世墓2基を検出した。遺構面はローム層であるが、区画整理時に削平を受けている。

2) 遺構各説

検出した遺構の内、第32次調査の遺構と重複するものがある。3・4号掘立柱建物は第32次調査検出の掘立柱建物と同一のものである。又、1号溝は第32次調査の1号溝に接続する。

住居跡

1号住居跡 (Fig. 51, PL. 29)

2号溝や1・2号掘立柱建物に切られるため損失は著しい。小形の住居跡である。平面形は隅丸長方形を呈し、西壁に接して幅90～100cm、高さ8cmのベッドを付設している。現存長4.35m、幅3.35m、現存壁高30cmを測る。柱穴はP 1・2の2本で、P 1は柱穴径35cm、深さ60cmを測る。周溝は周壁下を全周し、幅7～10cm、深さ5～8cmを測る。南壁に接して、壁中央部に出入口と思われるP 3がある。このpitは不整形を呈し、更に底面には隅丸長方形のpitを有している。P 3-aは現存長30cm、幅20cm、深さ8cm、P 3-bは現存長27cm、幅14cm、深さ10cmを測る。P 3-bの底は不整である。貯蔵穴としてはP 3は不整であり、出入口の梯子とその支柱の跡と考えた方が良いであろう。遺物には壺、壺、壺などがある。

土 塙

11基の土塁を検出した。形状、或いは構造において一定していない。構造上からみて土塁基として考えた方が良い。2段張り構造の土塁も存在しているが、特に床面に粘土を貼った土塁

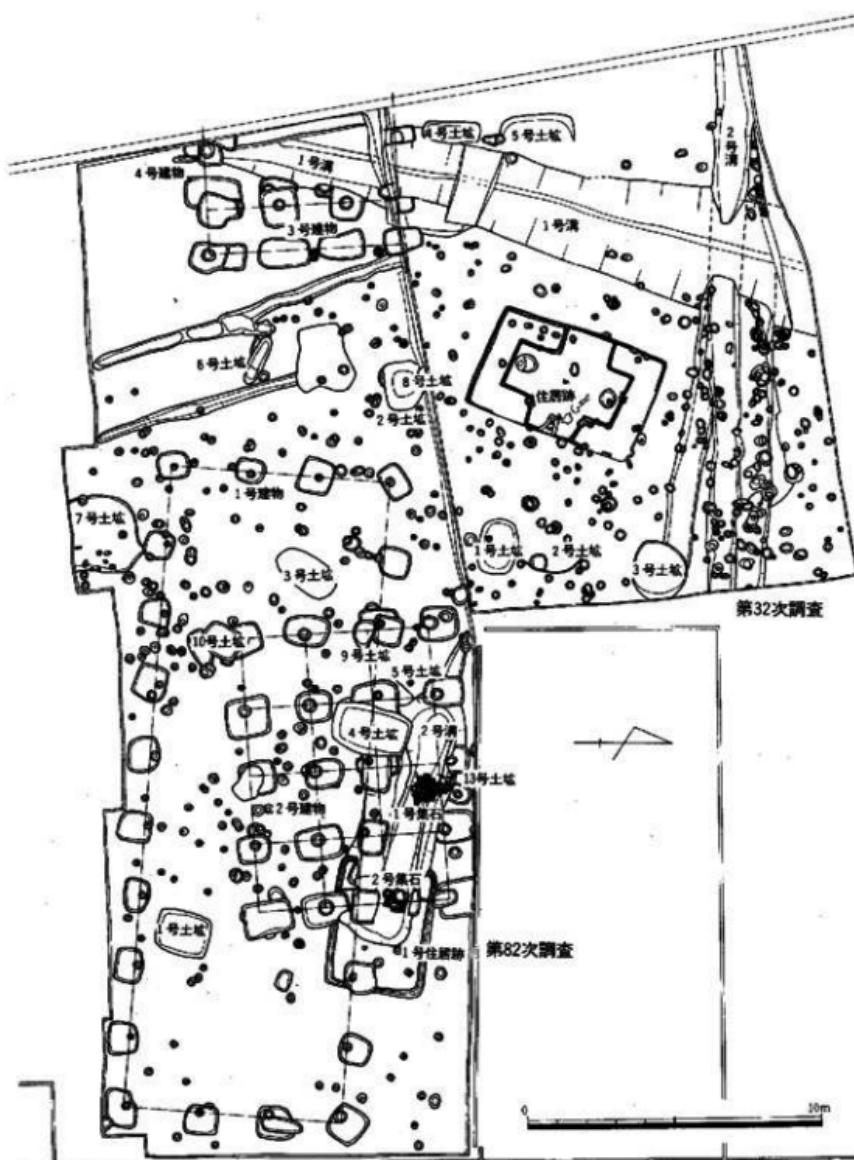


Fig. 50 第32次・第82次調査遺構配置図 (1/200)

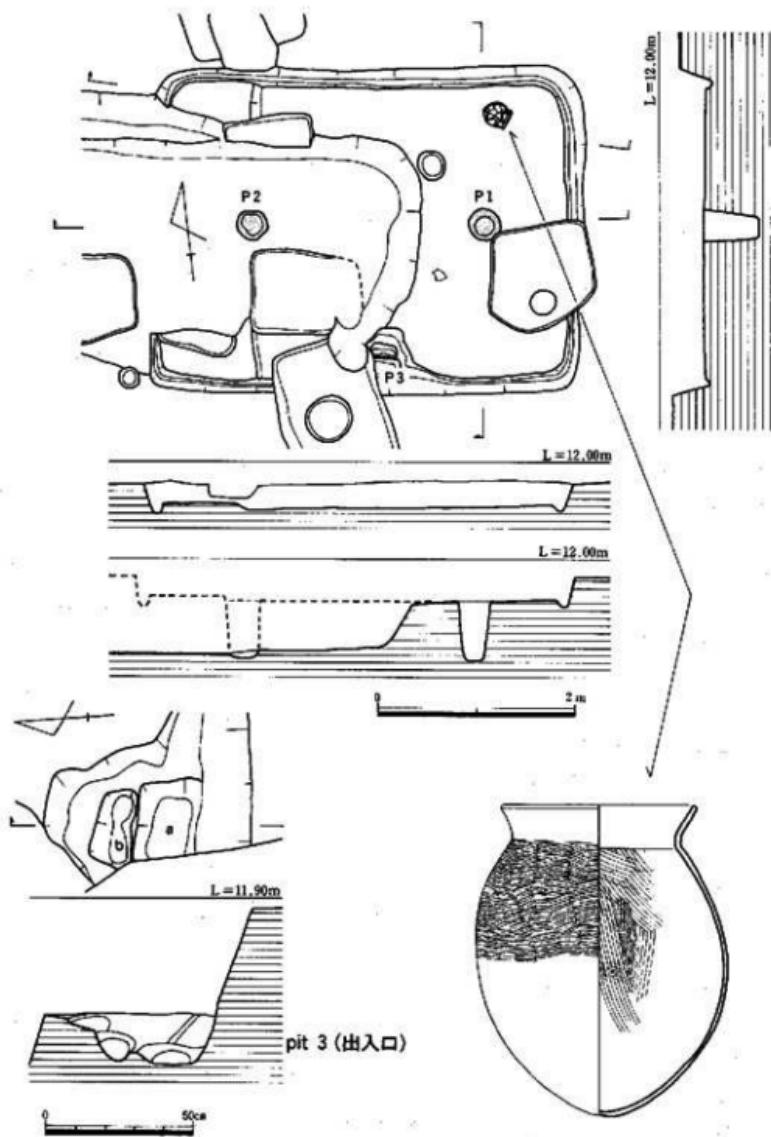


Fig. 51 1号住居跡、出入口 pit (1/60, 1/20)

については基として蓋然性が強い。時期は古墳時代～中世までの範囲であるが、粘土を貼った土壙は第32次調査の1号土壙が類例である。この土壙からは、土師器壺を出土しており、13世紀頃の所産である。他は出土遺物を検討しながら各個の説明の中で述べたい。

1号土壙 (Fig. 52, PL. 30)

平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。覆土は暗茶褐色粘質土である。長さ1.87m、幅1.5m、深さ34cmを測る。主軸方位はN13°Eである。遺物は壙底から瓦質の捏鉢片が出土した。

2号土壙 (Fig. 52, PL. 31)

平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形は摺鉢状である。北壁には方形の出張りがあるが、これは他の土壙である。壙底には淡灰青色粘土を約1～2cmの厚さに貼っていた。切り合ひ北側の8号土壙も同様である。長さ1.61m、幅1.1～1.2m、深さ30cmを測る。遺物は玉緑白磁碗の底部と口縁部片、青磁碗片が出土している。

3号土壙 (Fig. 53, PL. 31)

削平のため原形をとどめていない。現状では椭円形を呈し、断面形は浅い皿状である。長さ2.18m、幅1.17m、深さ0.4mを測る。底面には、淡灰青色粘土を約1～2cmの厚さに貼り付けていた。

4号土壙 (Fig. 53, PL. 30)

1・2号掘立柱建物を切っており、2号溝に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とし、八女粘土のブロックや粒子を含んだ

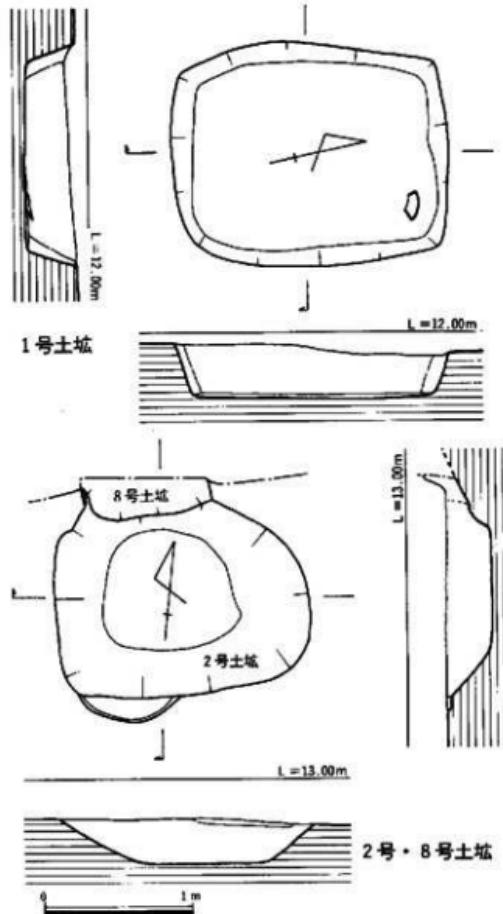


Fig. 52 1号・2号・8号土壙 (1/40)

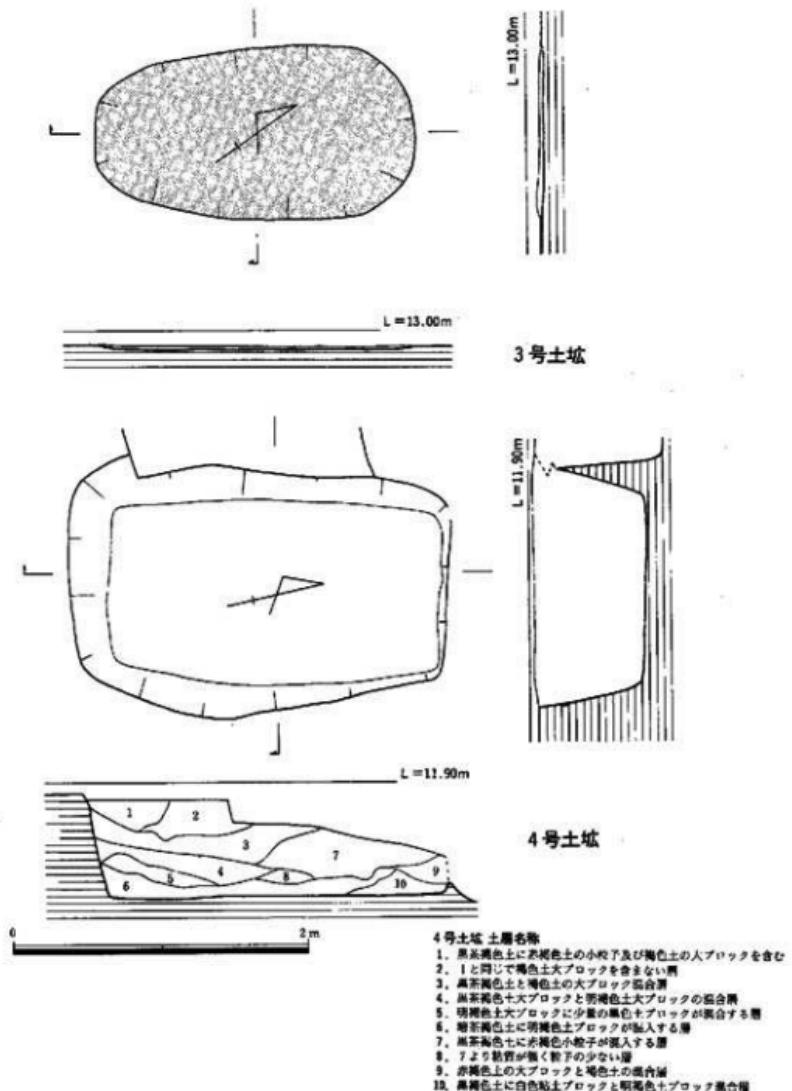


Fig. 53 3号・4号土塚 (1/40)

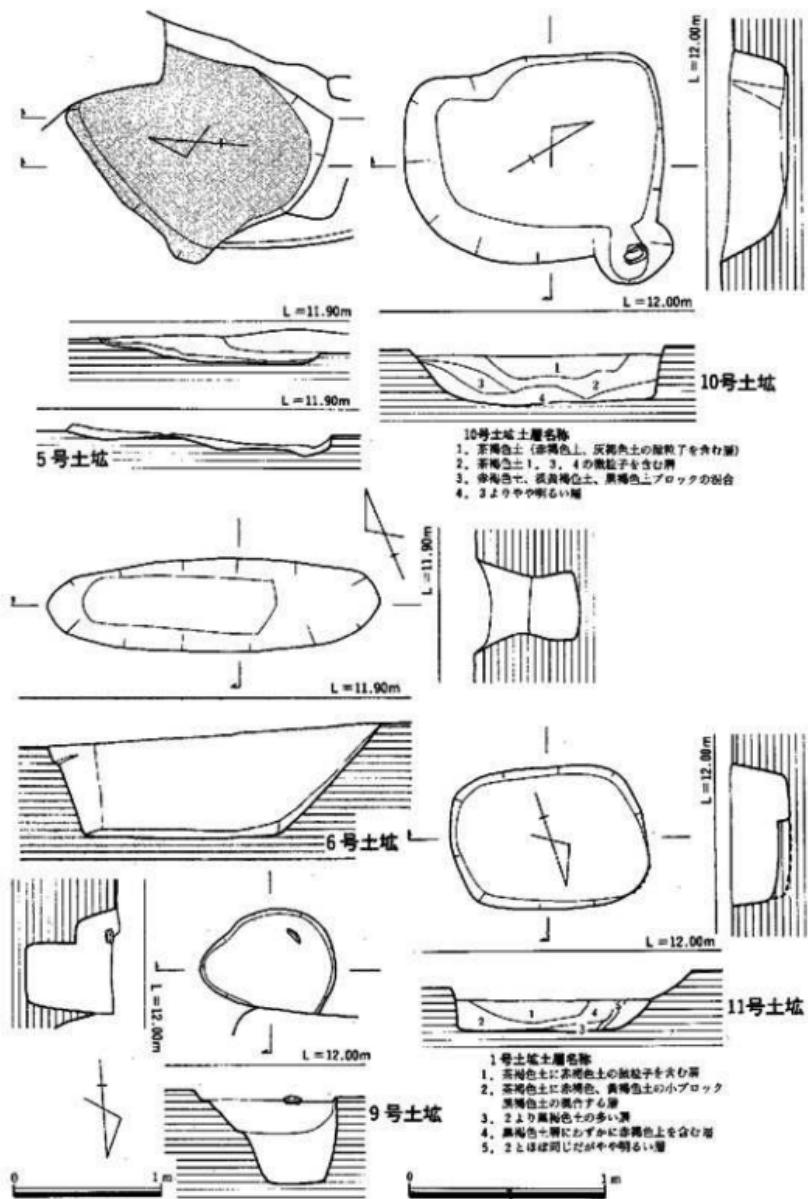


Fig. 54 5号・6号・9号～11号土壤 (1/40, 1/30)

層である。長さ2.6m、現存幅1.7m、深さ0.76mを測る。遺物は土師皿、白磁碗片が出土している。

5号土塙 (Fig. 54, PL. 31)

1・2号掘立柱建物を切っており、4号土塙から切られる。平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形は浅い皿状である。現存長1.04m、現存幅0.96m、深さ14cmを測る。塙底には4~6cmの厚さに灰白色粘土を貼り付けている。主軸はN 6°Eである。遺物の出土は無い。

6号土塙 (Fig. 54, PL. 32)

平面形は長楕円形を、横断面形は二段堀りをなす。側壁の中程に段が付き、下部は袋状を呈している。覆土は暗茶褐色粘質土である。主軸はN 68°Wである。中世の土塙墓と考えられる。

7号土塙 (Fig. 55, PL. 32)

南側の境界地にある。不整形の土塙で、断面形は皿状を呈している。覆土は黒褐色粘質土である。東西長2.65m、南北の現存長2.38m、深さ14cmを測る。遺物は青磁碗片、中国陶器鉢片、鉄釘一本が出土している。

8号土塙 (Fig. 52, PL. 31)

2号土塙と切り合っており、先後関係は不明。第32次調査との境界にあるが、第32次調査では検出していない。現存幅0.8m、深さ32cmを測り、他は規模不明。2号土塙同様に塙底に灰白色粘土を貼り付けている。

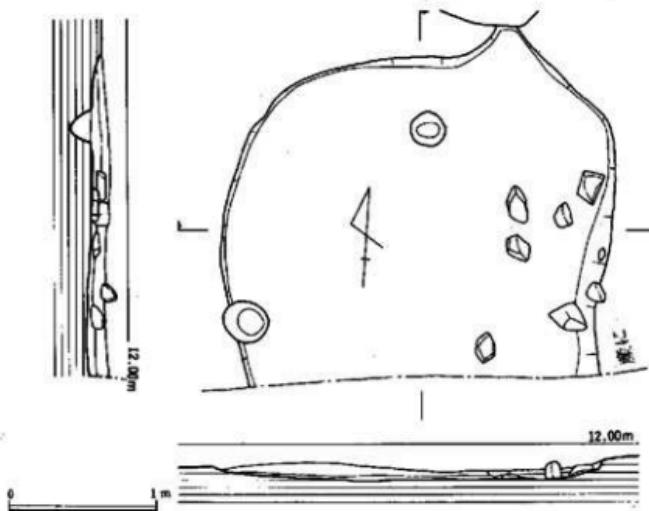


Fig. 55 7号土塙 (1/40)

9号土塙 (Fig. 54)

1号掘立柱建物の柱穴No.1を切っている。柱の抜き取り跡状を呈している。平面形は不整楕円形である。断面形は逆梯形状であるが、片側が二段になっている。覆土は暗茶褐色粘質土である。遺物は青磁碗片がある。

10号土塙 (Fig. 54)

2号掘立柱建物の柱穴No.1を切っている。平面形は不整楕丸長方形を呈し、長さ1.34m、幅1.02m、深さ32cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土を主体としている。遺物は白磁碗と青磁碗の底部片が出土している。この上層も柱の抜き取り跡状を呈している。主軸はN31°Eである。

11号土塙 (Fig. 54)

2号掘立柱建物の柱穴のNo.3を切っている。平面形は不整楕丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。長さ1.02m、幅0.72m、深さ34cmを測る。暗茶褐色粘質土の覆土を主体とする。主軸はN72°Wである。

12~15号土塙 (Fig. 50)

大形のpitであるため土壙としたが、13号土壙は柱穴跡状の痕跡を有している。14・15号土壙は3号掘立柱建物と切り合っており、3号建物自体が一度の建て替えが考えられるので、別個の建物柱穴と考えられる。12号土壙は不整楕円形を呈している。

集石遺構

2号溝の埋没後に設けられている。覆土が2号溝と同一のため掘り方等を検出することはできなかったが、上師皿や鉄釘等の出土から火葬墓であると判断した。

1号集石 (Fig. 56, PL. 33)

2号溝内西側で検出した。礫群は4cm~25cmの大円礫、角礫を利用しておらず、南北約1.6m、東西約1.2mの範囲に分布する。これらの礫群の内、北側の列状に並んだ礫は下部に礫の重なりがないことから、崩壊部分と考えられる。西側の出張状の礫にも同様なことがいえる。下層の礫群の重ねがしっかりした部分にアミをかけてみると、外側に大礫の小口面を揃えており、一辺は約70mを測る。方形の平面形を形成している。礫内部からは焼土、炭化物が出土している。又、鉄釘3本などはこの礫群の北東隅より若干はずれて出土した。礫群は火を受けたものが多い。その他出土遺物には瓦片がある。瓦等から16世紀と比定できる。

2号集石 (Fig. 56, PL. 33)

2号溝内の東側で検出した。掘り方等は不明である。長方形の平面形を呈し、一層の礫群で形成されている。礫は12~35cmの円礫や角礫を用いており、小口面を揃える。東西長80cm、南北長64cmを測る。下位からも礫は検出したが重ねた状態ではなかった。遺物は礫群中から瓦片が出土した他、礫の下層より鉄釘が出土している。

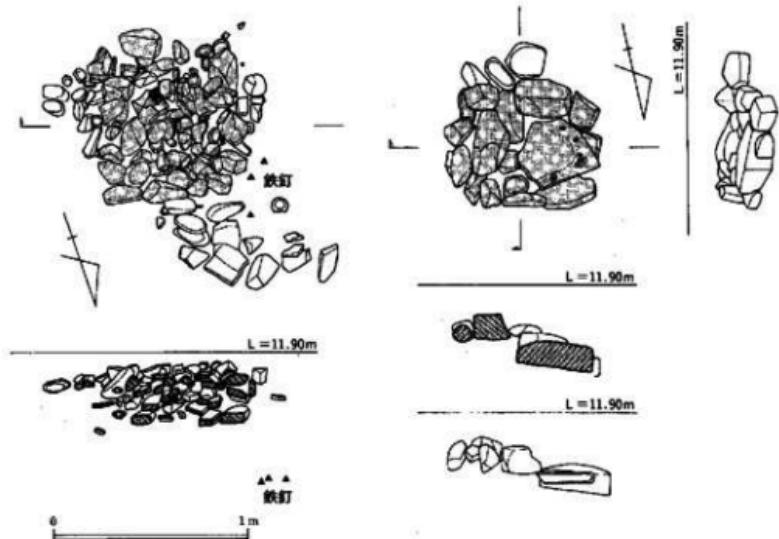


Fig. 56 1号・2号集石遺構 (1/30)

掘立柱建物

大形の掘立柱建物4棟を検出した。1号掘立柱建物は2号掘立柱建物より後出するものである。3号・4号掘立柱建物は重複しており、建て替えが行われたと考えられる。4号掘立柱建物が先行する。

1号掘立柱建物 (Fig. 57, PL. 28)

梁行3間、桁行9間の規模をもち、側柱だけの建物である。主軸方位はN87°Wである。梁行7.4m、桁行約2.18~2.19m、梁間平均約8.1尺、桁間平均約8尺を測る。柱穴掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ1.0~1.2m、幅0.8~1.2m、深さ0.7~0.9mを測る。柱根は径20~30cm、深さ0.7~1.1mを測る。掘り方覆土はやや茶系の強い黒褐色粘質土である。遺物は少なくないが、柱穴No.3・18・21から白磁、青磁片が出土している。上部からの混入品と考えるには破片数が多く、從来、奈良時代と考えていただけに、この建物の年代について再検討する必要がある。

2号掘立柱建物 (Fig. 58, PL. 34)

梁行4間、桁行5間の純柱建物である。主軸方位はN85°Eにある。梁行6.48m、桁行9.3m、梁間平均7.2尺、桁間平均約7.6尺を測る。柱穴掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ1.2~1.7m、幅0.9~1.4m、深さ0.5~0.8m、柱底径0.35~0.45mを測る。掘り方覆土は黒褐色粘質土である。

遺物は全て細片にすぎないが、中世遺物の出土はない。

3号掘立柱建物 (Fig. 58, PL. 34)

4号掘立柱建物と重複する。梁行3間、桁行2間以上の総柱建物である。元来の桁行は2号建物同様に4間幅が考えられる。梁行4.2m、桁行6.42m、梁間平均7尺、桁間平均約3.1尺である。主軸方位はN 6°Wである。柱穴掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ1.1~1.2m、深さ0.4~0.9m、柱根径0.35~0.4mを測る。覆土は黒褐色粘質土に黄褐色土が混入する。遺物は全て細片であるが、中世遺物は混入しない。

4号掘立柱建物 (Fig. 58, PL. 34)

3号掘立柱建物より先行するが、3号掘立柱建物と重複しているため一部掘り方を共有している。梁行3間、桁行2間以上の総柱建物である。主軸方位はN 6°Wである。梁行2.1m、桁行7.02m、梁間平均7尺、桁間平均7.8尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ1.0~1.6m、深さ0.6m、柱根径は0.3~0.4mを測る。残存状態は非常に悪い。

Tab.5 第82次調査掘立柱建物一覧表

(単位: cm)

規格	方向	行		行		方位	床面積 (m ²)	備考
		実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間寸法(尺)			
1号	9×3	東西	218.8(72.9) 217.8(72.6)	7.8+8.0+8.7+8.4+8.0+8.5 8.8+7.8+6.8+9.6+8.7+9.2+7.84	732(24.4) 730(24.3)	8.2+8+8.2 8.6+7.7+8	N 2°30'W	159.58
2号	4×3	東西	930(31)	7.7+7.8+7.8+7.7	648(21.6)	7.2+7.2+7.2	N 6°30'W	60.26
3号	3×2	南北	642(21.4)	7.6+6.2+7.6	420(14)	7+7	N 6°W	26.96
4号	3×1	南北	702(23.4)	7.5+7.5+7.5	210(7)	7	N 6°W	14.742

溝

1号溝 (Fig. 50, PL. 36)

第32次調査の1号溝と接続するが、南側に向って溝幅が狭くなり、底が浅くなる。断面形は箱型研磨で、現存長は6mである。覆土は暗茶褐色粘質土を主体としている。遺物は同安窯系、龍泉窯系の青磁碗が出土している。又、表層からは18世紀の伊万里碗片がある。

2号溝 (Fig. 59, PL. 36)

溝として機能の可否についてはやや疑問がある。現存長は11.4m、最大幅2.8m、深さ0.8mを測る。溝底は一定であるが、この溝の北西側約2.5mほどは幅が0.3~0.8m、深さ30~50cmの浅い溝となっており、深い方への注ぎ口の役割をもっている。元来、排水や濾などの溝機能ではなく、溜め水的な機能をもっていたものと思われる。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とする。この溝の埋まった後に1・2号集石遺構が設けられている。遺物には白磁、青磁碗片、土師質土器、瓦質土器がある。

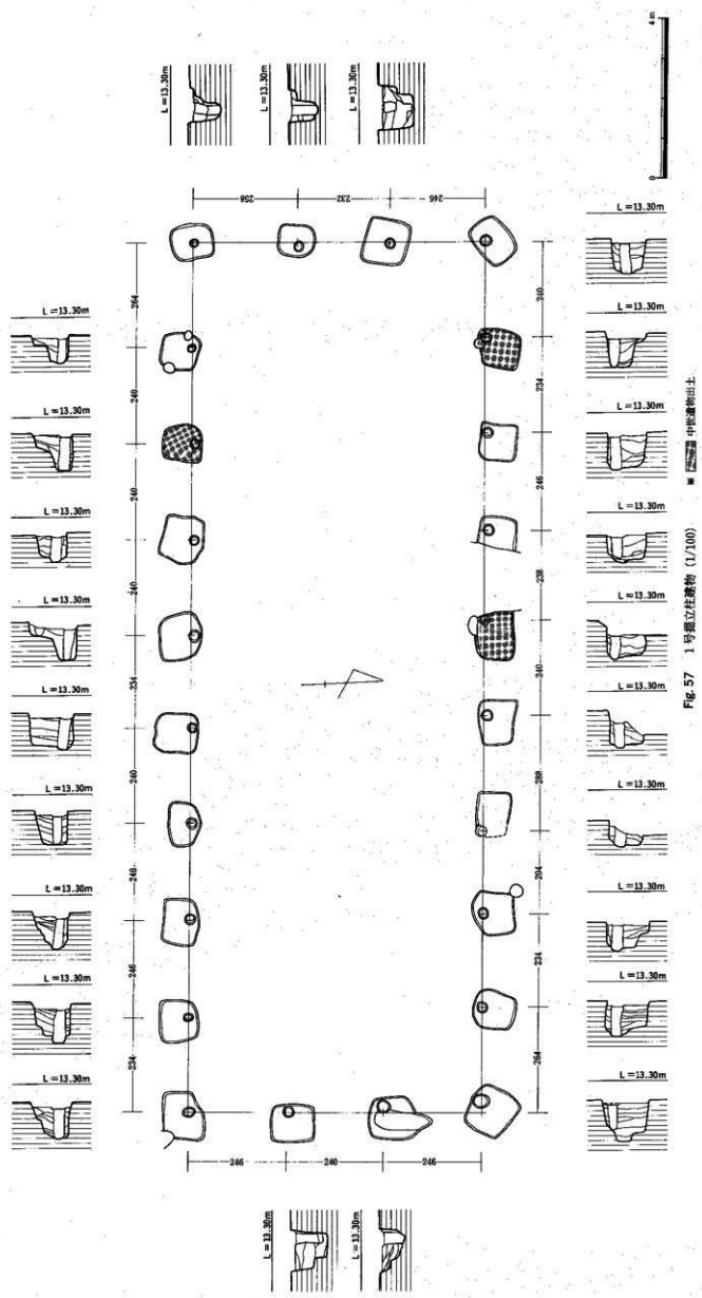
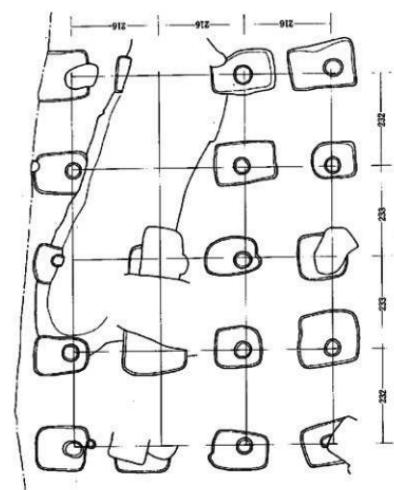
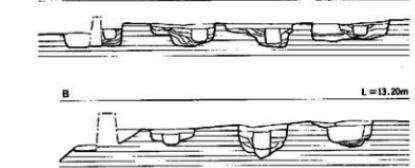
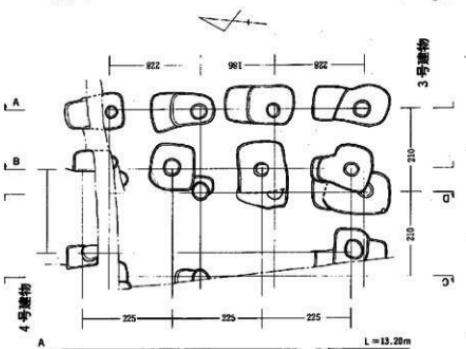
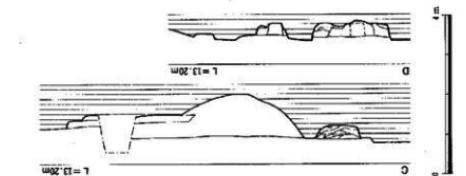
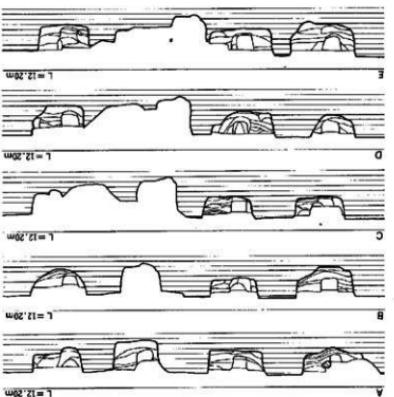


Fig. 57 1 空洞性墓室 (1/100)

Fig. 58 2号～4号船外機物 (L/100)

Fig. 58 2号～4号船外機物 (L/100)



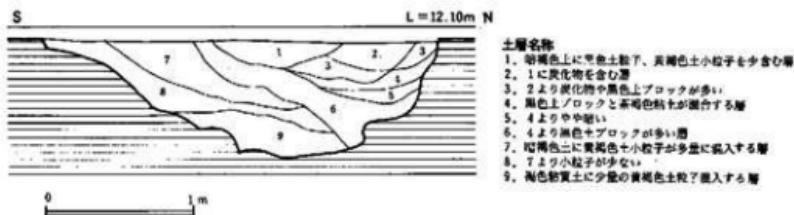


Fig. 59 2号溝土層図 (1/40)

3) 遺物各説

1号住居跡出土遺物 (Fig. 60, PL. 37)

土器

甕(1) 完形品である。口径9.8cm, 器高24.2cm, 最大胸径は中位にあって19.4cmを測る。底部は尖底で、口縁部はくの字形に外反する。外面上位はヨコ方向の粗いタタキ、下位はヘラによって下方から上位にナデあげている。内面はタテハケ調整である。胎土に砂粒を含む。暗褐色を呈する。

高壺(2) 復元径24.8cmを測る。口縁部が大きく外反する器形である。内外面にヨコハケ調整、内面にはタケ方向の暗文を施す。胎土に砂粒を含む。

壺(3) 口径10.8cmを測る。頸部が高く、ラッパ状に開く口縁部である。胎土は良好で、内外面ヨコナデ調整である。黄褐色を呈する。混入品である。

瓶(4) 把手片である。接合式で、中央部の径3.2cmを測る。上部に縱方向の溝がある。溝の長さ3.4cm、深さ2cm、幅1.5~2.5cmを測る。黄褐色を呈する。

その他(5) は大きく開いた器形の外面に、三角突帯を有した土器である。内面はヨコナデ調整である。鉢形器台と思われる。

1号土塙出土遺物 (Fig. 61, PL. 37)

瓦質土器

捏鉢(6) 口径27.8cm、現存高8cmを測る。口縁部を肥厚させる。内面は粗いヨコハケ、外面はナデ調整である。内外面に炭素を吸着させる。胎土に砂粒を含む。

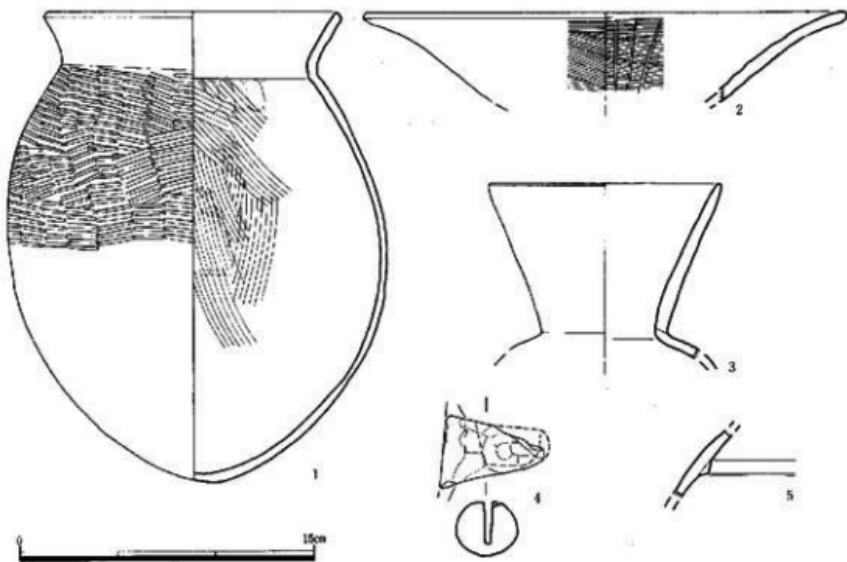


Fig. 60 1号住居跡出土遺物 (1/3)

2号土塙出土遺物 (Fig. 61)

白磁

碗 (7, 8) 7は底部で径6.5cmを測る。内底は輪状の搔き取を行う。8は大形の玉縁口縁である。釉、胎土ともに灰白色を呈する。白磁片が多い。

その他、龍泉窯系の青磁碗片、陶器片がある。

4号土塙出土遺物 (Fig. 61, PL. 38)

土師器

皿 (9) 口径7.5cm、高さ1.0cmを測る。糸切り底で、胎土に微砂を含み、黄褐色を呈する。1/3片である。

白磁

碗 (10) 口径15.5cmを測る。大きな玉縁を有している。外面には粗いタテハケを施す。灰白色釉を外面上位まで施す。胎土は灰色である。

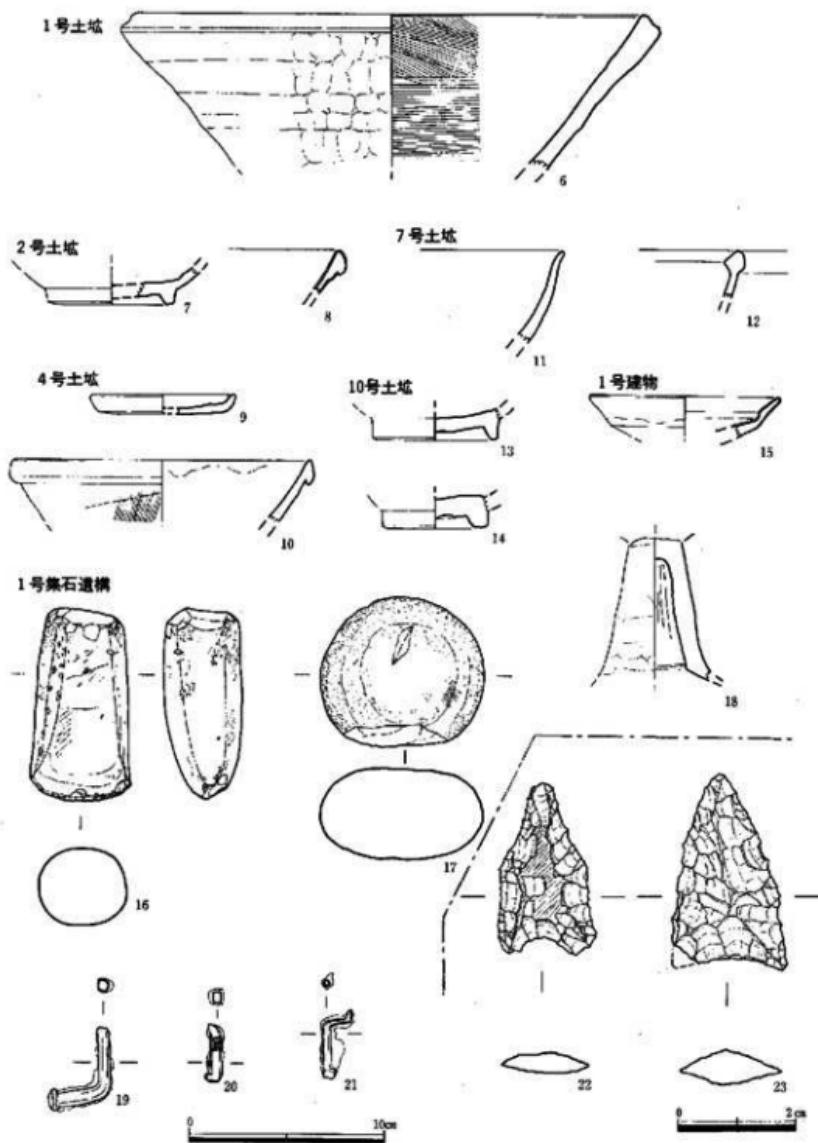


Fig. 61 土壤、溝、集石遺構出土遺物 (1/3, 1/1)

その他、滑石製白玉1個、白磁皿、青磁片がある。

5号土塙出土遺物

龍泉窯系青磁碗片、白磁碗、玉縁口縁片などがある。

7号土塙出土遺物 (Fig. 61)

青 磁

碗 (11) 端反りの口縁部を有する。外面に水引き痕が残る。胎土は茶灰色を呈し、緑茶色の釉を施す。

陶 器

鉢 (12) 玉縁の口縁部で、内側に稜を有している。内面には緑灰色釉を施し、外面は露胎である。胎土は灰色を呈する。

その他、白磁碗、皿片がある。

9号土塙出土遺物

白磁皿片、青磁碗片2がある。又、刀子状の鉄製品がある。

10号土塙出土遺物 (Fig. 61)

白 磁

碗 (13) 底径6.5cmを測る。内面には乳白色釉を施し、内底は輪状の攝取りを行う。胎土は白色である。

その他、碗片1、皿片1がある。

青 磁

碗 (14) 同安窯系である。底径5.4cmを測る。緑灰色釉を施し、細かい貫入がある。胎土は灰黄色で、焼成は甘い。

1号掘立柱建物出土遺物 (Fig. 61)

白 磁

皿 (15) 柱穴No.2から出土。1/4片である。口径10cmを測る。緑味を帯びた灰色釉を外面上位に施す。貫入は少ない。

その他、柱穴No.3からは白磁片、柱穴No.18からは白磁片、土師皿糸切り底片、柱穴No.21からは青磁片2が出土している。

石 器

石錠(23) サスカイト製である。現存長3.1cm、最大幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。調整は部分的に階段状剥離になっており、丁寧ではない。

1号集石遺構出土遺物 (Fig. 61, PL. 37・38)

石 器

石斧(16) 現存長10cm、最大幅4.8cm、厚さ4.5~4.6cmを測る。刃部はバチ形に開き、端部に使用痕がある。基部先端は敲打による調整であるが、他は研磨を施す。側面に敲打痕を残している。玄武岩製である。

敲打具(17) 径7.8cmの偏平円錐を用いている。厚さは4.6cmを測る。側辺に敲打痕が残る。裏面の中央には敲打による凹みがある。玄武岩製であるが、二次的に火を受けている。

鉄製品

釘(19, 20) 釘は計2個出土した。19は下部が2段に折れ曲がっており、現存長4.8cmを測る。下位の断面形は円形で、釘頭は方形を呈している。20の断面形は長方形を呈し、頭部は方形である。現存高3cmを測る。

瓦 類

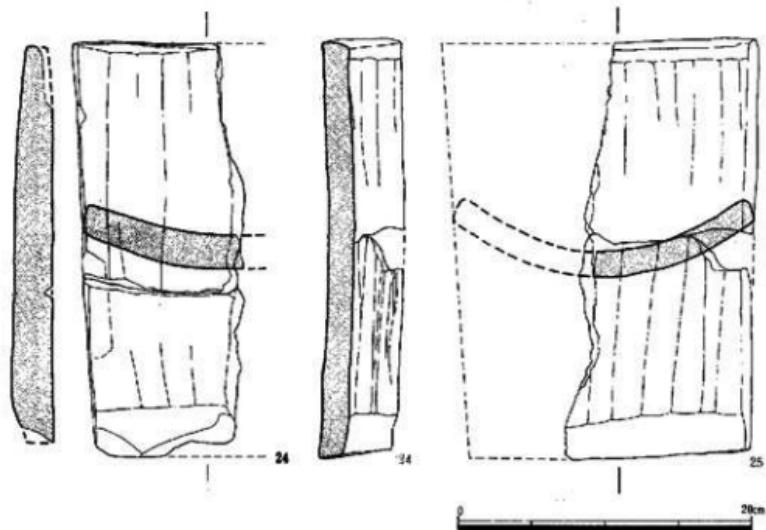


Fig. 62 1号集石遺構出土遺物 (1/4)

丸瓦11点、平瓦29点、瓦当瓦1点、他鬼瓦片が出土した。

平瓦(24, 25) 現存長は24が28.3cm, 25が28.4cm、厚さは24が2.4cm, 25が1.8cmを測る。谷部はタテ方向のヘラケズリを施す。後端部はヘラにて斜目にケズリ落とす。24は幅3.3cm, 25は2.2~2.8cmを測る。25の弧深は推定で3.6cmを測る。胎土に砂粒を多く含む。黄褐色を呈し、炭素の吸着はない。背部に離れ砂の付着がみられる。

軒平瓦 中心部の破片である。瓦当復元幅は約23cmを測り、外縁は深い。中心飾りは宝珠形で、左右に3回転の唐草文を配するものと思われる。瓦当面は黒灰色を呈する。第19次調査2号溝で出土した軒平瓦I類と同型と思われる。

鬼瓦 破片であるが、鼻の部分である。暗灰色を呈する。軒平瓦I類に伴うものである。

その他、土師器高壺(18)が出土している。

1号溝出土遺物 (Fig. 63, PL. 38)

青磁

碗(26, 27) 26は同安窯系、27は龍泉窯系である。26は高台径5.4cm、27の高台径6.4cm、残存器高6.0cmを測る。26は外面にタテ方向の櫛目を、内面には描文と櫛描文を施す。27の外面はヘラ片彫りによる蓮弁文を、内面には雲文、花文を施す。26は淡灰緑色釉、27は緑青色釉で、27は高台内側まで厚目を施す。

その他、染付(28)片がある。伊万里系の、クラウンカ茶碗である。これは溝表層からの出土である。かつて、庚申道と云う小道が存在し、位置からみてこの溝と重複している。溝の埋没後、多少の凹みが道路として使用されたものであろうか？

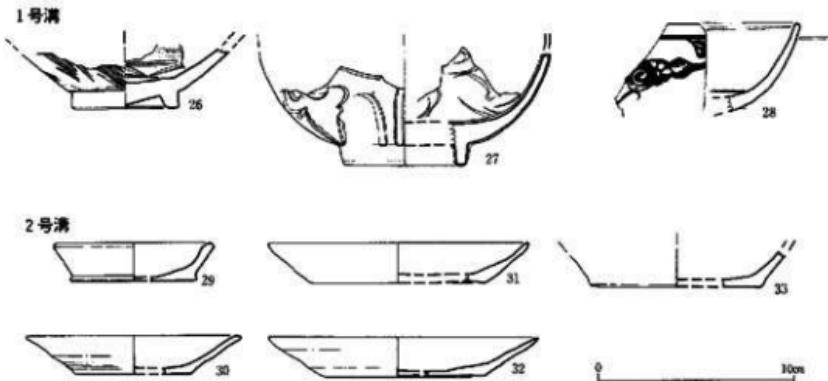


Fig. 63 1号・2号溝出土遺物 (1/3)

2号溝出土遺物 (Fig. 63, PL. 37・38)

土師器

皿(29) 口径8.0cm, 器高2.0cm, 底径6.4cmを測る。糸切り底で、体部内外面はヨコナデ調整である。器壁は厚い、胎土に細砂粒を含み、黄褐色を呈する。

壺(30~33) 全て糸切り底である。底部と口径比が大きい。大、小ある。小(30)は口径10.0cm, 器高2.0cm, 底径5.8cmを測る。大(31~33)は推定口径13.4~13.8cm, 器高2.0~2.1cm, 底径8.4~9.0cmを測る。体部はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み、31~33は褐色、又は黄褐色を呈する。

白磁

碗(34~38) 34・35は端反りの口縁部を有す。34の口径17.2cm, 35の口径17.8cmを測る。34の内面の上位から下位に圓線を施し、その内側に櫛描文を施す。釉は34・35が灰白色の透明釉で、34は外面中位に釉垂れがみられる。36は高台径5.7cm, 37は高台径6.7cmを測る。37は内底見込に沈線を有し、玉縁口縁である。38は高台が高く、釉は高台内側まで施す。36は乳白色、37は灰色色、38は緑味色帯びた灰色釉である。

青磁

碗(39~41) 龍泉窯系である。40は外面に稿蓮弁が施される。39, 40は高台外面まで釉を施し、41は豊付と外面の一部を搔き取っている。釉は39・40が青緑色、41が緑灰色である。

陶器

擂鉢(42・46) 備前糸の破片である。46の口縁部は端部をつまみ出し、外面が帯状の口縁部を形成する。内外面はヨコナデ調整。内面は3条以上の条痕を施す。胎土は砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。備前IV期古式に相当する。

42は底径13.8cmを測る。内外面ヨコナデ調整。内面には7条の条痕を下から上へ施す。外部下位にわずかにヨコ方向のヘラケズリを施す。胎土に砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。

瓦質土器

捏鉢(43) 口縁部外面に粘土を貼付けて、小さなL字状口縁部を形成する。内外面はヨコハケ調整、口縁部はヨコハケ調整である。胎土に砂粒を多く含み、黒灰色を呈する。いぶしが認められる。

土師質器

鍋(44, 45) 44は口径28.2cm, 現存高10.4cm, 45は口径31.8cmを測る。口縁部は肥厚し、体部との境は内面に稜を有している。内面はヨコハケ調整、外面はナデ調整である。外面は、口縁部付近まで擦の付着がみられる。いずれも胎土に砂粒を含み、44は黄褐色、45は茶褐色を呈する。

その他5個体分が出土した。

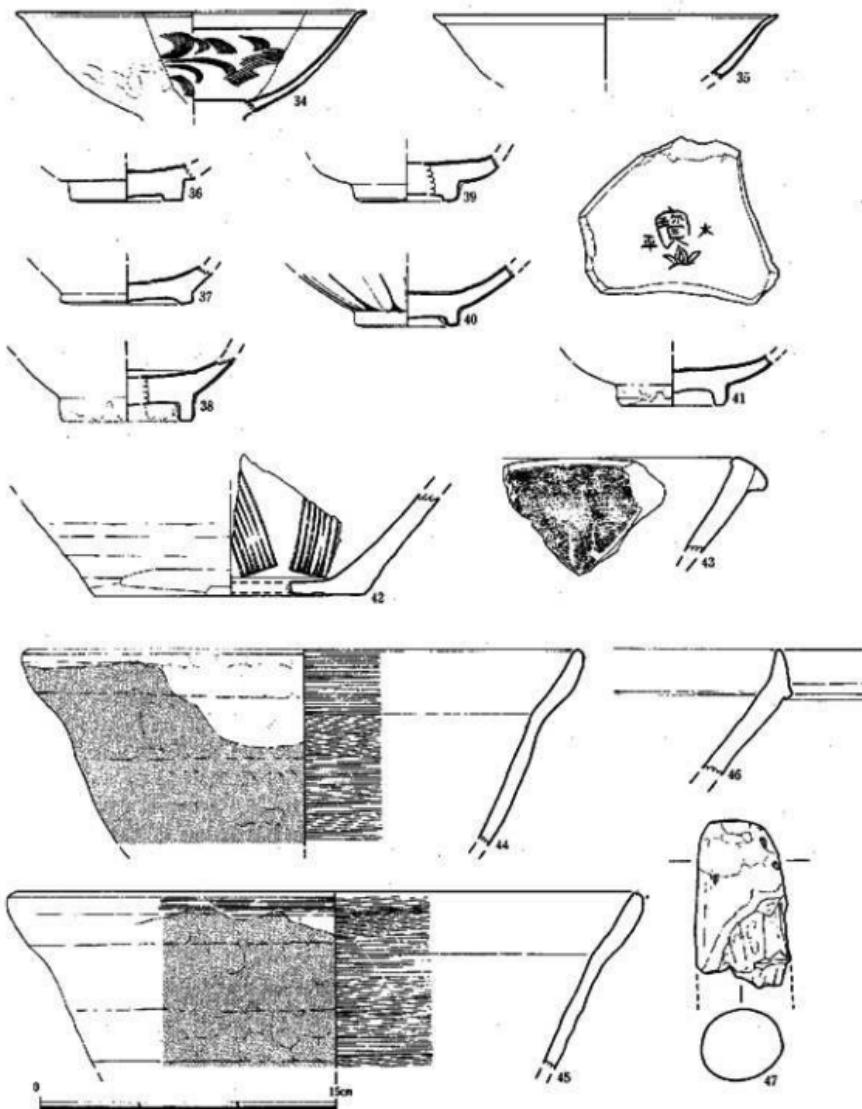


Fig. 64 2号溝出土遺物 (1/3)

土製品

五徳(47) 円柱状を呈し、断面形は橢円形である。現存長8.6cm、径3.6×4.2cmを測る。全体に丁寧なナデ調整で、端部は平坦に仕上げる。胎土に砂粒を含み、淡黄褐色を呈する。太宰府史跡、五条遺跡では製鉄関係遺物として報告されている。
註1

4) 小 結

第82次調査は、西北側の第32次調査、西側の第29次・第55次・第56次調査と密接に関係する遺跡である。時代は古墳時代初頭～16世紀に及ぶもので、遺物は18世紀まで出土する。

I期は住居跡である。片側にベッドを有した小形の住居跡で、斐形土器や高壺の器形から古墳時代初頭—Ia期に属するものであろう。
註2

II期は2号・3号・4号掘立柱建物が属する。これらの建物は全て総柱建物であり、倉庫と考えられる。3号・4号建物は建て替えによるもので、時期差は余り無いであろう。主軸方位は2号建物がN 6°30'W、3号建物がN 6°W、4号建物がN 6°Wにある。第29・55次調査検出建物の主軸方位は、1号建物がN 8°W、2号建物がN 6°Wである。又、第56次調査検出の1号建物の主軸方位はN 1°30'W、2号建物はN 4°Wである。若干の誤差はあるが、建物配置図(Fig. 65)でみるとかぎり、第82次調査2号建物、3号建物、第29・55次調査の1号建物は主軸を同一にする。又、第82次調査の4号建物、第29・55次調査の2号建物と第56次調査1号建物の主軸方位は一致する。これらの建物について時期は明確ではないが、第55次調査の2号建物柱穴No.12から検出した高壺が手懸りとなる。この高壺は口径14cmを測り、器高が浅く、体部が開く器形である。太宰府史跡SX2336などに伴っており、7世紀後半～8世紀の時期が考えられる。これらの建物群は正倉と考えるにふさわしい規模を有している。
註3

III期は1号掘立柱建物である。主軸方位をN 2°30'Wにおいており、2号・3号建物とは極端に方向がずれている。この建物の柱穴No.2・3・18・21からは土師皿や白磁、青磁片が出土している。土師皿は糸切り底である。これらの遺物は12世紀後半～13世紀と前後する時期と考えられる。周辺では12世紀後半～13世紀の遺構が多く存在しており、混入とも考えられるが、破片にしろ遺物量が多いことから、建物の年代に懸るものと思われる。この時期はまだ武家政権成立前夜であり、律令政権の影響は充分に残っていたと思われる。一方、郡衙等の地方官衙は、7世紀後半から8世紀初頭に成立し、10世紀頃には遺構が判然となくなると云われる。又、筑後国府は二遷し、横道遺跡(横道国府)の廃絶は仁治二年(1241)以降の13世紀代に求められている。当時の郡司層は地方豪族が任命されており、それは郡衙の建物構造、配置とともに影響を与えていたと思われる。よって地方官衙が10世紀頃を境として遺構が判然としなくなることについては「奈良時代に典型的に見られた整然としたスタイルが……在地の実情に即した姿

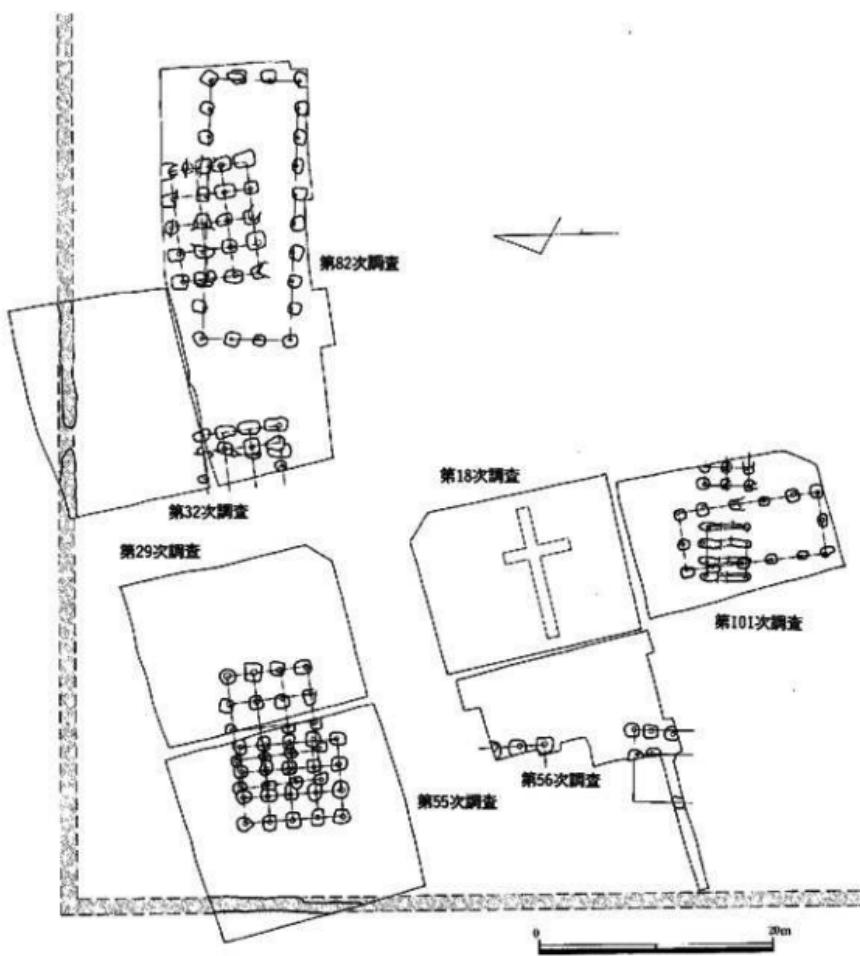


Fig. 65 据立柱建物配置図 (1/500)

に転化したことを示している」という考え方もあるので、郡衙成立当初からの実情を踏まえると、III期の1号建物が官衙としての延長線上にあることは否定できないだろう。この建物に併行する建物としては第56次調査の2号建物がある。方位はほぼ同一と考えて良いであろう。

そのIII期に属するものとして、2～5、7・9～11号土塙がある。IV期は1号・2号溝、1

号・2号集石遺構、1号土壤である。1号溝上層から出土した伊万里クラウンカ茶碗は、溝が廃絶後、近年まで道路として使用されていた伝承が残っている。1号溝出土遺物の内、龍泉窯系の碗は口縁部外面に雷文を配しており、15世紀初頭の時期が考えられるが、溝の時期比定になり得ない。

2号溝の時期を決める遺物としては土師器皿、壺、青磁碗（39、41）白磁碗（28）がある。青磁碗は外面に退化した蓮弁を施した蓮子碗である。壺は体部が大きく開き、底径と口径の比が大きい。^{註5}太宰府史跡第67次調査の黒灰色土層出土の壺は口径12.9～13.8cm、器高2.4～3.2cm、底径7.6～7.9cmを測り、底径と口径比は大きくなる。黒色土層出土の壺の中には口径11.5cm、底径5cm、器高2.5cmを測り、底径の小さい器形が含まれる。2号溝の壺は器高が、^{註6}太宰府史跡第67次調査III期の土師器壺や白岩西遺跡IV・V類に比べると非常に低いが、器形より同時性を示すものと思われる。太宰府史跡第67次調査の黒灰色土層・黒色土層及び白岩西遺跡IV類は16世紀初頭～中頃に比されており、2号溝は16世紀前半頃と考えられよう。

1号・2号集石遺構は第19次調査出土と同じ軒平瓦が出土しており、16世紀前半～中頃の時期が考えられよう。

註1 福岡県教育委員会 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告8集」 1978

註2 柳田康男 「二・三世紀の土器と鏡について」 森 貞次郎 古稀記念論文集 1982

註3 松村一良 「筑後國府の調査」 古代文化 第35巻第7号 1983

註4 九州歴史資料館 「太宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報」 1981

註5 山中敏史 「国衛、郡衛」 太宰府の歴史3 1984

註6 北九州市教育文化事業団 「白岩西遺跡」 北九州市埋蔵文化財調査報告書第43集 1985

註7 福岡市教育委員会 「有田、小田部第4集」 1983

5. 第83次調査

1) 調査地区の地形と概要

当該地は、福岡市早良区有田1丁目127-3番地に所在し、調査対象面積は387m²である。

有田地区の台地は北西、北東方向から浅い谷が深く切り込み、台地平坦地は約30m四方に限られる。この周辺の発掘調査は進んでおり、弥生時代から中世までの遺構を検出している。当該地はこの平坦地の北東側にあり、北方向からの浅い谷の谷頭に接している。発掘調査は賃貸住宅建設に伴うもので、期間は昭和58年8月24日～11月11日まで実施した。又、当該地の周囲が住宅に囲まれているため、残土の処理方法が大きな問題であったが、原因者（施主）との協議の結果、全ての排土を調査区外へ持ち出し、投棄することになった。地目は畠地であるが、永年使用されておらず、荒地化していた。標高は11.7mを測り、道路面と同高を示すが、調査区の東側は一段高くなっている、約90cmの比高差がある。区画整理時の造成状態を示すものである。

当該地の周辺では第6次・第29次・第61次・第70次調査を実施しており、古墳時代から中世末の遺構を検出しているが、特に中世の濠は集中して検出できる。第70次調査は当該地の北約50mに、第61次調査は約20m西に位置し、いずれも当該地方向への中世濠を検出している。表土は耕作土であるが、東側の一段高い部分では約20cmの深さ、その他は30～50cmの深さを測る。遺構面は東側がローム層、他は八女粘土の茶褐色粘質土である。一段高い東側では区画整理のため削平を受け遺構は存在しないが、低い部分では中世の遺構が存在する。これは、中世遺構が浅い谷頭内に存在したためであろう。

遺構は中世の土壤3、井戸1基、溝2条、道路状遺構1条、近世排水溝1条を検出した。遺物には中国青磁、白磁、李朝青磁、白磁、土師器皿、坏、土師質土器、瓦質土器、瓦、石臼、石鍋、板碑、石斧等を検出した。

2) 遺構各説

遺構は全て中世後半期に属しており、從来周辺で検出してきた濠や矩形の郭状遺構と密接につながっている。特に1号・2号溝は北側40mに在る第70次調査の1号・2号溝に接続するものと考えて良いだろう。遺物からみる限り、各遺構に時期差は無く、同時性を示している。

土 壤

1～3号土壤を検出した。3号土壤は井戸と判明したため欠番とするが、3号溝と称したものが大形土壤と考えられるので、これを3号土壤としたい。

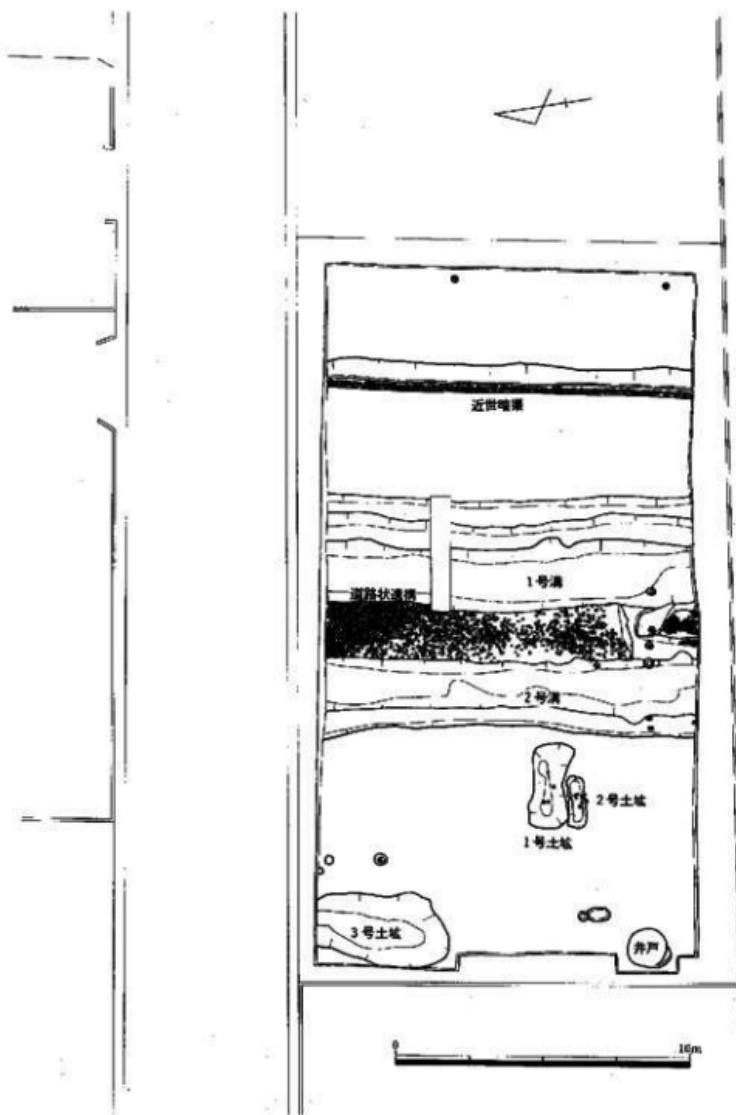


Fig. 66 第83次調査遺構配置図 (1/200)

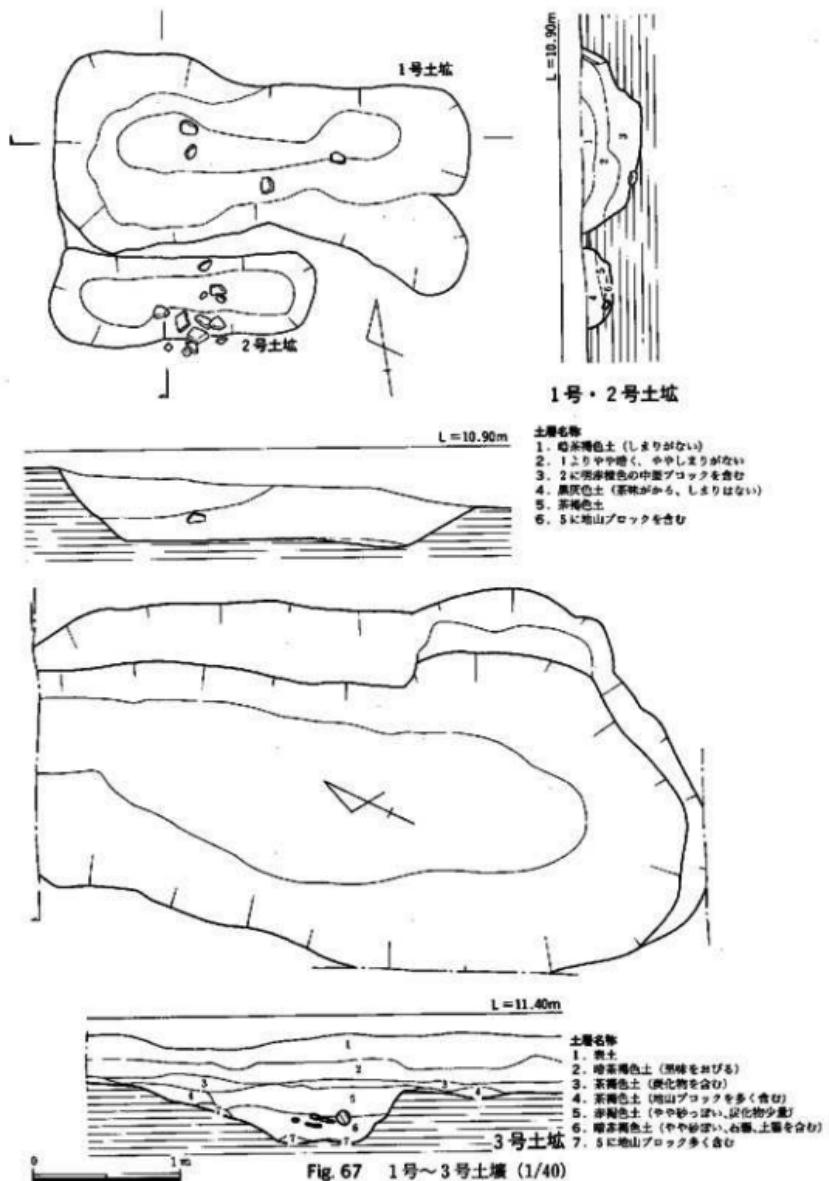


Fig. 67 1号～3号土壤 (1/40)

1号土塙 (Fig. 67, PL. 48)

2号土塙と接しており、一体の施設と思われるが、機能は不明。主軸は東西方向で、不整長方形形状を呈し、断面は逆梯形である。最大長2.84m、幅0.94~1.37m、深さ0.41mを測る。覆土は暗茶褐色粘質土に八女粘土のブロックを含んでいる。塙内からは礫とともに瓦片が多数出土した。

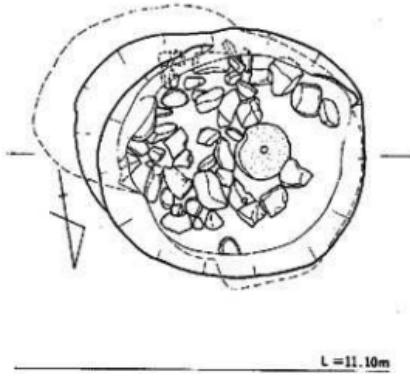
2号土塙 (Fig. 67, PL. 48)

1号土塙の南側に接しており、一体となる施設であろう。主軸は東西方向で、長さ1.2m、幅0.52~0.62m、深さ0.21mを測る。覆土は1号土塙と同様である。塙内から多数の礫と共に瓦片が出土した。

3号土塙 (Fig. 67, PL. 49)

北西隅の境界地にある。当初は溝と考えていたが、底面や土層の状態から、大形の土塙と判断した。不整の楕円形を呈し、断面はU字形である。現存長は4.5m、幅は1.6m~2.6m、深さ50cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土を主体としている。遺物は土師器皿、壺、土師質土器鉢、瓦質土器鼎、丸瓦、平瓦が出土している。

その他、明の染付碗片が、1点出土している。



井 戸 (Fig. 68, PL. 47)

当初3号土塙と呼称していたが、井戸と判明したため変更する。素掘りの井戸である。井戸上端は底面の平面形は不整円形を呈す。上端部は長径1.5m、短径1.28m、底面径は長径1.2m、短径1.1mを測る。井戸壁は傾斜をもっているが、底面から約0.7cmのところに吃水線があるため、壁が深くえりれている。底面は八女粘土下位の暗灰色微砂質土に達している。この層は湧水が著しいため、壁の崩壊も、著しい。更に湧水によって砂土を吹きあげ、水質汚濁につなが

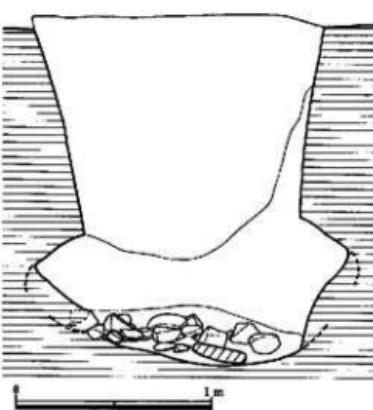


Fig. 68 井戸実測図 (1/30)

る。よって、湧水部分のえぐれた部分はもとより、井戸下位の周壁には粘土を貼り付け、崩壊を防ぐようT工し、更に井戸底には多数の礫を約3~4段に積み、粉塵の立つのを防いでいる。図に示している礫群は大部分を撤去したため下層の1~2段に過ぎない。約30cmの厚さである。この礫の最下部には石臼が2個用いられている。井戸内底に用いられるこの時期の例では、第74次調査で2例、第35次調査、第69次調査に各1例ある。井戸壁に用いたものは第46次調査、第44次調査に各1例ある。井戸祭祀に係るものであろうか。民俗例等を検討したい。

遺物は明青磁碗、李朝青磁碗、瓦質土器擂鉢、鼎、軒平瓦、粉挽臼、茶臼、敲石状石器がある。

溝・道路状遺構 (Fig. 69, 70, PL. 40~46)

2条の溝（濠）は南北方向に平行して走っており、その中央に道路状-土塁状-の遺構が存在している。特に道路状遺構は溝底に隆起した状態を示しており、幅広い溝底の構造物としての觀が強く、2状の溝と分けて考えることはできない。中央の道路状遺構を挟んで東側が1号溝で、幅広く、深い、西側が浅い2号溝である。土層図で観察する限り、1号・2号溝に先後の切り合い関係はなく、同時期に機能したものである。溝及び土堤状遺構の現存長は13m、これらを全て含んだ溝の幅は7.7~8.3mを測る。溝は大まかに二段掘り状を呈している。土層観察によれば、少くとも3度の修復利用がみとめられる。最終的には完全に埋没しきらない内に、アミ日で示すように区画整理以前まで農道として利用されている。以下に各溝、道路状遺構（土塁状）について述べ、再度、三者の関係をまとめたいと思う。

道路状遺構 (Fig. 72, PL. 41, 44, 46)

東側、西側の2条の溝はこの道路状遺構と一体をなしている。溝底は流水跡を残しているから、道路側溝的な状況をも示している。この遺構はI~III期に亘って3回の修復が行われているが、最終的には完全に埋没しない内に、近世・現代の道路として利用されるため、III期の遺構は破損を受けている。I期は地山を削り出したもので、上部幅は2m、下端幅は2.6m、高さ約30cmを測る。この時の1号・2号溝の断面形は、溝底が平坦な箱型研磨りを呈している。道路上面には長さ2~15cmの大の礫を、びっしり敷き詰めている。礫敷面は一定の高さではあるが、南端の約2.2mの長さの間が、ステップ状に一段高くなっている。この比高差は45cmである。II期は第I期の面を覆い被さる状態に、厚さ約50cmの盛土を行なう。この期の高さは、I期の南側がステップ状に1段高く作られていたが、この高い部分と同高位に作られる。上端幅は1.3m、下端幅は3.7mを測る。この時の1号・2号溝は底面がわずかに掘り込まれ、断面V字形を呈している。III期は、II期の道路状遺構の東側に扁在して、厚さ約30cmの盛土が行なわれる。そのため1号溝は下位が埋め込まれる。上面幅は推定で60cm、下端幅は100cmである。又、2

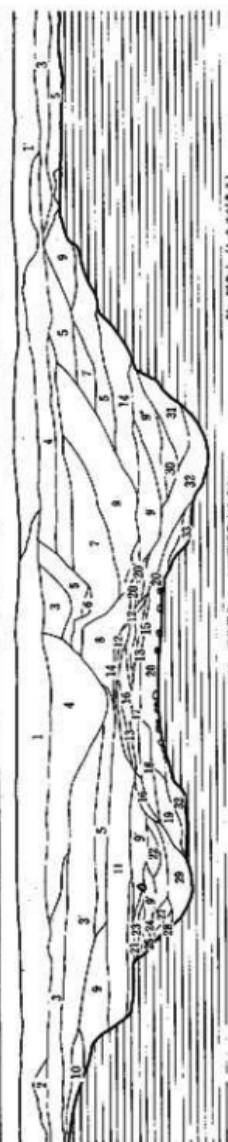
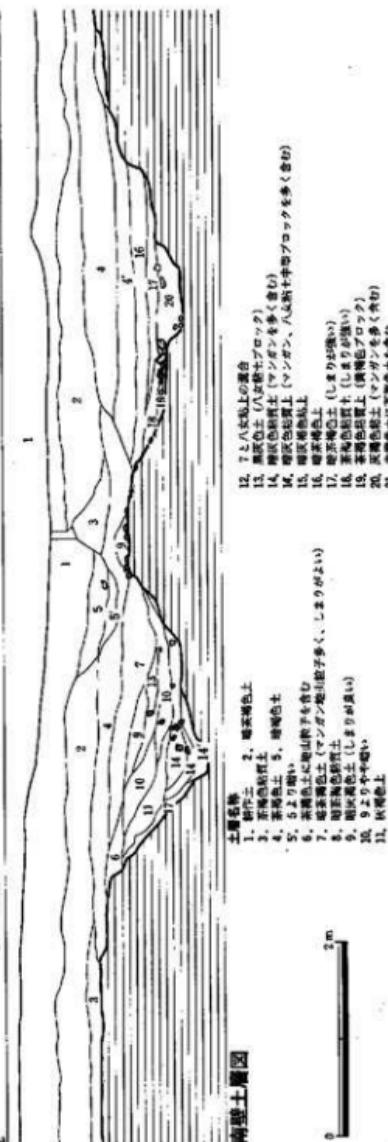


Fig. 69 1号・2号溝、道路状造構土崩図 (1/60)

北壁土質図

1. 黄褐色土 (黄褐色土と褐色土を含む) 10. 喀斯特色リームに褐色地帯を含む
1. 1より薄い 11. 5にシアンハニットのカッタードを含む
2. 褐褐色土 12. 深褐色土 (こまかく良い)
3. 切どじ土 13. ハニット (しまりが良い、表面を含む)
4. 灰褐色土 (しゃいろっぽい) 14. 喀斯特色粘土 (しまりが良い、八点折入式プロックを含む)
5. 3より厚い 15. ハニット
6. 3.2よりやや薄い 16. 深灰色土
7. 3.2よりやや厚い 17. 喀斯特色土 (オクタマンジーンを含む)
8. 喀斯特土 (シマリが良い) 18. 喀斯特色粘土に堅化を含む
9. 3に褐色地帯 (リード粒子を多く含む) 19. 18Cに含む粘土部分
10. 3より厚い 20. 喀斯特色粘土 (しまりが良く、堅化を含む)
11. 2より薄い 21. 喀斯特土 (マングンを含む)

**南壁土質図**

1. 桐生土 12. 7.2ハニット上の覆台
2. 喀斯特色土 13. 喀斯特色土 (ハニットプロック)
3. 喀斯特色粘土 14. 喀斯特色粘土 (マングン、八点折入式プロックを多く含む)
4. 喀斯特色土 15. 喀斯特色粘土
5. 5より薄い 16. 喀斯特色粘土
6. 喀斯特色土 17. 喀斯特色土 (しまりが悪い)
7. 喀斯特色粘土 (マングン地盤子多く、しまりがよい)
8. 喀斯特色粘土 18. 喀斯特色粘土 (しまりが良い)
9. 喀斯特色土 (リード粒子) 19. 喀斯特色粘土 (黄褐色色)
10. 9よりやや薄い 20. 喀斯特色土 (マングンを多く含む)
11. 喀斯特土 21. 喀斯特色土 (マングンを含む)

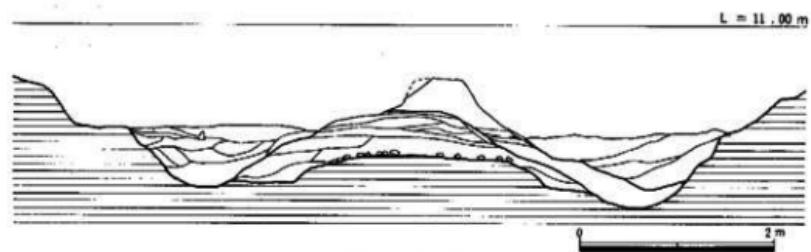


Fig. 70 土壌断面図 (1/60)

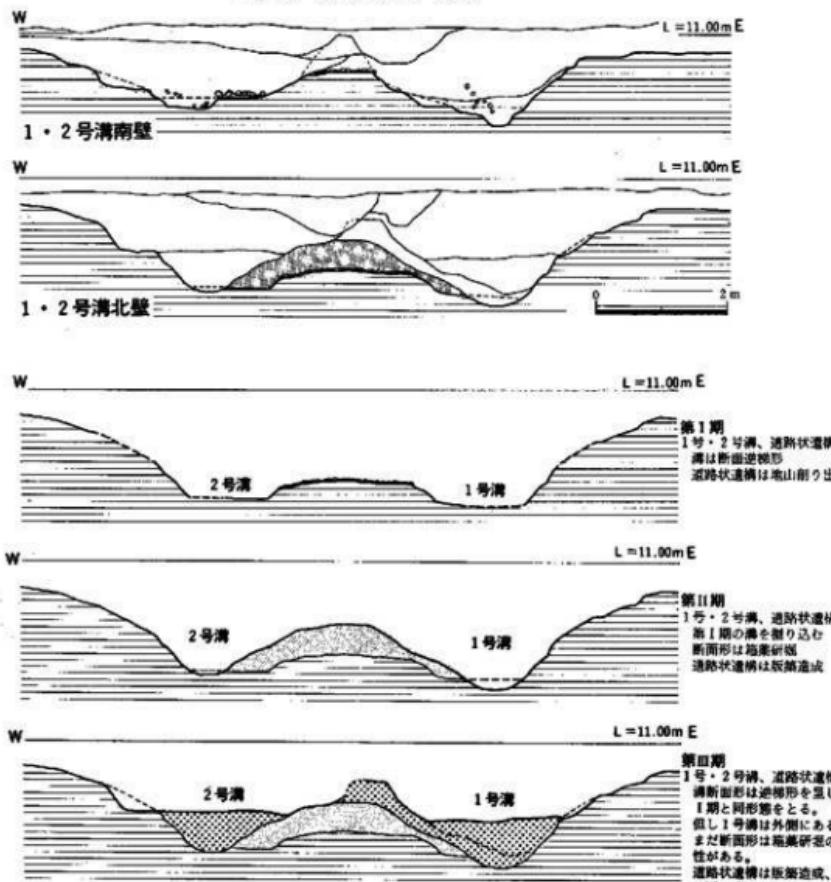
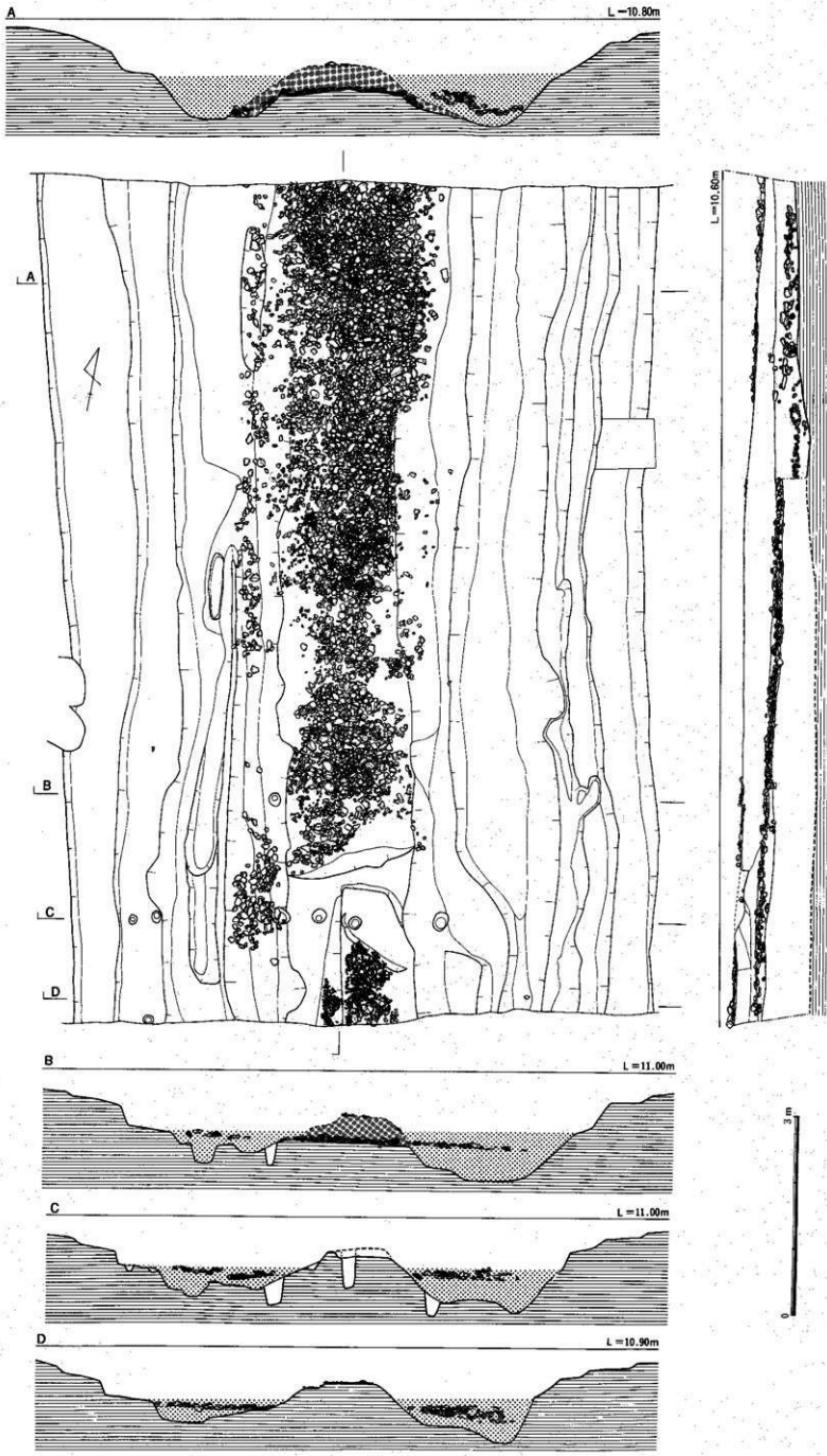


Fig. 71 溝, 道路状造構変遷図 (1/80)

Fig. 72 1号+2号断块勘探 (縮尺 1/80)



号溝は西壁を拡張し、更にII期の土壘面の一部を利用して、断面逆梯形状に作られる。この時1号溝は断面V字溝を呈し、第47、48、49層には礫が投棄され、礫面を形成している。しかし、これらの上面は水平に整形され、2号溝のIII期底面と同じ高さにある。又、1号溝の東壁を若干拡張しており、道梯形の溝と考えれば礫群は鎮圧のためとも考えられる。この期には溝及び道路状遺構を横断する状態で、柱列が存在する。柱列は6本で、径18~30cmを測る。P1とP4は土壘の両端に、P2、P3は土壘上に存在する。又、P5、P6は2号溝西側のテラス状の拡張部に存在し、直線的に並ぶ。P1とP4の間は2.5m、P1とP2の間は1.3m、P2とP4の間は1.2mを測る。その他P7、P8が存在し、P1~P6の方向に対し、直交する位置に在る。P4とP8の間は1.05m、P5とP7の間は0.95mを測る。溝、及び道路状遺構が完全に埋没しない内に、更に近世、現代まで使用された農道が存在する。そのためIII期の道路状遺構は一部が破損する。遺物はI期の礫中に多く、特に瓦は破碎され、礫として転用されている。その他に弥生時代石斧等がある。

1号溝 (Fig. 69~71, PL. 41, 43, 46)

道路状遺構を挟み、東側に位置する南北溝である。上記のとおり、三者が一体とすれば溝を計測することは無意味である。又、道路状遺構自体の規模の変化も観察できるから、当然、溝幅にも影響を与える。道路状遺構は、3度の修復利用が考えられるので、溝もそれに伴う。幅は1号溝の東側肩より、道路状遺構の東肩までを計測する。道路状遺構I期は溝幅3.8m、深さ1.5m、道路状遺構の肩からは30cmを測る。断面形は幅広い逆梯形である。II期は溝幅は4.4mを測る。I期の溝底が埋込まれるために溝断面はV字形を呈する。道路状遺構からの深さは1mを測る。III期は道路状遺構が、溝東側肩の高さに近くなるが、溝底もそれに伴い埋没する。この時点では溝底に礫群が投棄した状態で存在する。第49・50層が埋没し、上部に礫群が存在する。溝幅は4.25m、深さは東肩から1.2m、道路状遺構から1mを測る。溝断面形はU字形に近くなる。但し、礫群は第42、45、47層に存在し、上部は平坦に形成されることから、この礫群が鎮圧に利用された事も考えられる。とすれば、溝は逆梯形の断面形を呈し、その高さは2号溝III期の底面と同じになる。遺物は礫群より上部から青磁、白磁、李朝青磁、瓦片が出土し、礫下からの遺物の出土は少ない。

2号溝 (Fig. 69~71, PL. 41, 42, 44, 45)

道路状遺構を挟み、東側に位置する南北溝である。1号溝同様に、道路状遺構に3度の修復がみられるところから、溝もそれに伴う。溝幅は西肩から道路状遺構の肩までを計測する。道路状I期の深さは、西肩から1.25m、道路状遺構との比高30cm、幅3.8mを測る。溝断面は幅広い箱築研掘である。II期は幅4mを測る。底は更に掘り下げ、断面は幅広いV字形を作る。深さは道路状遺構肩から0.7m、西肩から1.3mを測る。III期には西側壁が拡張のため削り込まれ、幅約60cmのテラスを設ける。このテラスの高さに合わせて溝の下半は埋め込まれる。又、これ

と同じ高さの道路状遺構Ⅱ期の上面も約60cm 幅が利用される。この部分の第9'層、第21層の上面はタキ状に締められている。溝の断面形は逆梯形を呈する。溝西肩と道路状遺構との比高差は小さくなり、約15cm ほどである。溝上面幅は推定で4.7m、溝底幅は3.3m、深さ0.65m を測る。溝上面幅は道路状遺構が近世の道路に切られるため推定した。遺物は第III期の覆土から明の青磁、李朝の青磁が出土している。

3) 遺物各説

井戸出土遺物 (Fig. 73~75, PL. 50~53)

青 磁

碗(1~4) 1・2は明の青磁、4は李朝の青磁である。1は高台径6.9cmを測る。釉は淡緑青色を呈し、高台疊付まで厚目に施す。疊付の釉は擦り落としている。外面はヘラ彫りの深い蓮弁を施す。内底は折菊を印文する。2は高台径5.8cmを測る。釉は緑灰色で、高台内側まで厚目に施す。内外面に貫入がある。外面には線描きの蓮弁を施す。3は高台径5.5cmを測る。緑灰色の釉は、体部外面まで施す。細かい貫入がある。4は高台径5.3cmを測る。高台、及び底部の器壁は厚い。沈線状に2条巻線を巡らす。釉は灰青色で、外底まで施し、胎土は灰褐色を呈する。内底と外底に目痕が各々4ヶ所ある。

白 磁

碗(5) 李朝の白磁である。高台径6cmを測る。厚みのある輪高台である。釉はやや青味を有した灰白色で、外底まで施す。釉垂れが著しく、気泡がある。貫入は細かい。内底と疊付に各々4ヶ所の目痕がある。

瓦質土器

すべて井戸底の礫内より出土したものである。

摺鉢(6, 7, 9, 10) 直線的に開く体部を持つ。10は口径31.4cm、底部16.0cm、器高9.6cmを測るが、他は小片の為、法量は不明である。6・7は口縁部がやや肥厚しており、7は上端部がくぼむ。9・10は、口縁を内側へ折り返して玉縁を形成する。9は断面三角形、10は中くぼみした方形状を呈する。調整は内面に、6・7・9がヨコハケを施し、10が粗目のナナメハケを施す。口縁部外面は横ナデ調整で、10は口縁部下にハケ目調整を施している。内面は6・7がヨコハケ、10が粗目のナナメハケで、9は板状具によるナデ調整である。条線は6・7が6本、9が8本、10が10本である。色調は9及び6・7の内面が黄灰色を呈し、6の外面は茶褐色を呈する。2次的に火を受け、一部に煤が付着している。10は内外面共に、焼しの黒色を呈する。

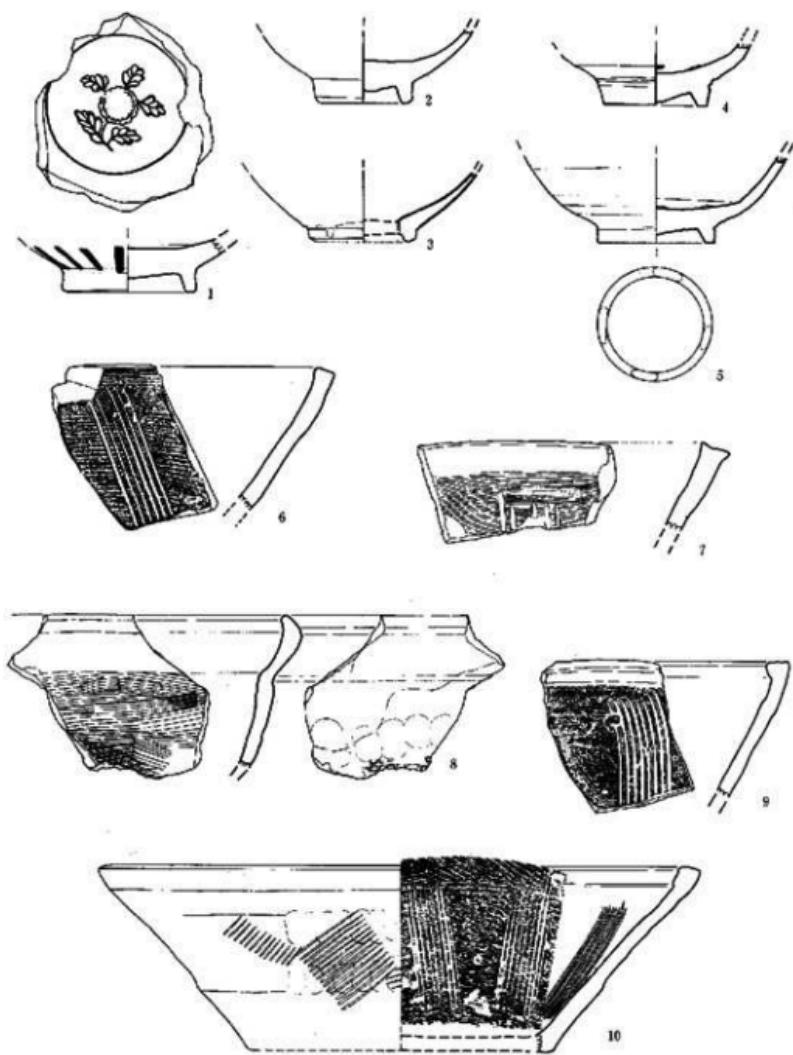


Fig. 73 井戸出土遺物 (1/3)

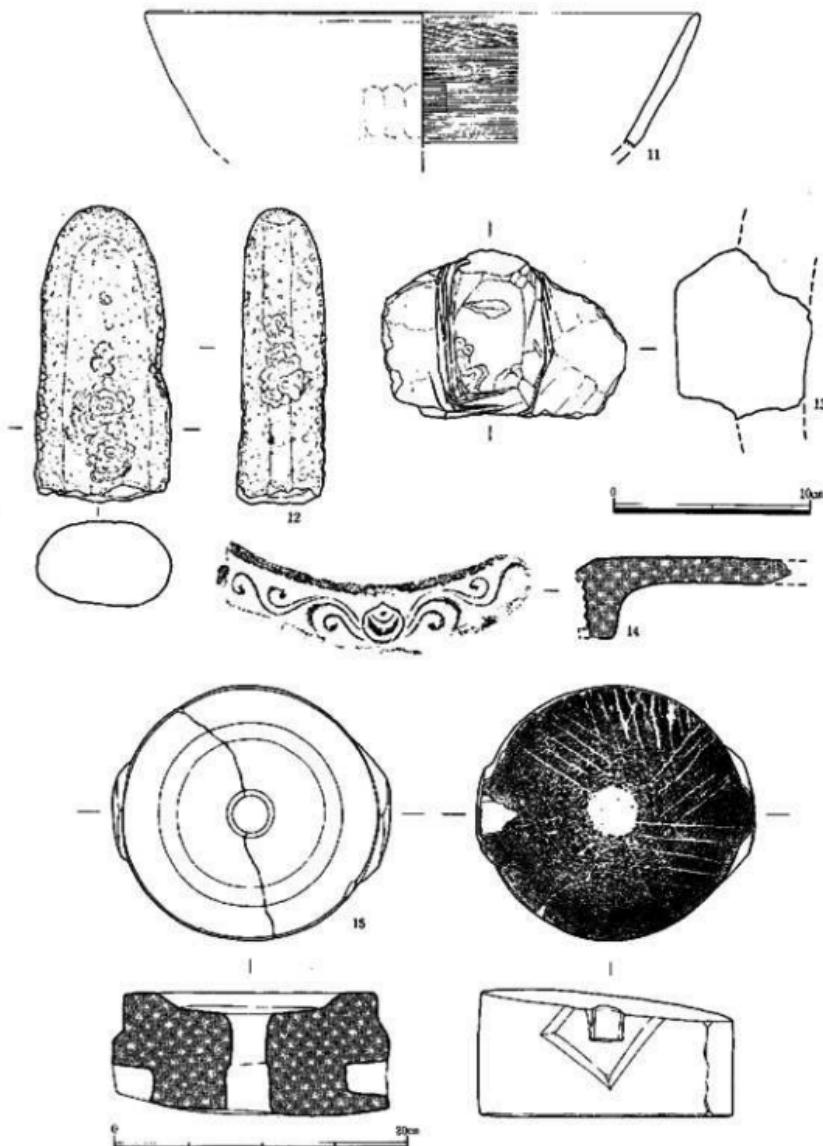


Fig. 74 井戸出土遺物 (1/3・1/4)

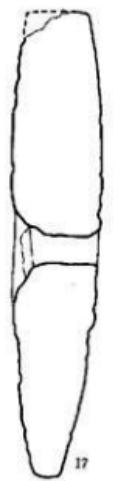
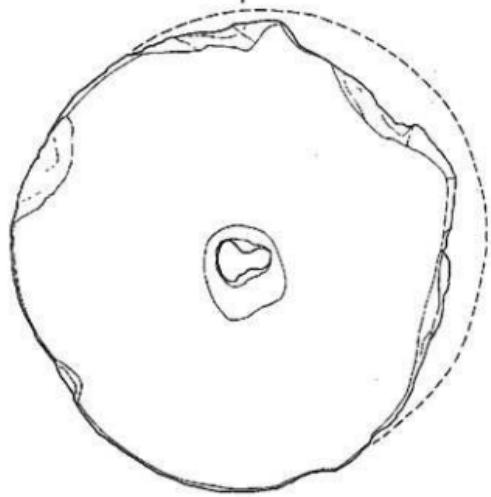
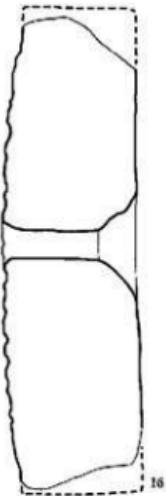
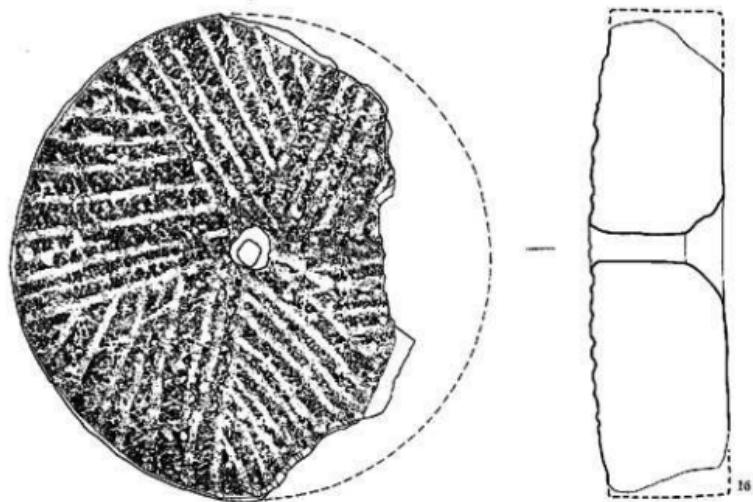


Fig. 75 井戸出土遺物 (1/4)

20cm

鼎(8) 破片の為、口徑の復元は出来ないが、現存器高8.0cmを測る。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は内窓気味に外反する。端部は更に内側へつまみ出している。調整は、口縁部ヨコナデ、外面の体部下位から底部にかけ、格子目タタキを施し、体部内面はヨコハケ調整である。内外面は灰色を呈し、外面には煤が付着している。焼成は良好である。

土師質土器

鍋(11) 復元口徑28.6cm、現存器高17.0cmを測る。体部は直線的に外上方へ開き、口縁は肥厚し、端部は平坦な面をなしている。調整は口縁部ヨコナデ。体部内面はヨコハケで、外面ナデである。体部外面に指圧痕を残す。明赤褐色を呈し、外面は火を受け黒変している。

石 器

臼(17, 18) 16は挽き臼の下臼である。一部を欠失するが、完形に近い。直径33cm、厚さ9.2cm、芯棒孔径3.3×3.7cmを測る。目は6分画主溝10本、副溝8本で時計回りである。目溝は使用によってかなり摩滅するが、幅50mm、深さは3mm程、断面三角形を呈する。上面の芯棒中心部は摺り鉢状に窪む漏斗状穴がある。径7.8cm×5.4cm、深さ3cmを測る。成形方法は摩滅がひどく不明である。17は石臼を砥石に転用したもので、表裏面は摩滅し、目溝を失なっている。直径は32.3cm、最大厚さ6.2cmを測る。縁辺は薄くなってしまっており1.8~4.5cmを測る。芯棒孔径は3.3×3.7cm、受け口の漏斗状窪みは径6.3×5.4cm、深さ1.2cmを測る。12・13はともに凝灰岩製のため気泡が多い。12は青灰色、13は小豆色を呈している。

茶臼(15) 15は上臼である。完形で、直径17.5cm、厚さ9.5cm、芯棒孔径3.1cmを測る。側面及び上面は、敲打調整後、研磨仕上げである。目は、使用による摩滅が著しい為明らかでないが、分画主溝8本、副溝5本以上で、時計回りである。上面は皿状に窪み、幅約3.6cmの周縁部を削り出している。側面には、一対の挽き木を入れる為の長さ2cm、奥行き2.4cmを測る方形の孔が穿たれ、孔の外周は菱形に浮き彫りにしている。砂岩製である。

不明石器(12) 下小口を欠損する。最大長15.3cm、最大幅6.9cm、最大厚4.5cmを測る。両側面の中央部を敲打により中窪みさせており、A面、B面共部分的に敲打痕を残す。形状から石斧の可能性もあるが、凝灰岩製であり、敲打具、擦り石等の使用が考えられる。

石鍋(13) 滑石製で把手部分の破片である。器厚3.5cmで把手部分は幅5.2cm、高さ3cmを測る。把手部の段上にタテ長のノミの痕跡を残す。器壁が厚く、内外面ともケズリが粗いので未製品と思われる。

瓦 類

有田遺跡第19次調査、2号溝出土の軒平瓦I類に当たる。軒平瓦2点、丸瓦1点が出土した。

軒平瓦(14) 瓦当復元幅21.5cm、瓦当厚3.6cmを測る。外縁は深く、中心飾りは宝珠形を呈し、左右に3回転の唐草文を配している。唐草の先端は下向きで巻き込みが深く、2転目の蔓草は中心飾りから派生する。顎は曲線彫で、ヘラ削りを施している。砂粒を多量に含み、いぶしが施されている。

1号溝出土遺物 (Fig. 76, 77, PL. 50~53)

出土遺物は土師質、瓦質土器の鍋、鉢を中心として、陶磁器類、瓦類、滑石製の石鍋等が出土している。出土した場所は疊内がほとんどで疊下からは少なく、瓦質土器の擂鉢、瓦類が出土している。

土師器

壺 (18) 糸切り底である。20は口径13.4cm、器高2.2cm、底6.6cmを測る。内外面ヨコナデ調整である。胎土に細砂粒を含み、暗褐色を呈する。

青 磁

碗 (19) 龍泉窯系である。高台径5.2cmを測る。釉は灰青色を呈し、高台外面まで厚目に施す。外面には蓮弁を施す。焼成が弱く、胎土は黄灰色を呈する。

皿 (20) 李朝青磁である。高台径3.7cmを測る。胎土は暗青灰色で、透明釉を外底まで施す。内底と疊付に目痕がある。骨付は5ヶ所である。

その他、明の青磁線描き蓮弁碗、端返りの青磁碗が出土している。

白 磁

皿 (21~23) 李朝の皿である。21は体部がやや丸味をもち、直線的に開く器形である。21の高台径5.3cm、22の口径11.1cm、器高3.6cm、高台径5.3cmを測る。釉は21が乳白色で、気泡が多く、22の釉はやや青味をもって、灰白色である。疊付は搔き取っており、内底と疊付に目痕がある。22の高台内側には砂粒が付着し、21、22の内底の目痕は砂粒が多い。焼成は弱い。23は口縁部が屈折し、腰部を形成する。高台は厚く、径6.1cmを測る。釉は青味をもった灰白色で、薄目に体部下位まで施す。内底に粘土目痕がある。

その他、明の白磁皿などが出土している。

陶 器

擂鉢 (24, 25) 儀前系の鉢と思われる。24は口径25.6cm、底径13.2cm、器高13.0cmを測る。口縁端部上面をつまみ出した“くの字形”的口縁部を持ち、24は端部の内側を押っている。内外面共にヨコナデ調整で、24は内面に11本単位の条線を、10ヶ所に、25は8本単位の条線を施している。胎土に砂粒を少し含み、24は赤灰色を、25は暗茶褐色を呈する。24は疊上、25は疊中から出土した。

瓦質土器

26, 28, 29は疊内、30は疊下、27は溝底より出土した。

鼎 (29) 丸味を帯びた体部で、口縁部は内弯氣味に外反し、端部を内傾氣味に長くつまみ出している。体部と口縁部の境は、内面に強い稜を有している。調整は口縁部ヨコナデ、体部内外面はヨコハケである。灰色を呈し、外面には煤が付着している。焼成は良好である。

擂鉢 (27) 外上方へ大きく開く体部と、内面に粘土を貼って肥厚させた口縁部を持つ。内面

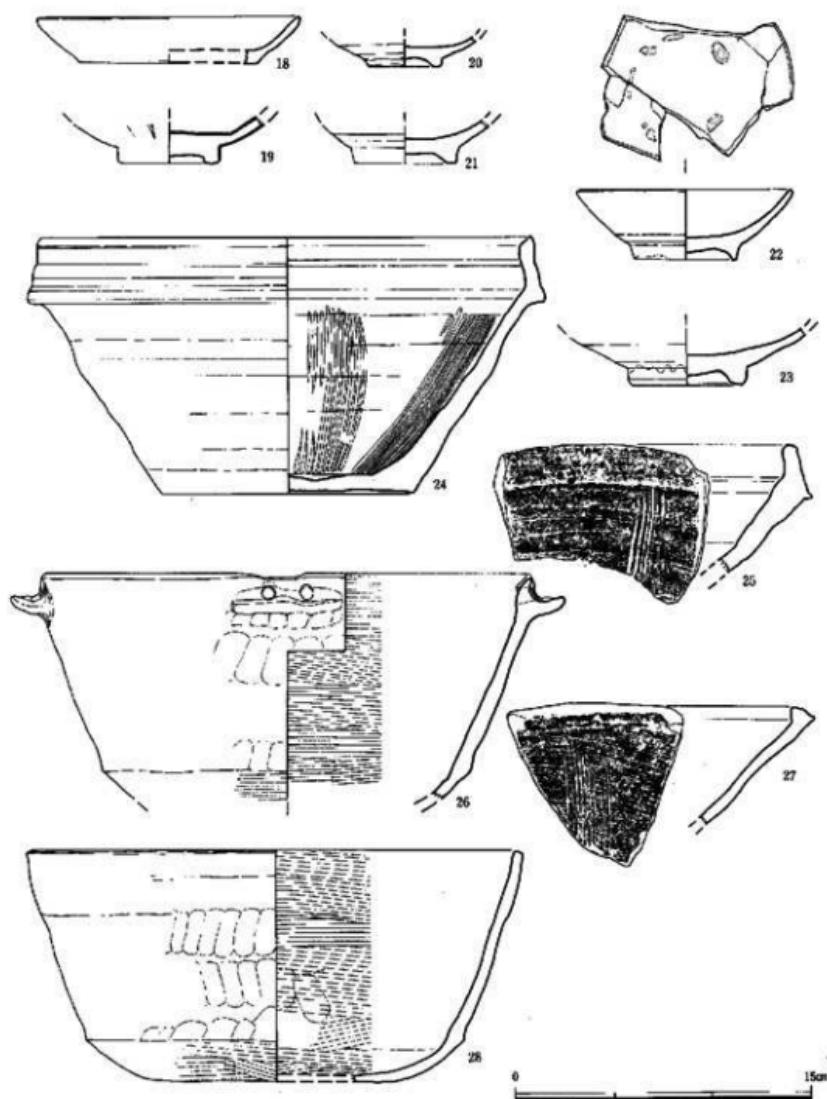


Fig. 76 1号溝出土遺物 (1/3)

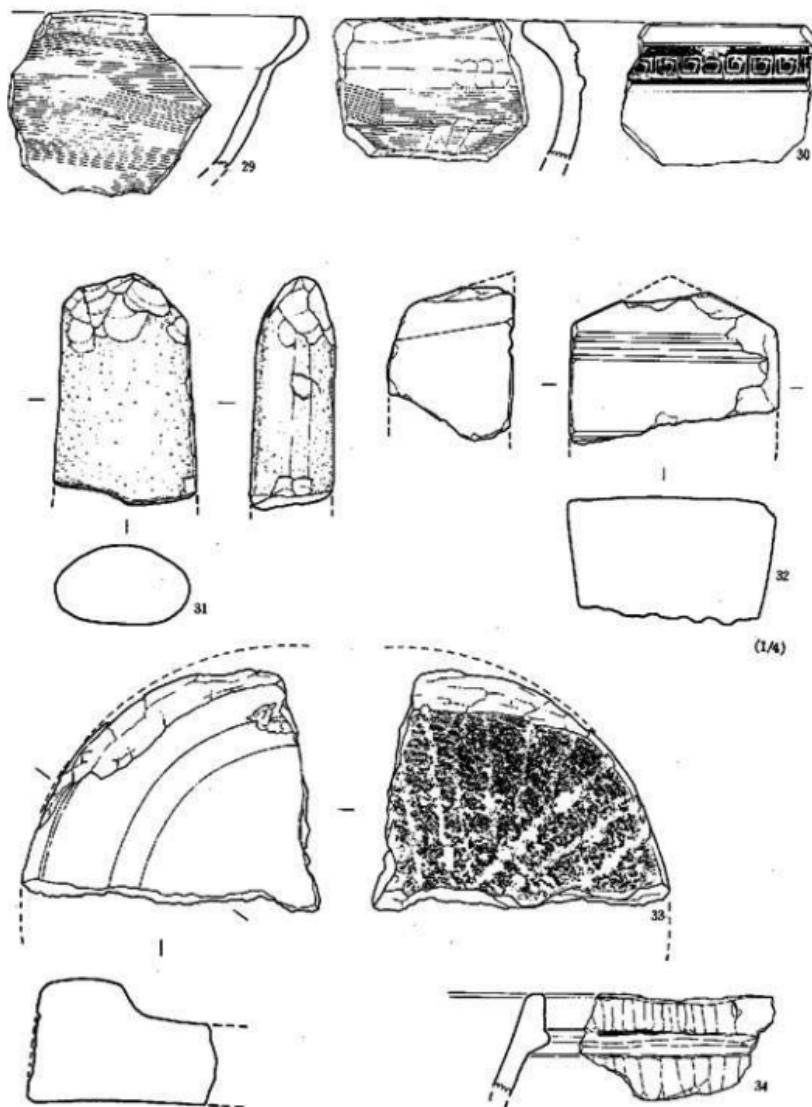


Fig. 77 1号溝出土遺物 (1/3)

ヨコハケ調整で、タテ方向の10本単位の条線を施す。内面は黄白色を呈し、外面にはいぶしを施している。

火舎(30) 体部から口縁部へ丸味を持って立ち上がり、口縁上端部は平坦な面をなしている。外面口縁下に2条の突帯を巡らし、突帯間に雷文をスタンプする。体部内面はヨコハケで、頭部内面には指圧痕を残す。茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に細砂粒を多く含む。

鍋(26, 28) 26は復元口径25.1cm、現存高11.7cmを測る。底部を欠いているが丸底を呈すると思われる。体部は直線的に外上方へ開き、底部との境に腰部を形成する。口縁部は丸味を帯びて外反し、端部は細く尖り気味である。外面口縁直下に長さ約5.2cm、幅約2cmのやや上反りした1対の耳を貼り付ける。耳の直下には、釣手を結わえる径0.7cmの孔を2つ穿つ。内面ヨコハケで、外面は摩滅しているが、耳及び体部に指圧痕を残す。焼成は良好で、黄灰色を呈する。28は復元口径25.6cm、器高11.9cmを測る。底部は扁平な丸味で、体部は緩く外反する。体部と底部の境は腰部をつくり出している。調整は口縁部はヨコナデ、内面及び底部外面はヨコハケである。外面は火を受け、煤が厚く付着している為、調整は不明であるが、体部に指圧痕を残す。胎土に砂粒を含み黄灰色を呈する。26と同一個体になる可能性が強い。

石 器

34・33は砾下、30は砾上より出土している。

石製品

石鍋(34) 滑石製の小片である。口縁部から1.5cm下に、幅1.2cmの鋸を割り出している。内外面共ケズリによる整形で、外面にはタチ長のケズリ痕を残している。

石臼(33) 茶臼の下臼と考えられる。復元直径31cm、周縁部の幅4.2cm、厚さ6.2cm、受け皿の深さ1.9cmを測る。口は破片の為、主溝、副溝の数は明らかでないが、8分画と思われる。凝灰岩製で、調整は摩滅がひどく不明である。

石斧(31) 始刀石斧で、刃部を欠損している。現存長13.0cm、最大幅7.4cm、最大厚4.3cmを測る。基部は剥離調整で、両面共研磨されているが、両側辺に敲打痕を残している。玄武岩製で、全体に風化している。

板碑(32) 砂岩製で頭部の破片である。現存長10.5cm、幅14.3cm、最大厚8.6cmを測る。頭頂部は山形をなすと思われ、頭との境には薬研彫りの横線を2条施す。正面及び側面は丁寧なケズリ調整を施すが、裏面は粗成形のままである。

瓦 類

軒平瓦、平瓦、丸瓦の破片が溝砾内、砾下より出土しているが、量は少ない。平瓦3点、丸瓦4点、軒平瓦1点、瓦埠1点である。35・38は砾内より出土し、39は溝底より出土した。

軒平瓦(36, 37, 38) 36は井戸出土の軒平瓦(14)と同一型式と思われる。瓦当厚4.5cmを測る。胎土に砂粒を多く含む。全面にいぶしを施している。

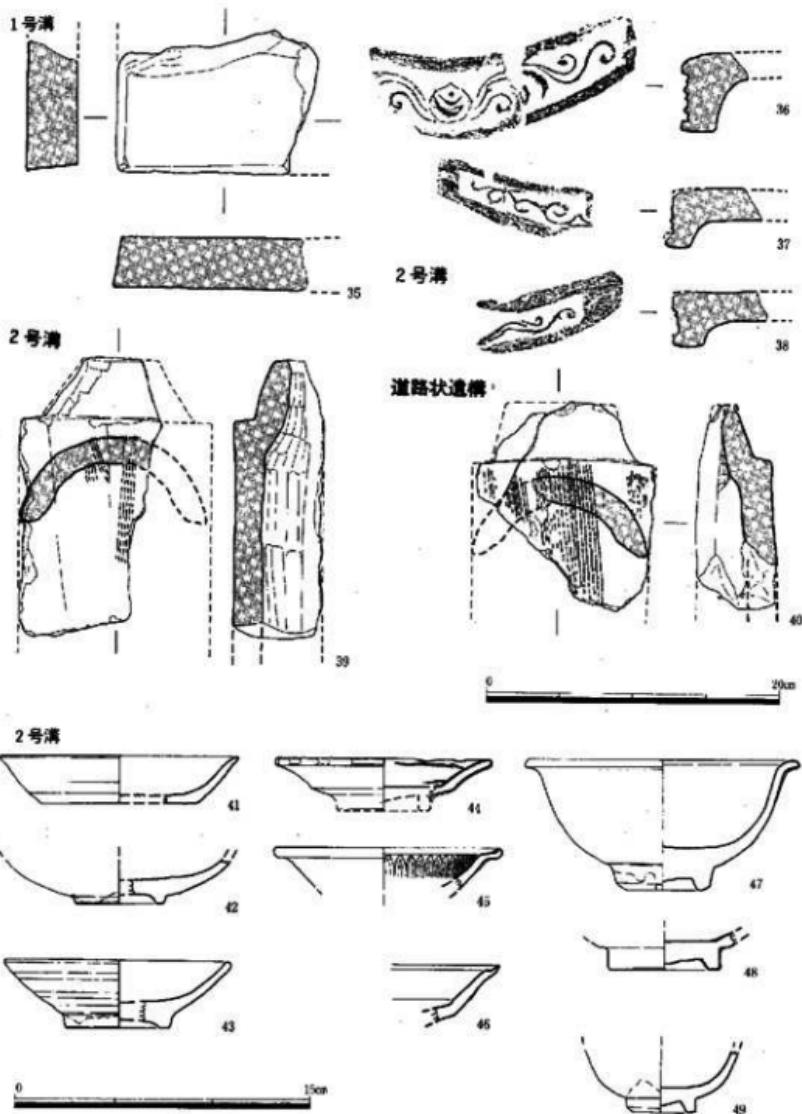


Fig. 78 1号·2号沟出土遗物 (1/4, 1/3)

丸瓦 (40) 前端部及び右側面部を欠損している。筒部後端部の推定幅7.0cm、玉縁長4.0cm、玉縁尻部推定幅5.4cm、筒部厚1.9~2.1cmを測る。筒部背面には繩目とのタキ痕が残っており、縱方向のヘラ削りが施される。谷面は細かい布目と横方向の紺状の痕跡が残る。玉縁部背面はナデ調整で谷面はヘラケズリを施す。小口内側と周縁はヘラ削りによって面取りを行なう。胎土には砂粒を含み、暗灰色を呈する。背面全体にいぶしが施される。

埴 (35) 四角埴の破片で現存長9.7cm、厚さ3.5cmを測る。断面形状は允状を呈す。A・B両面共にナデ調整で、表面に離れ砂が付着する。側辺はヘラによる面取り調整である。

2号溝出土遺物 (Fig. 78, PL. 51, 52)

1号溝に比べると遺物は少ない。礫内の遺物が多く、陶磁器類、瓦類、石鍋等の石製品が出土している。

土師器

壺 (41) 糸切り底で、板目痕がある。口径12.3cm、器高2.4cm、底径8cmを測る。内外面ヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み、黄褐色を呈する。

白磁

小碗 (49) 明代であろう。高台径5.3cmを測る。蓋付のケズリは丁寧である。釉は乳白色を呈し、外面下位まで施す。細かい貫入である。胎土は淡黄白色である。

皿 (43) 李朝である。口径11.7cm、器高3.5cm、高台径5.3cmを測る。釉は乳灰色を呈し、外底まで施す。蓋付は搔き取る。釉垂れや気泡がある。蓋付と内底に目痕がある。胎土は黄灰色である。

青磁

碗 (47, 48) II期溝より出土。47は明代である。口径14.2cm、器高6.7cm、高台径4.9cmを測る。端反りの口縁部を有す。釉は灰青色を呈し、高台外面まで、厚目に施す。

皿 (43) 口径11cmを測る。高台付模花皿である。青灰色釉を厚目に施釉する。貫入がある。内面にはヘラ描文を施す。土壙II期の礫中出土片と接合する。

陶器

皿 (42, 46) 42は唐津系、45は美濃又は瀬戸系であろう。42は低い高台で、径4.7cmを測る。やや赤味をもった灰色釉を体部下位まで施す。粗い貫入がある。露胎部は褐色を呈す。45は外反する口縁端部を内側に折り曲げて、玉縁状を形成させる。内面には深い菊花を描く。釉は厚く、黄緑色を呈する。

その他、礫上より、端部が小さく屈折する唐津皿 (46) が出土している。

瓦

軒平瓦 1点、平瓦 2点、丸瓦 5点の破片が出土しているが数量は少ない。

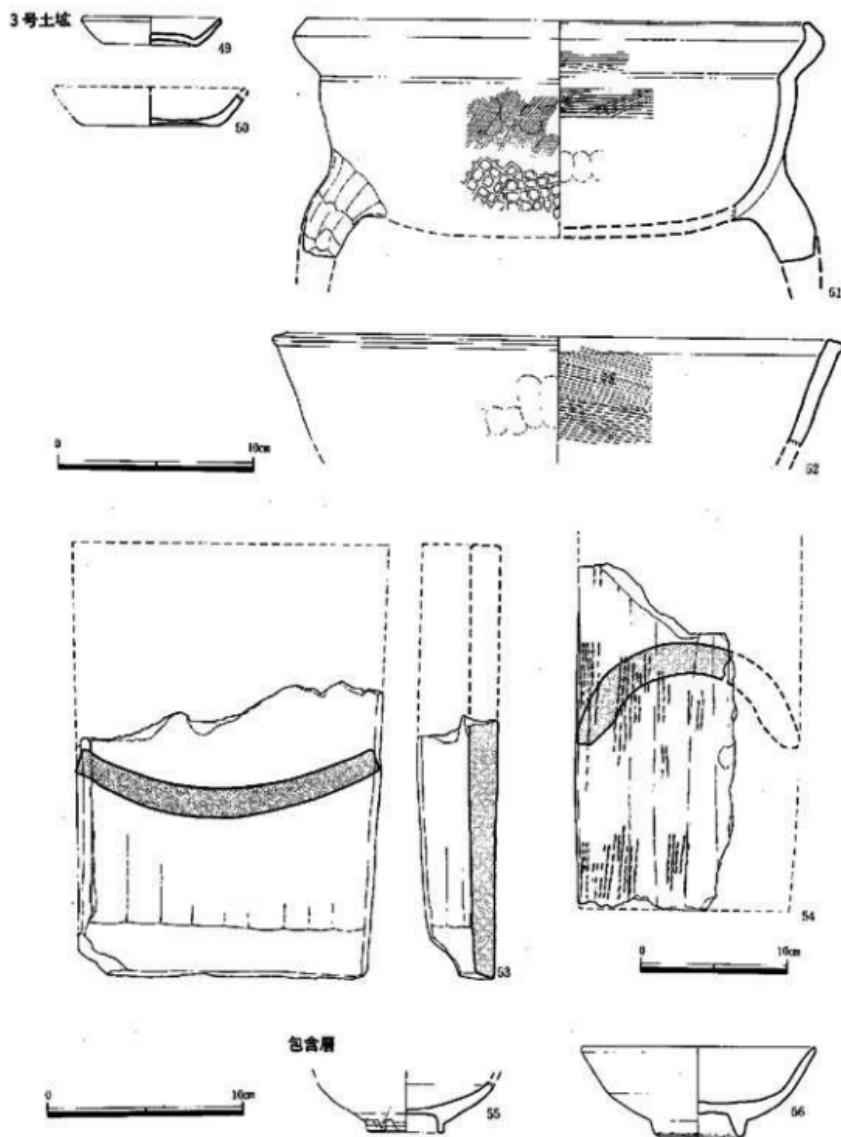


Fig. 79 3号土壤·包含层出土遗物 (1/3, 1/4)

軒平瓦(38) 磬内から出土した。瓦当復元幅20.8cm、瓦当厚3.3cmを測る。外縁の上玄は浅く、下玄は深い。脇区は広く、2.6cmを測る。瓦当面は欠損しているため中心飾りは不明であるが、左右に3回転の唐草文を配している。蔓の波は緩やかで、先端は下向きで深く巻き込んでいる。平瓦部の両面には、離れ砂が多量に付着している。頸は段頸で、ヘラによる調整が施される。焼成は良好で灰色を呈する。有田第19次調査2号溝出土の軒平瓦IV類にあたる。

丸瓦 玉縁部、筒部後端部を欠損する。筒部前端部の推定幅は14.6cm、器厚は2.2cmを測る。背面は繩目のタタキ痕が残っており、縦方向のヘラケズリが施される。谷部には細い横方向の紐状の痕跡を残す。周辺部はケズリによって面取りを行っている。胎土には砂粒を少し含み、黄褐色を呈する。

その他、壙が1点出土している。

道路状造構出土遺物 (Fig. 78, PL. 52)

1号・2号溝と接合するものが多く、李朝白磁皿はIII期出土であるが、1号溝磬中出土品と接合する。又、2号溝III期出土の高台付菱花皿もIII期磬中出土片との接合である。

青 磁

碗(47) 高台径5.6cmを測る。釉は淡灰緑色で、單目に外底まで施される。一部露胎である。外面に、ヘラ描蓮弁を施す器形である。

その他に、龍泉窯系の太い蓮弁を有した小碗がある。

瓦 類

軒平瓦1点、丸瓦3点、平瓦11点出土している。

丸瓦(40) 下筒部上半部と玉縁の一部を欠損している。筒部後端幅13.2cm、厚さ1.8cm、玉縁部長2.8cm、玉縁尻部推定幅5.6cmを測る。筒部背面は繩目のタタキ痕が明瞭に残っており、ケズリは顕著でなく、ナデに近い。谷部面は、左下りの糸切り痕を残す。玉縁部背面はナデ調整で紐の痕状を残す。小口内面及び周縁部は、ヘラ削りによって面取りを行なう。胎土には砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。全体にいぶしが施される。

3号土壙出土遺物 (Fig. 79, PL. 50)

遺物は少ない。床面から土師皿、覆土から瓦質土器の鍋、土師質土器の鍋、平瓦、丸瓦、軒平瓦の小片が出土した。

土師器

皿(40) 口径7.2cm、底径4.8cm、器高1.4cmを測る。外底部は糸切り底である。体部は丸みを持って外反し、ヨコナデを施す。淡褐色を呈し、焼成は良好である。

壙(51) 口縁部を欠損する。現存器高1.7cm、底部径6.8cmを測る。糸切り底で、外上方へ

開く体部にはヨコナデを施す。淡褐色を呈するが、二次的に火を受け、内外面とも煤が付着する。

瓦質土器

鼎 (52) 底部及び脚部下半を欠損する。復元口径26.3cm、現存器高10.8cmを測る。丸味を帯びた体部で、口縁部は内弯気味に外反し、端部を内側へ長くつまみ出して内傾させている。頸部内面には、明瞭な稜を有している。調整は内面及び口縁部がヨコナデ調整で、内面の頸部から口縁部にかけてヨコハケを残す。外面体部上半は細いナナメハケで、下半には格子目のタキを施す。脚部はナデ調整である。暗灰色を呈し、外面は火を受け、煤が厚く付着している。胎土には砂粒を少し含む。

土師質土器

鍋 (53) 復元口径29.4cm、現存器高15.6cmを測る。体部は外上方へ直線的に大きく開き、口縁部は端部を外側へつまみ出して中くぼみにする。平坦な面をなしている。調整は内面ヨコハケで、外面は摩滅のため不明であるが指圧痕を残している。胎土には砂粒を少し含み、暗黄褐色を呈する。

瓦類

平瓦(53, 54) 前端部を欠損する。後端部は幅20cm、厚み2.0cmで谷の深さは3.6cmを測る。背部は摩滅しており、調整は不明であるが、谷部は縱方向のヘラケズリを施す。後端部はヘラで、幅26cmを斜に切り落し、小口両側面はヘラによる面取りを行う。胎土には砂粒を少し含み、焼成は良好。黄褐色を呈するが背部は火を受け一部黒変する。

包含層出土遺物 (Fig. 79, PL. 52)

陶器

碗 (57) 古唐津系である。口径12.2cm、器高4.7cm、底径4.7cmを測る。釉は緑味のある茶褐色釉で、外底まで施す。疊付、及び内底は蛇の目状に搔き取っている。胎土は褐色である。

皿 (56) 高台径3.9cmを測る。底部の器壁は薄い。淡灰黄色釉を体部下位まで施す。

その他に古唐津系の皿、高取焼片、伊万里片がある。

4) 小 結

当該地で検出した遺構は全て中世後半期に属し、出土遺物等から大きな時期差は無い。1号・2号溝と道路状遺構は一体化したものであるが、道路としての機能を考えるには側溝の幅が広く、又、溝両肩に対して深い位置にあり、切り通し状を呈するなど疑問が残る。又、南側では2条の溝を横断する形で、柱穴が並んでおり、橋脚的な役目をもつものとして注目できる。そ

の場合に道路状の遺構がどのような役割を果たしているのか検討の必要がある。これらの溝が中世の城跡に懸ることは間違いないため、溝構成などの全体像を把握することが先決のようである。1号・2号溝のI・IIとIII期の間に若干の時期差がある。又、全般に李朝陶磁器の出土が多いことが特徴である。1号溝の隙中—すなわちIII期の段階で出土した遺物の内、備前系の鋤鉢はV期に属し、桃山時代が比定されている。又、鍋は第19次調査で検出した16世紀前半代^{註1}の鍋に比べて、口縁部の外反屈折が小さく、ほとんどが認められなくなる。防長周辺で産出する鼎・鋤鉢は破片であるが、少なくとも16世紀の中頃を境にその混入は止まるものと考えられる。李朝の皿、碗は内外に粘土目を有している。2号溝III期の直上からは古唐津皿が出土しているが、初期伊万里に属するものは出土していない。軒平瓦は第19次調査で出土しており、16世紀前半～中頃に伴うものと思われる。こうしてみると、これらの遺物は16世紀前半～中頃の要素をもつものも存在するが、備前の鉢や土師質鍋、古唐津の皿などの存在から16世紀後半代の要素が強いといえよう。2号溝の李朝陶磁も又、16世紀後半代に比定できるもので、これらの溝、及び道路状遺構が最終的に使用されたIII期の年代は16世紀後半～末が考えられよう。井戸は李朝の輪高台をもつ碗や上師質の鍋等から16世紀後半代～末の時期が考えられる。3号土壇には1号・2号溝や井戸のように新しい要素のものを含まず、明の染付、瓦質土器の鼎などの存在から若干、先行する遺構と思われる。

註1 福岡市教育委員会「有田・小田原第4集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集 1983。

註2 間壁忠彦 「備前」「世界陶磁器全集3 日本中世」小学館 1977。

6. 第87次調査

1) 調査地区の地形と概要

当該地は福岡市早良区有田2丁目12-6番地に所在する。調査対象面積は248m²である。

有田地区は標高12~14mを

測る平坦地を形成しているが、

この地区には発掘調査地点が

集中しており、弥生時代前期

から中世までの遺構や遺物が

検出されている。昭和41~43

年にかけて区画整理が実施さ

れているがこの事業に際して、

九州大学考古学研究室が、福

岡市教育委員会の委託を受

け、発掘調査を実施している。

当時の調査では当該地は第29

街区と呼称されている。この

トレンチ調査では夜白式土器

と板付I式土器を共伴する弥

生時代初頭のV字溝を検出し

たと報告されている。又、台

地の中心では奈良時代の掘立

柱建物群が存在し、早良郷に

関する官衙の存在がクローズ

アップされる地域でもあり、

更に中世末に於いては約200m

四方に及ぶ濠や郭の存在はこ

の台地が早良平野に於いて歴

史的に重要な位置を占めてい

たことを物語っている。

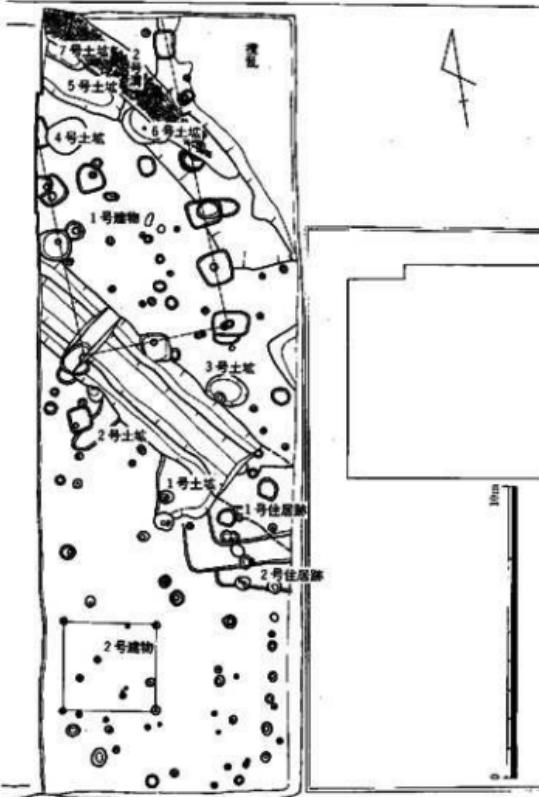


Fig. 80 第87次調査遺構配置図 (1/200)

当該地の周辺では、第6次・第19次・第77次・第96次調査を実施しており、弥生時代前期の溝、住居跡、古墳時代住居跡、溝、奈良時代掘立柱建物、中世の濠、土塙墓、井戸など各時代に亘っている。発掘調査は店舗付住宅建設に伴うもので、昭和58年10月14日～12月1日まで実施した。当該地は既に区画整理による削平を受けており遺構の遺存状態は悪い。更に九州大学の調査によって既報告以外の遺構も調査が行われているが、未報告であるため遺構の時期や切り合いに不明確さを欠いた部分もあることを断っておきたい。

遺構面はローム層で、表土は約20cmを測る耕作土である。調査区の東北隅は著しい掘削を受けているため溝や掘立柱建物の一部が著しく損失を受ける。

遺構には弥生時代前期初頭の溝1条、古墳時代の住居跡2軒、掘立柱建物1棟、中世土塙4、土塙墓1、溝1条、時期不詳土塙2がある。遺物は弥生時代前期土器片、古墳時代初頭の甕(完成品)、中世輸入陶磁器、雜器、鉄釘などである。

2) 遺構各説

上記のとおり、九州大学考古学研究室による第1次・第2次調査と重複している。既に溝は完掘されており、又、土壤や住居跡、及び掘立柱建物の一部が発掘されているが、溝以外の資

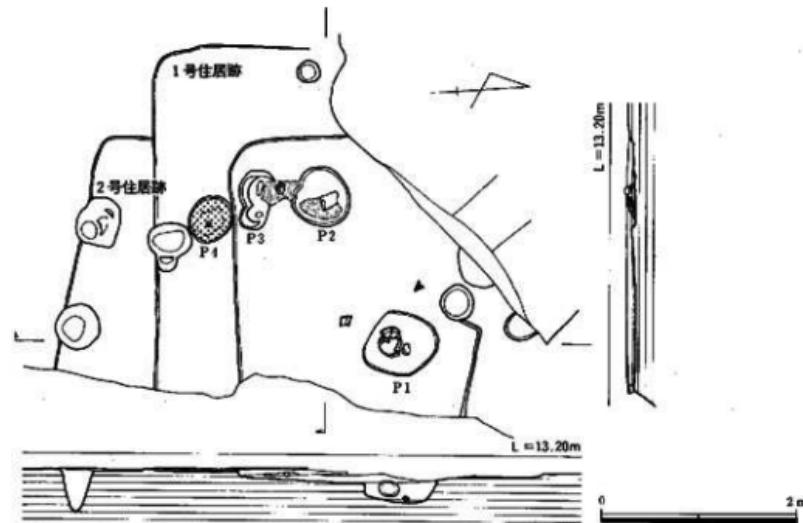


Fig. 81 1号・2号住居跡 (1/60)

料が残っていないため、詳細な状態を知る事はできない。

住居跡

2軒の重複した住居跡を検出した。この住居跡は1号溝に重複する。九州大学の調査時点では遺存状態が悪いためプランを確認し得なかったとみえて、住居跡の大部分を破壊している。

1号住居跡 (Fig. 81, PL. 55)

2号住居跡を切っている。削平が著しく、周壁は約4cmほどしか残っていない。平面形は人形の長方形を呈するものと思われ、南側壁に接して幅80~100cm、高さ0.8cmのベッドが設けられる。住居跡の南北長は3.94m、東西長は3.7m、深さ10.5cmを測る。周溝は存在しない。住居跡の中央に位置するP1からは、布留式併行の壺が完形品で出土した。pitの径は68cm、深さ24cmを測る。P2、P3周辺では焼土や炭化物が分布しており、P2には板状の炭化物が存在する。P4は径44~50cmを測り、橢円形を呈しているが、内部は焼土、炭化物が充填しており炉跡と考えて良い。但し、位置からみて、1号・2号住居跡に伴わない。又、P1は1号住居跡床面に分布した炭化物や焼土を掘り下げた結果検出したもので、2号住居跡に伴う可能性を有している。古墳時代初頭の住居跡である。

2号住居跡 (Fig. 81, PL. 55)

1号住居跡に切られるため全形を確認できないが、平面形は長方形を呈するものであろう。遺存状態は悪く、2~3cmほどしか残存しない。現存の東西長は2.5m、南北長は4.22mを測る。P1の北側にはL字形を呈した溝S₁が存在するが、この溝は2号住居跡の壁に対して平行する位置にある。2号住居跡からは布留式併行期の土器が出土しており、この期の住居跡がベッドを付設することは周知の事実であるから、このL字形の周溝はベッド内側に設けられたものと考えて良い。周溝幅は3~4cmを測る。南壁に接してベッドが存在するはずであるが確認できなかった。1号住居跡と同規模のベッドであると仮定すれば、住居跡の一辺は約5mの長さを復元することが可能である。炉跡、柱穴等は不明である。古墳時代初頭の住居跡である。

土 塚

1~6号までの土塚を検出した。1号・2号土塚は弥生時代~古墳時代に、3~7号土塚は中世に位置づけられる。4号土塚は下層から鉄釘や焼土が出土しており、火葬墓と考えられる。

1号土塚 (Fig. 82, PL. 57)

1号溝及び、1号・2号住居跡との切り合い関係は不明である。平面形は不整形を呈し、断面形はレンズ状を呈している。南北2.3m、東西2.0m、深さ0.22mを測る。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器の細片が出土した。覆土より古墳時代が考えられる。

2号土塚

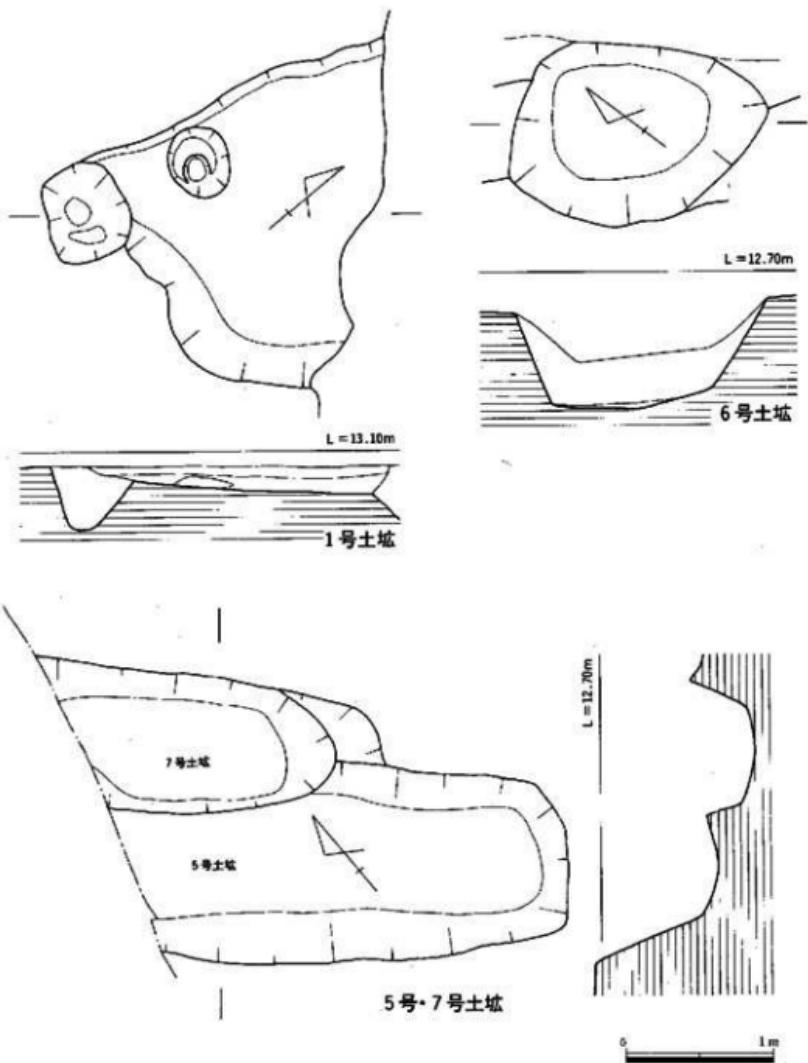


Fig. 82 1号・5号～7号土壤 (1/40)

1号溝に接しており、平面形は不整橢円形を呈している。最大長1.94m、最大幅7.4m、深さ6.3~17cmを測る。北側の1号溝に接する部分の幅がやや広い。又、底面も北側へ傾斜しており、1号溝へ流れ込む溝状遺構と考えることもできる。覆土は黒褐色粘質土である。晩期夜白式土器が出土している。

3号土塚 (Fig. 83, PL. 57)

平面形は橢円形を呈し、断面形はレンズ状である。長さ1.44m、最大幅1.02m、深さ11cmを

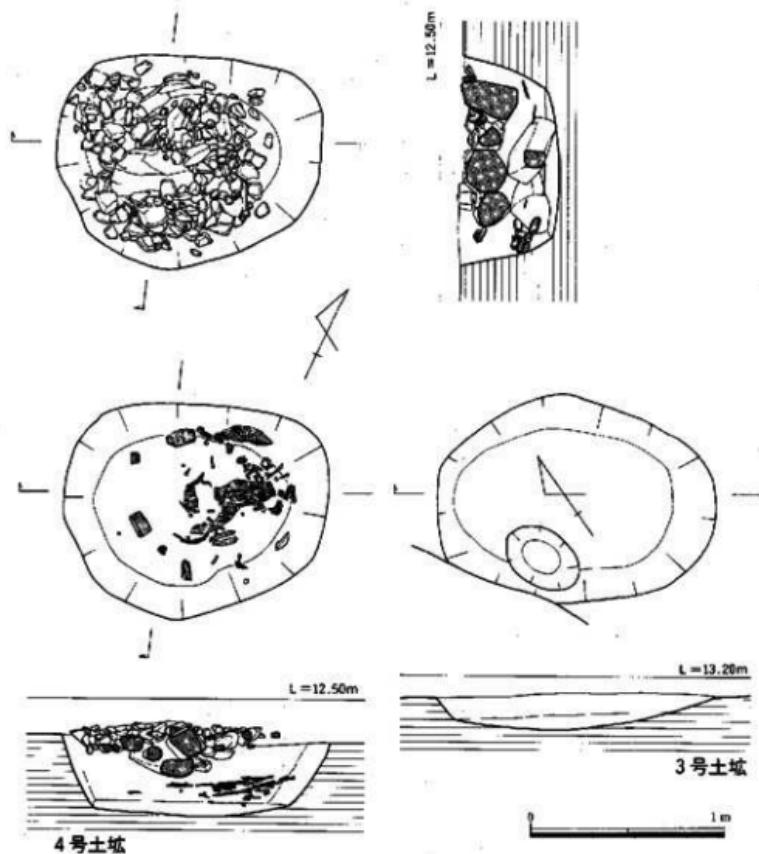


Fig. 83 3号・4号土塚 (1/30)

測る。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とする。遺物の出土は無いが、中世後半期と考えられる。

4号土塙（土塙墓）(Fig. 83, PL. 56)

平面形は、不整隅丸長方形で、断面形は逆梯形状を呈している。覆土は暗茶褐色粘質土である。最大長1.37m、最大幅1.1m、深さ0.6mを測る。主軸はN72°30'Eである。この土塙上層には礫群の集積が認められる。礫の大部分は被熱しており、この間には焼土塊や炭化物が検出できる。長さ46cmと52cmの2石を南北に平行しておき、その周辺に4~20cm大の円礫や角礫、又は板状礫と積み重ねている。更にこの積石群の下層—土塙底面の西側には、長さ約30cmを測る角礫2石が壁に接して置かれている。覆土の中位から下位は焼土や炭化物が層をなしておる。この炭化物は板状を呈し、長さ90cmや60cmの範囲に分布する。炭化物層の上位から下位にかけて鉄釘が35本出土した。これらの鉄釘は土塙の東側に寄って集中し、径約60cmの環状の広がりをもっている。又、これらの釘は壙底より約10~15cm浮き上っている。鉄釘は環状の中心部で一ヶ所に集中し、固り状をなす部分があるが、この固り状部分では鉄釘先端は内側へ向いている。環状に広がる外側の釘は先端を外へ向ける傾向がある。鉄釘が現位置に近い状態で転落したと仮定すれば、釘を用いた用器は円形に近い形状と考えられる。但し、容器の規模に対して、鉄釘は長さ約10cmを測るところから、数量を合わせると異常ともいえよう。この土塙が、火葬墓とすれば數度に亘って、荼毘が行われたと考えられないだろうか？壙底西側に据えられた2石の上面高は釘との分布高にほぼ一致する。調査の途中、壙底内の小礫を幾つか取り上げた事を記憶しており、これらの礫が指を置くための支石の役割りをしていた可能性は充分にある。鉄釘の東側への集中は、撒き取りの際に取り残したものと考えたい。上層の礫群は土壤埋葬後の壙圧、又は標石と考えたいが、現時点では資料が不足しているので、今後の検討課題したい。遺物には土師器坏、染付、青磁などがある。染付けは赤絵付が一部行われており、明代の時期と考えたい。

5号土塙 (Fig. 82, PL. 57)

西側境界地にあるため全形は不明である。1号溝に切られる。平面形は隅丸長方形で、断面形はU字形を呈している。現存長は2.85m、幅1.3m、深さ9.5cmを測る。覆土は6号土塙と同じく暗茶褐色粘質土である。遺物の出土は無い。溝状遺構の可能性も残る。

6号土塙 (Fig. 82, PL. 57)

2号溝に切られている。平面形は不整円形を呈しており、断面形は摺鉢状である。最大長1.75m、最大幅12.5m、深さ約78cmを測る。遺物は、須恵器、土師器が出土している。覆土は暗茶褐色粘質土であるが、締りが悪く、茶褐色砂質土のブロックを含んでいる。

7号土塙 (Fig. 82,)

5号土塙の北に接しており、2号溝に切られる。平面形は梢円形状を呈し、断面はU字形である。現存長2.0m、最大幅0.95m、深さ1.1mを測る。覆土は暗黄褐色粘質土に黒色土を含む層

を主体としている。遺物の出土は無い。

掘立柱建物

柱穴が並ぶものが幾つか存在するが、建物として対応する柱列が存在しない。1号掘立柱建物は、九州大学考古学研究室によって柱穴No.7～10までが調査されているが、詳細の報告はない。柱穴No.8は1号溝内に残されたベルト上面にてかろうじて検出した。柱穴規模が大きく、柱穴には重複している掘り方もあるので、建て替えがあった事を示している。

1号掘立柱建物 (Fig. 84, PL. 58)

北側境界地に位置するので、規模は不明。更に、東側柱列は著しい掘削により破損を受けている。主軸方位は磁北方向である。梁行2間、桁行5間以上の規模をもつ、側柱だけの建物である。但し、柱穴3と柱穴11の間に間柱を2本設けている。梁行5.2m、梁間平均8.7尺、桁行8m、桁行平均10尺を測る。又、柱穴3と11の間は5.2m、柱間平均5.7尺を測る。掘り方は隔丸長

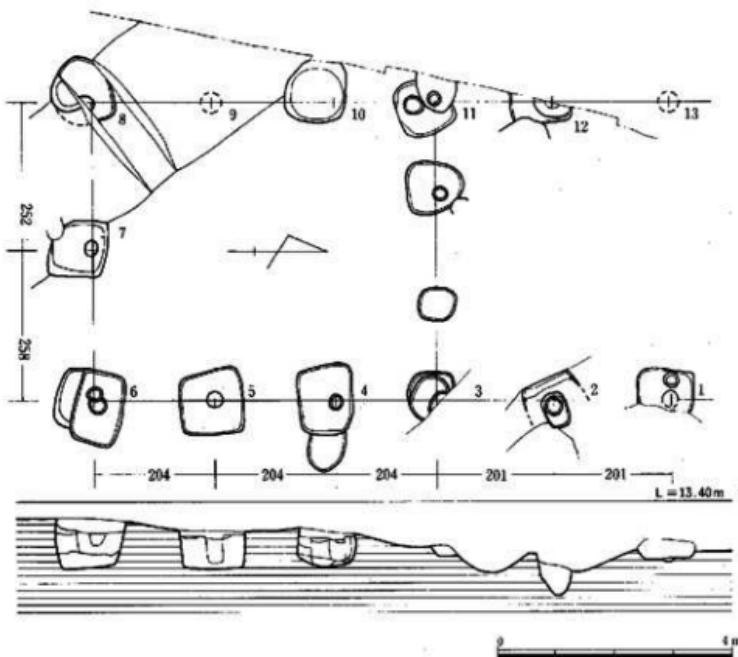


Fig. 84 1号掘立柱建物 (1/100)

方形を呈し、長さ0.9~1.2m、柱根径20~25cm、深さ60~90cmを測る。柱穴14・15は浅く、5~17cmを測る。一部黄褐色粘質土のブロックを含んでおり。遺物の出土は極めて少ない。又、柱穴No 3・4・6・11は他の掘り方と切り合っており、建て替えが行われたことを示している。建物を復元すれば、柱穴No 3~11の間に在るNo 14、15の掘り方は浅いので、床束と考えれば、この東柱は建物の中間に存在するものと考えて良いであろう。よって建物の規模は少なくとも2間×6間を考えることができよう。

2号掘立柱建物

梁行1間、桁行1間の規模である。梁間は3m、桁間は3.1mを測る。柱穴は20~30cmを測る。既に掘り方は削平されており、深さ52.9cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

溝

1号溝は既に九州大学考古学研究室によって発掘調査、及び報告が行われているので、詳細は省くが、遺物については若干出土したので参考にされたい。2号溝は中世である。

1号溝

(Fig. 85, PL. 59)

昭和42~43年に発掘調査が行われている。この調査では、長さ約12mに亘って規模を確認した。溝は「幅2.3~2.6m、深さ約1.5mであり、断面V字状をなし、溝底は北西端より南東端へ現地形に沿って、約5cm傾斜している」こと、又、「この溝の延長は試掘溝によって、…中略…27街区(第77次調査)東側まで約60mに亘って確認された。」のである。

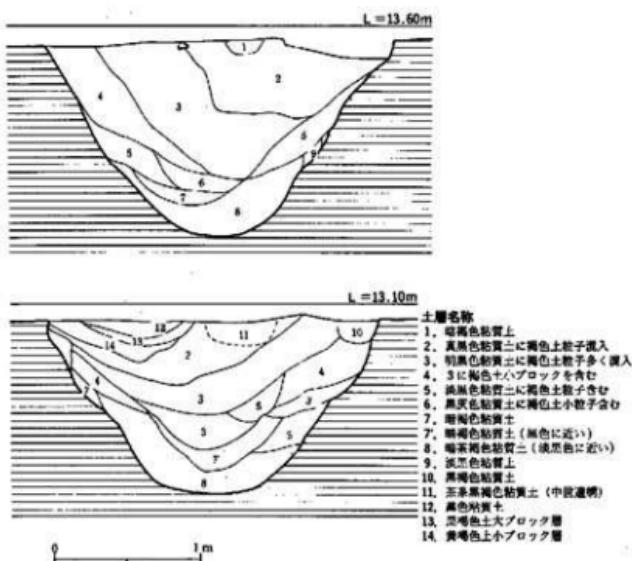


Fig. 85 1号溝土層断面図 (1/40)

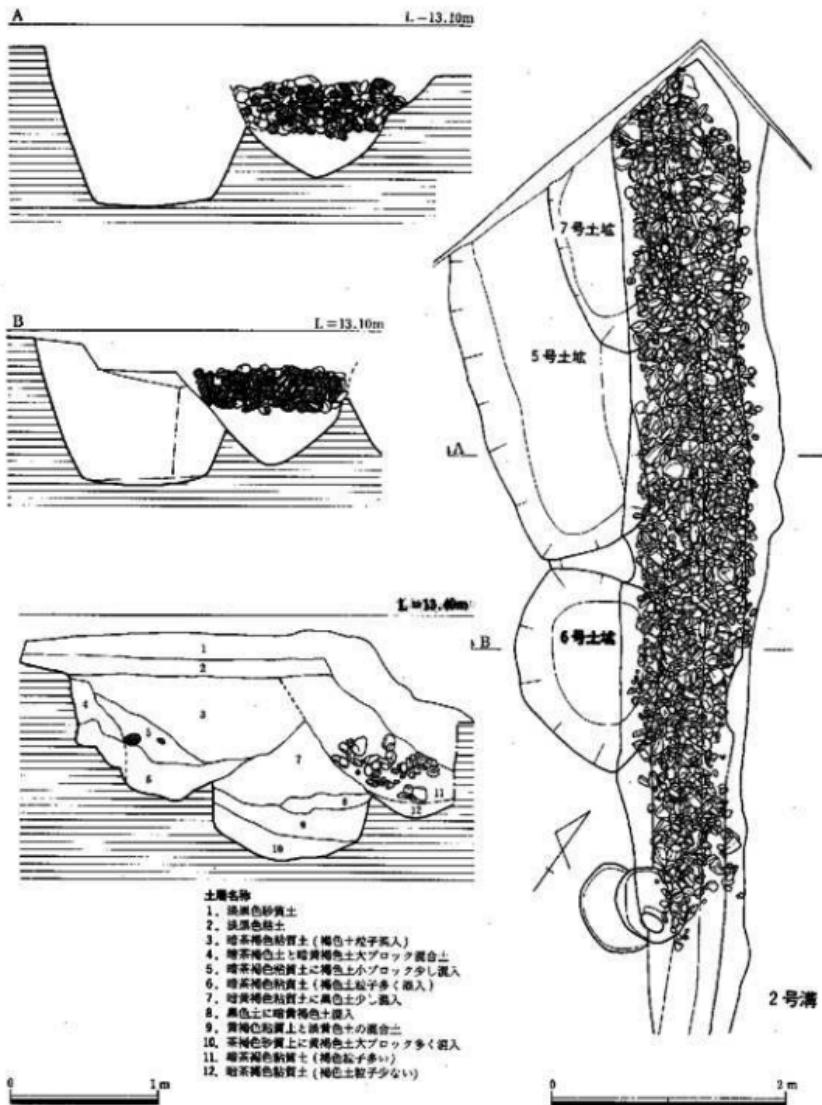


Fig. 86 2号溝、及び5号・6号土壤断面図 (1/40, 1/50)

る。今回は前回の調査分を再度、底ざらえし、土層を確認するにとどまった。溝断面形はV字形ではなく、箱築研磨である。覆土は黒褐色粘質土を主体とし、上層からは弥生時代前期の甕形土器が出土した。この溝は既述の通り、第77次調査や第56次調査、第95次調査でも確認しており、梢円形の環濠と考えられる。^{註2}

2号溝 (Fig. 86, PL. 60)

削平のため残存状態は悪い。主軸は東西方向で、疊敷の溝である。現存長8.8m、現存幅1.3m、現存の深さ1.3mを測る。溝の断面はV字形をなすが、床上に疊床がある。疊床は溝底から約50cm浮いており、厚さは約50cmを測る。疊は5~30cm大の円疊、角疊を用いており、被熟したものも含んでいる。疊内からは焼土塊、瓦片、土師器、陶磁器などが混入している。覆土は暗茶褐色粘質土である。この溝は北側の第6次調査でも検出しているが、ここでは南北方向であるから、矩形に曲る溝と考えて良い。第6次調査では李朝の鏡などが出土している。

3) 遺物各説

1号住居跡出土遺物 (Fig. 87, PL. 61)

土師器

壺(1, 2) 1は完形品である。P1出上。口径18cm、器高26.2cmを測る。胴部の最大径は23.4cmを測り、上位にある。口縁部は内窵し、端部は平坦である。肩部に1条の沈線を巡らすが、連続しない。外面はタテ・ヨコハケ調整、内面はヨコ・タテのヘラケズリ調整である。2は口径16.8cm、口縁部は内窵し、端部は平坦である。外面はタテハケ後ヨコハケを加えている。1の胎土は精良で、2は砂粒を含む。ともに黄灰色を呈する。布留式併行期の土器である。

2号住居跡出土遺物 (Fig. 87, PL. 61)

土師器

甕(3) 口径18cmを測る。口縁部は内窵しているが、大きく外へ開く。端部は丸味をもち、肥厚する。胴部外面はヨコハケ調整で、内面はヘラケズリである。胎土に長石、石英等の細粒を含む。黄褐色を呈する。布留式併行期の土器である。

4号土塙出土遺物 (Fig. 88, PL. 62)

白磁

皿(6) 復元口径13cm、現存高2.2cmを測る。釉は青味を有した白色釉を厚口に施すが、外底の施釉は丁寧ではないため露胎の部分がある。貫入、釉垂れがみられる。胎土は灰白色である。内底にはヘラ片彫りの文様を施す。

青磁

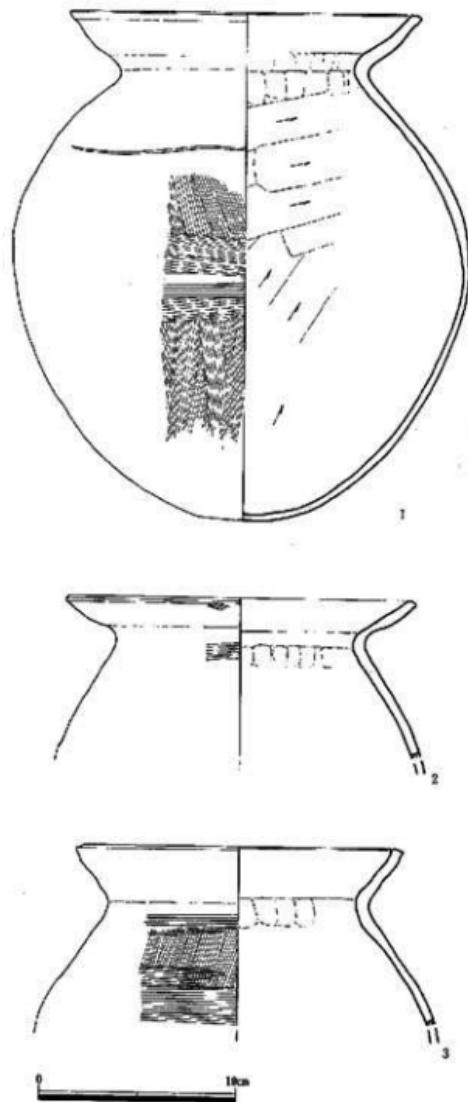


Fig. 87 1号・2号住居跡出土遺物 (1/3)

碗(5) 小碗である。底径3.1cmを測る。釉は淡緑色で、高台内底まで薄目に施す。疊付は露胎である。内底見込みに目痕がある。胎土は灰白色である。

染付

碗(4) 1/8片である。体部が球体を呈しており、口径9.6cm、現存器高4.5cmを測る。胎土は黄灰色を呈し、焼成は甘い。釉は透明で、貫人がある。文様は緑色、及び赤色で施される。赤絵付である。

その他、灰釉陶器や土師器の皿状のものがあるが、器形は不明である。

鉄製品

釘(7~13) 釘は合計35本検出した。いずれも頭部が方形を呈し、身の断面形は長方形である。長さは数種類あるが、7は現存長10.2cm、断面0.6~0.5cm、8は現存長10.1cm、断面0.7~0.6cmを測る。8は頭部の大きさに比べ、著しく短いので破損品の可能性がある。

1号掘立柱建物

(Fig. 85)

打製石器(14) 柱穴No.3出土である。サヌカイト製で、現存長5.2cm、現存幅2.7cm、厚さ1.3cmを測る。翼状の横長剥片

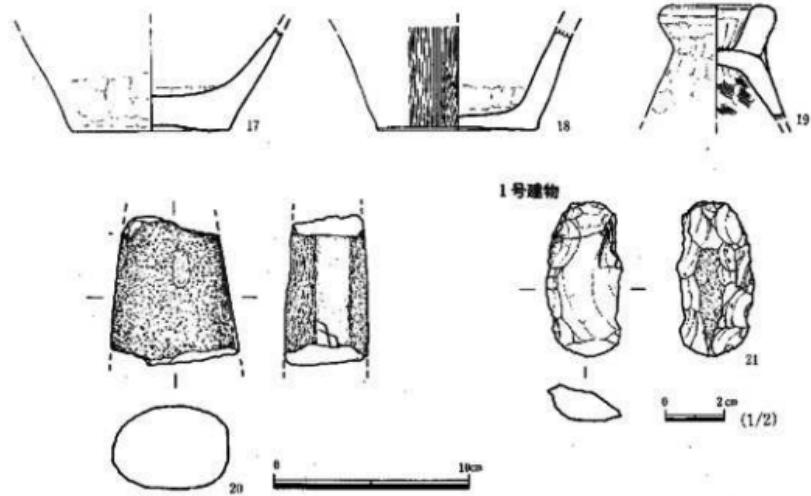
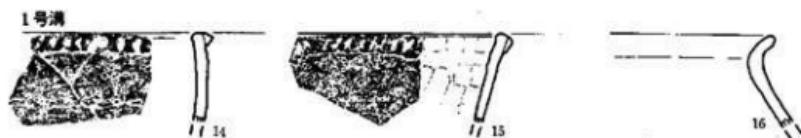
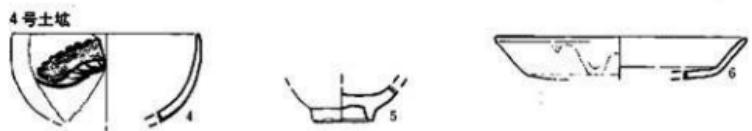


Fig. 88 4号土坑, 1号洞出土遗物 (1/3, 1/2)

を用いており、片面には自然面を残す。縁辺には両側から調整を施し、刃を形成している。基部は未調整である。

1号溝出土遺物 (Fig. 85, PL. 61, 62)

九州大学考古学研究室の既報告に詳しいので詳細は省きたい。遺物には網雲母片岩製紡錘車、砂岩製磨製石斧、角閃石安山岩製磨製石斧、黒曜石製打製石鎌、夜臼式土器、板付I式土器がある。上層には板付II式土器、弥生時代中期～後期の土器、土師器、須恵器が混入しているが、その下層より溝底までは、夜臼式と板付I式土器の共存層であると云われる。土師器、須恵器は古墳初頭住居跡や奈良時代の建物を破壊した結果であり、弥生時代中期～後期についても混入ではなく、他の遺構との切り合いの結果であろう。今回は土層観察用のベルト撤去に伴い数点検出した。

縄文式土器

壺(17) 破片である。口縁部を小さく外反させ、端部は丸味をもつ。胎土には長石、雲母粒子を含む。黄褐色を呈する。

甕(15, 16) 15・16ともに口縁部片であるが、15は体部が外開きし、16は内窩する。刻み目は15がヘラ状で細く、16は幅広い。16の外面には貝殻条痕をわずかに残している。15の内外面はナデ調整である。

蓋(20) つまみ部分の径は6cmを測る。つまみの内側は深い上げ底になっている。体部は大きく開かない。外面には指圧調整痕が良く残っており、内面には貝殻腹縁にて搔いたような幅1cmばかりの条痕がある。内面は黒色で、外面は黄褐色を呈する。外面に黒斑がある。

弥生式土器

甕(18, 19) 第1層上部より検出した。底径は10が8.4cm, 11が7.9cmを測り、やや上げ底である。体部は直線的に立ちあがる。18の外は細かいタテハケを施す。19は摩滅しているが、下位に指ナデ調整痕が残る。胎土に砂粒を含み、黄褐色を呈する。軟質の土器である。

石製品

石斧(21) 玄武岩製の磨製石斧であるが、敲打成形段階である。刃部、基部ともに欠いているが、基部に対し、刃部幅が幅広い形態である。現存長7.6cm、最大幅6.5cm、最大厚4.3cmを測る。敲打を全面に行うが、表裏面に打裂痕を、又、右側辺には節理面を残している。

2号溝出土遺物 (Fig. 89, PL. 62)

土師器

壺(22, 23) 大・小の二種がある。22, 23は口径と底径比は大きく、器高は深い器形である。いずれも糸切り底である。22は口径13cm、底径6.9cm、器高3.5cmを測る。調整は摩滅のため

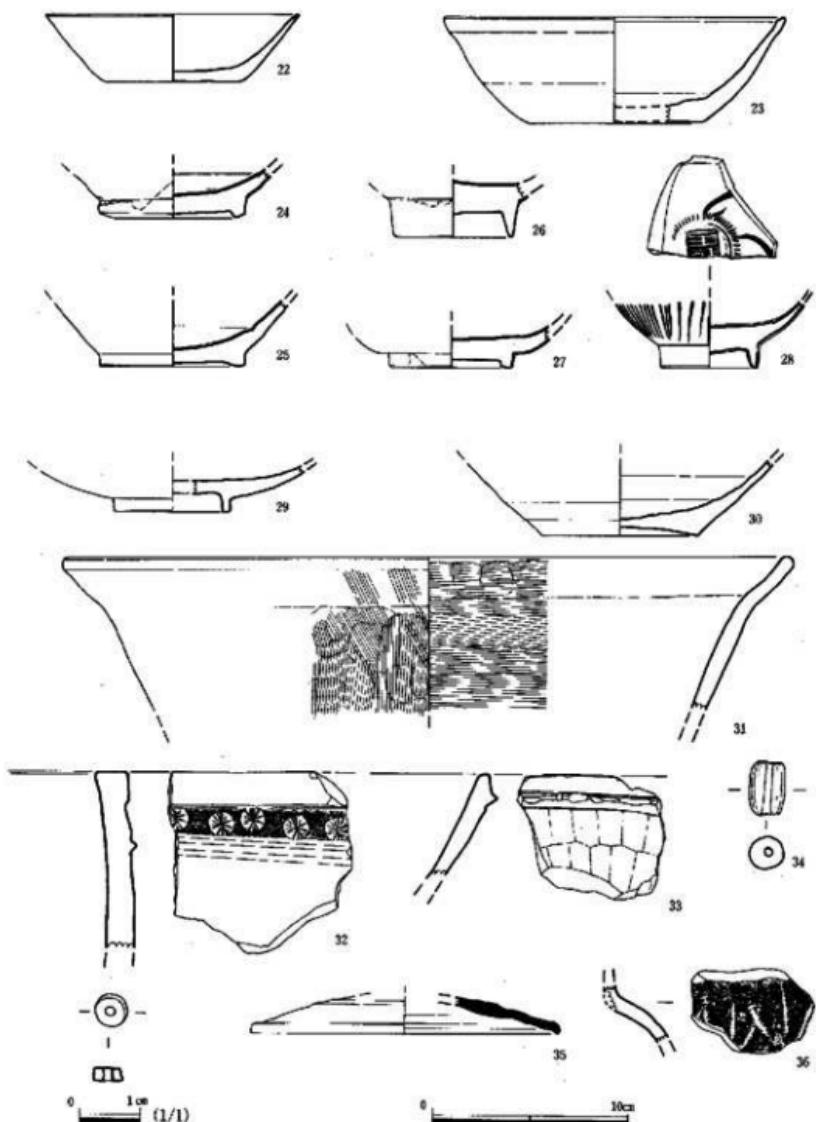


Fig. 89 2号满出土遗物 (1/3, 1/1)

不明である。23は口径17.6cm、底径8.9cm、器高5.5cmを測る。体部下半は丸味をもっている。体部内外面はヨコナデ調整である。胎土はいずれも精良で、23には雲母、長石等の粒子を含む、22は黄灰色、23は黄褐色を呈する。

白 磁

碗(24~26) 24・25は玉縁口縁を有するもので底径はいずれも7.3cmを測る。24の高台内側のケズリはやや深い。26は口縁端部が小さく外反する端反りの碗である。高台径6.2cmを測る。太宰府史跡の分類では24・25がIV-1、26がV-3に相当する。^{#2}

皿(29) 復元高台径6cm、現存高2.5cmを測る。高い高台を有し、体部は丸味をもつ。内底には小さな段を有している。釉は外底まで施すが、疊付は搔き取っている。釉は透明で、細かい貫入がある。胎土は黄味を帯びた白色を呈している。焼成が弱く陶器質を呈する。

皿は小形品が他に1片あって、乳白色釉である。

その他、白磁皿1点、碗片2などがある。

青 磁

碗(27, 28) 27は高台径5.3cmを測る。高台内側のケズリは浅い。釉は暗濃緑色を呈している。疊付と外底は露胎である。胎土は暗灰色である。28は龍泉窯系で、高台径4.9cmを測る。高台が高く、蓮子碗である。緑灰色の釉を厚目に施し、外底は輪状に搔取りを行う。高底に粘土の目痕が残る。内底には「顧氏」銘の印文を施し、周囲にはヘラによる櫛歯文をあしらう。体部は内面ヘラ片彫りの雲文で、外面は線状の退化した蓮弁を施す。「顧氏」銘をもつのは15世紀後半をさかのばないと云われ、15世紀末~16世紀初頭に位置付けられる。^{#3}

その他、龍泉窯系の碗で、体部外面は2条と1単位とした線描きの蓮弁を施し、内面には蓮弁を浮き彫りにしたもののが1点出土している。28と同時期であろう。

陶 器

甕(30) 碗中より検出。褐釉陶器で、底径8cmを測る。上げ底で、体部には水引き痕が残る。外面は黒褐色、内面は暗茶褐色である。胎土には砂粒を含み、黄褐色を呈する。

土師質土器

鍋(31) 1/10片より復元。口径37.6cm、現存高8cmを測る。体部は直線的で、口縁部は内弯する。頸部の屈折は緩やかである。外面はタテハケ調整で、口縁部はヨコナデである。内面はヨコハケ調整である。体部外面は媒が厚く付着する。胎土に砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。

瓦質土器

火舎(32) 碗中より検出。器壁の厚さ1.5cmを測る。口縁端部は平坦である。口縁端部外面は帶状に隆起させ、下位に三角突帯を設ける。この間には菊花文のスタンプを施す。胎土に細砂粒を含み、黄灰色を呈する。

土製品

土鉢 (34) 磚中より出土。長さ2.8cm、最大幅1.8cmを測る。円柱状の環状土鉢である。孔径は3~5mmを測る。胎土は細砂粒を含み、灰色を呈する。

石製品

石鍋 (33) 小型品である。器壁の厚さ0.8~1.1cmを測る。口縁部は平坦である。口縁部外面には小さな三角突帯を作り出している。突帯から内面にかけては丁寧なケズリを施し、痕跡を残さない。外面はタテ長のケズリ痕である。石材は良質である。

その他滑石製の石鍋片は3点ある。

包含層及びpit出土遺物 (Fig. 89)

須恵器

蓋 (35) 包含層出土。復元口径16cmを測る。体部はやや丸味をもち、口縁端部を下へ引きのぼして屈折をつける。天井部は時計回りのヘラケズリを施す。胎土には微砂を含み、灰色を呈する。

瓦質土器

湯釜 (36) 住居跡の中世pit出土、破片のため器形の復元はできない。口縁部は、ほぼ直立する。肩部には交差した鋸歯状文様を施す。貝殻腹縁を施文具としている。内面には指圧調整痕が残る。外面はヨコナデ調整で、黄灰色を呈する。

その他、搅乱土からは古伊万里系や唐津系の陶磁器、青磁、白磁、水注破片、須恵器、瓦器片、凝灰岩製の石臼片、砂岩製の砥石、玄武岩製の磨石が出土している。

4) 小結

以上、述べたように、当該地では弥生時代前期から近世におよぶ、遺構や遺物を検出した。これらはI期-弥生時代前期、II期-古墳時代の初頭、III期-奈良時代、IV期-中世末、V期-近世初頭に分けられる。I期の1号溝は九州大学の第1次・第2次調査によって、約60mの長さが確認されていたが、第95次調査の結果、この溝が台地を取り巻くのではなく、西側に面した広く浅い谷を取り巻く形で、台地を横断していることが判明した。詳細は第95次調査で検討したい。II期の2軒の住居跡はいずれも布留式土器盛行期の土器である。住居跡の形態は、規模からみて、四辺にベッドを巡らした形状をとるものと思われる。北側の第6次調査検出の1号住居跡と同形態をもち、集落小単位を形成するものであろう。III期は奈良時代の掘立柱建物であるが、包含層上の坏蓋が手懸りを与えるが、実証するには至らない。この建物の主軸方位は磁地にあって、第55次調査検出の2号建物とは約8°、第56次調査1号建物とは約1'30°、第82次調査2号建物とは約7°の誤差であり、ほぼ同一方向と云えるので、これらの建物と同時性

を示すものの、構造上の相違から居館的な建物と考えたい。IV期の2号溝は、既述したように矩形に曲がる砾敷きの溝である。溝は排水施設をも兼ねたもので、東側の台地縁辺へ傾斜する。出土遺物には明代の青磁(19)や白磁皿(16)や薄手の白磁端反り皿などがある。16世紀初頭の時期が比定できよう。V期は4号土塙(上塙基)である。出土遺物には、青磁碗(5)や赤絵付碗などがあるが、赤絵付碗は体部が球体に近く、伊万里初期碗の形状に近似しているので、16世紀後半～17世紀初頭の時期を与え、今後の検討課題としたい。

註1 福岡市教育委員会「有田跡跡－福岡市有田古代集落跡第二次調査報告」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集 1968

註2 森田熱・横田賢次郎「太宰府出土の輸入制器について」「九州歴史資料館研究論集4」1978

註3 上田透夫「14～16世紀の青磁の分類」貿易陶磁研究No.2 1982

註4 亀井明徳「日本出土の明代青磁の変遷」鏡山先生古稀記念古文化論叢 1980

Tab.6 第87次調査 4号土塙出土鉄製釘観察表

番号	部 位	形 無	長さ(cm)	厚さ(cm)	断面の形状	本質の有無	備 考
1	体 部	脚部下位で折れ曲り、L字状	4.3 + e	0.85	方形		
2	脚部～体部上半	直 線 状	3.7 + e	0.5	角形?	角形?	○
3	体部下半、先端部欠損	直 線 状	3 + e	0.5～0.8	方形		
4	脚部?	脚部がやや外方へ曲がる	2.4 + e	0.4	方形		
5	脚 部	直 線 状	3 + e	0.6	角形?	○	
6	足 形	直 線 次	3.9	0.6			
7	脚 部	直 線 次	2.2 + e	1.2	0.4	方形	○
8	脚 部	直 線 状	3 + e	1.5	0.6	長方形	○
9	脚部?	直 線 状	3.2 + e	0.7	方形?	○	
10	足 形	脚部下位で折れ曲り、走し字状	6	1.5	0.5	方形	方形
11	脚 部	直 線 状	4 + e	0.6	方形	○	
12	脚 部	直 線 状	5.5 + e	0.6	方形		
13	脚 片	脚片のため不明					
14	脚部?	直 線 状	3 + e	0.7	方形		重複?本行書きといふ
15	足形、先端部欠損	中央部がL字状に折れた曲る	8 + e	0.6	方形	方形	
16	脚 部?	直 線 状	4.5 + e	0.5	方形		
17	先端、先端部欠損	直 線 状	6.5 + e	1.2	0.6	方形	
18	脚 片	脚片のため不明	1.8 + e	0.4	方形		
19	脚 片	脚片のため不明	1.5 + e	0.4		○	
20	脚部～体部上半	直 線 状	4.8 + e	0.6	方形	○	
21	脚 片	直 線 状	1.4 + e	0.6	方形		
22	脚 片	直 線 状	3.1 + e	0.5	方形		
23	先端、先端部欠損	脚部下位でL字状に折れ曲る	8.3	1.3	0.6	方形?	
24	足 形	脚部下位でL字状に折れ曲る	1.3	0.6	方形	○	
25	脚部下半～先端部	脚部下位がくの字に曲がる	4.9 + e	0.85	方形	○	
26	脚 片	くの字に曲がる	1.0 + e	0.55	方形?	○	
27	脚 部	くの字に曲がる	3.1 + e	0.45	方形		
28	脚 部	直 線 状	4.8 + e	0.5	方形		
29	脚部下位を欠損	4.7 + e	1.2	0.6	方形		
30	脚部～脚部上半	直 線 状	3.8 + e	1.3	0.65	方形	
31	脚部～先端部	先端部がL字状に曲がる	3.6 + e	0.5	方形	○	
32	脚部?	直 線 状	4.8 + e	0.8	方形	○	
33	先端部～脚部上半	脚部下位がくの字状に曲がる	5.0 + e	0.6	方形	○	
34	足 形	脚部下位がくの字状に曲がる	9.5	0.9	0.6	方形	○
35	脚部?	直 線 状	3.5 + e	0.6	方形	○	他の数据が付與

7. 第95次調査

1) 調査地区の地形と概要

当該地は福岡市早良区有山1丁目31-4に所在し、調査対象面積は約657m²である。

有田地区は標高12~14mを測る平坦地を形成しているが、この平坦地の西側、北西方向からの谷頭付近に位置し、標高12.5mを測る。周辺では第12次・第31次・第57次調査を実施しており、古墳時代～中世の遺構・遺物を検出している。当該調査の旧地目は畠地である。

発掘調査は倉庫建設に伴うもので、調査期間は昭和59年7月25日～8月25日までである。既述のとおり、この地域は区画整理が行われており、当該地も又、著しい削平を受け、遺構の遺存状態は悪い。周辺の調査では古墳時代初頭～中墳の住居跡、掘立柱建物、奈良時代と考えられる掘立柱建物、16世紀代の漆などを検出している。表土は約20cmの耕作土であるが、遺構は耕作上下のローム層上面にて検出できる。

遺構は弥生時代前期の溝1条、古墳時代住居跡1軒+α、古墳時代～中世の土塙4、中世の濠2条、近世の道路状遺構1条を検出した。遺物には縄文晩期夜白式土器、偏平片刃石斧、土師器壺、青磁碗、白磁碗、明の染付、李朝皿、備前鉢などがある。

2) 遺構各説

昭和41～43年の区画整理のため削平を受け、住居跡や土塙の遺存状態は悪い。一部に炉跡のみを検出した。又、Pit群も数の上からも少なく削平の著しさを物語っている。

住居跡

1軒の住居跡を検出した。他に2号溝の西南側にも円形炉を検出しており、この炉は住居跡に伴う炉と思われる。1号住居跡は、1号・2号溝と重複している。

1号住居跡 (Fig. 91, PL. 64, 65)

1号・2号溝の東北側で重複しているため、構造が不明確である。2軒の住居跡の重複も考えられるが、周壁が完全に削平されており、実証は困難である。よって、2枚の図を掲載し、検討材料としたい。上をA面、下をB面と呼称する。住居跡の北側は2号溝に切られており、東側は削平のため周溝、壁を失う。かろうじて、西側・南側にて周溝を確認した。住居跡の南北現存長は5.1m、東西現存長は4.4mを測る。A図は遺構面でのプラン確認を行った段階で検出したものである。周溝は周壁下に巡り、ベット下には巡らない。幅10~12cm、深さ6~8cm

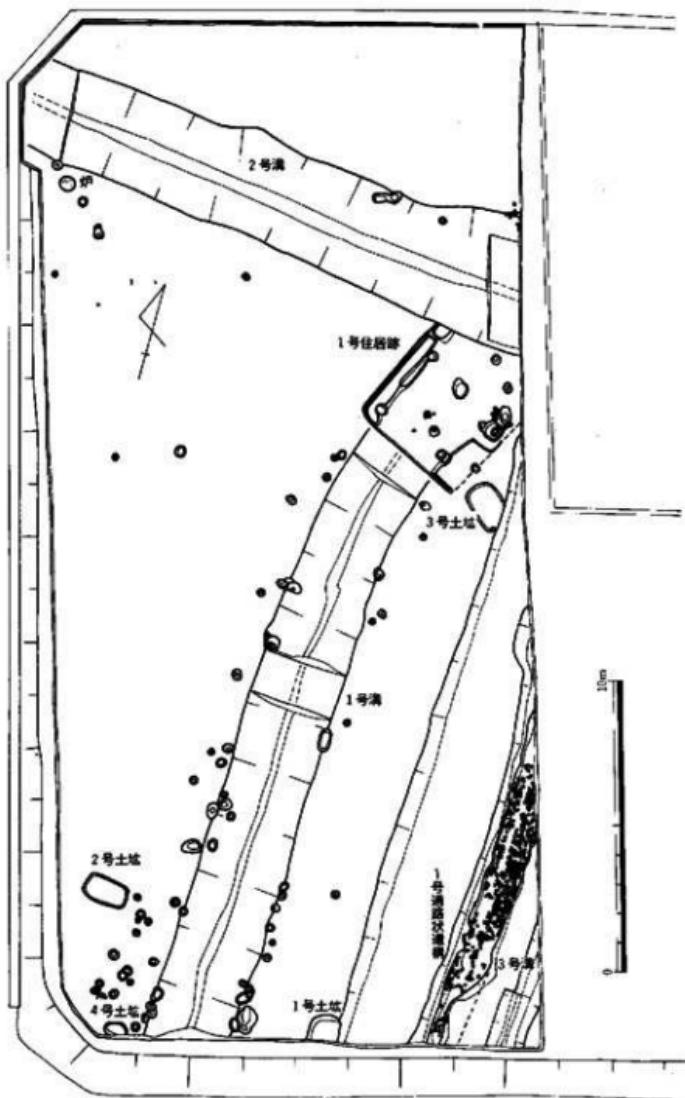


Fig. 90 第95次調査構造配置図 (1/200)

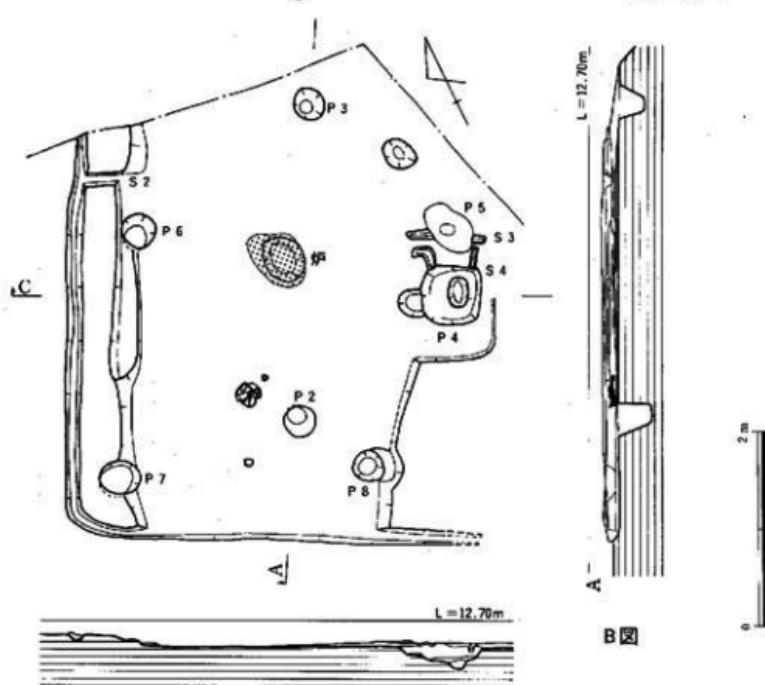
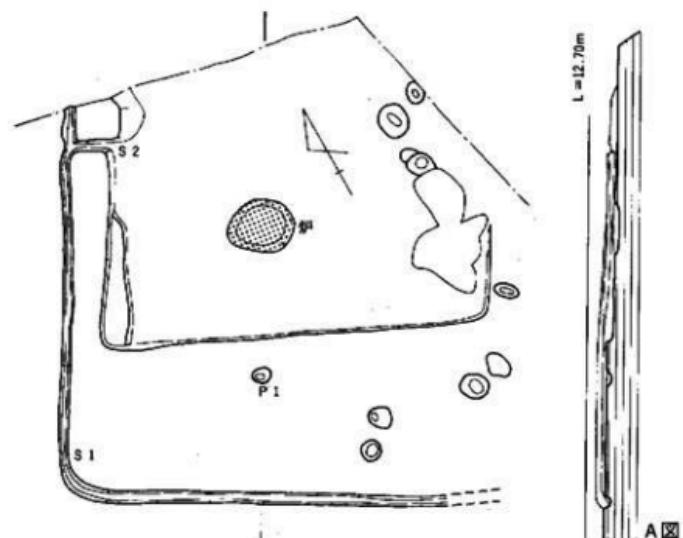


Fig. 91 1号住居跡A・B図 (1/60)

を測る。周溝 S 2 は A 図では用途不明の溝である。周溝の内側には高さ 10cm ほどのコ字型に巡るベッド状遺構が付設されるが、南側が幅 155~180cm を測るのに対し、西側は幅 45~60cm の狭いものである。東側は周溝が削平されているため、幅は不明である。西側については、ベッドと床面の境が、丁度、1 号溝の肩のラインとも一致しており、ベッド幅の確認が充分ではなかった事も考えられよう。但し、炉の位置からみて、南に対し、東西のベッド幅が狭いことは充分に考えらる。炉の位置は A・B 図共に中央に位置するが、形状や焼土の状態は相違する。炉は 55cm × 77cm を測る。A 図での主柱は不明である。B 図は、更にタタキ状の床面を掘り下げるものである。P 2, 3 は炉を挟んだ位置に対峙する主柱で、径 33cm、深さ 25~35cm を測る。P 4 は方形を呈し、径 60cm、深さ約 20cm を測る。墻底には長さ 30cm の楕円形 Pit が存在する。この pit は入口部に相当するもので、楕円形 Pit は梯子の差し込み跡と考えて良いだろう。P 4 の北側には小溝 S 3 が存在するが、この小溝はベッド下を巡る周溝と考えられ、A 面で検出した小溝 S 2 と対応すると思われる。柱穴はベッド上に作られるることは無いから、柱穴 P 3 の北側をベッドの縁とすれば、ベッドはコの字形に巡るものと考えられる。南側は周壁が確認できないので推測はできないが、ベッドが存在しない方が大である。又、P 4 に接して、南北方向の小溝 S 4 が存在するが、この周溝はやはり、壁下の周溝を表らわすもので、出入口の P 4 の位置からみて、P 4 の東側が壁であったと推定できる。よって、この住居跡は 2 軒の住居跡と考えられるが、削平や重複関係から規模、構造を判断することは困難である。遺物は弥生時代終末期の土器が、B 図の床面から出土しており、又、これらの住居跡覆土からは、布留系の二重口縁壺片が出土している。これらの遺物の時期差が、住居跡の重複関係の手配りでもある。

2号住居跡

削平のため、平面形は不明である。炉のみを検出したものである。炉は不整円形を呈し、断面は皿状である。径約 60cm を測り、内部には焼土、炭化物がつまっていた。

土 塚

覆土は黒褐色粘質土や暗茶褐色粘質土があり、古墳時代及び、12世紀~16世紀までの中世の時期が考えられる。

1号土塚 (Fig. 92)

両側境界地にあって、近世の道路から東側が破損を受ける。平面形は隅丸長方形を呈しており、現存長 1m、現存幅 1.06m、深さ 22cm を測る。主軸方位は N 5°30'W である。覆土は暗茶褐色粘質土である。遺物には瓦質土器の湯釜が出土している。

2号土塚 (Fig. 92)

平面形は隅丸長方形を呈し、西側が幅広い。断面形は逆梯形状である。長さ 1.49m、幅は西

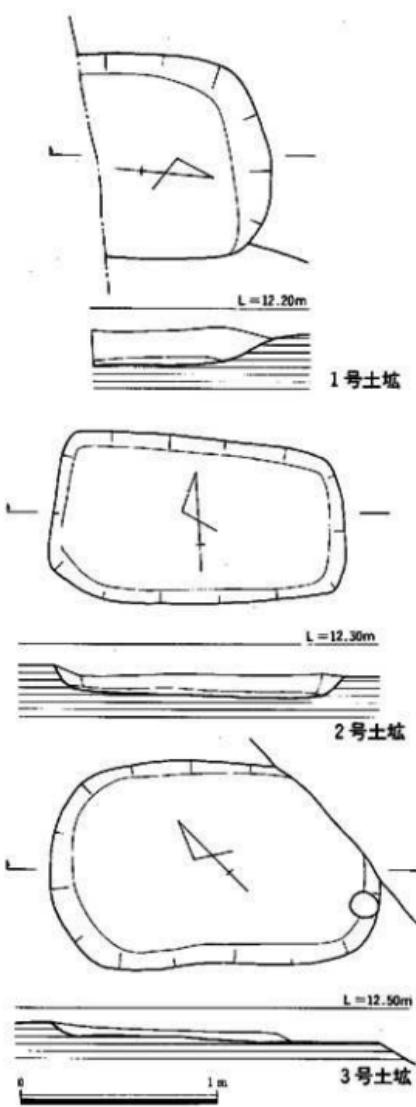


Fig. 92 1号～3号土塙 (1/30)

側が0.68cm、東側が0.87cm、深さ11cmを測る。主軸方位はN87°Wである。覆土は黒褐色粘質土である。覆土からは青磁碗片が出土している。

3号土塙 (Fig. 92, PL. 65)

近世の道路状造構で切られ、東側を破壊する。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。最大長1.69m、最大幅1.06cm、深さ11cmを測る。主軸方位はN45°Wにある。覆土は暗茶褐色粘質土である。遺物は無いが、中世の遺構である。

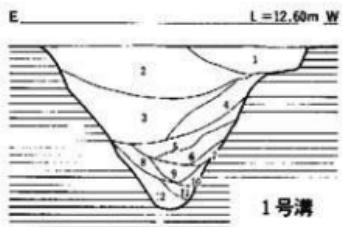
4号土塙 (Fig. 90, PL. 65)

南側の境界地にある。平面形は梢円形を呈し、断面形は逆梯形である。最大長は0.79m、最大幅は0.5m、深さ20cmを測る。主軸は東西方向である。覆土は黒褐色粘質土で、遺物の出土は無い。

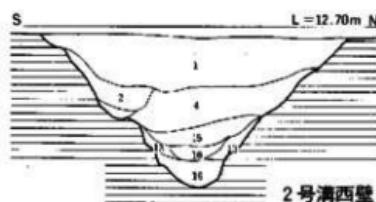
溝

1号溝 (Fig. 93, PL. 66)

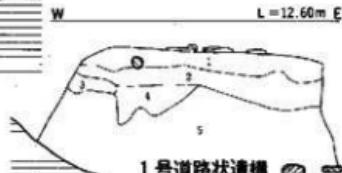
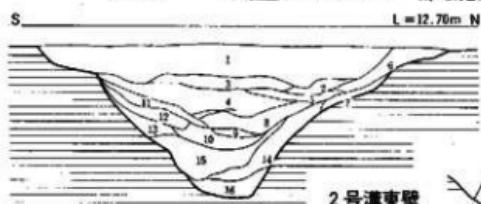
主軸を南北方向においているが、やや弧形を呈した溝である。北側では1号住居跡、2号溝と切り合う。断面形はV字形を呈し、一部箱築研堀状を呈している。溝の現存長27m、最大幅4m、深さ1.7mを測る。溝底は南側へ傾斜する。覆土は黒褐色粘質土を主体としており、中層には褐色粘質土が存在するため黒褐色粘質土は大きく、上・下の2層に分離できる。レンズ状堆積である。遺物は第1・2層から主に出土し、



- 1号溝土層名跡
1. 黄褐色砂土 (黄褐色粘土質の粒子を若干含む)
 2. 粘土質砂土 ()
 3. 黄褐色粘土 (2よりも粒子を多く含む)
 4. 明褐色粘土質土 (黄褐色粘土ブロックを少し含む)
 5. 黄褐色粘土 (3よりも少く含む)
 6. 明褐色粘土 (黄褐色粘土ブロックを少し含む)
 7. 黄褐色粘土 (5よりも多い)
 8. 明褐色粘土質土 (6よりも多い、黄褐色粘土を少し含む)
 9. 黄褐色粘土 (5よりも少く含む、黄褐色粘土を若干含む)
 10. 黄褐色粘土 (やや混ざったい、10よりも少ない)
 11. 黄褐色粘土 (やや混ざったい、黄褐色粘土質土粒子を若干含む)



- 2号溝土層名跡
1. 黄褐色砂土 (ローム粒子、黑色粘土ブロックを含む)
 2. 1よりも多い (ローム粒子多量)
 3. 1にローム小ブロック、無色砂土小ブロック多く含む
 4. 1よりも多い (黒色砂土少)
 5. 2にロームの中程度ブロック含む
 6. 1よりも多い
 7. 5よりもやや多い
 8. 4よりもやや多い、黑色土の小ブロック多く含む
 9. 黑褐色土 (ワーム粒子少量)
 10. 黄褐色粘土
 11. 8よりもやや多い
 12. 黑褐色粘土
 13. 黑褐色土、ローム中程度ブロック多い
 14. 13にローム・粒子少含む
 15. 黄褐色粘土質土
 16. 黄褐色粘土上



- 1号道路状造構造土層名跡
1. 明黄色土
 2. 暗灰褐色土 (1の粒子を若干含む)
 3. 暗灰褐色土 (1の粒子を若干含む)
 4. 暗灰褐色土 (1及び施工粒子を含む)
 5. 暗灰褐色土

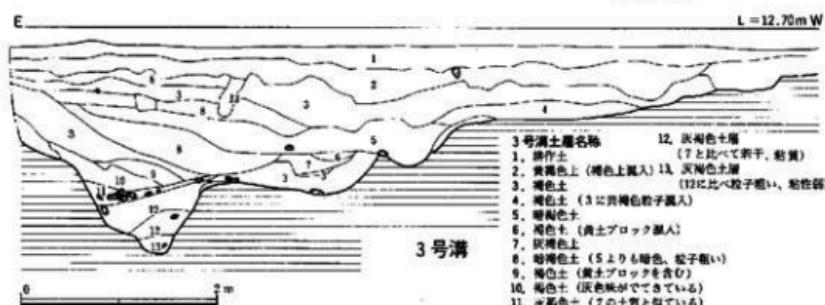


Fig. 93 1号～3号溝土層図 (1/60, 1/20)

下層からの出土は著しく少く、時期比定できる遺物は無い。この溝は第87次調査の項で述べたように弥生前期初頭の溝に接続するもので、この間の溝は第77次調査^{第1}、第18次調査^{第2}、第56次調査^{第3}によって連続することを確認している。この溝の範囲を推定する判断する材料は増加しており、後述したい。遺物は縄文時代晚期の夜臼式土器、壺、壺、及び扁平片刃石斧、投弾が出土している。

2号溝 (Fig. 93, PL. 67)

東西方向の溝である。断面形はV字形、又は箱蓋研堀を呈している。覆土は暗茶褐色粘質土を主体としており、ローム粒子を含んでいる。又、下層は八女粘土やロームのブロックが多量に落ち込んでいる状態であった。溝の現存長19m、幅は3.5~4.5m、深さ1.56~1.6mを測る。溝底は若干、東へ傾斜する。この濠は第77次調査等で検出した濠と同規模、同時期の造構で、郭を形成する溝の一部である。遺物は各層から出土したが、白磁碗、青磁碗、明代の染付碗、李朝の皿、備前鉢、瓦質土器などがある。

3号溝 (Fig. 93, PL. 67, 68)

調査区の南東隅にて検出したため、全形は不明である。この溝の上部には近世・現代の道路状遺構が重複している。土層図で見ると、この溝は二段掘りで、一段目は逆梯形、二段目は箱蓋研堀である。一段目の現存幅は3.8m、現存の深さ約1m、二段目は幅1.4m、深さ0.9mを測る。現存長は約11.5mを測るが、二段掘りの状態は南から約2mの長さで終り、北側は一段目の逆梯形の溝状を呈す。又、約16m北側には水溜り状の方形袋部を形成しており、ここで溝は終るものと思われる。こうした例は、第77次調査の2号溝が相当し、一段目約2.5~3.0mを測る袋部を形成している。当該溝が、2号溝に対して直交する位置にあることも第77次調査例と同様である。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とし、二段目の土層は灰褐色粘質土である。遺物は白磁碗、青磁碗、備前鉢、滑石製石錘が出土している。

道路状遺構

1号道路状遺構は疊敷のため、道路として仮定した。2号道路状遺構は単に幅広く、逆梯形の断面形を呈しているため、切通しの道路と考えたに過ぎない。

1号道路状遺構 (Fig. 94, PL. 67)

3号溝と重複しており、3号溝より後出する。土層観察によれば、3号溝の一段目を利用し、西側肩に偏在している。3号溝の埋没が終っていない段階で、幅約1m、高さ約30cmの基段状部を作る。その上部に明黄褐色粘質土や暗灰褐色粘質土によって、2~3枚の版築を行い、上部に径0.3~1.5cmの礫を填圧している。又、基段状部を作る際、3号溝の西側肩を削り、幅85cm、深さ約50cmの側溝を設けている。同様に、道路状遺構の東側にも2号溝を利用して幅広い側溝を設ける。道路状遺構は逆台形の断面形を呈し、上部幅は80cm、下部幅は1m、高さは

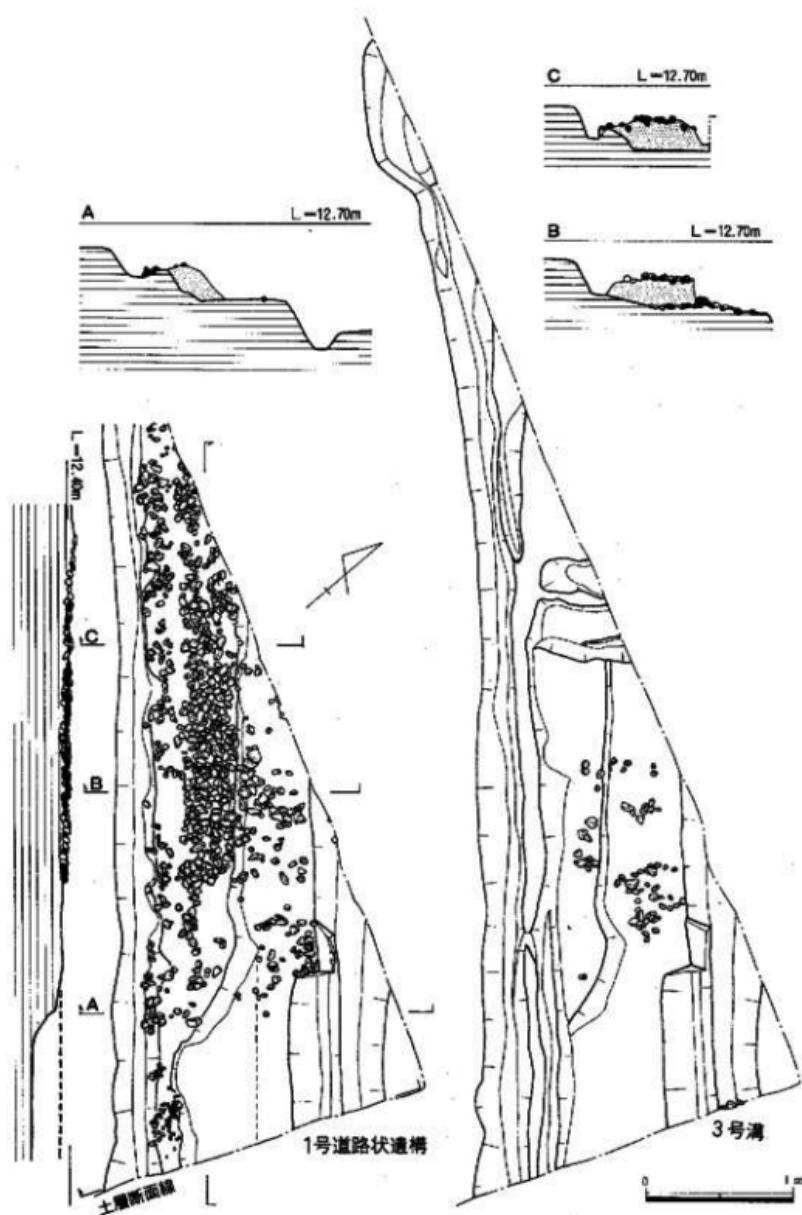


Fig. 94. 1号道路状遺構, 及び3号溝 (1/40)

基底面から約40cm、西側の側溝底面から約15~20cmの高さである。現存長は11.5mを測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。遺物は青磁碗、白磁碗、古伊万里碗、青銅製品がある。特に近世陶磁は礎敷中より多数検出した。江戸時代の遺構である。

2号道路状遺構 (Fig. 94, PL. 67)

現存幅約7m、深さ約30cmの断面形逆梯形状を呈した掘り込みが、現存長22mに亘っており、農地の区画部としては不自然なため道路とした。区画整理以前のもので、近代・現代であろう。

3) 遺物各説

1号住居跡出土遺物 (Fig. 95, PL. 69)

いずれも住居跡下面 (B図) から出土したものである。上面 (A図) から出土した遺物には布留式併行期の二重口縁壺片や在地系の甕片がある。

土師器

鉢 (1) 完成品である。口径15.6cm、器高13.1cmを測る。口縁部はくの字形に外反する。体部は球体で、底部は約2.5cmの平底状を呈している。口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ調整、内面はナデ調整である。胎土に砂粒を含み、黄褐色を呈する。

壺 (2, 3) 2は口径18.2cmを測る。口縁部はくの字形に外反し、端部は平坦である。頸部に三角突帯を貼付け、指、又は棒状のもので、波形に刻みをつける。3は大形の甕で、くの字形口縁部を有す。頸部に幅広い帶状の突帯を貼付け、X字形のヘラ刻みを施す。いずれも胎土に砂粒を含み、2は暗褐色、3は黄灰色を呈す。

石製品

敲打具 (4) 玄武岩の転砾を利用している。現存長13cm、最大高8.4cm、最大厚3.4cmを測る。A面と右側辺には自然面を残している。左側辺は破損しているが、再度の調整痕がある。上下の小口部は両面より打欠いて、先端を尖らせており、この部分を使用している。上小口尖端は丸味をもち、茶褐色に汚染されている。下小口先端は使用のためつぶれている。最も頻繁に使用している。全体に敲打痕があつて、特にA面の中央部に敲打痕が集中する。

1号土塙出土遺物 (Fig. 95, PL. 69)

瓦質土器

湯釜 (5) 復元口径16.5cmを測る。口縁部は直立し、頸部は内面に段を有す。口縁部外面に梅花文と菊花文の印文を交互に施す。体部外面はヘラヨコナデ調整、内面には炭素が吸着する。胎土に砂粒を含み、内外面は暗灰褐色を呈する。

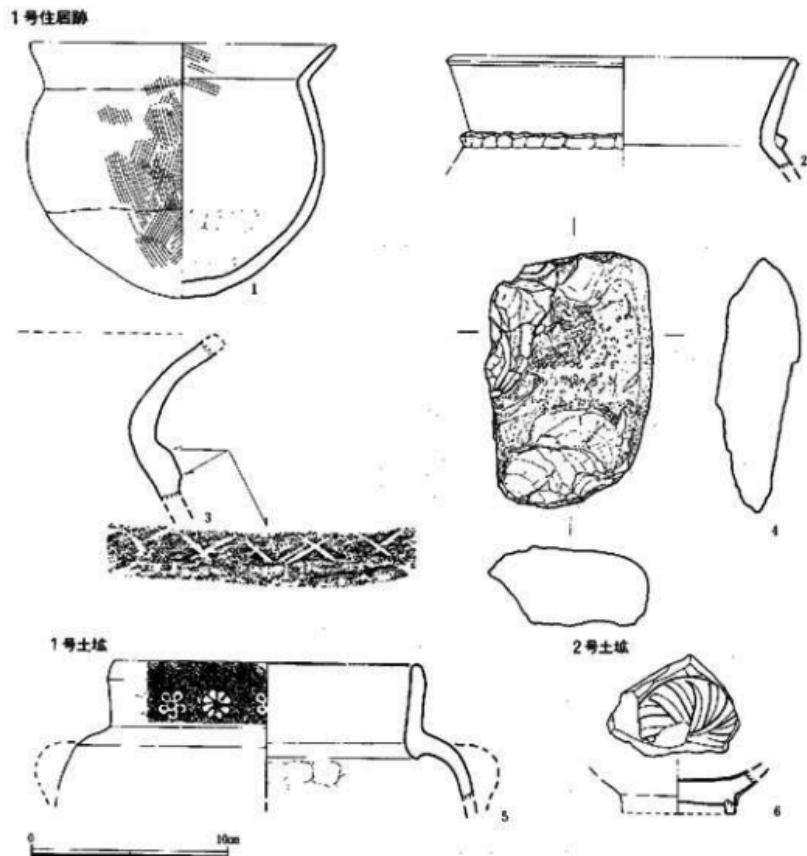


Fig. 95 1号住居跡・1号・2号土塙出土遺物 (1/3)

2号土塙出土遺物 (Fig. 95, PL. 69)

青 磁

碗 (6) 破片であるが、復元高台径は5.9cmを測る。灰緑色釉を厚目に施す。内底にはヘラ片彫りの捻花文を施す。

1号溝出土遺物 (Fig. 96, PL. 69, 70)

いずれも第1層～第3層の間からの出土である。第1層からは12、第2層からは7～10、第

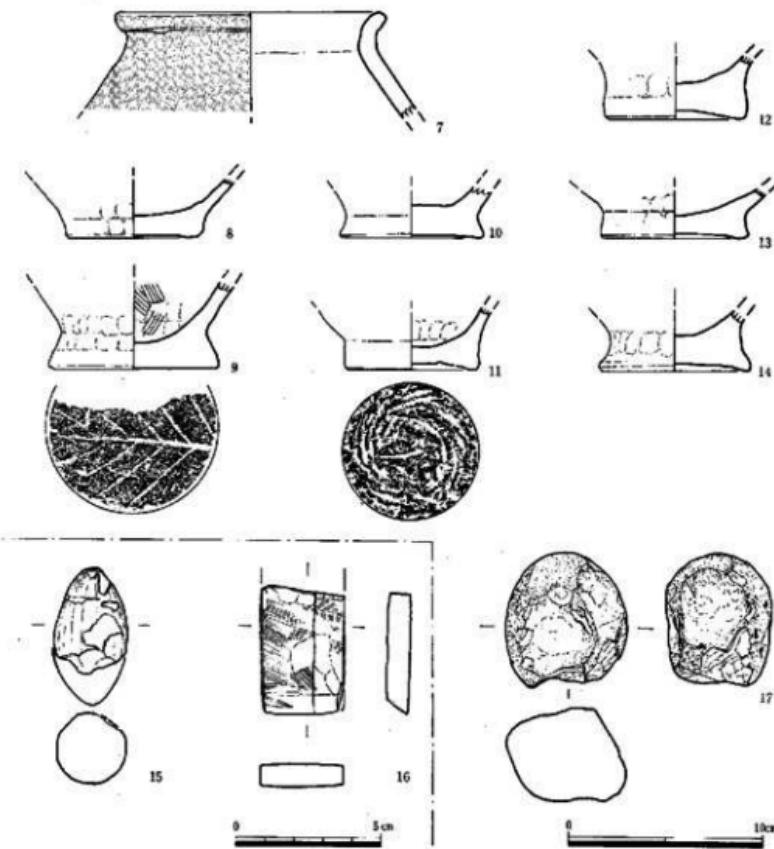


Fig. 96 1号溝出土遺物 (1/3, 1/2)

3層からは11が出土した。

縄文式土器

壺(7, 8) 7は口径14cm、内傾した頸部に小さく外反させた口縁部がつき、端部は丸味を有す。口縁部内面と外面は、ヨコナデ調整である。8は底径7.0cmを測る。円盤貼付状の厚みを有している。

7は胎土に砂粒を含み、褐色を呈する。

甕(9~14) 底部片である。底径は7.3~8.8cmを測る。9・10・13・14の底部縁辺は外方へ

の張り出しが強く、11・12の縁辺張り出しは弱い。11～14は上げ底である。胎土に砂粒を含み、8・9・11・13は黄褐色、10・12は暗黄褐、14は暗褐色である。

土製品

投弾（15） 第1層出土。約1/3を欠く。現存長3.6cm、最大径2.5cmを測る。砂粒を含み、暗褐色である。

石製品

偏平片刃石斧（16） 第2層出土の基部を欠いている。現存長4.4cm 最大幅2.8cm、厚さ0.8cmを測る。研磨非常に丁寧である。刃部は裏面から研ぎをしている。頁岩である。

敲打具（17） 第1層出土。玄武岩製である。角礫を用いており、4面には打裂面を残している。丸味をもった部分には敲打痕が残るが、風化が著しい。最大長6.6cm、最大幅6.5cm、最大厚5.5cmを測る。

2号溝出土遺物 (Fig. 97, PL. 70)

土師器系切り底皿、青磁片、白磁片、明の染付碗、李朝皿、備前鉢などが出土した。

青 磁

碗（20, 23） 20は龍泉窯である。高台径4.4cmを測る。青緑色の釉を高台内側まで厚目に施す。胎土は灰色である。23は高台径5.6cmを測り、断面はコの字形の高い高台である。青味を帯びた緑色釉を厚目に施し、外底は搔き取る。高台外面の釉垂れは著しく、粗い貫入がある。焼成は弱く、胎土は淡灰色である。明代である。

皿（21, 22） いずれも李朝の皿である。いずれも底径は4.8cmを測る。21の豊付は両端を削るため尖がり気味である。21は透明釉を施す。骨付には目痕がある。胎土は灰色である。22は刷毛目手と云われるもので、白濁色の土を体部内外面に刷毛掛した後、透明釉を施す。内底と骨付に目痕がある。胎土は黒灰色を呈する。

染 付

碗（18, 19） 18は饅頭心の碗、19は蓮子碗である。18は小野氏編年E群に、19はC群Iに分類できる。^{註5}18は見込みに界線を施し、内底には折菊をあしらう、外底には「富貴佳器」をスタンプする。19の内面には口縁部と見込みに界線を、内底には蓮花文を施す。外面口縁部に界線を施し、その間に波瀾文を施す。脚部には芭蕉葉文を描く。又、腰部に2条の界線がある。釉は乳白色で、19は厚目の釉と青味を有している。高台豊付はケズリ取っている。

陶 器

摺鉢（26） 口縁部は肥厚し、逆くの字形を呈し、外面に2条の凹線を巡らす。内外面はヨコナデ調整。内面には8本単位の条痕を施す。胎土に微砂を多く含み、茶褐色を呈する。備前焼で、V類に位置づけられる。

註5

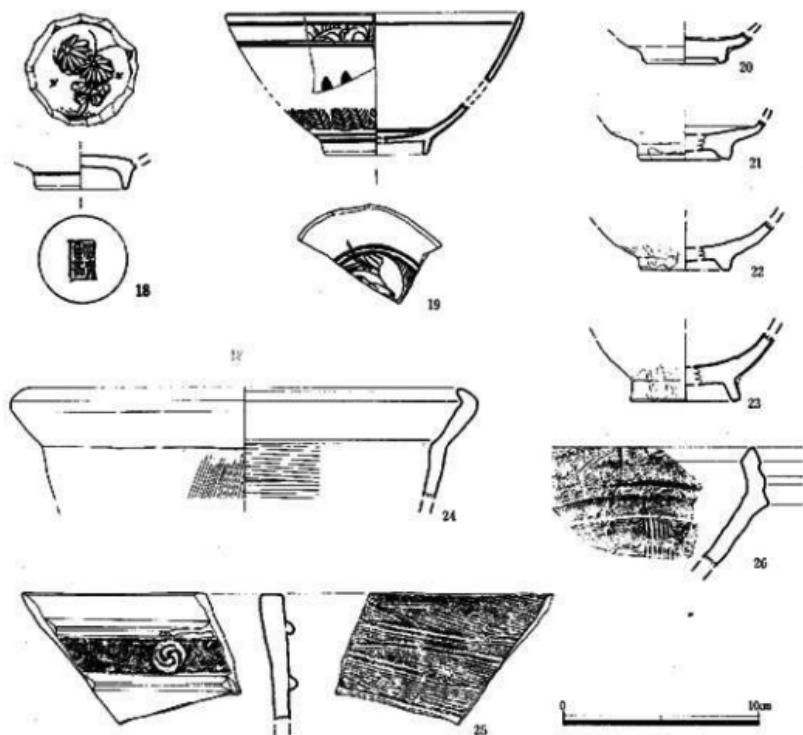


Fig. 97 2号溝出土遺物 (1/3)

瓦質土器

鼎(24) 復元口径24.2cmを測る。口縁部は内弯気味に外反し、口縁端部を内側へつまみ出している。体部内面はヨコハケ、口縁部内面、及び外面はタテハケ後ヨコナデ調整である。胎土は、精良で、黒色を呈する。

火舎(25) 体部は直立気味である。口縁部は肥厚し、端部は平坦で、器壁は0.8~1.3cmを測る。外面に2条の突帯を施し、その間に巴文を印文する。内面の口縁部より下は粗いヨコハケ調整である。胎土は精選されており、上位は灰色、下位は黄灰色である。

3号溝出土遺物 (Fig. 98, PL. 70)

白磁

碗(32, 33) 32は玉縁口縁を、33は端反りの口縁部を有する。底径は32が7.7cm, 33が7.1cm, 32の釉は灰緑色釉で、内底に施す。33の釉は灰色で、内面に施すが、見込は輪状に焼き取っている。外面は露胎である。32は大宰府史跡のIV-I類、33はVII-I類に相当する。
註7

陶 器

摺鉢(34) 備前系である。2号溝出土の鉢と同器形である。逆くの字形の口縁部を有している。胎土に砂粒を含む。口縁部外側は黒灰色、他は茶褐色を呈す。備前編年のV類である。
註6

石製品

石錐(35) 滑石製の有溝石錐である。長さ9.9cm、最大幅3.2cm、厚さ2cmを測る。溝幅は0.7~0.9cm、深さ0.4~0.6cmを測る。鑿の痕跡が残る。

1号道路状遺構

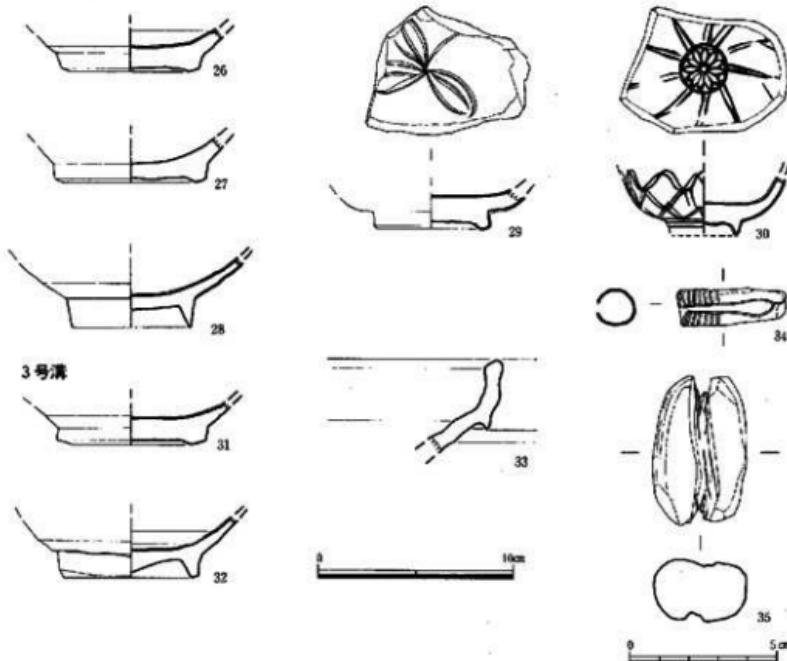


Fig. 98 3号溝、1号道路状遺構出土遺物 (1/3, 1/2)

1号道路状遺構出土遺物 (Fig. 98, PL. 70)

27・29・31・36は覆土より出土、30は疊中より出土した。

白 磁

碗(26~28) 26, 27は玉縁口縁を、28は端反りの口縁部を有す。底径は26が7.1cm, 27が7.8cm, 28が6.2cmを測る。26・27は内面に施釉し、釉は26が灰緑色、27が黄白色である。28は外画下位まで施釉し、灰緑色を呈する。粗い貫入がある。大宰府史跡分類では、26・27がIV-I類に、28がV-3類である。

青 磁

碗(30) 龍泉窯系である。底径6cmを測り、緑黄色釉を高台内側まで施す。内底にはヘラ片彫りの蓮花文を施す。焼成が弱いため、釉が溶け切っていない。

染 付

碗(31) 伊万里系の碗である。高台径3.7cmを測る。外面の腹部と高台に界線を施し、外面は2条の線で、網目文を描く。内底は菊花文、体部は放射状の蓮弁文様を描いている。胎土は灰白色を呈する。18世紀代に比定できる。

金属製品

不明青銅器(35) 青銅の薄板を管状に巻いて貼り合せたものである。先端部は孔をつぶしている。現存長3.6cm、最大孔径1.2cmを測る。煙管の吸口部分とも思える。

4) 小 結

上述の通り、遺構の遺存状態が悪く、又、溝など一部を検出したにとどまるため、明確な構造は把握し得ない。大きく4期の段階に分けられる。

I期は弥生時代前期の1号溝であるが、この溝は夜臼式土器を主体としており、当該地では層位により、板付I式との分離、又は混在を確認することはできなかった。溝は先述したように、第87次(19街区)から始まって、第77次・第18次・第56次・第95次調査に亘る各調査結果から環状に連続することが把握できた。第87次調査の南側、約220mの小田辺城域推定地では第54次調査を行っており、東西方向の夜臼期の溝を検出している。又、同じく第87次調査から西方向に、約200mの位置一すなわち、第95次調査の南方向約100mでは第45次調査を実施している。この地点は北西から入る広い谷の谷頭部分に相当するため湧水が著しい。この調査では古墳時代の溝と重複して、夜臼期の東西方向の溝を検出している。この溝は第95次調査1号溝と直線的に連続する可能性をもっている。こうした条件を結びつけてみると、飛躍ではあるが、東西径約200m、南北径約300mを測る橢円形の環溝が考えられる。これらの溝は、台地を取り囲む状態で巡っているのではなく、西側の広い緩斜面を取り囲む状態を呈していると云えよう。

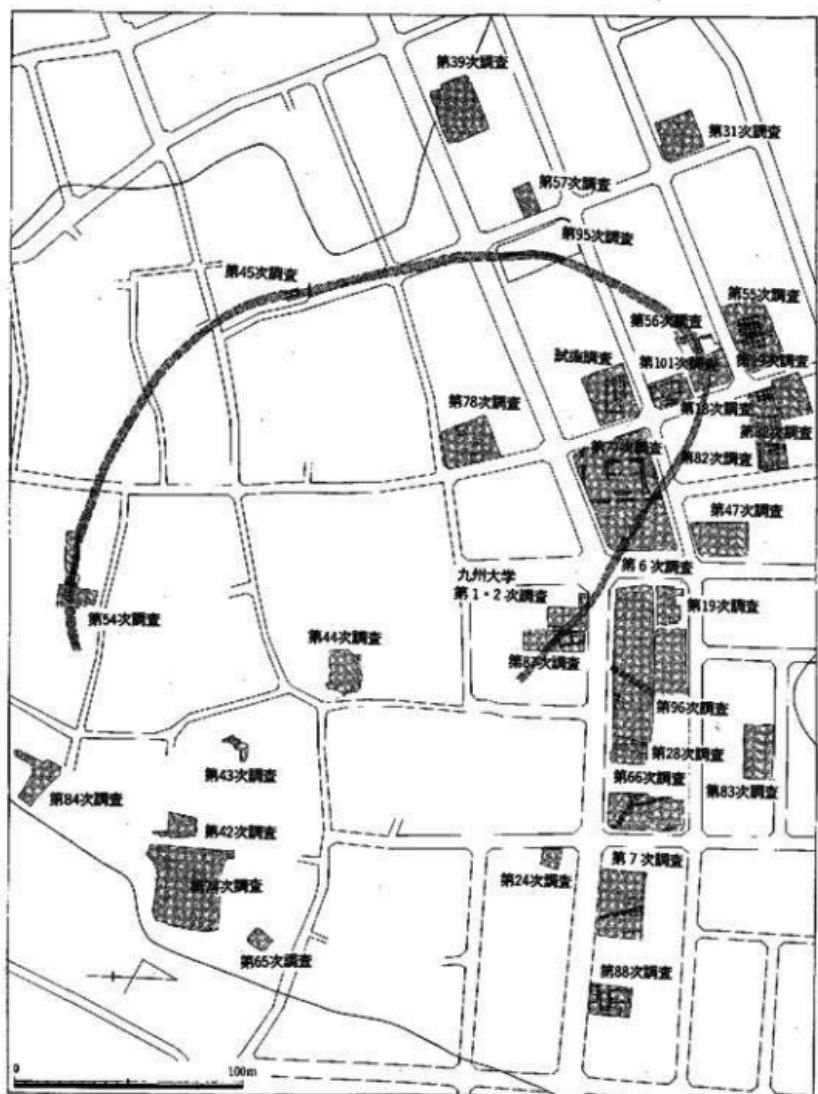


Fig. 99 弥生時代前期の溝配図 (1/2,500)

この内側に位置する第78次調査では夜臼期～板付II式期までの貯蔵穴を検出しておる、この地域に弥生時代前期遺構が集中している可能性は高い。又、夜臼期の有田七田前遺跡は、この環溝端から約200m 西に位置しており、生産遺跡としての性格からみて、この環濠とは直接的なつながりを有している。

II期は、赤生時代終末期の住居跡であるが、布留式併行期の住居跡と重複している可能性が高い。有田遺跡では、弥生時代終末期の住居跡としては初見である。

III期の濠は、有田地区の台地上に約200m 四方に亘って作られた矩形をなす郭の一部と思われる。李朝の皿や明の染付からみて、16世紀前半から中頃の時期が比定できよう。備前の鉢は近世に近いものでV期に相当する。埋没時期を示すものと思われる。溝底下層のブロック状地山碎土は多量であり、土器を削平し、埋め込んだ可能性がある。

IV期は近世の道路状遺構であるが、幅が狭いため道路としての機能が果たせるのか、否か疑問の残るところである。櫻中には近世の陶磁器が入っており、最終時期は18世紀の前半～後半の間であろう。

註1 本文141ページ参照

註2 昭和58年度に発掘調査、上層から晩期夜臼式土器の完形品が出土する。

註3 昭和54年度に発掘調査、東西方向の溝を確認した。

註4 福岡市教育委員会「有田・小田部第4集」1983

註5 第18次調査に接続する東西方向の溝を確認した。

註6 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」貿易陶磁研究No.2 1982

註7 関壁忠彦「備前焼」「世界陶磁全集3日本中世」小学館1977

註8 境田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集 1978

註9 福岡市教育委員会「有田・小田部第4集」P181, 1983

8. 第97次調査

1) 調査地区の地形と概要

当該地は福岡市早良区南庄3丁目90・91・93番地にある。調査対象面積は1,082m²である。有田・小田部台地は北側へ八手状に小台地を形成しているが、当該調査区はその中で、最も長く北側へのびる舌状台地の縁辺部に位置している。標高6.8mを測り、台地下の水田面との比高差は約3mである。台地の東側は金屑川の蛇行によって侵食を受け、小段崖を形成している。

発掘調査は昭和59年8月20日～9月5日迄実施した。表土、及び堆土は地権者の了解を得て全て調査区外へ搬出した。遺構は表土直下のローム層面に検出される。表土の耕作土は20cm～25cmの深さであった。遺構の状態は芋穴等の搅乱、及び削平を受け、遺存状態は悪い。

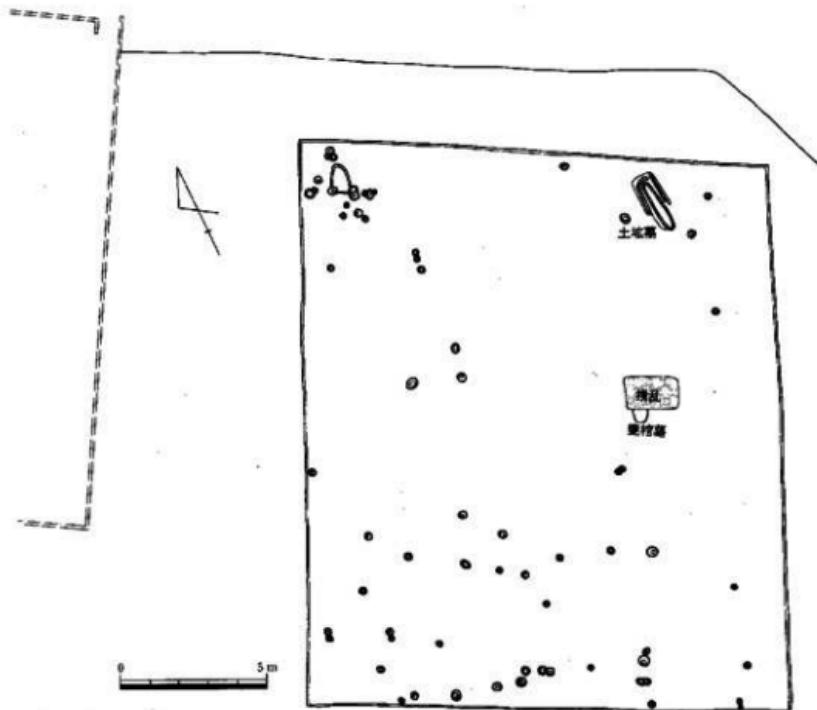


Fig. 100 第97次調査遺構配置図 (1/200)

2) 遺構各説

検出した遺構は弥生時代終末～古墳時代初頭の豪棺墓 1 基、古墳時代の土塙墓 1 基、土塙墓、柱穴とも遺物は全て細片のため、時期を確定することはできない。

土 塙

1号土塙 (Fig. 101, PL. 72)

調査区の北東隅に位置する。平面形は北側がややすぼまる隅丸長方形を呈することから、頭位を南側に向けて埋葬された土塙墓になると思われる。又、南側は40cmの幅で高まりを持ち、枕をつくり出したものと思われる。主軸方位はほぼ南北で、長さ187cm、幅30～42cm、深さ31cmを測り、断面形は逆梯形を呈する。墓壙の南側は削平されているが、壙内には厚さ2.5～4cmの粘土を貼っている。粘土面にはコの字形に配置した溝が残っていた。溝は右側面の幅2.5cm、左側面の幅5cm、北側小口の幅5cmで残っている。

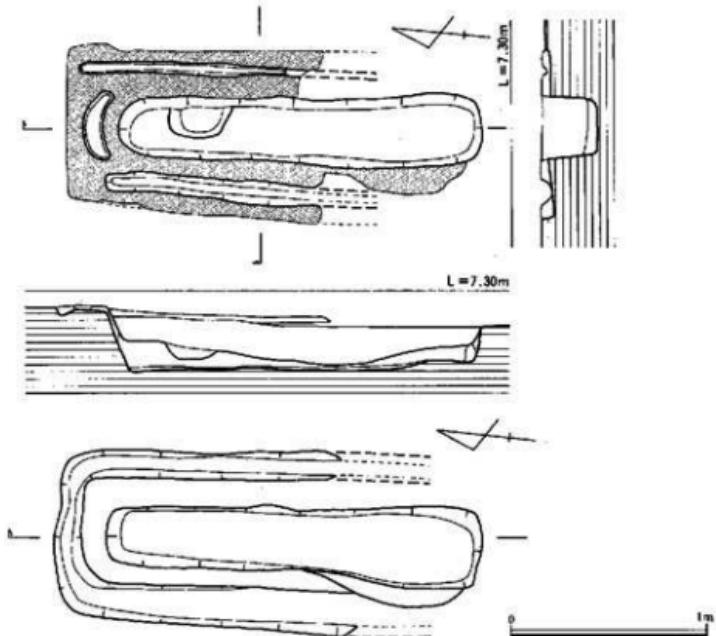


Fig. 101 1号土塙墓 (1/30)

粘土の下位は墓壙周溝下に幅14~20cmの溝が巡っていることから推定すれば、周辺に先ず板材等を巡らし粘土で固定したものと思われる。出土遺物はなく、時期を決定する事はできない。

壺棺墓

調査区の中央東寄りで壺棺墓を1基検出した。北側を搅乱で破壊され、検出されたのは壺の胴部破片のみである。

1号壺棺墓 (Fig. 102, PL. 71)

墓壙は北側を崩壊しているが、胴丸長方形を呈するものと思われる。現存長51cm、現存幅48cmを測る。棺は上面を大きく削平され、墓壙に接する部分を残すのみである。主軸方位N21°Eを示し、傾斜角度は、ほぼ水平である。検出されたのは、1個体の壺胴部破片のみであるが、搅乱壙内にも別個体の壺の胴部破片が確認されており、複式棺であった可能性もある。

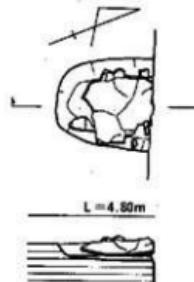


Fig. 102 壺棺墓 (1/30)

3) 遺物各説

1号壺棺 (Fig. 103, PL. 73)

成人棺の胴部破片である。胴部上位から下位に向かって丸味を持って移行し、胴部下位に幅0.8cm、高さ0.2cmの低いコの字突帯を一条貼付する。内外面磨滅が激しく、調整は不明であるが、胴部外面はナデ調整と思われる。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好

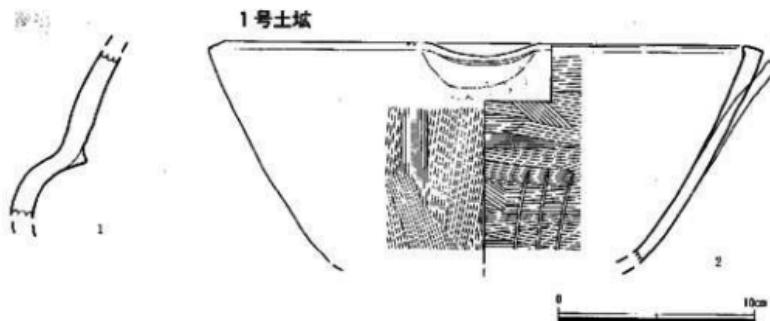


Fig. 103

1号土壙出土遺物 (1/3)

である。

攪乱出土遺物 (Fig. 103, PL. 73)

1号壺棺蓋の北側を破壊する攪乱より検出された遺物である。

弥生式土器

壺（1） 口縁部の細片で口径を復元することはできない。二重口縁を呈する壺形土器である。頸部は外弯して立ちあがり、更に口縁部でくの字状に直線的に外反する。頸部と口縁部の境に断面三角形の段を形成している。調整は、内外面とも磨減しているが、横ナデと思われる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で黄褐色を呈する。

土師質土器

壺鉢（2） 復元口径28.5cm、現存高11.3cmを測る。片口で、体部は丸味を帯びて直線的に立ち上がる。口縁部は内側へ肥厚し、端部は平坦である。内外面共粗いハケ目調整で、体部内面には日の浅い5本単位の条線を施す。淡赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

4) 小 結

以上、各遺構・遺物について述べてきた。各遺構共に遺物の出土は少なく、年代を決定するには制約があるが、以下、各遺構について述べてみたい。

1号壺棺は残存状態が悪く胸部破片を残すのみで、それ自体で時期の決定はしえないが、隣接する攪乱より出土した二重口縁の壺は、西新町遺跡D区3号住居跡出土の壺と同一形態を示し、弥生時代終末から古墳時代初頭の壺と考えられる。1号壺棺もこの時期に類例を求める低いコの字形突帯をもつものは祇園町遺跡出土の1号壺棺下巻があり、時期も前者とほぼ同時期に属するものと思われることから、両者が合口壺棺であった可能性は高い。土塙墓は遺物の出土がなくその時期を確定する事はできないが、その形態から古墳時代のもので、木棺の下に土塙をつくる二重墓塙になる可能性が高い。柱穴は検出した数が少なく建物を建てるまでには至らなかった。出土遺物は各柱穴とともにほとんどなく、時期を決定する事はできない。

有田・小田部遺跡に於いて、この時期の壺棺が遺構に伴って検出されたのは初めての事であり、当遺跡に於けるこの時期の墓地の性格、壺棺墓の終焉を考える上で非常に興味深い。今後、当調査区周辺部の調査を待って、墓域の広がり、性格等を検討したい。

9. 第101次調査

1) 調査地区の地形と概要

調査対象地は福岡市早良区有田1丁目32-3番地にある。対象面積は216m²である。有田地区の台地最高所は、尾根状に延びる小田部地区とは異なり、平坦部を形成している。当該地はこの平坦部の北縁付近に位置し、標高13m前後を測る。当該地周辺では、数多くの調査が行われており、特に律令時代の堀立柱建物群が整然と検出されている。また南に隣接する第77次調査では、弥生時代から中世の堀立柱建物、溝等が検出されているが、第77次調査区西端にある溝は、当該地の溝と陸橋を有して接続する可能性がある。当該地の地目は畠であったが、個人専用住宅建設のため、国庫補助を得て発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和60年9月4日から10月2日迄実施した。遺構は表土下のローム面に検出された。表土は約15cmを測る。検出した遺構は古墳時代住居跡1軒、堀立柱建物5棟、中世の土塼墓2基・溝3条である。

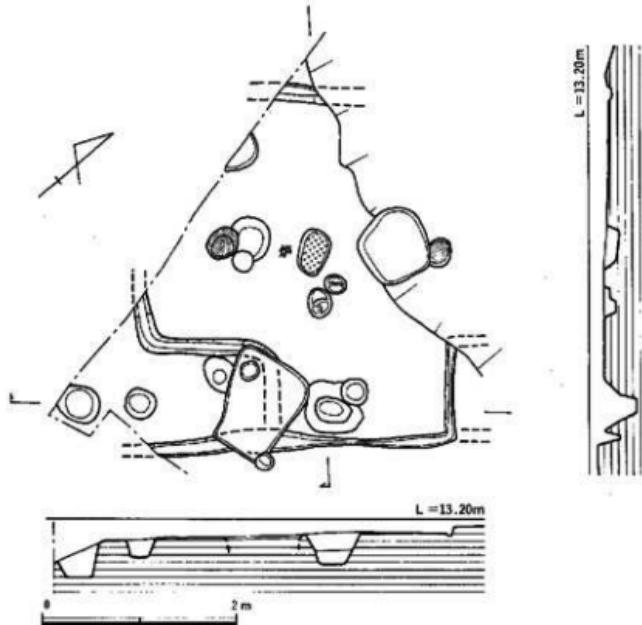


Fig. 104 1号住居跡 (1/60)

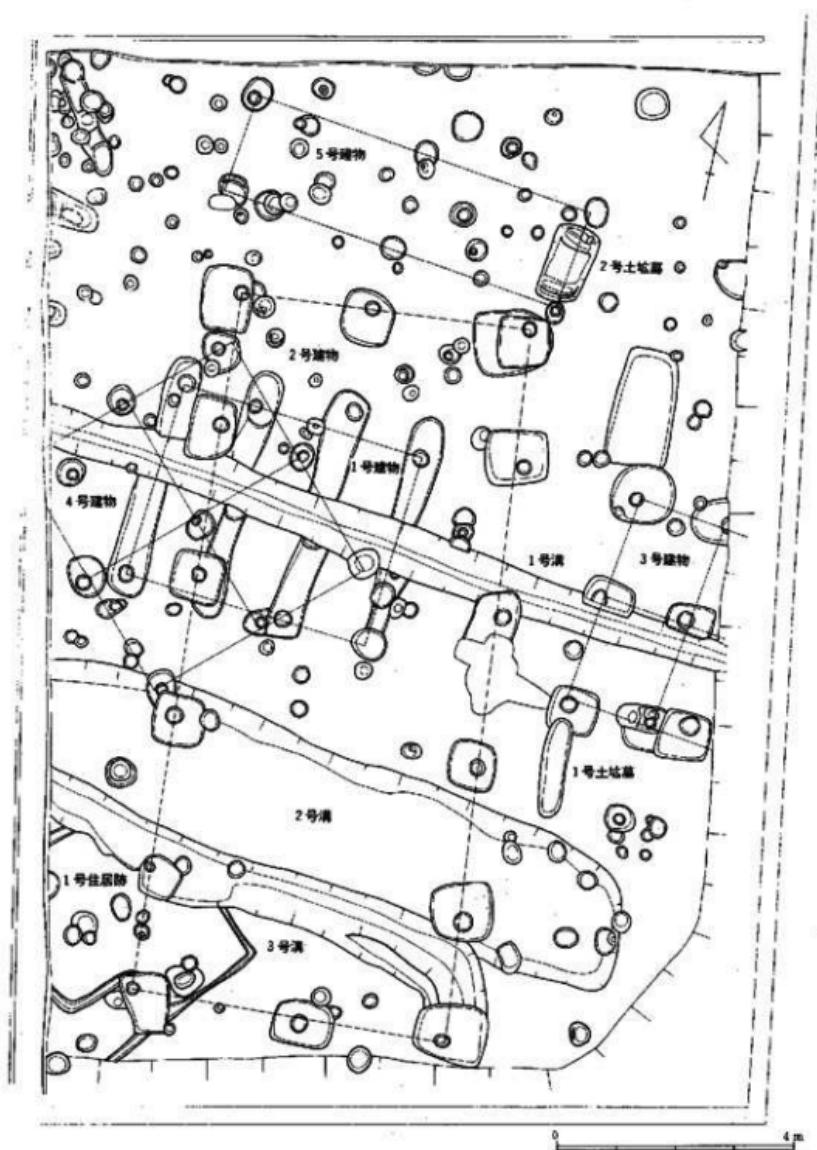


Fig.105 第101次調査遺構配置図 (1/100)

2) 遺構各説

住居跡

1号住居跡 (Fig. 107, PL. 74)

調査区南西端の境界地で検出した。南側は道路によって破壊されている。残存部分の削平も著しく、住居跡は周壁溝の存在でようやく検出できた。確認できた範囲では東・南側にL字形のベットを有しているが、北・西側にもベットが存在する可能性が強い。現存の規模は南北方向3.8m、東西方向3.7mで、ベットの幅は約90cmを測る。周壁下とベット下には、幅10~15cm、深さ10~20cmの周溝が巡っている。東壁の中央には径約55cm、深さ約30cmのpitが設けられ、その上面には焼土が分布する。ピットと焼土に直接の関係はなく、ピットは入口部の何らかの構造であるものと思われる。住居跡の中央には径約30cmを測る炉が存在し、炉を挟んで、南北に2本の主柱を確認した。主柱は径約30cm、深さ約35cmを測る。

土 塚 墓

1号土塚墓

(Fig. 109, PL. 76)

調査区の東南側、2号溝の北隣で検出した。平面形は橢円形に近い隅丸長方形を呈する。長さ1.7m、幅0.42m、深さ0.18mを測る。断面形は逆梯子形を呈する。覆土は暗茶褐色を呈す。出土遺物はごく少ない。

2号土塚墓

(Fig. 109, PL. 76)

長さ1.3m、幅0.76m、深さ0.14mを測る。上部は削平を受けている。隅丸長方形のプランで、断面形は逆梯子形を呈する。覆土は暗茶褐色土である。南側壁は二段掘りで、南壁に接して

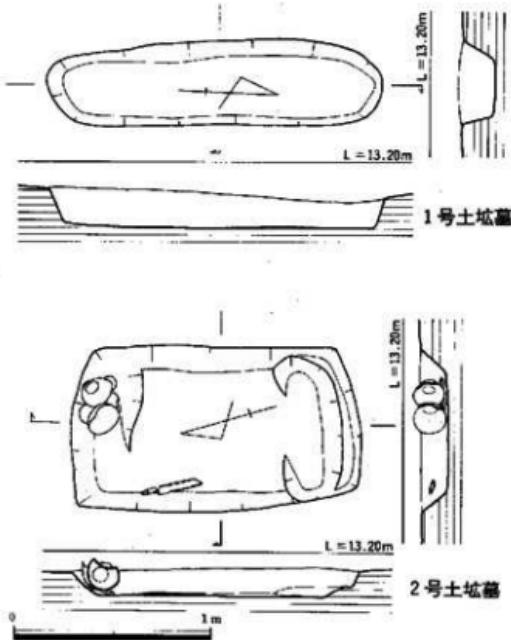


Fig. 106 1号・2号土塚墓 (1/30)

隅丸長方形の凹みを作り出している。また、北側にも同種の凹みが見られる。これは木棺の小口と考えられ、組合せ式木棺の可能性が高い。北東隅から床面に接して土師器 3 点、龍泉窯系青磁鉢 2 点が、また西壁やや北寄りの位置に、床面から 15cm のところに刀片が刃部を南に向けてあった。12世紀後半～13世紀初頭の間に比定できる。

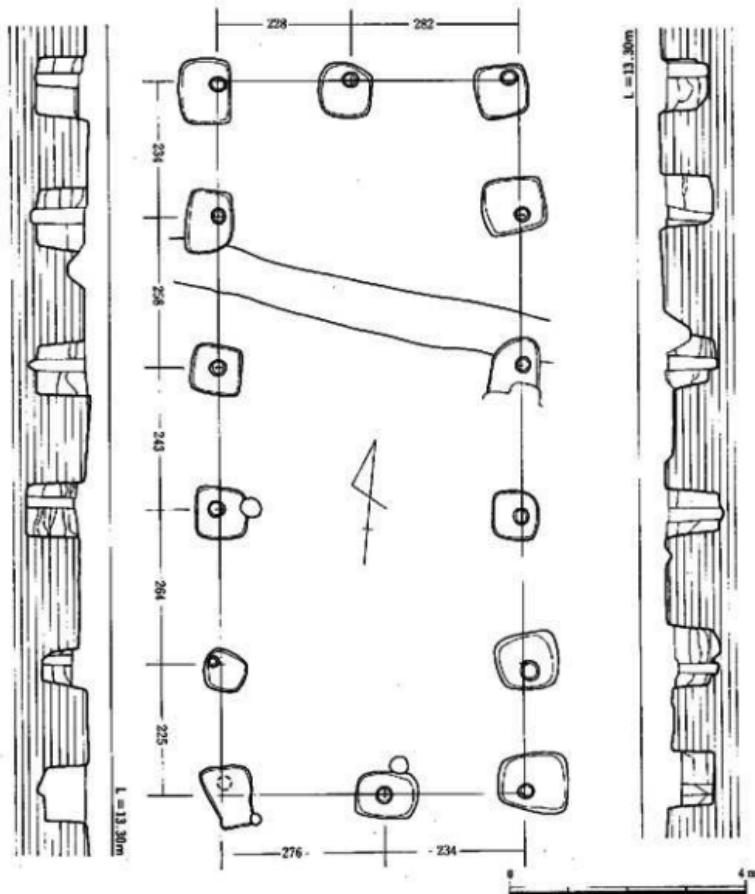


Fig. 107 2号掘立柱建物 (1/100)

壇立柱建物

5棟検出した。そのうち1号と3号はほぼ直線上に並ぶ。また1・3号は東西方向に近い主軸をとり、2号はほぼ南北に主軸をとっている。

1号壇立柱建物 (Fig. 110, PL. 74, 75)

調査区中央付近に検出された。梁行2間、桁行3間の総柱建物と思われる。長軸方向のほぼ中心線上を1号溝が走り、桁行方向の第2列目の柱穴群を切っている。梁行方向には布掘りを持つ。削平のため布掘り、柱痕のいずれも遺存状況は悪い。梁行336cm、桁行426cm、梁間平均175cm、桁間平均143cmを測る。現存における布掘りの長さ430~440cm、幅45~70cm、深さ10~20cm、柱痕径20~30cm、深さ15~20cmを測る。出土遺物はほとんどない。

2号壇立柱建物 (Fig. 111, PL. 74)

梁行510cm、桁行1220cmの規模の大きな建物である。梁行2間、桁行5間の側柱だけの建物で、主軸はN 5° Eである。梁間平均260cm、桁間平均244cmを測る。掘り方は隅丸方形を呈し、長辺は70~120cm、深さ70~90cmを測る。柱痕径は約30cmである。柱穴P 8より手捏ね土器、P 11より土師器碗が出土した。

3号壇立柱建物 (Fig. 111, PL. 74, 75)

東側境界地に検出された。2間×1間以上の総柱建物である。南北方向の柱間平均は182cmを測る。掘り方は隅丸方形を呈し、一辺80~130cm、柱痕径は約25cmを測る。1号建物のほぼ延長上にあり、同一時期と考えられる。

4号壇立柱建物 (Fig. 111, PL. 74)

西側境界地に検出された。梁行2間、桁行2間の総柱建物である。主軸方位はN 44° Wである。梁行438cm、桁行438cm、梁間平均210cm、桁間平均220cmを測る。柱穴掘方は円形で径40~70cm、深さ30~45cm、柱痕径約20cmを測る。出土遺物は土器の細片が少量あるのみである。

5号壇立柱建物 (Fig. 111, PL. 74)

主軸方位をN 84° Eに置く。梁行1間、桁行1間の側柱だけの建物である。梁行180cm、桁行600cm、桁間平均300cmを測る。柱穴の掘方径約40cm、深さ15~35cmを測る。出土遺物はほとんどない。

Tab.7 第101次調査壇立柱建物一覧表

(単位: cm)

規 模	方 向	梁 行		桁 行		方 向	支 部 (ad)	備 考	
		実 長	柱間寸法 (cm)	実 長	柱間寸法 (cm)				
1号	3×2	東西	428 (14.2)	4.4~4.6~5.0	336 (11.2)	5.6~5.6	N 84° W	14.31	
2号	5×2	南北	1224 (40.8)	7.8~8.6~8.1~8.8~7.5	510 (17.3)	9.4~7.6 7.5~9.2	N 5° W	62.42	
3号	1~e×2	東西	150 + e	0	360 (12)	6~6	N 5° E	3.4 + e	
4号	2×2	北西	438 (14.6)	7~7.6	438 (14.6)	7~7.6	N 45° W	16.98	
5号	2×1	東西	600 (20)	10~10	186 (6)	6	N 53° W	10.18	

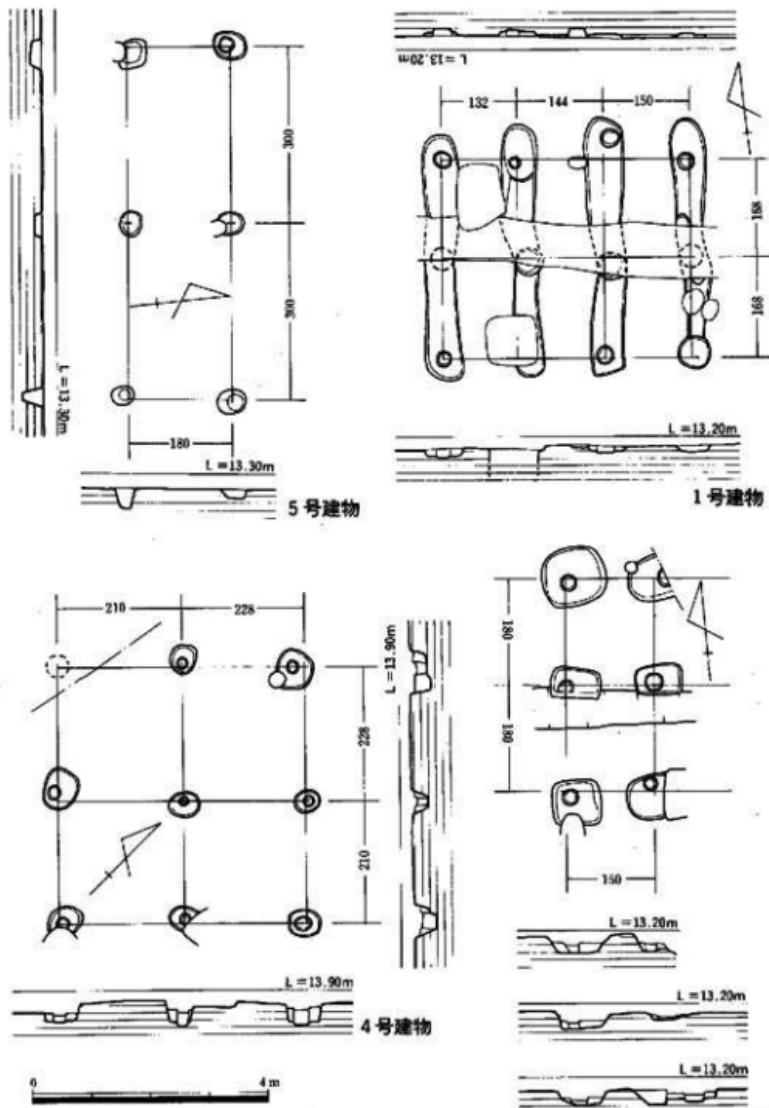


Fig. 108 1号・3号～5号据立柱建物 (1/100)

溝状遺構

1号溝

(Fig. 112, PL. 74)

調査区中央をほぼ東西に貫通する溝で、断面形はV字形を呈する。溝の幅は50~90cm、深さ30~50cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土で、弥生時代から中世の遺物を包含している。瓦質土器や明代の碗より16世紀前半の年代が考えられる。

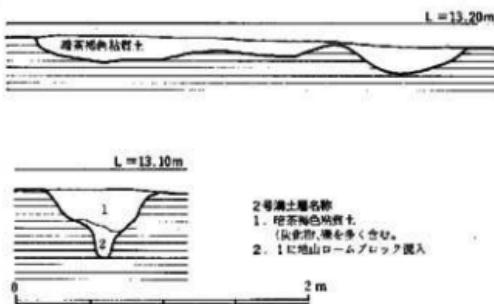


Fig. 109 1号・2号溝断面図 (1/40)

調査区南側に位置している。幅2.1~2.4mと広い。削平のためか、深さは10~20cmしかない。溝は調査区内東端で完結するが、陸橋部がここにあり、溝はさらに延びる可能性がある。覆土は暗茶褐色粘質土を呈し、弥生時代~中世の遺物を出土する。

3号溝

2号溝を切るように平行して東西方向に走るが、調査区東側で南側に曲がる。土層断面観察及び方向性から考えて、2号溝と一体のものと思われる。覆土は暗茶褐色粘質土を呈する。

3) 遺物各説

2号土塙墓出土遺物 (Fig. 113, PL. 76)

墓壙内より青磁2点、土師器皿3点、刀片1点が出上した。

青 磁

碗(1, 2) いずれも龍泉窯系青磁で、内面に刻花文を施す。1は内面に3対の蓮花と圓線を1本描く。口径15.5cm、器高6.7cmを測る。両面にやや黄色味を帯びた淡緑色釉を施す。2は口径17.0cm、器高7.2cmで、コバルトブルー色の気泡を多く含む透明釉を施す。内面には2対の蓮花と1組の葉及び圓線を描いている。

土師器

皿(3~5) いずれも器高が低く、上げ底ぎみで、底部糸切り離しの後にナデを加えたものである。板目痕はない。1は口縁部を欠失する。推定口径8.5cm、推定器高0.8cmを測る。淡黄褐色を呈する。内面の剥落が著しい。2は口径8.4cm、器高0.8cmを測る。淡橙色を呈する。

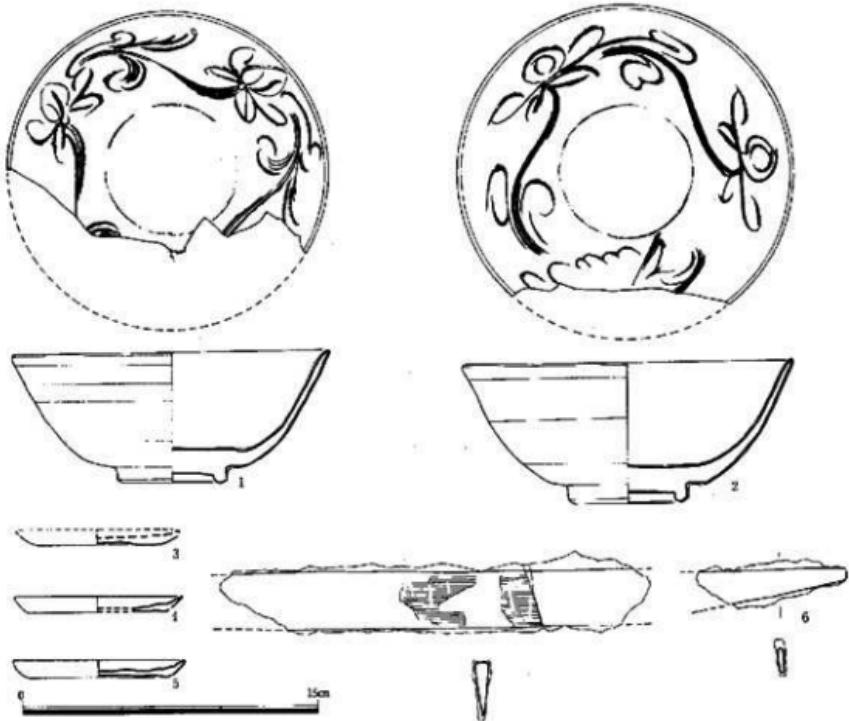


Fig. 110 2号土墳墓出土遺物 (1/3)

3は口径8.7cm、器高0.9cmで、淡黄褐色を呈する。いずれも胎土はやや粗く、焼成もあまり良くない。

鉄 器

刀 (6) 錆化が進んでいるため不明な点が多いが、折れた鉄刀の一部と思われる。身の現存長21.2cm、幅2.9cm、厚さ0.8cm、茎の現存長7.2cm、厚さ0.3cmを測る。身の中央部分には木質が明瞭に残る。出上位置は床面から浮いており、格外副葬が落ち込んだものかとおもわれる。

堀立柱建物出土遺物 (Fig. 111, PL. 77)

土師器

碗 (10) 2号建物P-11より出土した。底部が平底に近い丸底で、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口径10.8cm、器高6.5cmを測る。内面は指ナデ調整で、外面にはヨコハケがかすかに残る。胎土は石英・長石等を含みやや粗い。焼成は良好である。

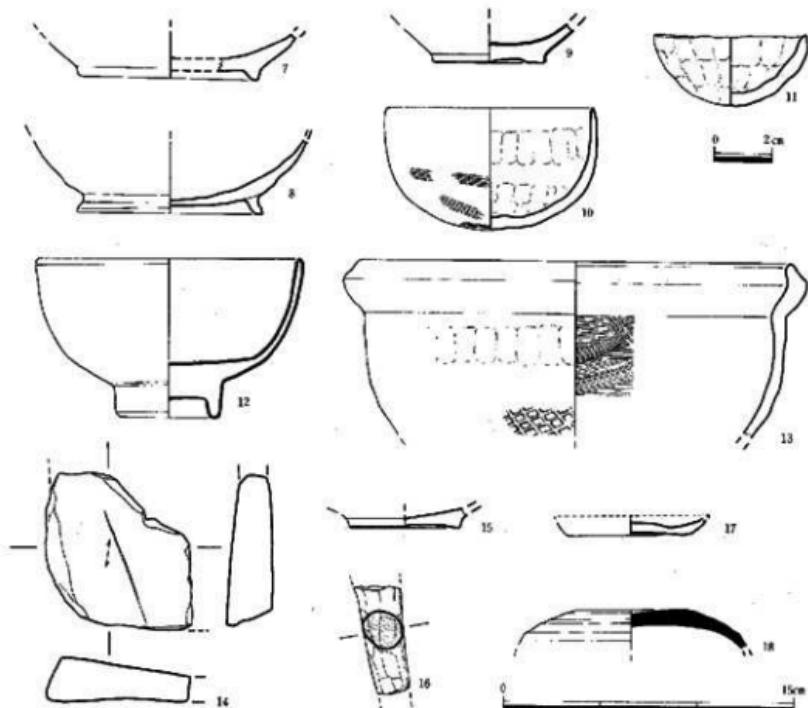


Fig. 111 出土遺物 (1/3, 1/2)

手捏ね土器 (11) 口径5.2cm, 器高2.5cmを測る。丸底で、口縁部はかなり歪んでいる。全体に指圧調整痕が明瞭に残る。明橙色を呈し、焼成は良好であるが、全体にひび割れが激しい。

ピット出土遺物 (Fig. 110, PL. 77)

土師器

椀 (7, 8) 8は外側に聞く高台を貼りつけている。胎土には石英・長石を含みかなり粗いが、焼成は良い。内面は黒色を呈し、外面は淡黄褐色を呈する。両面ともナデ調整である。

青磁

碗 (9) 越州窯系青磁碗の底部片で、底径5.9cm、高台の幅0.9cmを測る。外面に緑黄色の半透明釉を施し、外底部にも少量認められる。内底見込周縁には重ね焼きの痕跡が残っている。

胎土は淡青灰色を呈する。

1号溝出土遺物 (Fig. 111, PL. 77)

土師器

皿 (17) 糸切り底で、口縁部を欠失する。推定口径8.1cm、推定器高1.0cmを測る。体部はやや丸味を持ち、底部は上げ底ぎみである。両面とも器面の荒れがひどく調整は不明である。

瓦質土器

鼎 (13) 口縁部の破片であるが、類例から鼎であると思われる。口縁部は内面に強い稜を残して外反するが、口縁端部は内弯する。胴部は軽く屈折し、屈折部より下の外面に格子目のタタキを施す。内面は胴部がヨコハケ、口縁部はヨコナデである。また外面には媒が付着している。全体に淡黄褐色を呈すが、一部暗灰色を呈する。

16は脚部の破片であるが、13の鼎の脚と思われる。現存部分の最大径2.4cmを測る。全面タテ方向のケズリ調整で仕上げている。若干青味がかった暗灰色を呈している。

青磁

碗 (12) 口径13.5cm、器高8.3cmを測る。全面に淡緑青色の半透明釉を施す。全体に焼け方が荒く、釉が焼けはじいている部分もある。胴部下半にはタテ方向に貫人が入る。

白磁

碗 (15) 底径5.6cmを測る。底部はケズリ出しである。白色の半透明釉を施し、胎土は青みがかった白色を呈する。

石製品

砥石 (14) 頁岩製。両面と左側面を利用している。かなり磨りへっており、使用頻度は高い。両面に数条の擦痕が確認できる。現存の大きさは5×5.5cmである。

4号溝出土遺物 (Fig. 114, PL. 77)

須恵器

坏蓋 (18) 天井部の径5.8cm、現存の器高1.9cmを測る。天井部は凹んでいる。外面は回転ヘラケズリ調整で、内面はナデで仕上げている。

4) 小結

調査区が狭いため、検出した遺構を総合的に把握することはむつかしく、時期別に簡単にまとめてみたい。大きく4つの時期に大別することができ、I期は住居跡の時代、II期は1~4号

建物の時代、III期は土塙墓の時代、IV期は1～3号溝の時代である。

I期の住居跡は削平が著しく、全体の半分程度しか検出していないため、明確なプランは不明であるが、東壁中央のピット部分を除いてベッドが全周する可能性が強い。また東壁中央のピットは、入口部に関連する構造の一部分かも知れない。この形態の住居跡は第32次調査等でも検出されている。出土遺物が極めて少ないため明確な時期は不明であるが、類例等から4世紀代後半前後の時期が考えられる。

II期は奈良時代と思われる建物群で、1～4号建物は、周辺調査区の成果からこの時期に属するものと思われる。建物の時期的な変遷は、その切り合い関係から、4号建物→1・3号建物→2号建物の順に建てられている。このうち最後に建てられた2号建物は、その全体の規模と同様に柱穴掘り方の規模も大きく、注目できる。

III期は2号土塙墓1基だけで、出土した土器より、12世紀後半13世紀初頭に比定できよう。

IV期の溝3条は、ほぼ平行して走るが、2・3号が浅く幅が広いのに対し、1号はやや深くて幅は狭い。何らかの機能の差が考えられる。時期的には、1号溝から出土した明の青磁碗より16世紀代の年代が考えられる。

図 版
PLATES

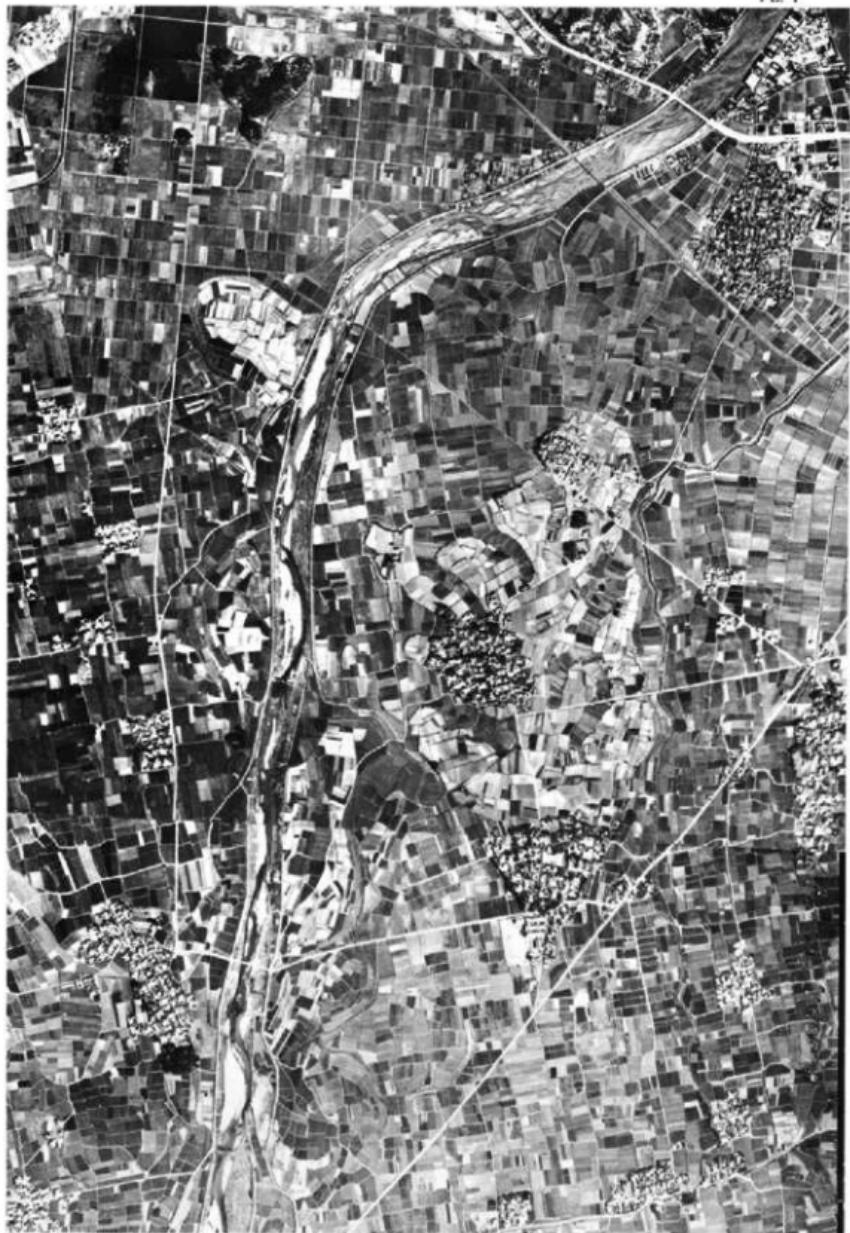
[訂正図版]

有日遺跡第83次調査

PL. 45



(1) 1号溝土層状態（北から）



有田遺跡群周辺航空写真（1946年撮影、上が北）



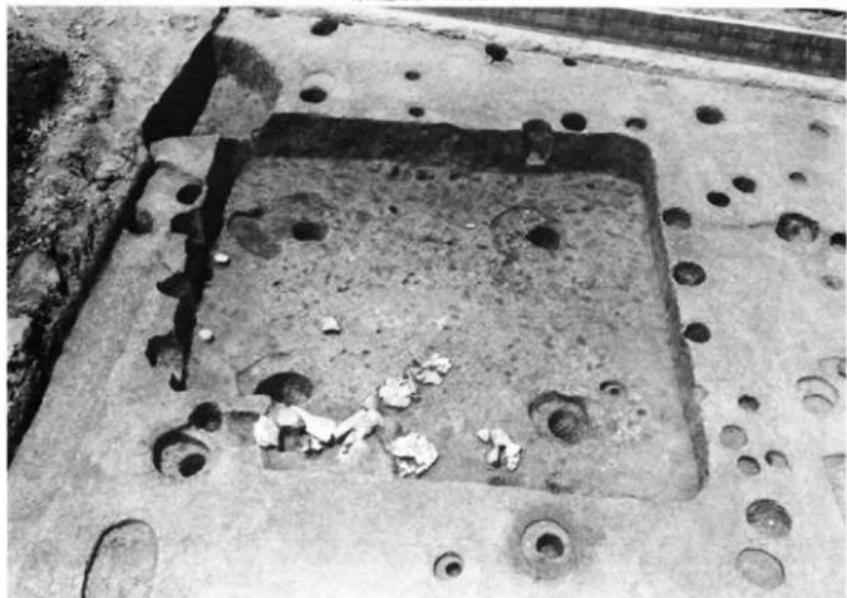
有田遺跡群周辺航空写真（1975年撮影、下が北）



(1)第52次調査北半部分（南から）



(2)調査区南半部分（南から）



(1) 1号住居跡（東から）



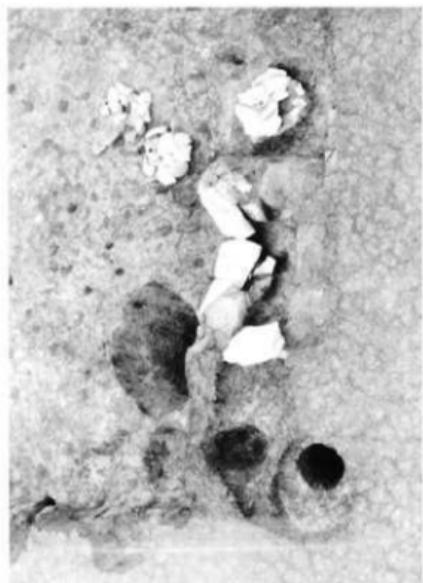
(2) 1号住居跡・カマド検出状況（西から）



(1) 1号住居跡かまどの状態（南から）



(2) (1)と同じ（正面から）



(3) (1)と同じ（裏面から）



(4) 1号住居跡かまどの悪化部（北から）



(1) 1号住居跡遺物出土状態（西から）



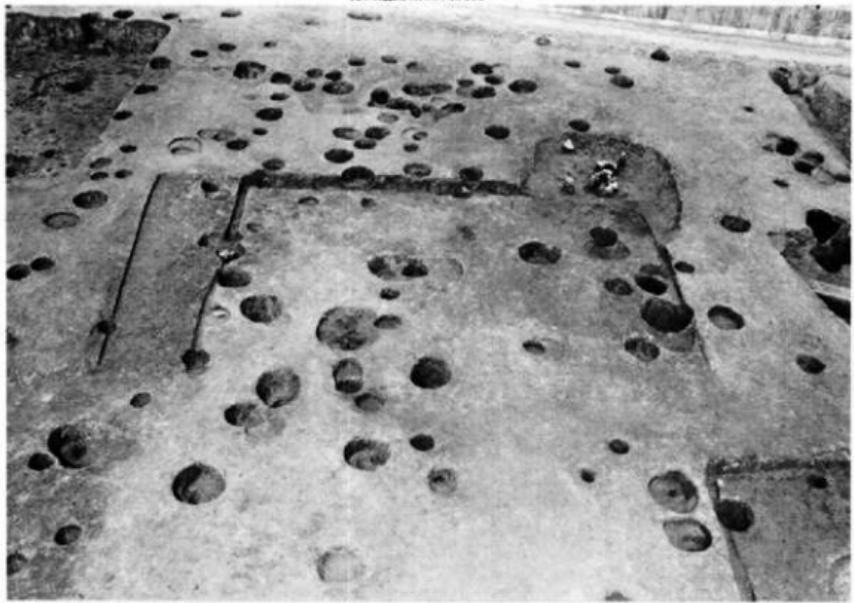
(2) (1)と同じ（裏）



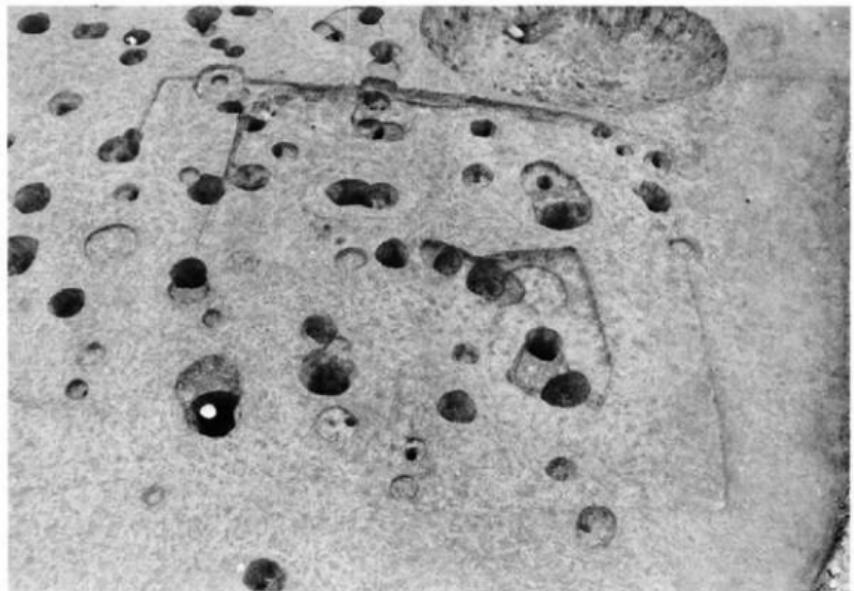
(3) (1)と同じ（裏）



(4) (1)と同じ（裏）



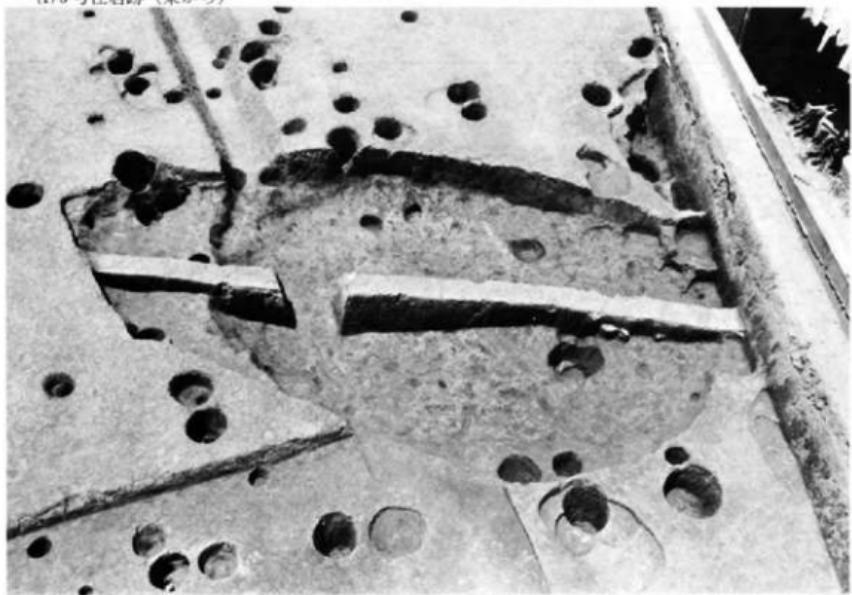
(1) 2号住居跡（東から）



(2) 3号住居跡（東から）



(1) 5号住居跡（東から）



(2) 10号・11号土壤（東から）



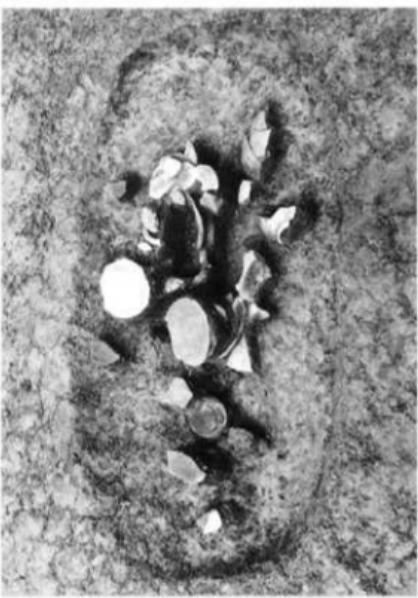
(1) 1号土壤 (東から)



(2) 1号土壤遺物出土状態



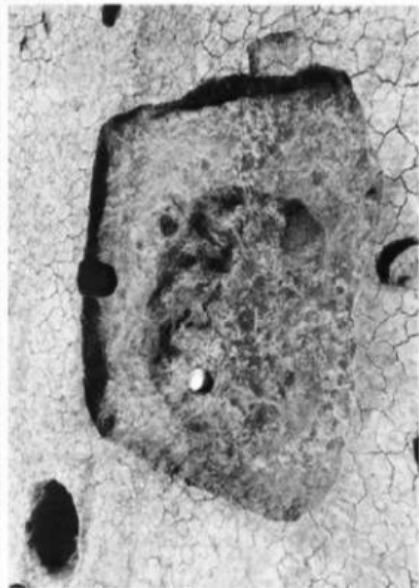
(3) 2号土壤 (東から)



(4) 2号土壤遺物出土状態



(1) 4号土壠 (西から)



(2) 5号土壠 (西から)



(3) 5号土壠遺物出土状況



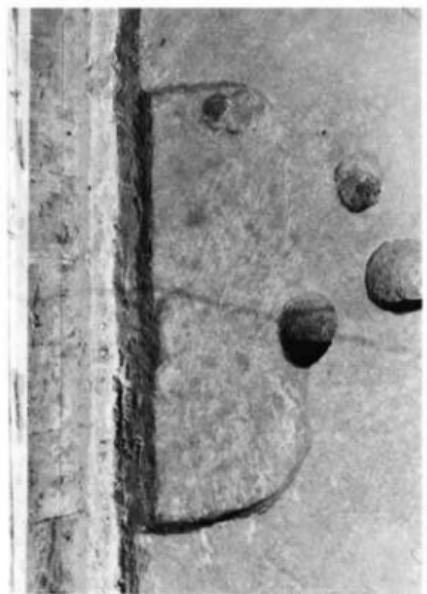
(4) 7号土壠 (北から)



(1) 8号土壙 (西から)



(2) 8号土壙遺物出土状態



(3) 9号土壙 (西から)



(4) 11号土壙 (中心)



(1) 10号土器遺物出土状態(北から)



(2) (1)と同じ(片身)



(3) (1)と同じ(裏面)



(4) (1)と同じ(新巻)



(1) 1号溝（東から）



(2) 1号溝断面の状態



(3) 11号土壙断面の状態（南から）



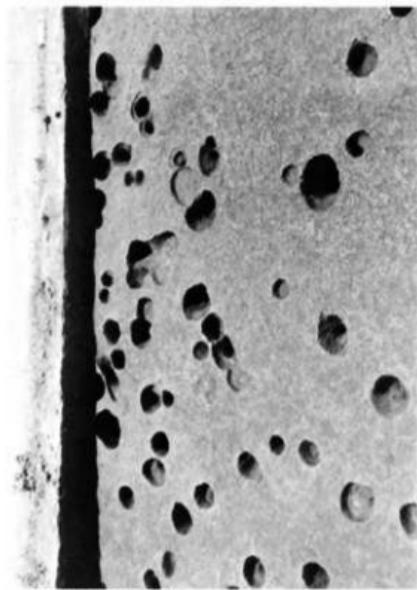
(4) 11号土壙遺物出土状態（南から）



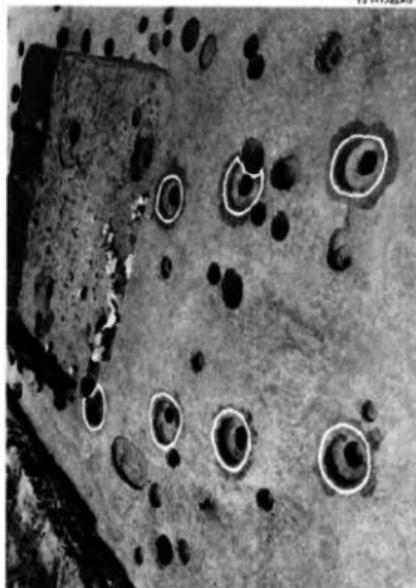
(1) 2号・3号溝 (南から)



(2) 4号・5号溝 (北から)



(3) 調査区南側 pit 群



(1) 1号掘立柱建物（東から）



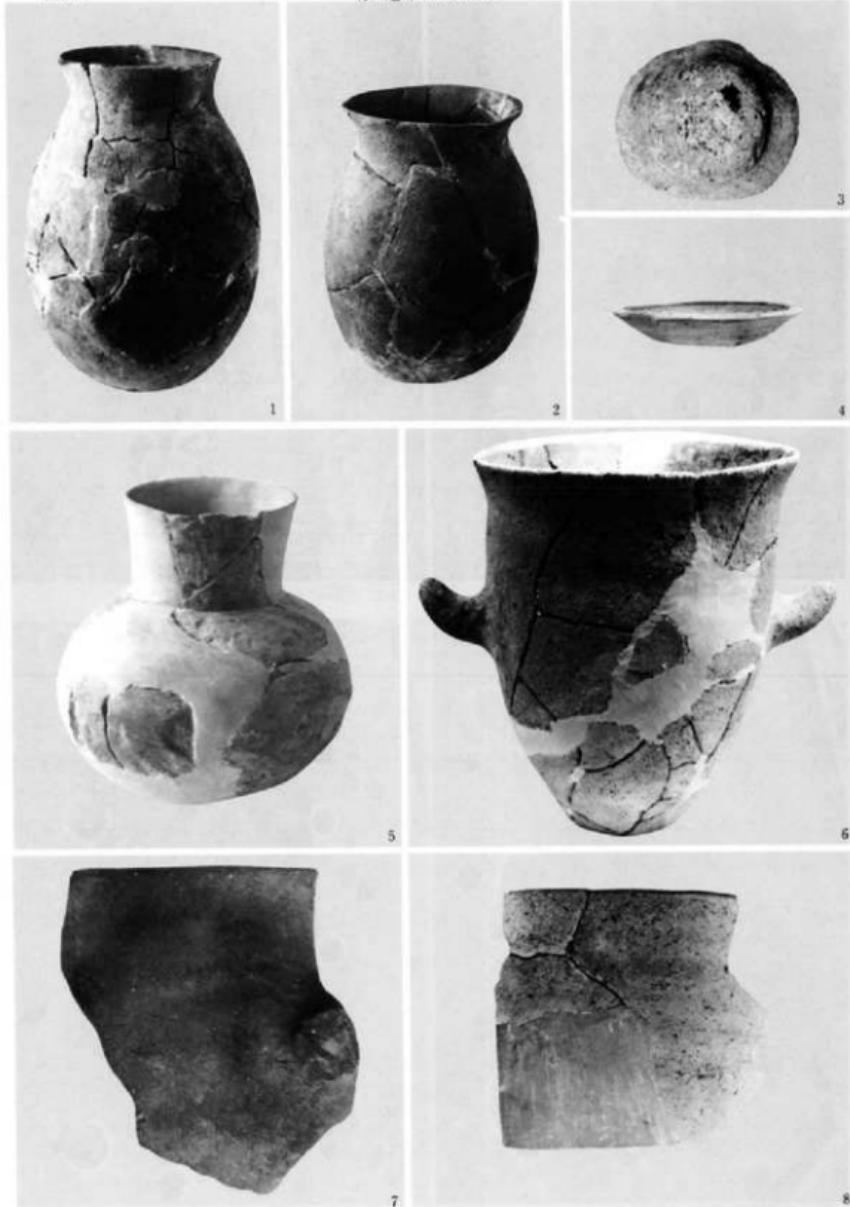
(2) (1)に同じ（南から）



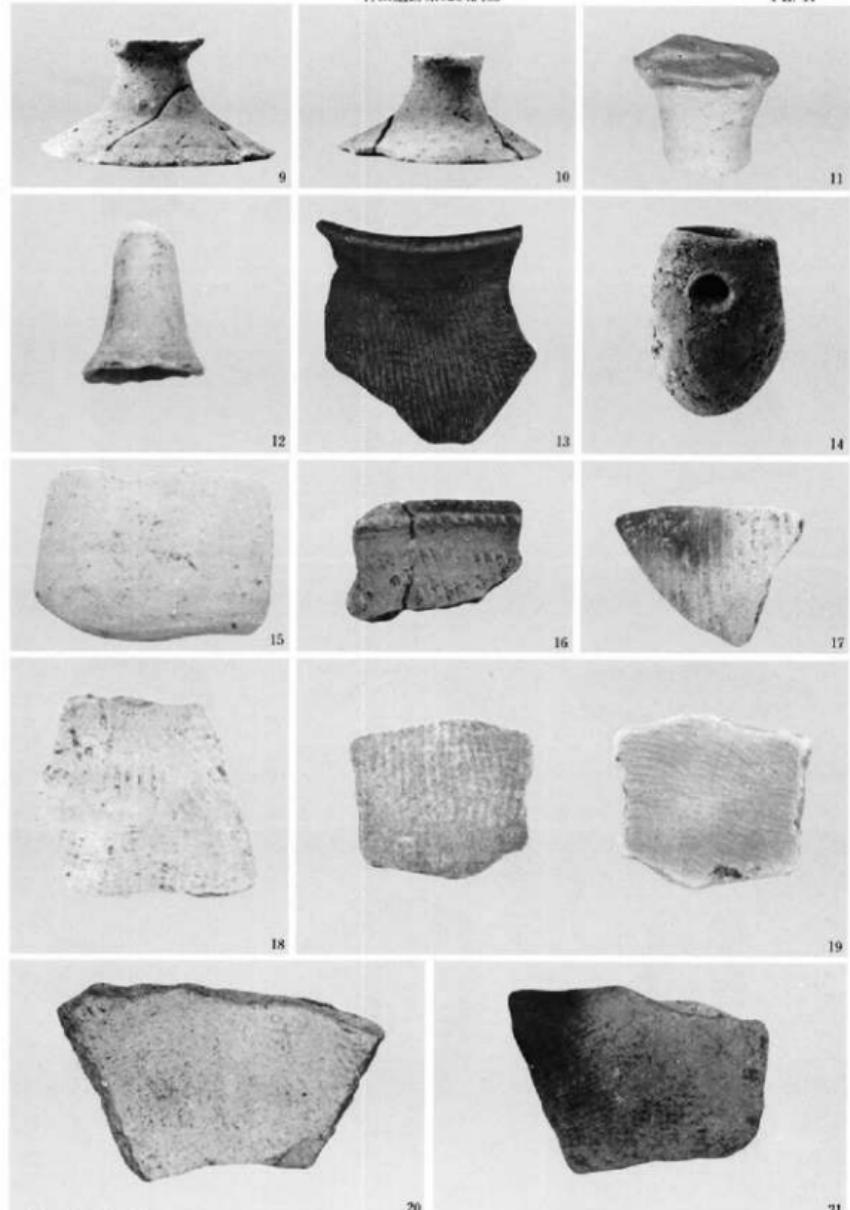
(3) 2号掘立柱建物（南から）



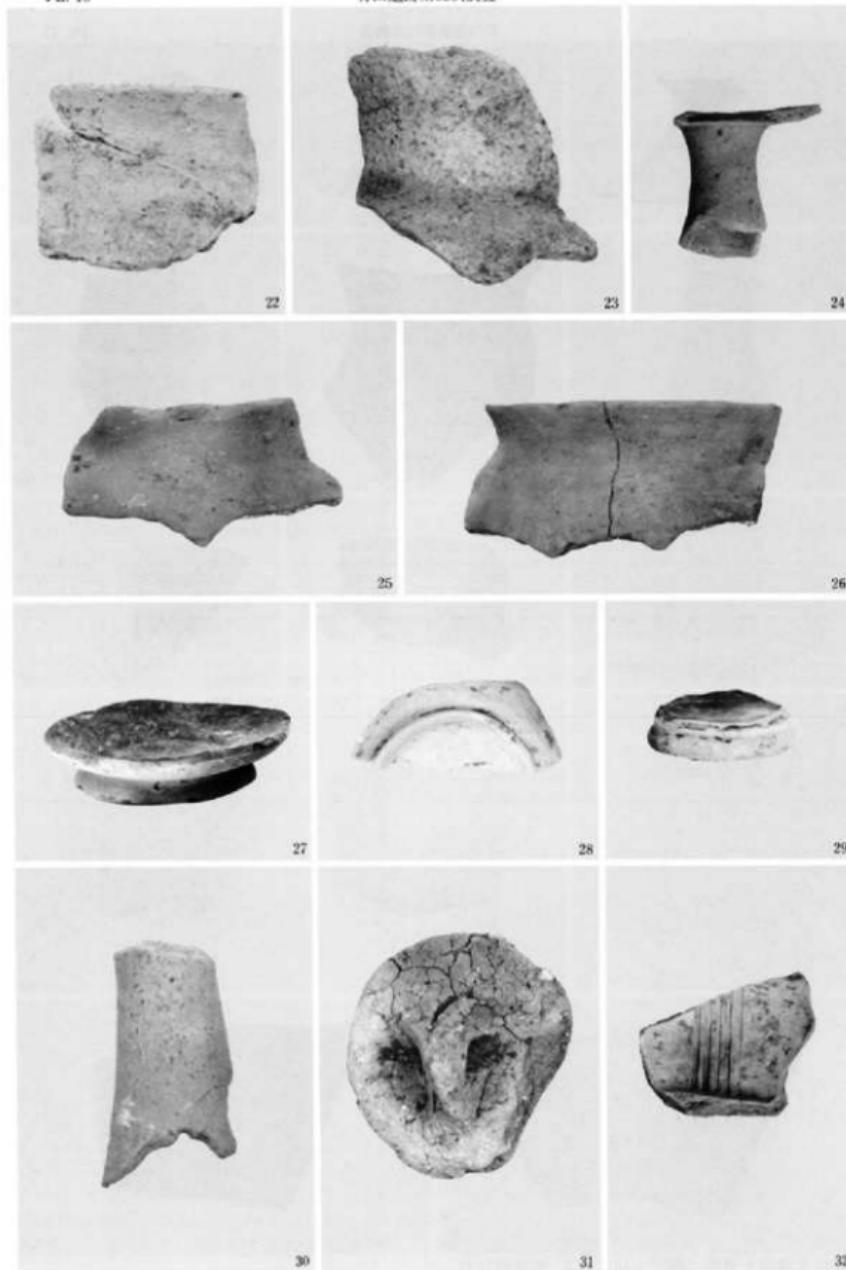
(4) 3号掘立柱建物（南から）



住居跡出土遺物（縮尺：1、2は1/4、6は1/5、他は約1/3）



10号土壤出土遺物（縮尺：14は1/3、他は約1/2）



出土遺物(22~30は土壤、31はpit、32は溝出土、縮尺: 3/1は1/1、他は1/2)



出土遺物（40は1号住居跡、他は土壤、縮尺：1/3）



(1)第59次調査全景（南から）



(2)調査区北半部分（南から）



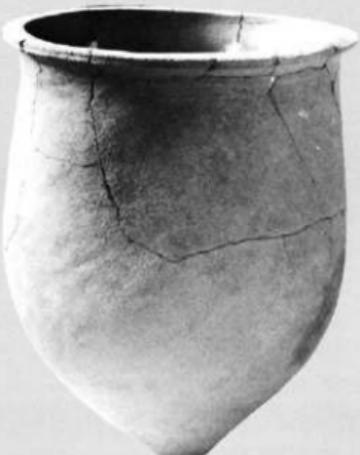
1



2



3



4



5

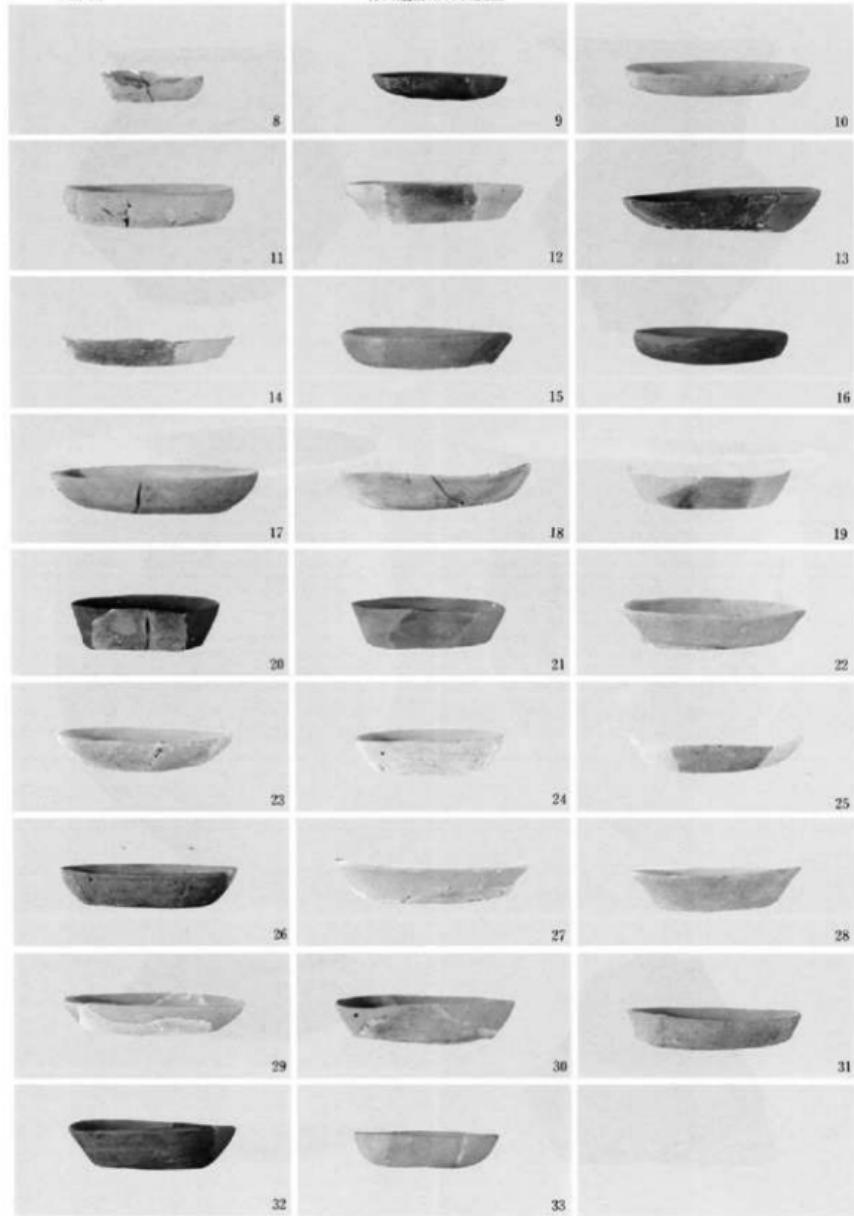


6

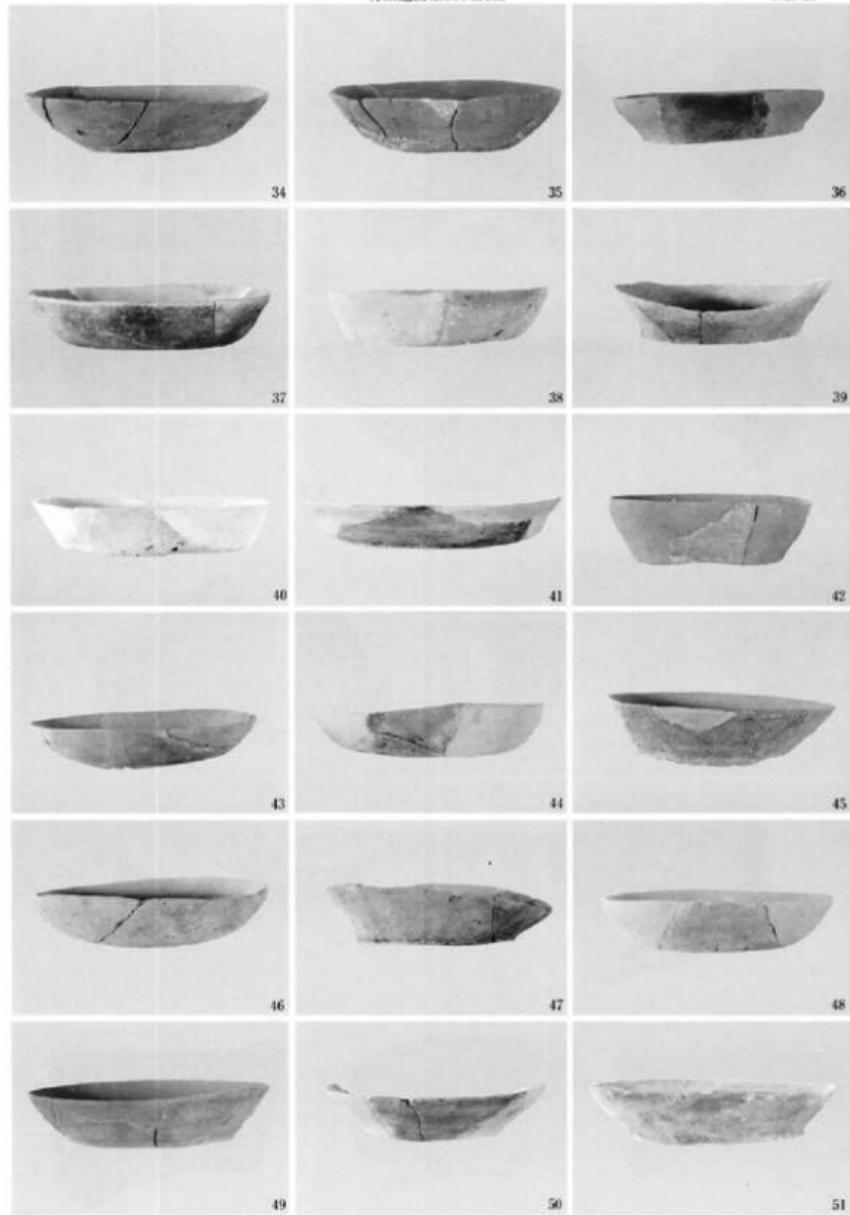


7

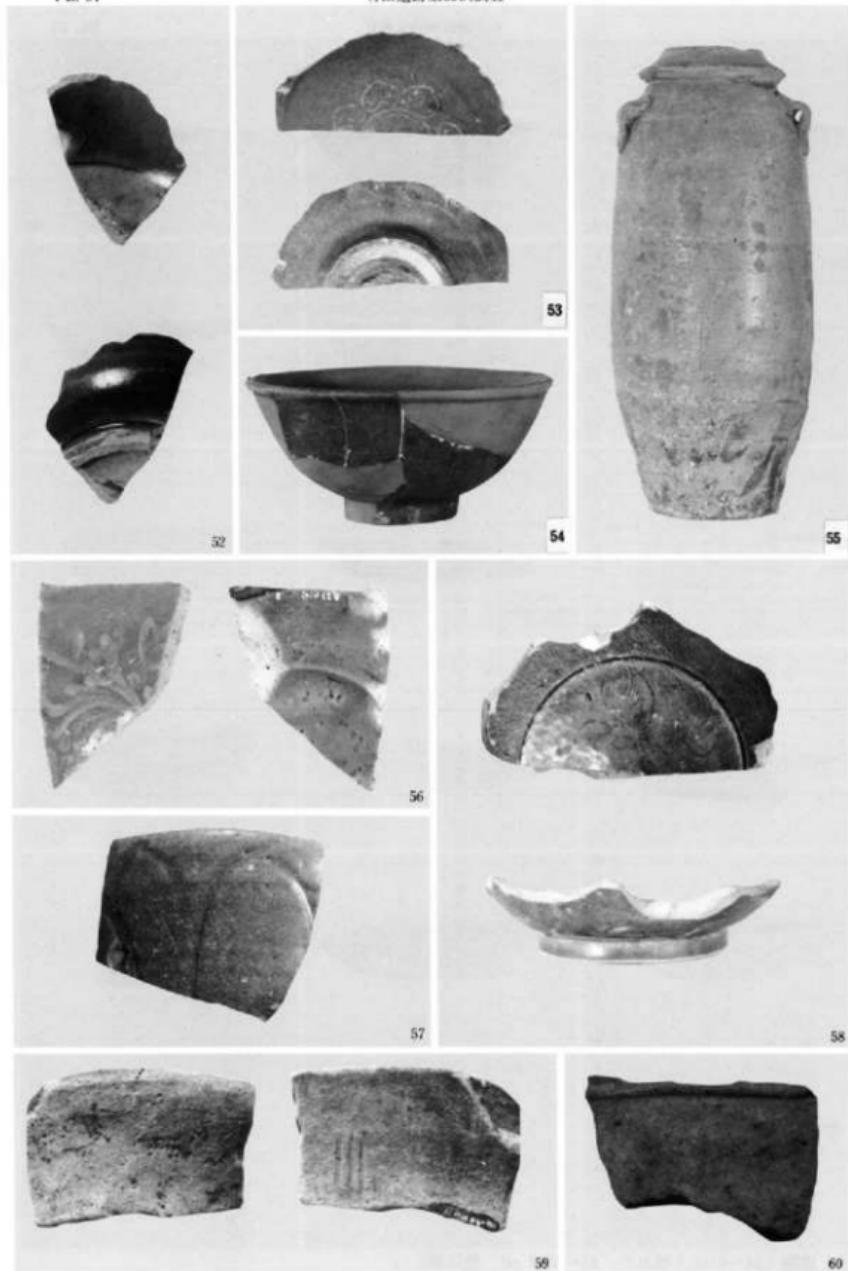
出土遺物(1・2は2号土壤、3は1号甕棺上甕、4は下甕、5～7は2号溝)



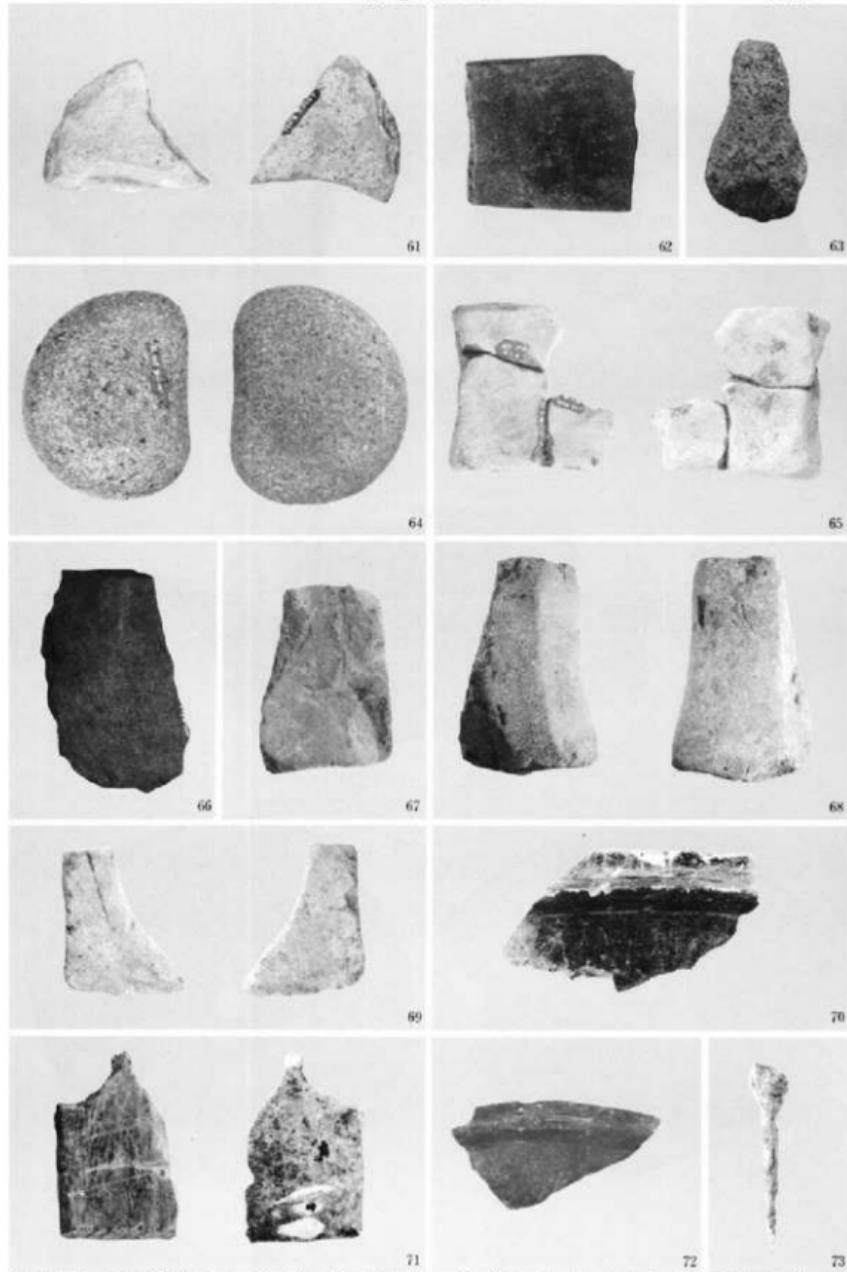
出土遺物（8～26は土壤出土、27・28はpit、他は溝、縮尺：1/3）



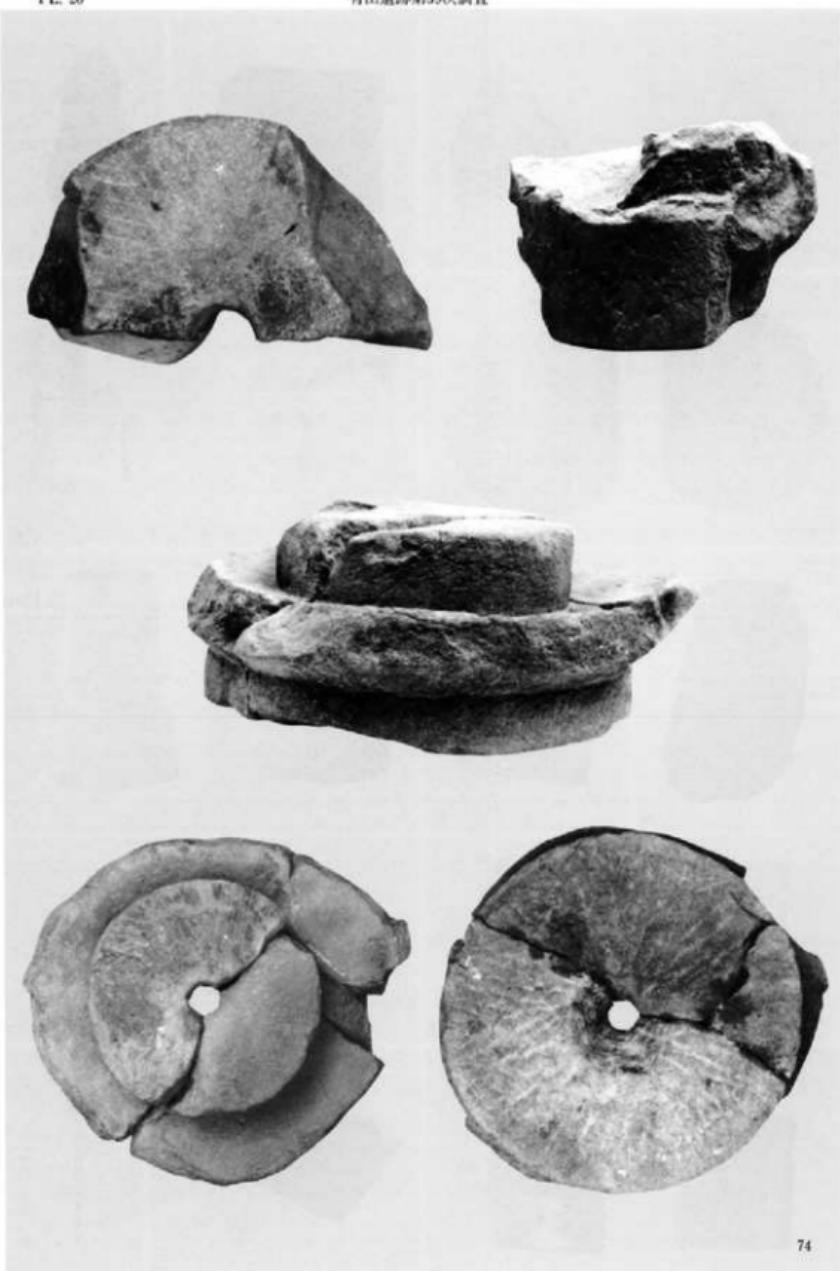
出土遺物（34～45は土壤出土、46～48は pit、他は溝）



出土遺物 (52~55・56は土壤出土、56・57は pit、58・59は 2号溝)

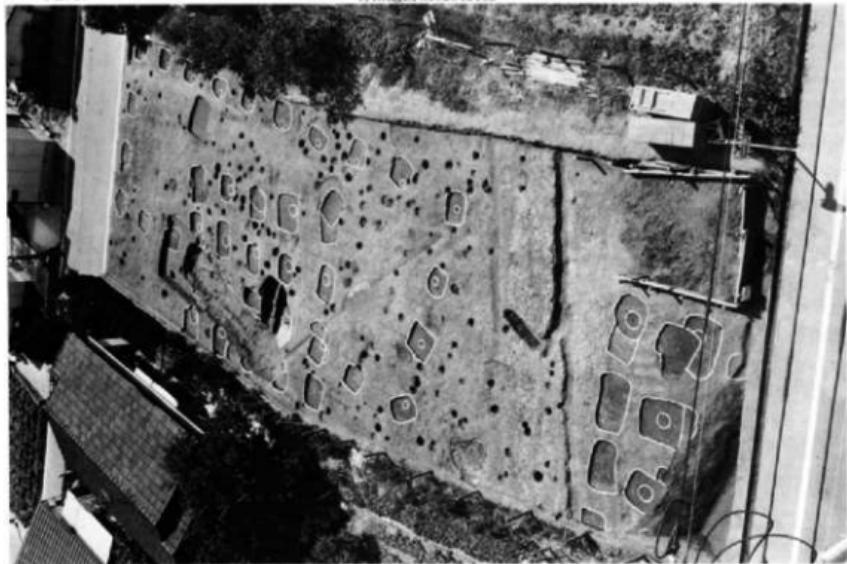


出土遺物 (61は2号住居跡、62・63・73は土壤出土、64～66はpit、67～70は溝、71・72は包含層)

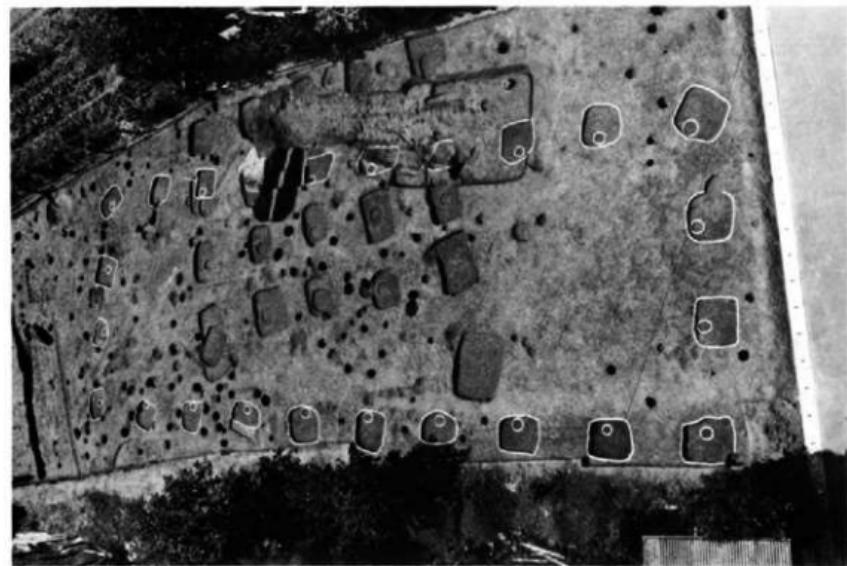




(1)第60次調査全景（東から）



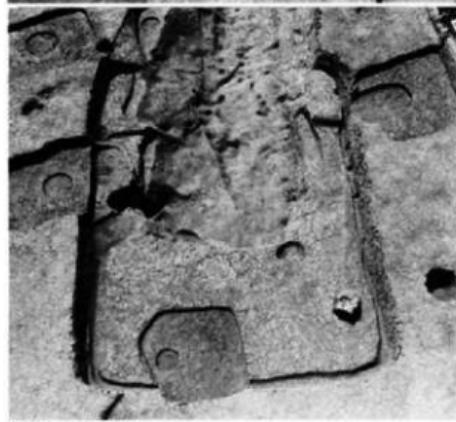
(1) 第82次調査全景（北から）



(2) 1号掘立柱建物（東から）



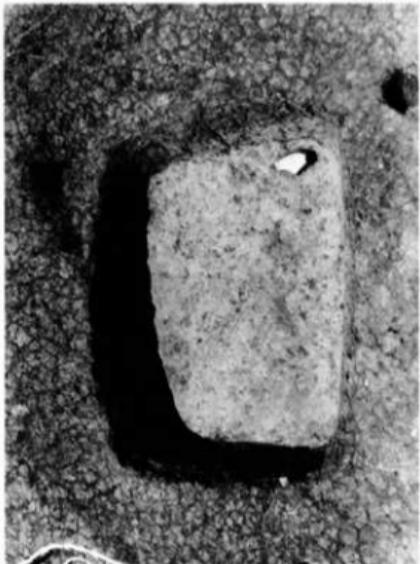
(1) 1号住居跡（南から）



(2) (1)に同じ（東から）



(3) 壺出土状態



(1) 1号土壠(東から)



(2) 1号土壠遺物出土状態



(3) 4号土壠(西から)



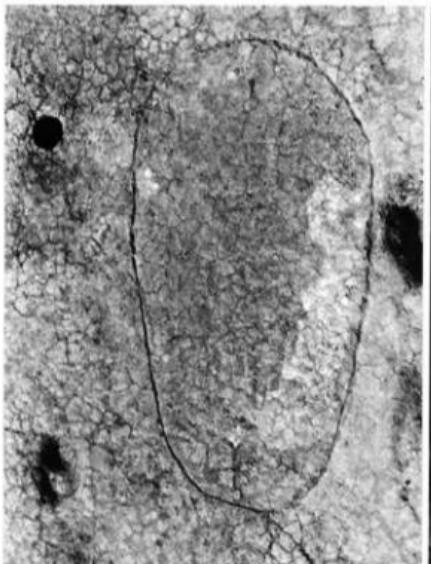
(4) 6号土壠(北から)



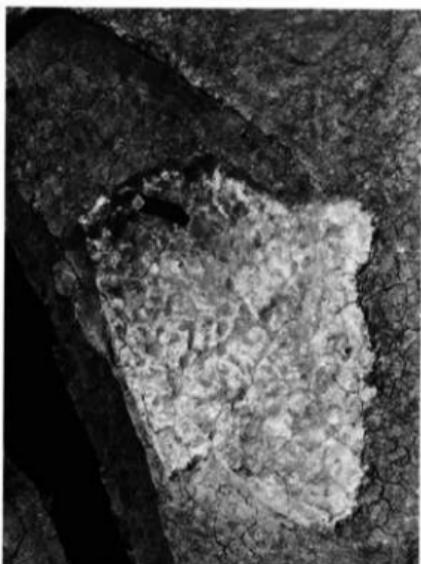
(1) 2号・8号土壤 (南から)



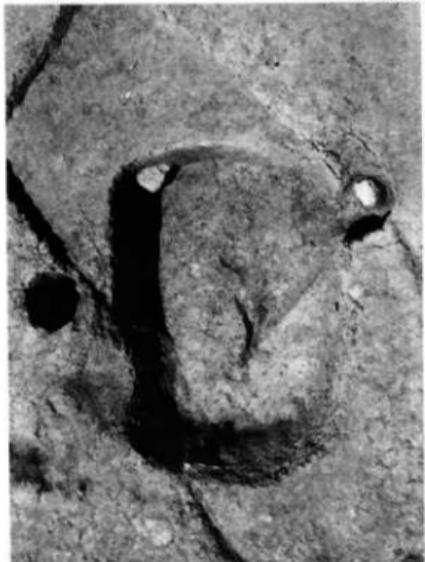
(2) 2号土壌+壁の状態 (南から)



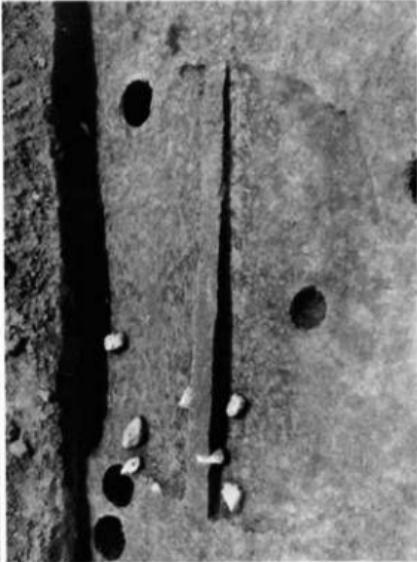
(3) 3号土壤 (南東から)



(4) 4号土壤 (東から)



(1) 6号土壠 (東から)



(2) 7号土壠 (北から)



(3) 6号土壠・2号掘立柱建物切合い状態



(4) 1号・2号掘立柱建物柱穴切合い状態



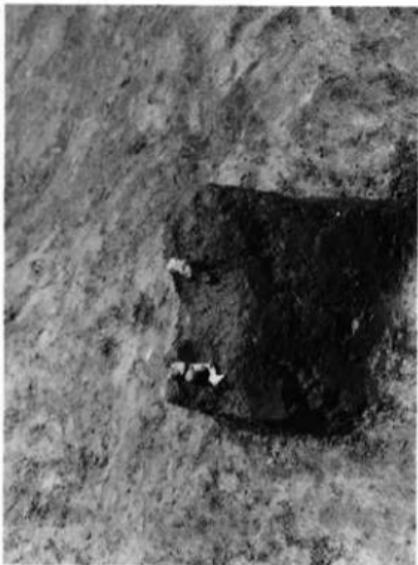
(1) 1号集石 (北から)



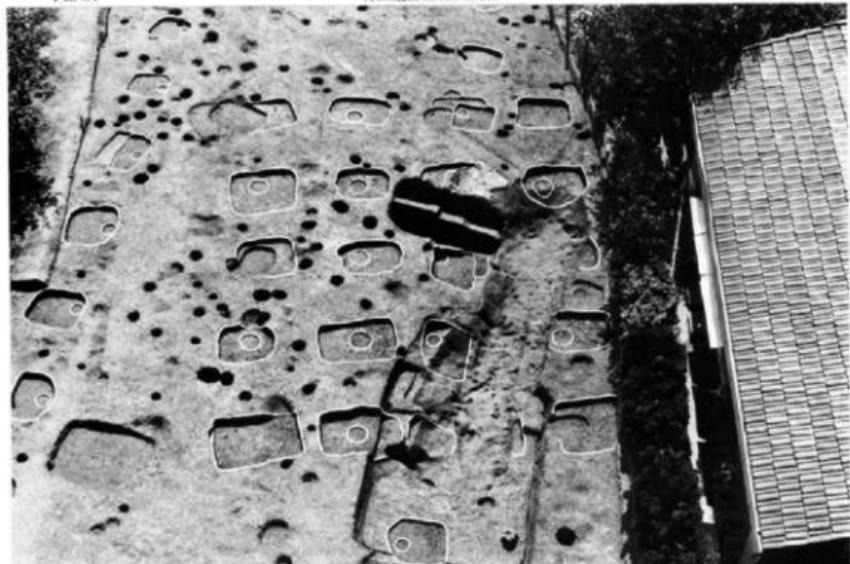
(2) 1号集石内軒斗瓦出土状態



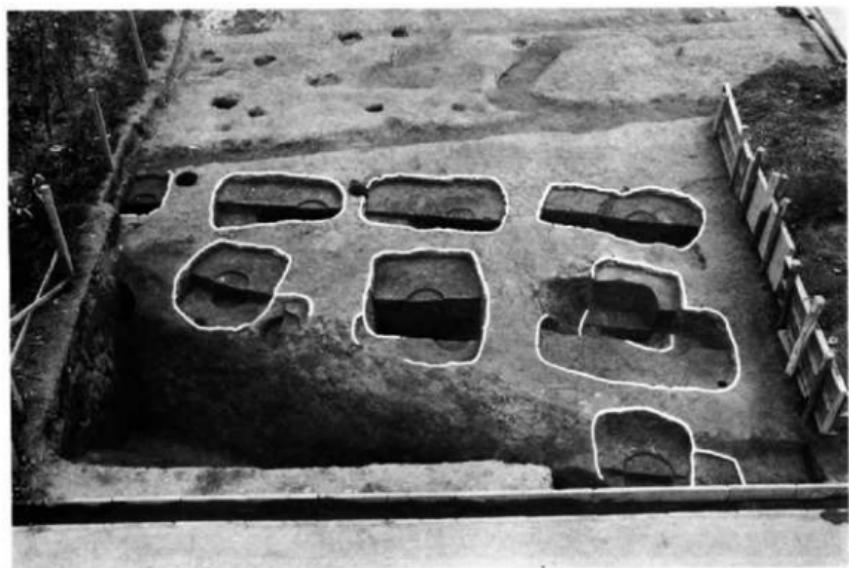
(3) 2号集石 (北から)



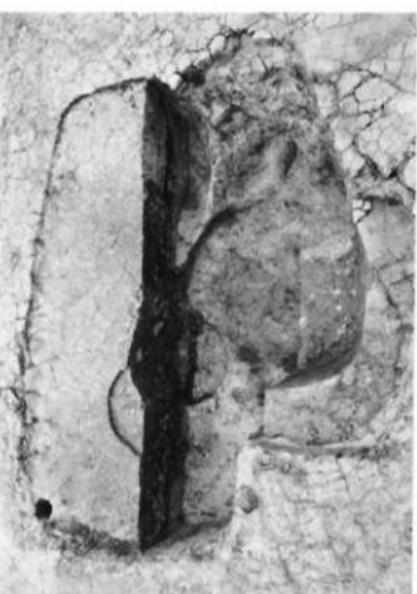
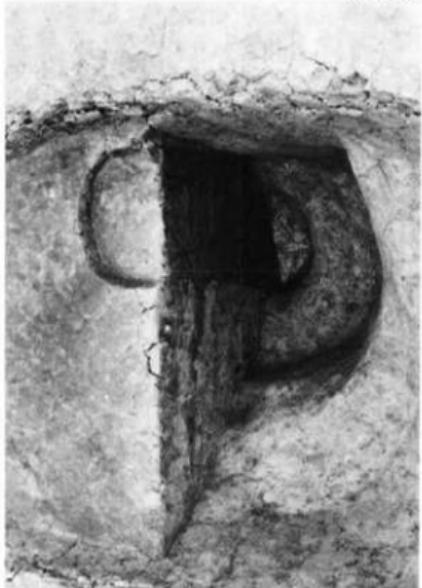
(4) 1号集石鉢釘出土状態



(1) 2号掘立柱建物（東から）



(2) 3号・4号掘立柱建物（西から）

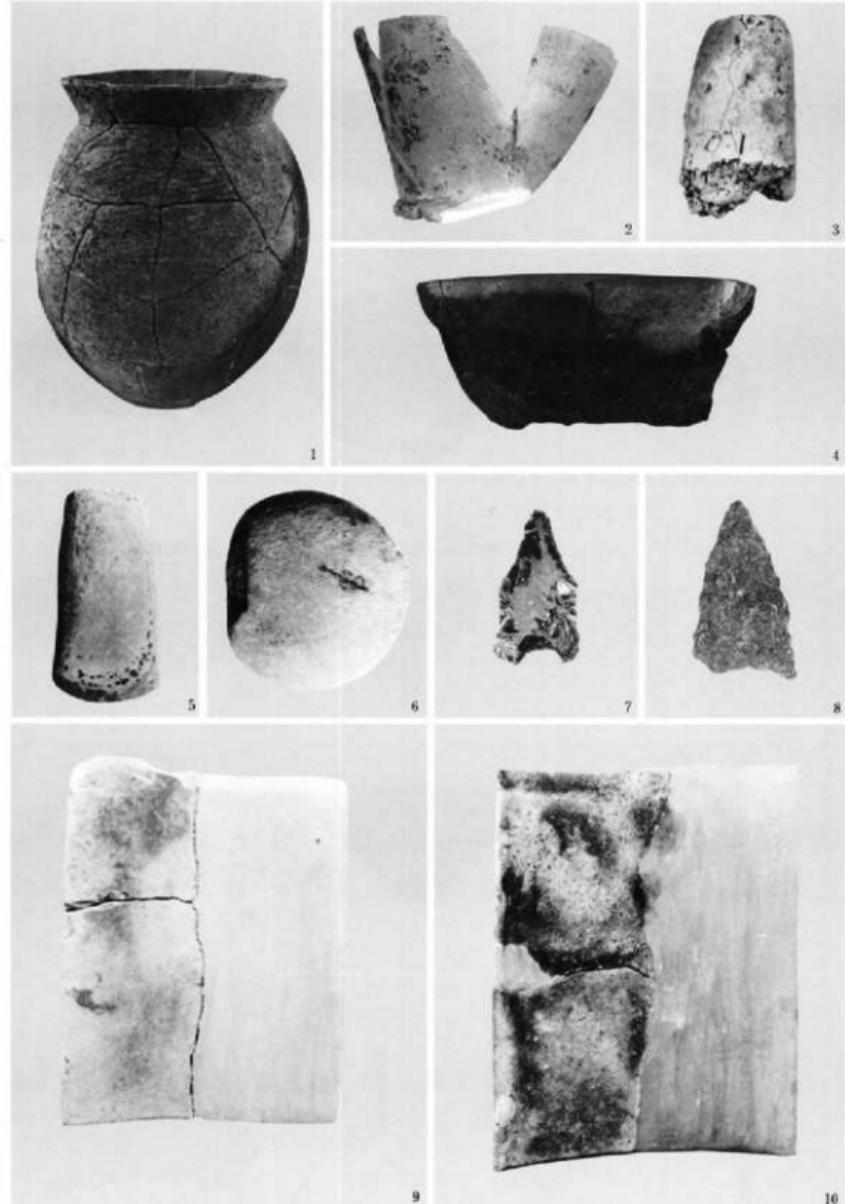




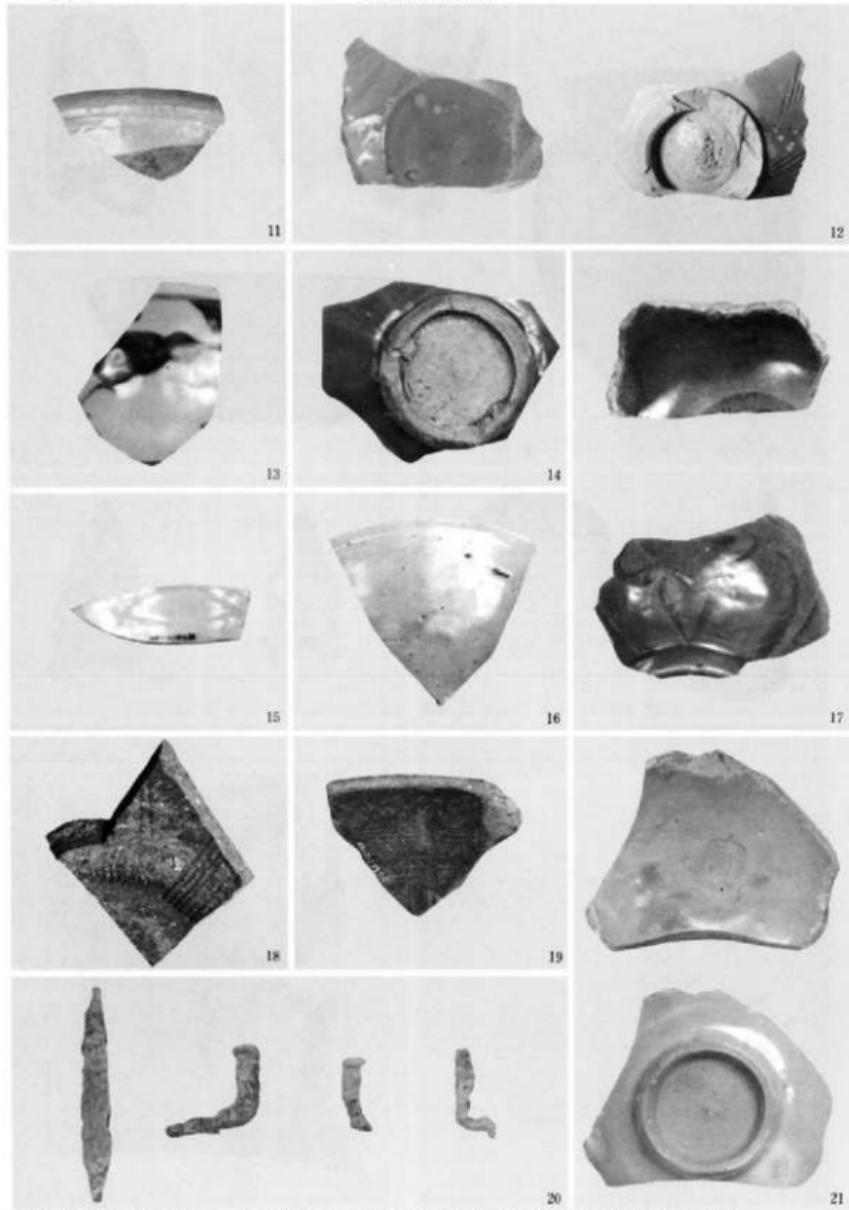
(1) 1号溝（南から）



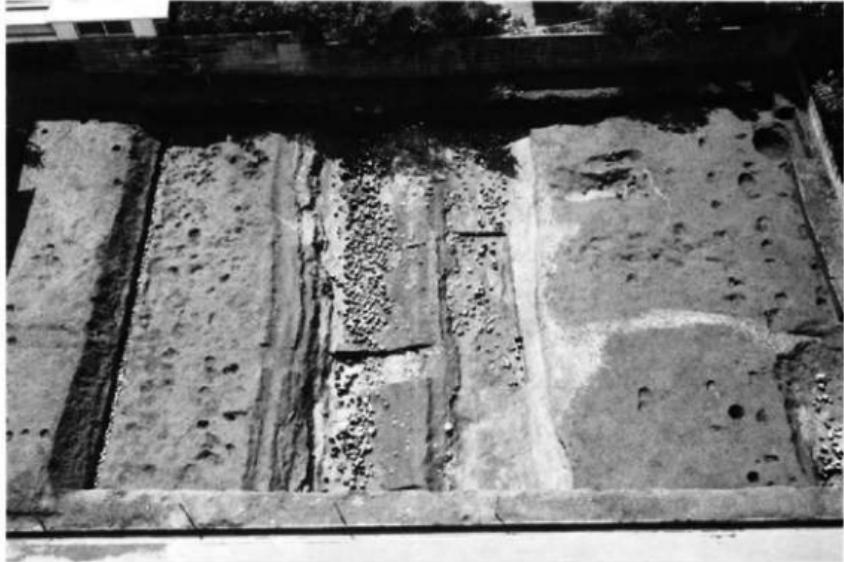
(2) 2号溝土層状態（東から）



出土遺物（1～2は住居跡、3・4は2号溝、5・6・9・10は集石遺構）



出土遺物 (11は4号土壤、12・13・15・17は1号溝、20は集石遺構、他は2号溝縮尺:1/2)



(1)第83次調査全景（北から）



(2)調査区全景（南から）



(1) 道路状遺構 II・III期（北から）



(2) 道路状遺構Ⅲ期（北から）



(1) 1号・2号溝、及び道路状遺構（北から）



(2) 1号・2号溝、及び道路状遺構北側土層



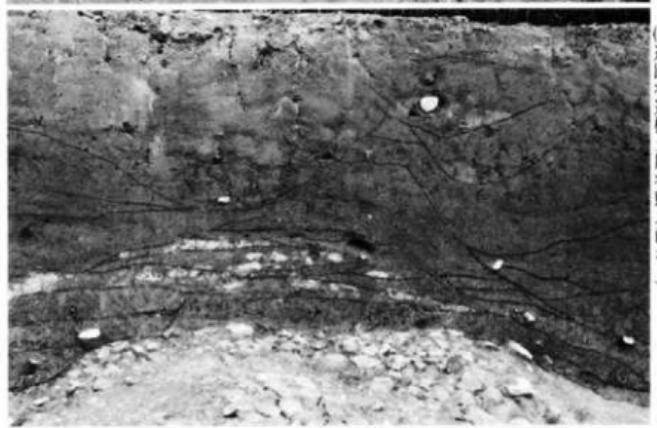
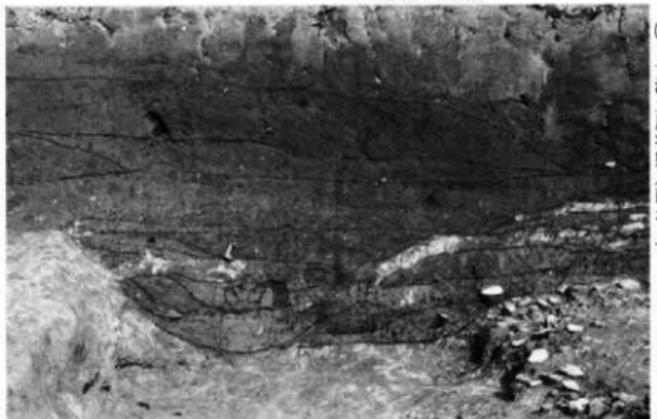
(3) 1号・2号溝、及び道路状遺構南側土層



(1) 1号・2号溝、及び道路状遺構II期（北から）



(2)(1)に同じ（南から）

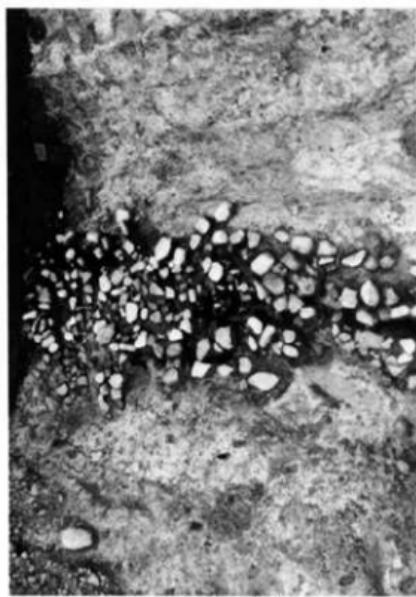




(1) 道路状況 時期II・III期の状態



(2) 2号溝の底面状態(北から)



(3) 2号溝1期底面の状態(北から)



(4) 道路状況 構造敷の状態



(1) 1号溝土層状態（北から）



(2) 2号溝土層状態（北から）

(1) 1号溝 I・II期土層状態(北から)



(2) 道路状遺構土層状態(北から)

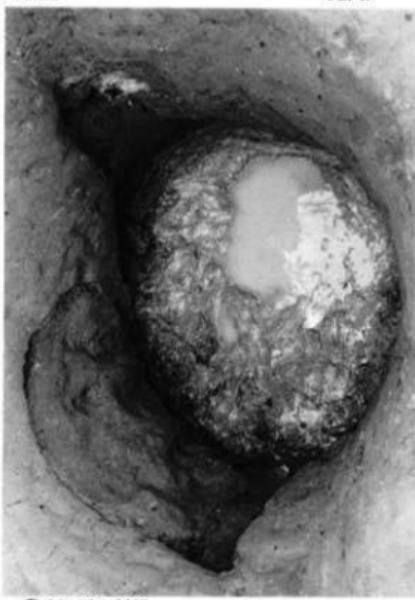


(3) 2号溝、土層状態(北から)





(1) 井戸



(2) 井戸底の状態



(3) 井戸底礫群の状態



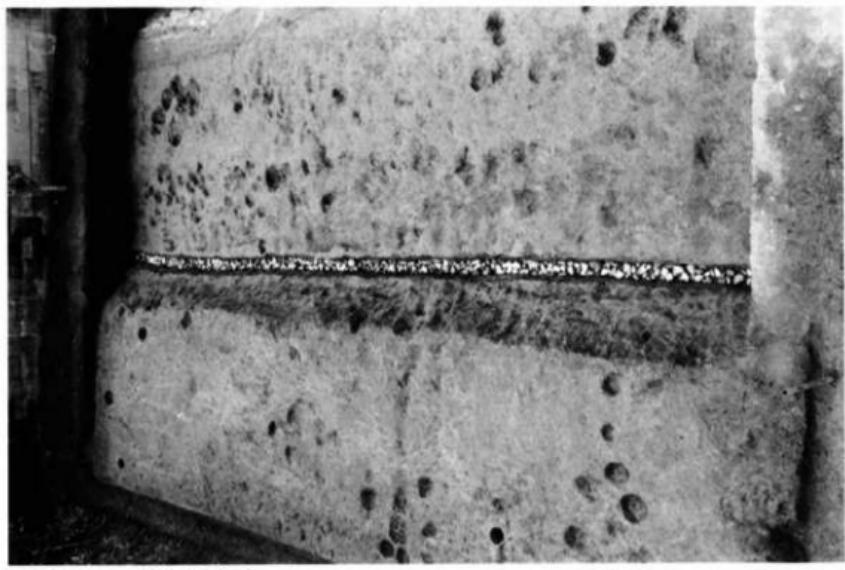
(4) 井戸底遺物出土状態



(1) 1号・2号土壇（南から）



(2) 2号土壇土層状態（西から）



(3) 近世暗黒の状態（近から）



(1) 3号土塹（裏から）



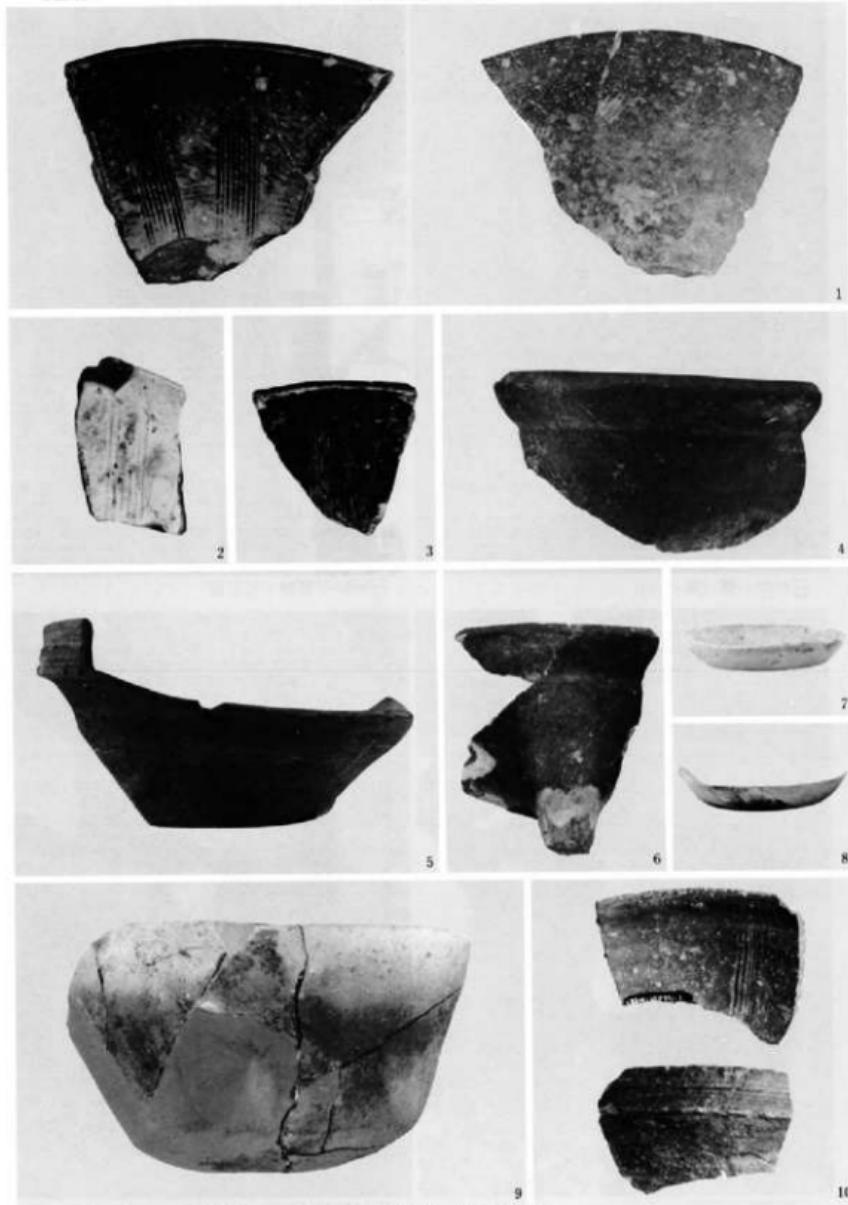
(2) 3号土塹壁土の状態



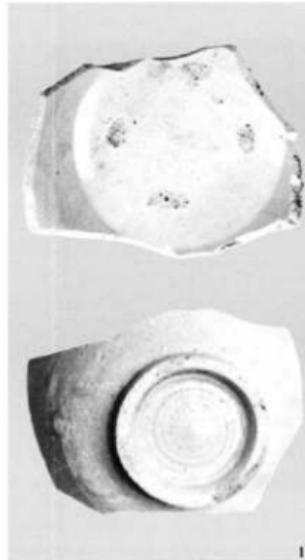
(3) 遺物出土状態



(4) 遺物出土状態



出土遺物（1～3は井戸、4・6～8は3号土壤、他は1号溝）



11



12



13



14



15



16



17



18

出土遺物（11～13は井戸、14～17は1号溝、18は2号溝 縮尺：1/3）



19



20



21



22



26



23



24



27



28

出土遺物 (19は包含層、26は井戸、他は溝。縮尺: 1/4)

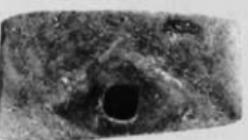


29

30



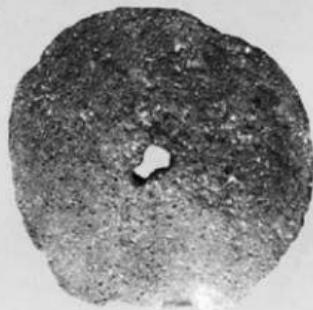
31



33

34

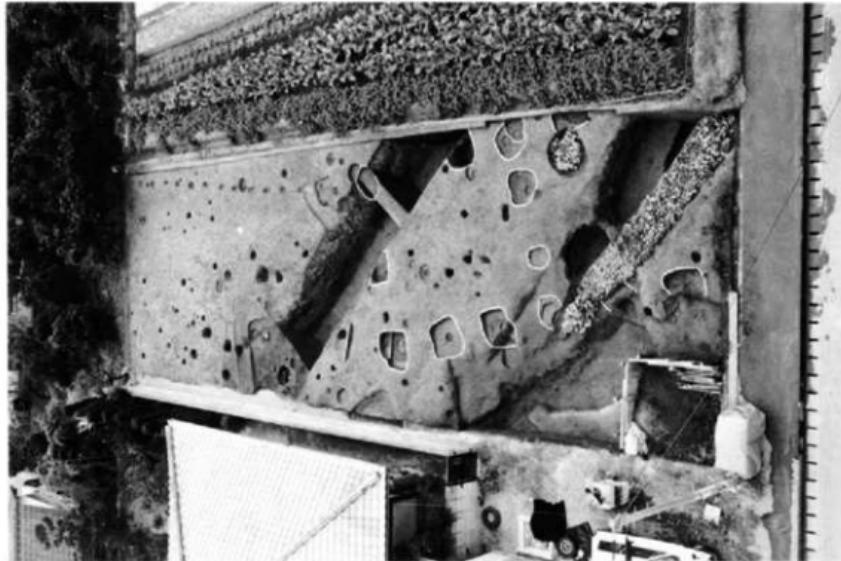
32



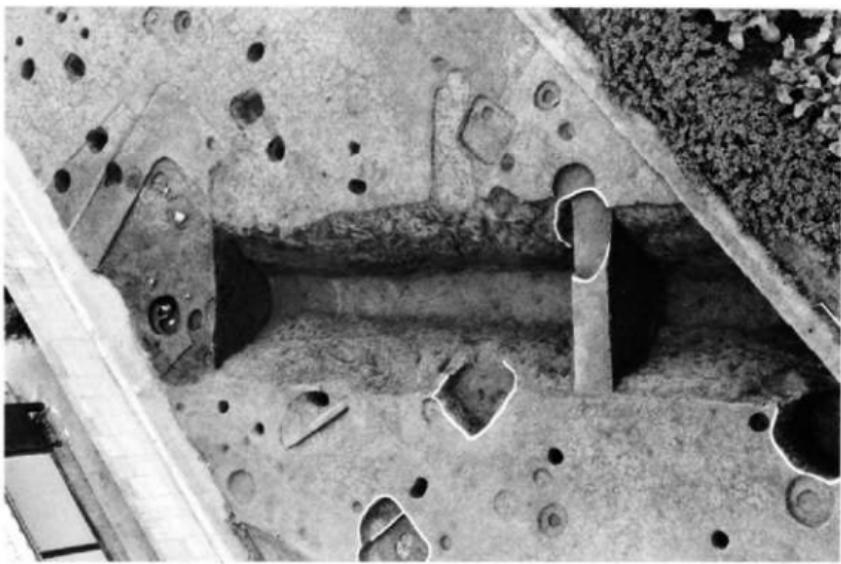
35

36

出土遺物 (30・31は1号溝、他は井戸、縮尺: 29~31・33は1/3、32・34は1/4、35・36は1/6)



(1) 第87次調査全景（東から）



(2) 1号溝（東から）

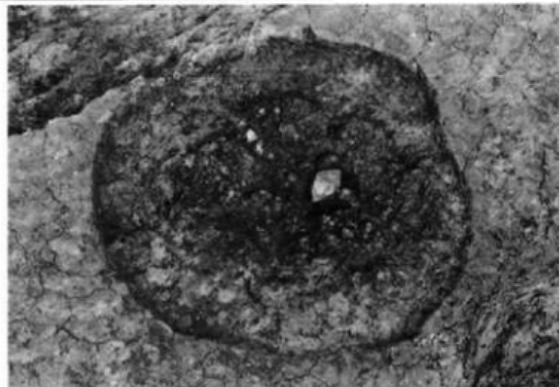


(1) 1号住居跡（北から）



(3) 炉検出状態（南から）

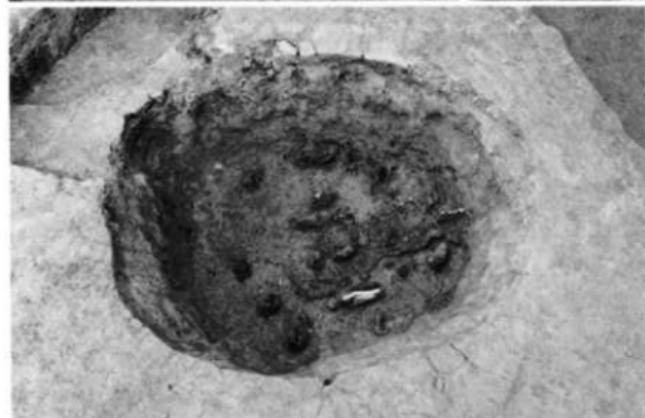
(2) 壺出土状態（西から）



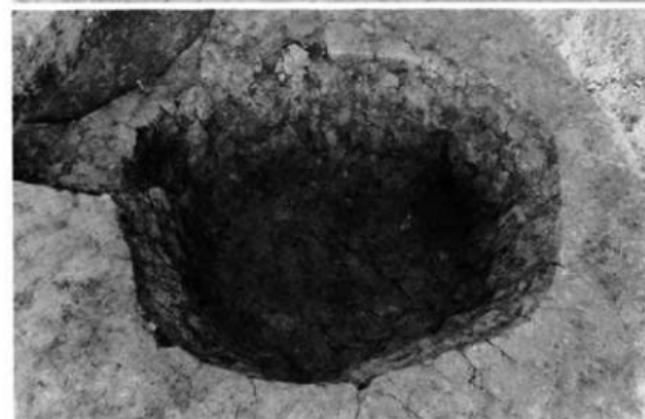
(1) 4号土壤 (北から)



(2) 鉄釘・炭化物出土状態 (南から)

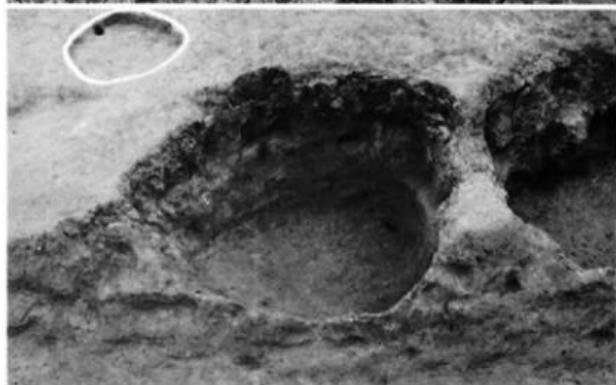


(3) 4号土壤完掘状態 (南から)





(1) 2号土壤

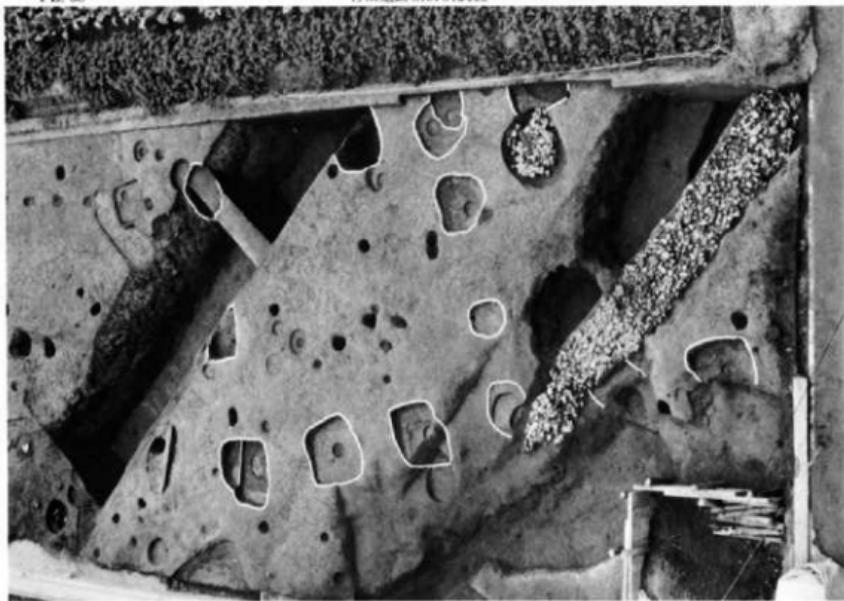


(2) 1号土壤（西から）

(3) 5号土壤（東から）



(4) 6号・7号土壤（北から）



(1) 1号掘立柱建物（東から）



(2) 柱穴土層状態



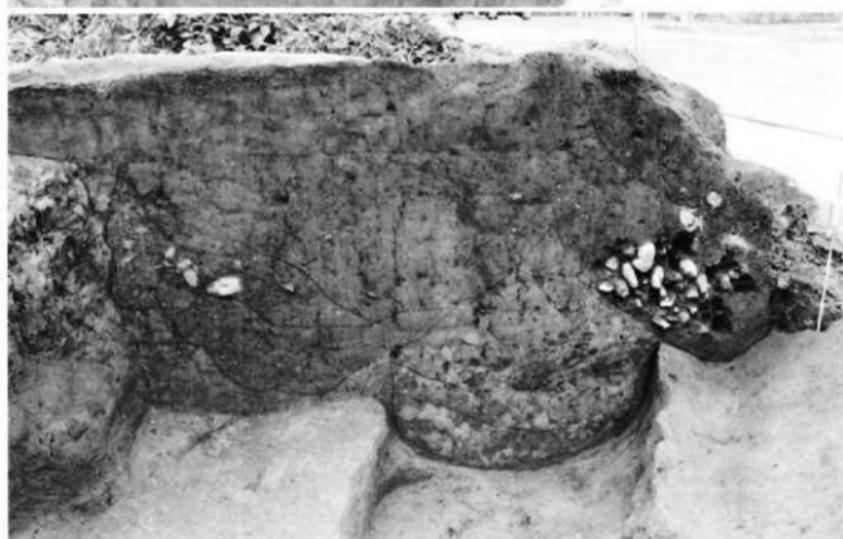
(3) 柱穴の状態



(1)
1号溝土層狀態
(東側)



(2)
1号溝土層狀態
(西側)



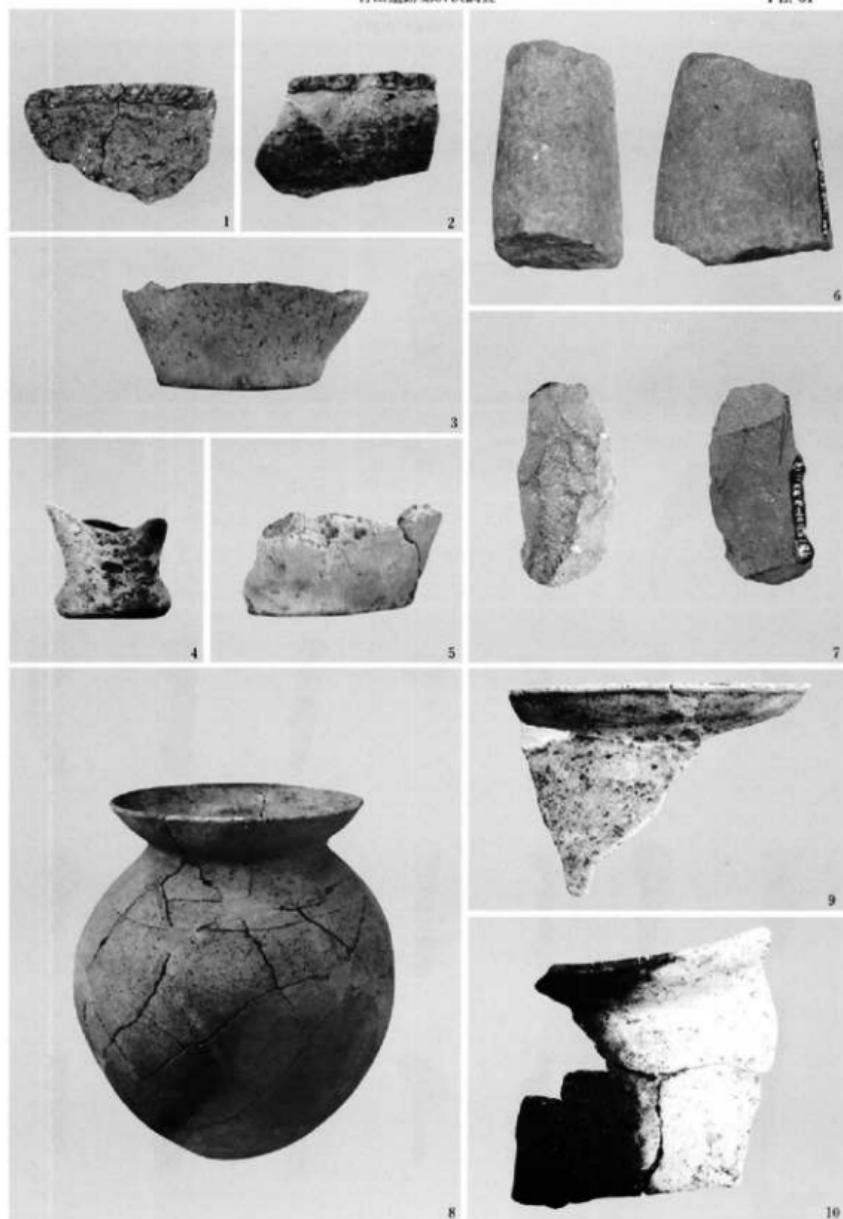
(3) 1号溝 6号・7号土壤土層狀態 (東から)



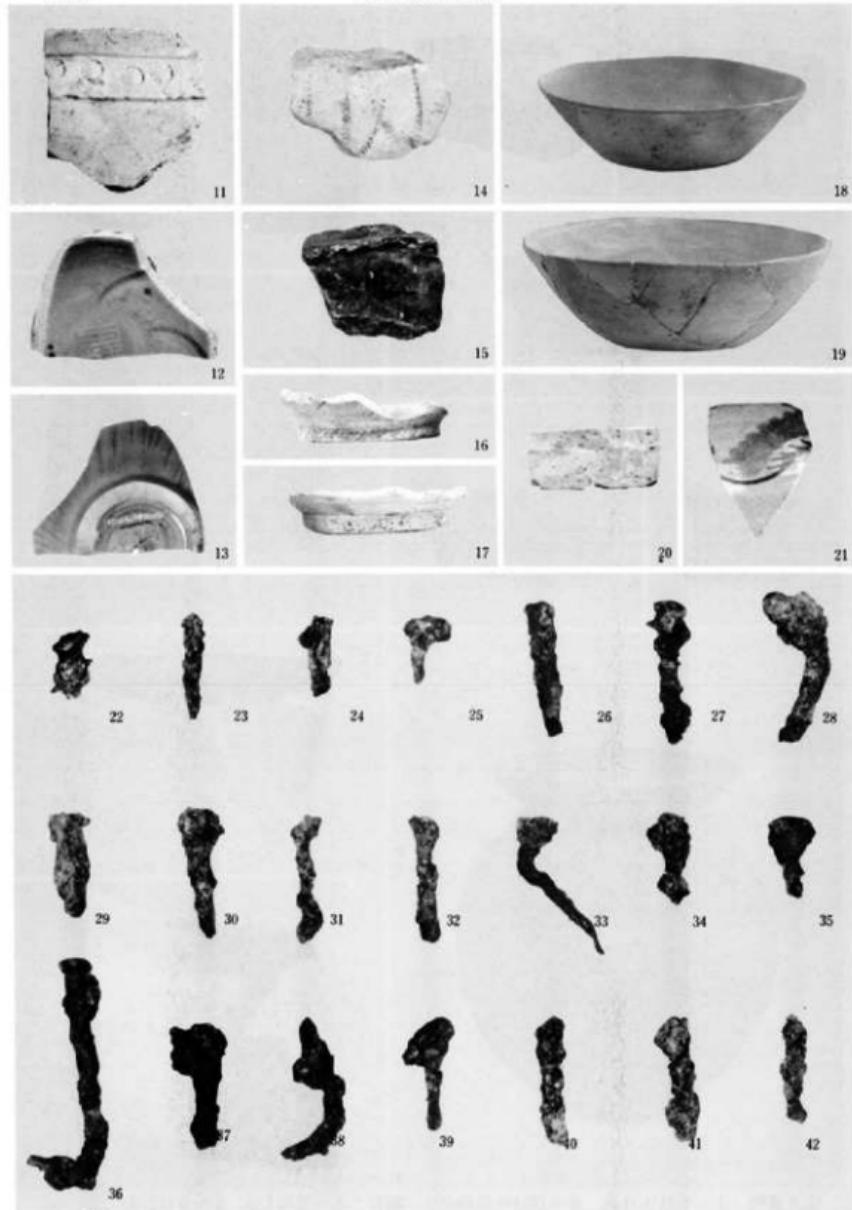
(1) 2号溝（北から）



(2) 2号溝完掘状態



出土遺物（1～8は1号溝、9～10は住居跡出土、縮尺：1～5は1/2、6～9は1/3）



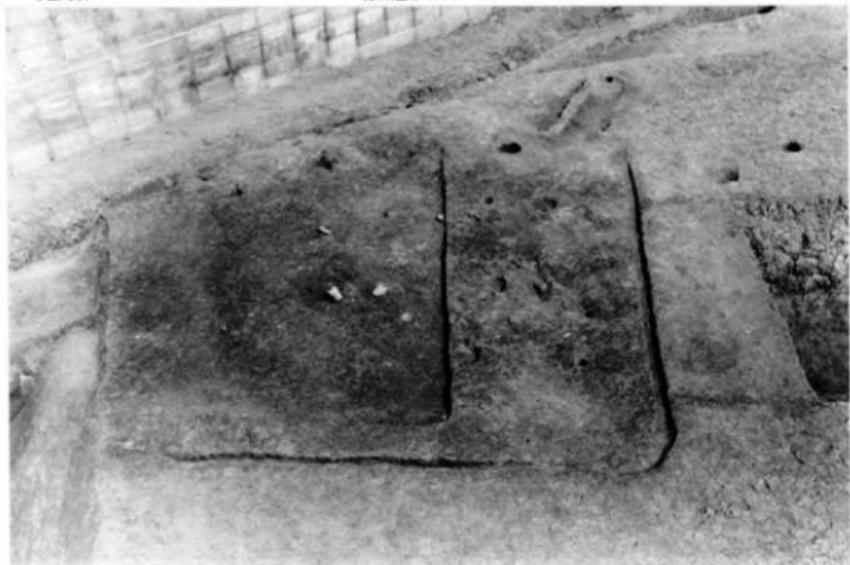
出土遺物



(1)第95次調査全景（東から）



(2)(1)と同じ（西北から）



(1) 1号住居跡 A面 (北から)



(2) 1号住居跡 B面 (北から)



(1) 1号住居踏出入口部の pit



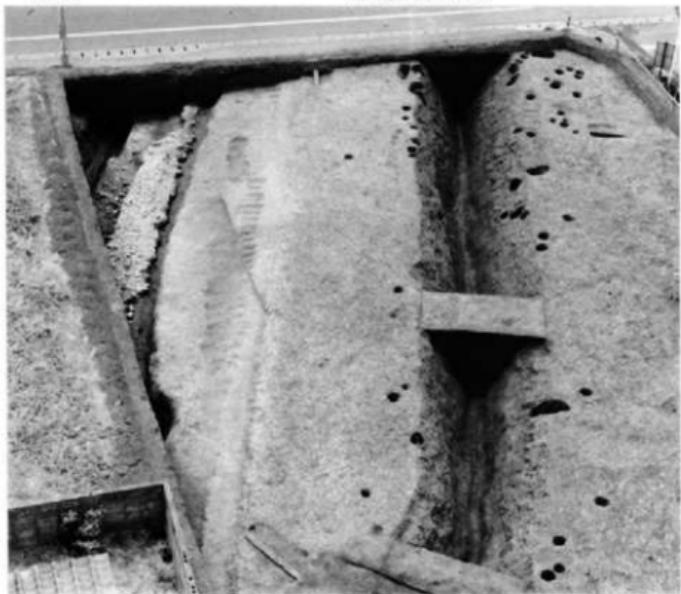
(2) 遺物出土状態



(3) 3号土壤 (西から)



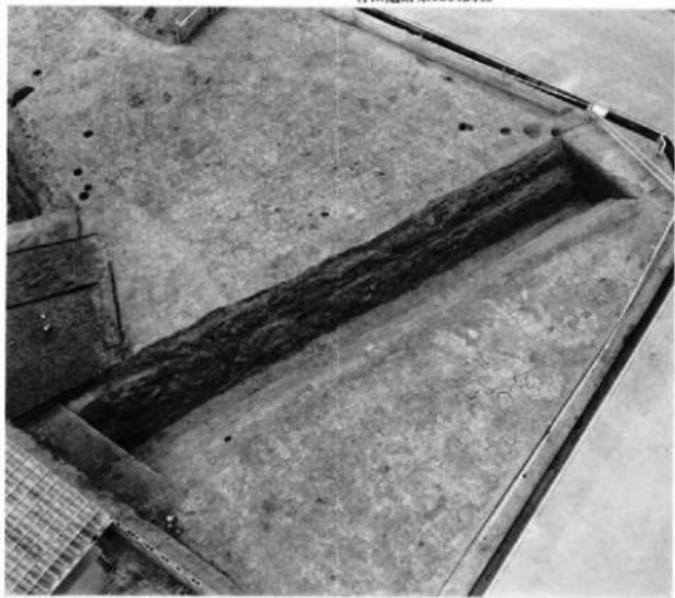
(4) 4号土壤 (東から)



(1) 1号・3号溝（北から）



(2) 1号溝断面土層図



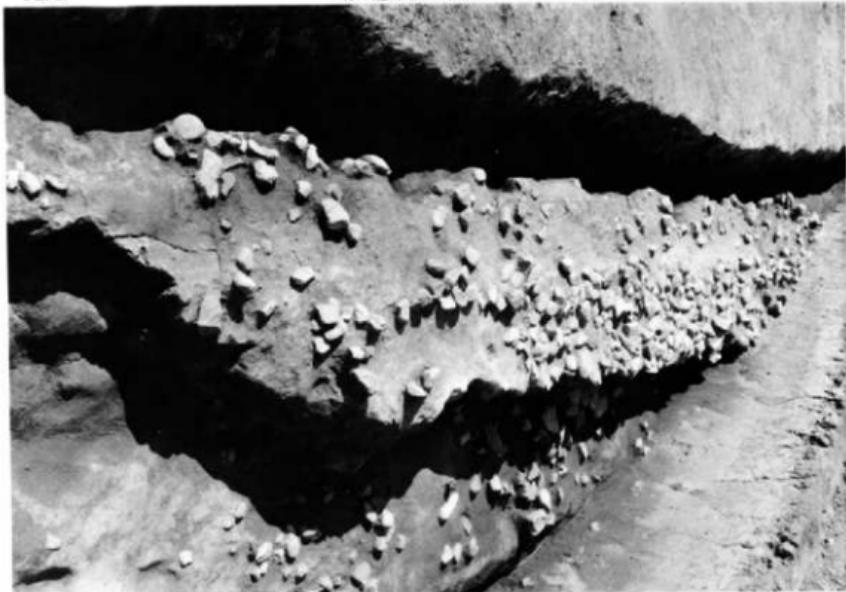
(1) 2号溝（東から）



(2) 3号溝、2号道路排水管（北から）



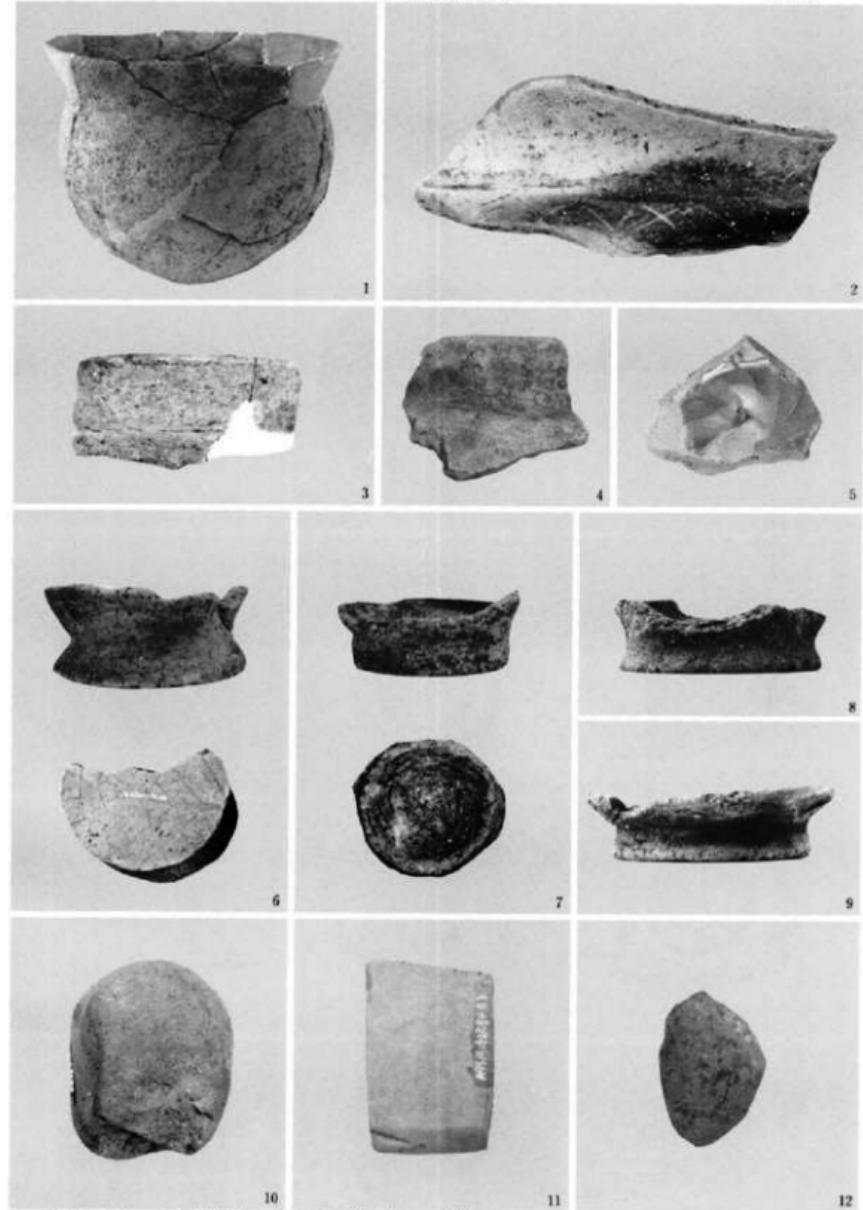
(3) 3号溝、1号道路排水管（北から）



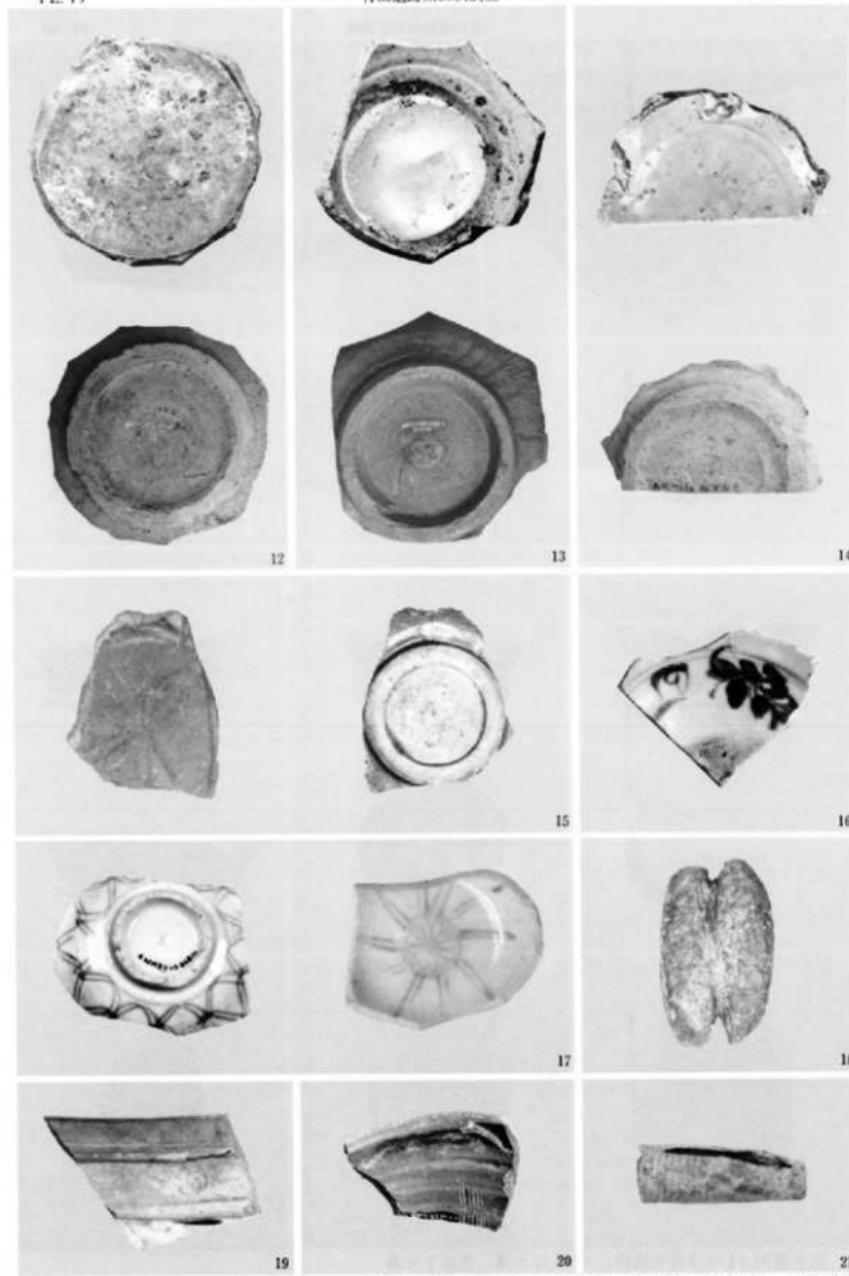
(1) 1号道路状遺構（南から）



(2) 3号溝の状態（南から）



出土遺物（1～3は住居跡、4・5は土壤、他は1号溝
縮尺:1・2・3・10は1/3、4～9は1/2、11・12は1/1）



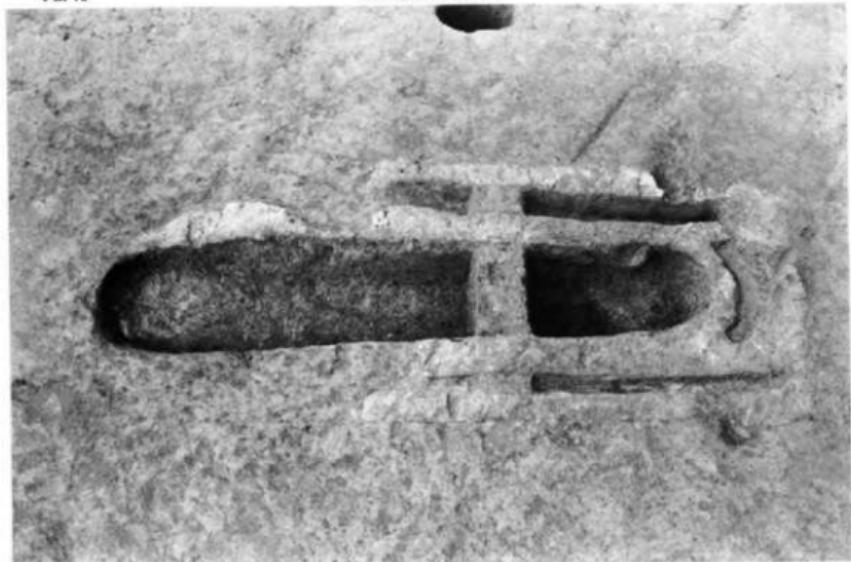
出土遺物 (12~18・21は3号溝、19は2号溝、20は1号溝、縮尺: 12~17、19・20は1/3、18は1/1)



(1)第97次調査全景



(2)甕棺出土状態



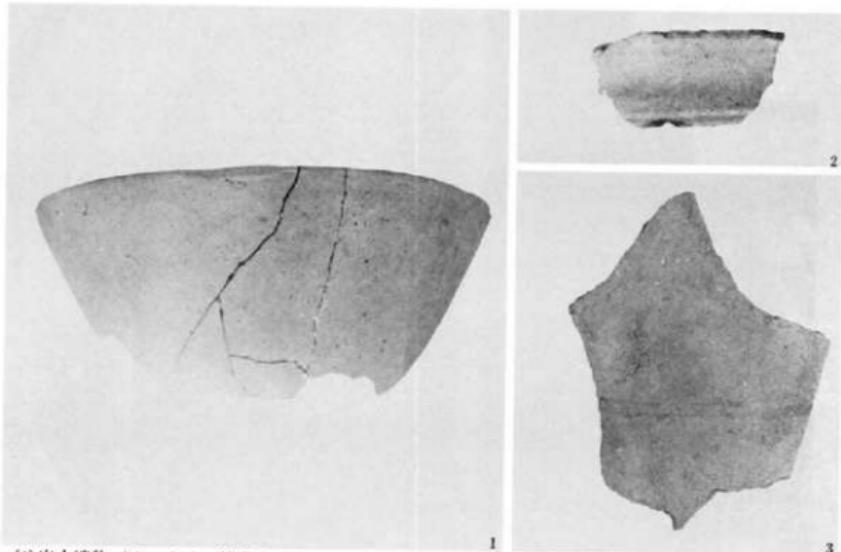
(1)土壤墓（東から）



(2)土壤墓の粘土帶撤去状態



(3) 土壌墓小口部の状態



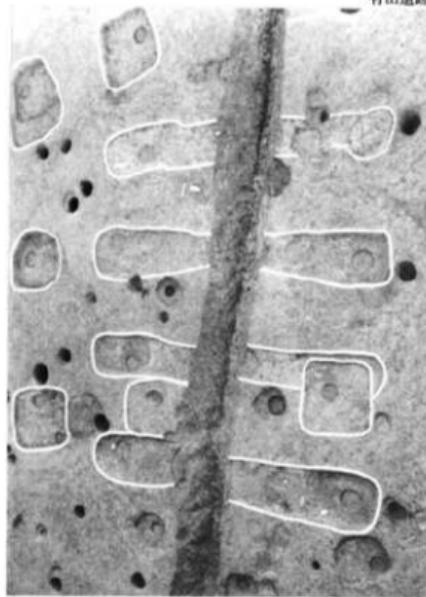
(4) 出土遺物 (1・2は、攪乱出土、3は1号窯棺)



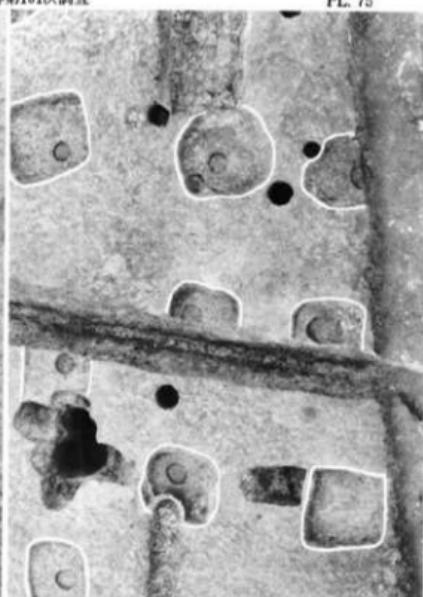
(1)第101次調査全景（東から）



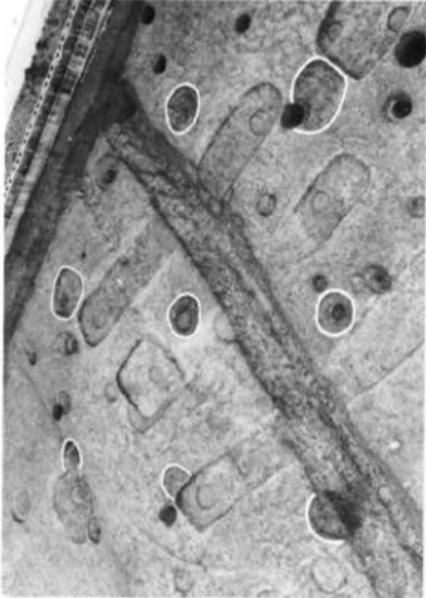
(2)1号～3号掘立柱建物（南から）



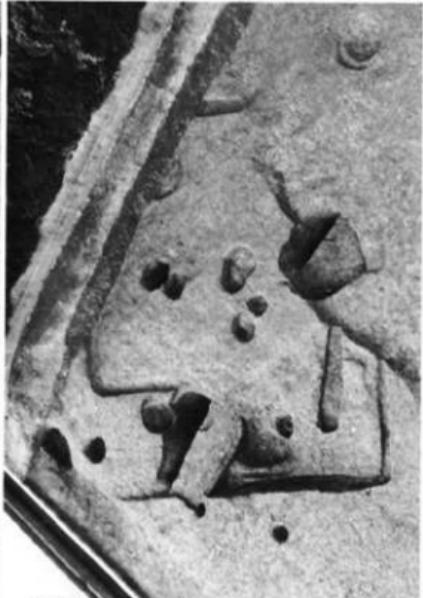
(1) 1号櫛立柱遺物 (南から)



(2) 3号櫛立柱遺物 (東から)



(3) 4号櫛立柱遺物 (東から)



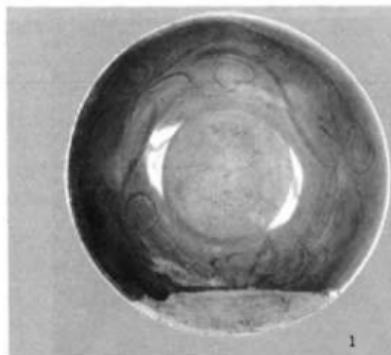
(4) 住居跡 (東から)



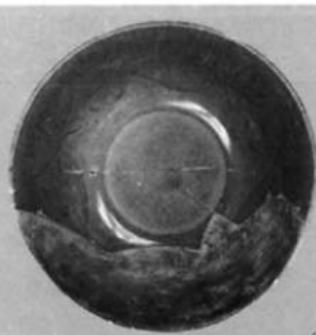
(1) 2号土壤墓（北から）



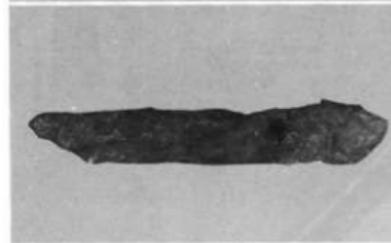
(2) 2号土壤墓遺物出土状況



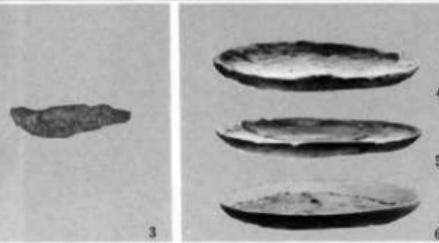
1



2



3

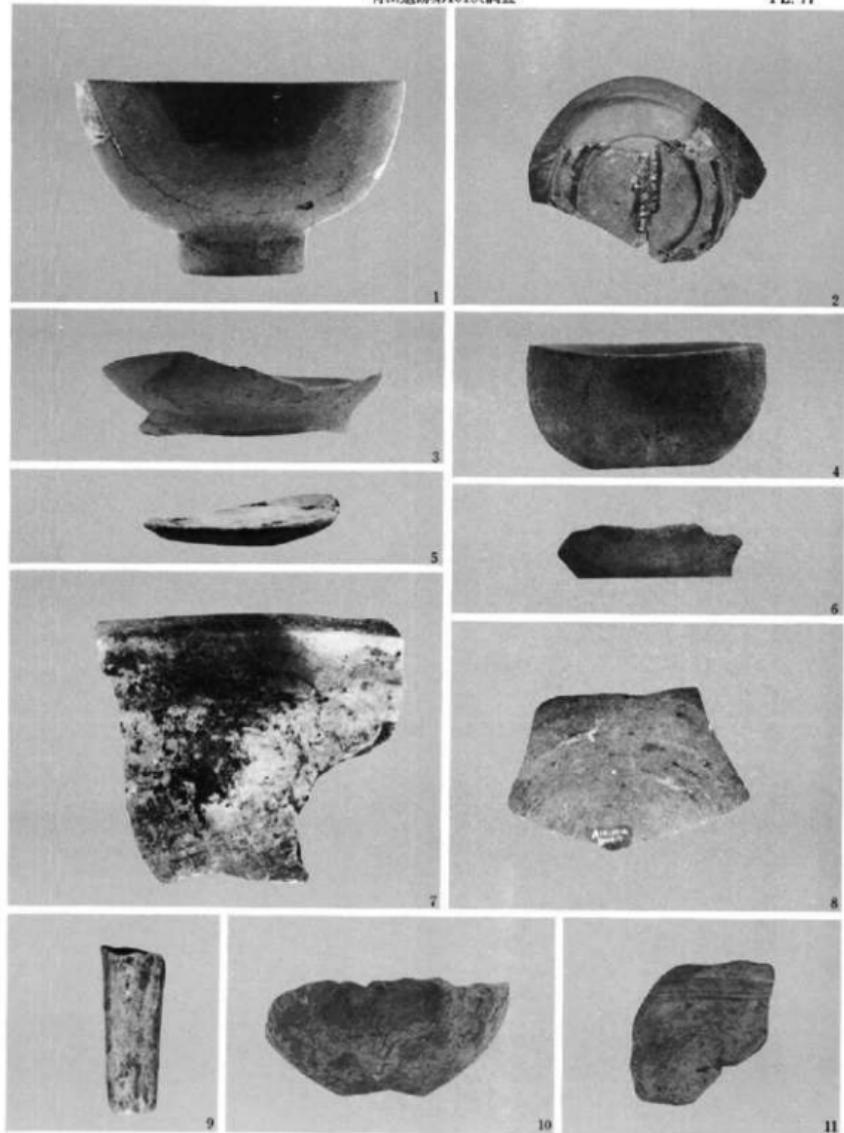


4

5

6

出土遺物（1～6は2号土壤墓）



出土遺物（4・10は掘立柱建物、1～3はpit 5～7・9・11は1号溝、8は4号溝）

付 論

1. 福岡市早良区有田遺跡出土の細形銅戈に
付着する織物について
2. 福岡市大字拾六町宮の前遺跡 3号石棺出土の
鉈に付着する織物について

京都工芸繊維大学名誉教授 布 日 順 郎

付 論

1. 福岡市早良区有田遺跡出土の細形銅戈に付着する織物について

1949年1月に発掘調査された有田遺跡の第2号墓から発見された細形銅戈の下方部分に織物が付着していることについては早くから知られていたが、その織物についての詳細な調査は行なわれていなかった¹⁾。

筆者は1985年7月12日に同市を訪れた際に標記の織物の写真撮影と実体顕微鏡による観察を行ない、さらに織物片の一部についての織り密度や織維断面等に関する調査を行なったので、ここに報告する。

なお、本遺跡の時期は弥生前期末とされる。

1. 材 質

材質調査は織維断面形により、断面作成にはパラフィン切片法を適用した。第2・3図にみると、これらの断面形は家蚕のものであるから、この織物は絹に相違ない。

2. 織り密度と織維断面計測値による产地推定

第1図にみると、出土の絹は平絹である。その織り密度は第1表にみると、比恵、栗山両遺跡の絹にきわめて近いことから、本遺跡の絹もまた、比恵、栗山両遺跡の絹と同様日本製とみられる²⁾。

本遺跡の絹の織維断面計測値（経、緯の平均値）を漢代のそれ（第2表）と比較すると、第3表にみると、完全度では本遺跡のほうが漢代4墓のいずれよりも小さい。いずれも有意な差とはいえないが、このことは本遺跡の絹の材料糸が日本産であることを証拠立てるものとみられる。また、断面積では本遺跡の絹での値が、陽高と楽浪の値よりも大きく、馬王堆、ノイン・ウラの値よりも小さい。この場合、有意差のみられるのは陽高のみであるが、樂浪との差も有意に近いものである。すなわち、どちらかといえば陽高、樂浪よりは馬王堆、ノイン・ウラに近い値である。このことから、本遺跡の絹の材料糸を産した蚕は中国本土（おそらく華中）系統の品種で、四眠蚕であった可能性が考えられる³⁾。

以上のことから、有田遺跡出土の細形銅戈に付着している絹は、同遺跡のあたりで飼育された蚕の糸を使ってそのあたりで織られたものと思われ、死者を葬るにあたり、細形銅戈をそれで包んで副葬したものと考えられる。

終わりに、本調査を行なう機会を与えられた福岡市教育委員会に感謝する。

文 献

- 1) 福岡市教育委員会「有田遺跡——福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告——」1968
- 2) 布目順郎「比恵遺跡出土の細形銅劍に付着する織物・織維について」（福岡市教育委員会「比恵遺跡——第6次調査・遺構編——」福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集）1983
- 3) 布目順郎「養蚕の起源と古代絹」雄山閣、1979

第1表 有田遺跡出土の平綱における繊維断面計測値と織り密度
(参考までに、比恵、栗山古遺跡出土の綿製品での数値を併記した)

遺跡	資料の形態	付着物体	経緯の別	繊維断面についての計測値			織糸数	経糸数と織糸数の比	織糸の巾(mm)
				完全度(%)	面積(μ^2)	供試繊維の数			
有田	平綱	戈身	経縫	42.6±3.42	72.7±7.84	35	40	2.00	0.25-0.40 0.20-0.25
			縦縫	55.7±4.53	56.3±5.36	30	20		
比恵	平綱	劍身	経縫	45.6±4.38	61.1±6.33	30	42	2.62	0.20-0.33 0.24-0.32 -
	綿織物	劍柄	縦縫	50.8±3.22	63.0±4.56	30	16		
				49.1±2.63	77.1±6.07	64			
栗山	平綱	人骨	経縫	54.4±3.17	74.4±5.84	30	40	1.67	0.10-0.15 0.10-0.20
			縦縫	53.1±3.72	65.3±5.00	34	24		

備考 有田遺跡の綿を付着する細形鎧戈は第2号墳から出たもの。時期は、有田が弥生前中期、比恵と栗山が弥生中期前半。

第2表 漢代の平綱における繊維断面計測値

遺跡名	繊維横断面についての計測値	
	完全度(%)	面積(μ^2)
陽高県(山西省)	50.9 (10)	37.1 (10)
楽浪	50.8 (23)	49.8 (23)
馬王堆1号	— (5) [53.9]	65.5 (5) [69.3]
ノイン・ウラ	53.9 (20)	73.0 (20)
バルミラ	—	—

備考(1) 馬王堆の綿織維横断面計測値は「考古学報」(1974年第1期)にあるもの(ただし、〔 〕内の数値は筆者が同学報に示された綿織維横断面写真をもとに算出したもの)。
(2) 本表の数値にはマタクでのものは含まれていない。
(3) () 内の数値は資料数。

第3表 有田遺跡出土の平綱と漢墓出土の綿製品における繊維断面計測値の差の有意性検定

弥生前中期遺跡とその資料	完全度	面積	漢代4墓とその資料
有田遺跡の平綱(2)	<0.7	>***	陽高県漢墓の綿製品(10)
〃	<0.8	>0.2	楽浪漢墓の綿製品(23)
〃	{ — [<0.4] 0.2]	{ <0.4 [<0.9] 0.1}	馬王堆1号漢墓の綿製品(5) ノイン・ウラ古墳の綿製品(20)
〃	<0.2	<0.1	

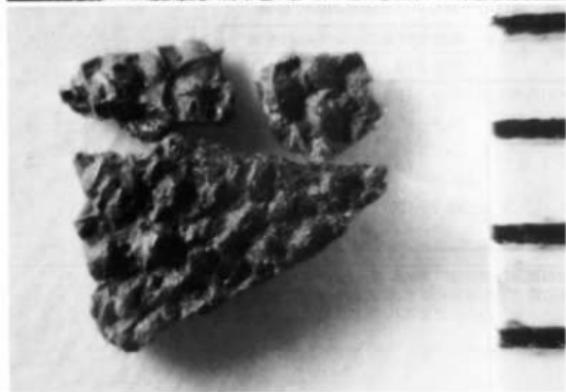
備考(1) <又は>の下に付した***印は危険率0.001の水準で両平均値間に有意差を認めるもの。同じ場所に数値を記したものは危険率0.05以下の水準では両平均値間に有意差を認めないもの(この数値が大きくなるほど両平均値間の差が小さくなる)。

(2) () 内の数値は資料数。

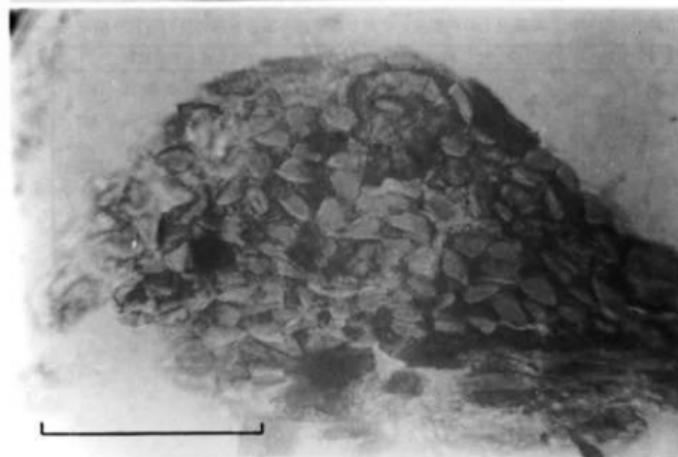
*説明文は図版 2
に記入



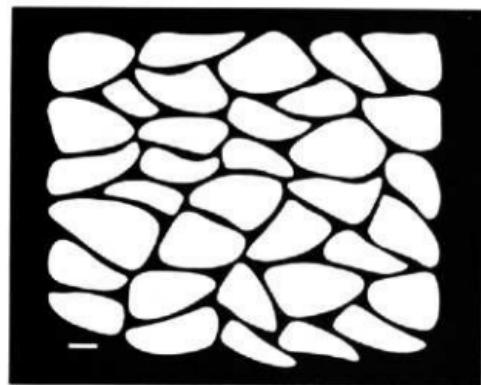
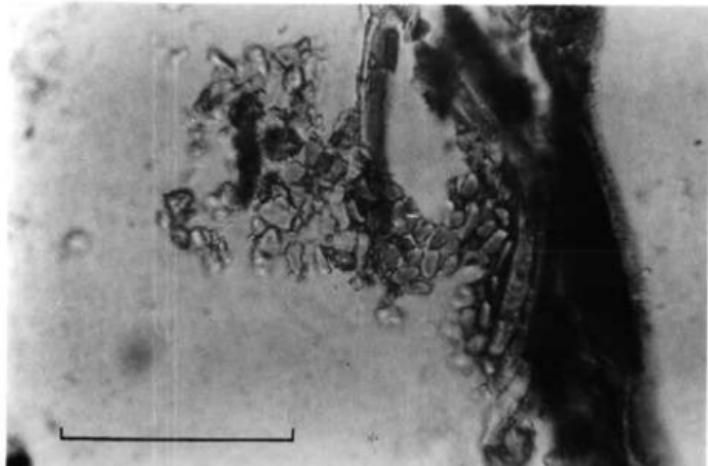
1



2



3



有田遺跡出土の細形銅戈に付着する平網

1. 最も大きな断面
2. その一部拡大

Scale : いずれも 1 mm

同じ平網の繊維断面写真

3. 経糸
4. 緯糸

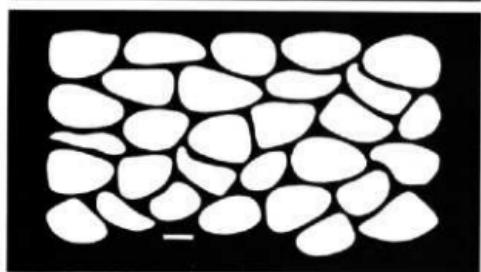
Scale : いずれも 0.1 mm

同じ平網の繊維断面転写図

(個々の断面転写図を無秩序に並べたもの)

5. 経糸
6. 緯糸

Scale : いずれも 5 μm の 1/2



6

付論 2

2. 福岡市大字拾六町宮の前遺跡 3号石棺出土の鉢に付着する織物について

標記の織物については1971年の報告書¹⁾にその概要が記されている。

織物は鉢（長さ17.8cm）の全面を広く覆い、その縫目は粗いながらも確りと織られている様子がうかがえる（第1図）。

本遺跡の時期は弥生後期の終末とされ、この織物がもし絹であれば、この時期の出土絹は殆どないので、きわめて貴重なものといわなければならない。邪馬台国の時代と余りかけ離れていないことでも興味深い資料である。その材質や織維断面についての調査を行なったので、ここにその結果を報告する。

1. 材質

材質調査は織維断面形によった。断面作成には従来同様パラフィン切片法を適用した。

結果は第2図にみる通り、明らかに家蚕のものである。

2. 織り密度と織維断面計測値による産地推定

出土の織物は第1図にみるように、平絹であり、その織り密度と織維断面計測値は第1表に示す通りである。

この絹の織り密度17×15は弥生絹の中でも最も粗い部類に属し、弥生後期の麻織物4種類の平均22.3×13.3はもとより、弥生時代の麻織物6種類の平均20.5×14.2に比べても本遺跡の絹のはうが粗い。

筆者はこれまでに、弥生遺跡出土の絹を、織り密度の点からすべて日本製とみなしてきたが、弥生絹の中でも粗いほうに属する本遺跡の絹が日本製とみなされることはいうまでもない。

出土の絹の織維断面計測値を第2表に示す漢代4墓のそれと比較（比較は経緯の平均値で行ない、差の有意性検定は省略する）するときは、完全度においては漢代4墓での値のいずれよりも小さい。また、断面積のほうは陽高、楽浪よりも大きく、馬王堆、ノイン・ウラよりも小さいが、どちらかといえば馬王堆での値に近い²⁾。

完全度の値が漢代4墓でのそれよりも小さいことは、この絹の材料が日本産であることをあらわしているようである。また、断面積の値が馬王堆のそれに近いことは、その材料を生産した蚕が中国本土、殊に華中あたりの四眠系品種であったことを想わせる。おそらくそのような蚕品種が出土地のあたりで飼育されていたものと思われる。

終わりに、本調査の機会を与えられた福岡市教育委員会に感謝する。

文 献

- 1) 福岡県労働者住宅生活協同組合「福岡市大字拾六町宮の前遺跡（A～D地点）——弥生～古墳時代移行期の墳墓と竪穴の調査報告——1969～1970」1971
- 2) 在日頃部「蚕糸の起源と古代絹」雄山閣、1979

第1表 宮の前遺跡出土の鉢に付着する平網の繊維断面計測値と織り密度

資 料	経緯 の別	繊維断面についての計測値			織 糸 敷 (対 1 cm)	経糸数と 緯糸数の比	織糸の巾 (mm)
		完全度 (%)	面 積 (μ^2)	供試繊維の数			
鉢に付着する平網	経 緯	45.1 ± 3.62	60.9 ± 5.44	30	17	1.13	0.45 - 0.70
		49.1 ± 6.08	63.8 ± 6.13	20	15		0.35 - 0.50

備考 鉢は3号石棺からのもの。時期は弥生後期終末。

第2表 漢代の平網における繊維断面計測値

遺 蹤 名	繊維横断面についての計測値	
	完全度 (%)	面 積 (μ^2)
陽高県(山西省)	50.9 (10)	37.1 (10)
樂 滄	50.8 (23)	49.8 (23)
馬王堆 1 号	— (5) [53.9]	65.5 (5) [69.3]
ノイン・ウラ	53.9 (20)	73.0 (20)
パルミラ	—	—

備考(1) 馬王堆の網繊維横断面計測値は『考古学報』(1974年第1期)にあるもの(ただし、〔 〕内の数値は筆者が『考古学報』に示された繊維横断面写真をもとに算出したもの)。
 (2) 本表の数値にはマフタでのものは含まれていない。
 (3) () 内の数値は資料数。



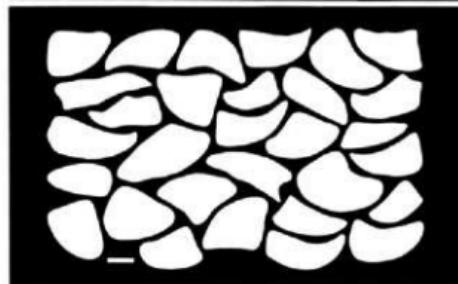
1

宮の前遺跡出土の鉈に付着する平網（弥生後期終末）
1. 鉈に付着する平網
2. その一部拡大

Scale: いずれも 1 mm



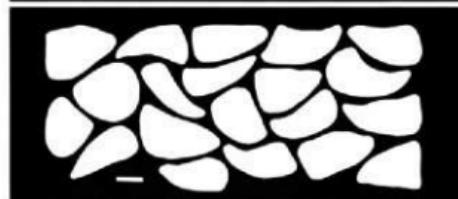
2



宮の前遺跡出土の平網の繊維断面転写図
(個々の断面転写図を無秩序に並べたもの)
3. 経糸
4. 緯糸

Scale: いずれも 5 μm の 1/2

3

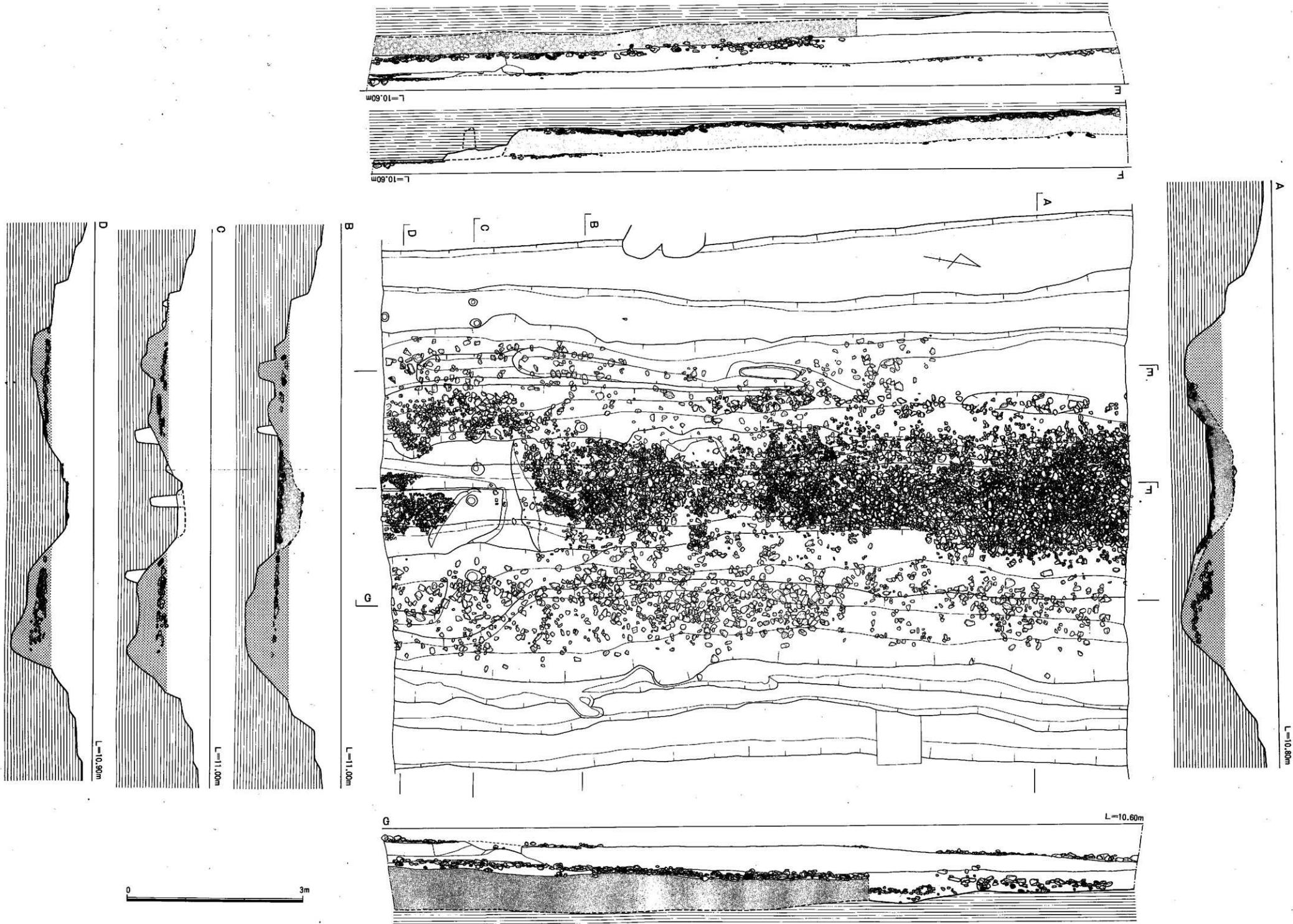


4



付図1 有田・小田部地区調査地点配置図 No. IV (1/1000)

■ 弥生時代の溝
■ 中世の溝及び溝



付図II 第83次調査 1号・2号溝, 及び道路状遺構実測図 (縮尺 $1/40$)

有田・小田部 第7集
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第139集

1986年 (昭和61年) 3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-7-23

印刷 (有)松古堂印刷